
バカとテストと介入者

霧咲風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと介入者

【Nコード】

N83100

【作者名】

霧咲凧

【あらすじ】

気がつくとバカとテストと召喚獣の世界へと来ていた主人公（俺）とその兄妹がFクラスのメンバーに振り回され苦労つつも楽しんでいくのんびり（？）コメディ。『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。オリ主やオリ展開が苦手な方は御注意を。木下優子や佐藤美穂のキャラ崩壊があると思っています。軽く覚悟はして置いてください。三日に一話更新する予定です。主人公勢の名前を変更しました。現在この作品の略称を募集中。

プロローグ

突然だが、君たちはテンプレを知っているだろうか。いわゆる。

『神様に殺されちまつたけど二次元の世界に転生してチート能力とか使いまくれるぜ！ヒャッハア！！』

ってな感じのそれだ。

実際、今俺こと霧沢風祈三つ子の兄弟の薫、それに妹の風香はそんな感じなんだが、神様とやらにも会えずチート能力も無い。

さて、そんなこんな（まだ数行だが）で転生先だが、俺たちはバカとテストと召喚獣の世界に来ていた。

と言つかだな……ちょっと回想を見てくれ

「はあ……夕飯どうしようかな……」

そう言うつたのは俺の双子の兄弟である薫だ。どっちが上なのかは知らん。風香ははっきりしているのにな。

この薫。実は料理スキルは神がかったレベルでプロをも打ち負かせるんじゃないか？と疑問に思うほどだ。

さて、今は中学校の終業式も終わり、あーやっとくだらない中学校生活も終わったか。と思いながら夕飯の買い物をしている所だ。

そこで何の脈絡も無く視界が暗くなり、気がつくと俺たちはこの世界に来ていた。と言うわけだ。

しかも……………

「あれ？どうしたの風祈に薫に風香さん。やっぱり長月中学から卒業するのが残念なの？」

なぜか明久と同じ中学出身でだ。

正確には『原作』でも明久の中学だった長月中学の校門前にいて、横でバカ面したバカが居るって所だな。

どうやらここではこいつと幼馴染らしい。

んで、まあいろいろあつて次回につながるわけだ。

と、次回に託してみたが恐らく時間が飛ぶだろうな。

……つつか短ッ！！

ま、この世界での俺たちの生活は、元の世界の俺たちの生活よりも楽しかったけどな。

ウィズ〜自己紹介〜

主人公1

Q『あなたの名前ってTE?』

A『霧沢 風祈 (きりさわ ふうき)』

Q『あなたの性別はなNI?』

A『見て分かんねエのか、オマエ……なんて冗談はよして、男だな』

Q『あなたの髪はどんな感じですか？』

A『質問の意味がよく分からんのだが……、まあ、耳にかかるかからないかの位置まで伸ばした銀髪か？』

Q『あなたの体型を教えちゃおうZE!!』

A『雄二のボクサーっぽい体型をもう少しボクサーっぽくした体型だな。身長は……最近計った覚えがねえからよく分からんが、今は183cmぐらいじゃねえか？』

Q『あなたの顔はどんな感じ？』

A『切れ長の、黒と言うか灰色の、近くで見ねえと違いが分からん目だな』

Q『その由来HA？』

A『どっちは忘れたが、片方の親が外国人だからこんな目と髪の色なんだよ。……ホントは母親の方の血な』

Q『よくどんな性格って言われRU？』

A『えーっと、ぶっ飛んでる……だっけ？自覚は無いが、まあ、大切なものは大事にするタイプってとこだな』

Q『どんな口癖なのかNA？』

A『いろんな作品のキャラの口調を真似ることか？ あ、このまえ、
「んあ」とか口癖だつて言われたな』

Q『一人称はなんだYO』

A『「俺」だな』

Q『最後に、名前の由来を教えてくださいRE』

A『お前絶対にマリファナ先輩だろ！？ 埼玉に帰ってダウン・ア
ツパー・ブイ・ストームでもやってきやがれ！！』

Q『良いから、名前の由来WO』

A『……まあいいが。えーつと……まあ、次のヤツの名前を俺の名
前の前に入れてみる。それで単語が出てくるから』

主人公2

Q『あなたの名前つTE？』

A『霧沢 薫（きりさわ かおる）』

Q『あなたの性別はなNI？』

A『男だね。正真正銘完全無欠に男だよ』

Q『あなたの髪はどんな感じですかA？』

A『質問の意味がよく分からないんだけど……。まあ、肩って言うか二の腕くらいまでの長さの銀髪かな？ おかげで余計に女子に見られやすいのかもしれないけど……。』

Q『あなたの体型を教えちゃおうZE！！』

A『えーっと、身長は具体的な数字だと148cmぐらいかな……。？ 割とコンプレックスだけど……。まあ良いや。それで、太ってもないけど痩せすぎでもない感じかな』

Q『あなたの顔はどんな感ZE？』

A『二重まぶたで、目の色は黒か灰色か近くで見ないと分からない目。で、よく皆から女子に勘違いされる顔。……。前に服を買いに行ったら、何の躊躇も無く女物の服と下着を店員さんから渡されたし……。』

Q『その由来HA？』

A『どっちは忘れたけど、片方の親が外国人だからこんな目と髪の色なんだよ。……。ここだけの話し、母親の方の血ね』

Q『よくどんな性格って言われRU？』

A『優しい……。かな。たまに一緒に旅行とか行くとなぜか顔を合わせるたびに震えられるけど、皆そう言うね』

Q『どんな口癖なのかNA？』

A『「」だから」とか、「」だよ」とかで、よく男子が使う「」ぜ」

とかを使わない事かな？ あ、「くかな」をよく使ってるって言われた事があるよ」

Q 『一人称はなんだYO？』

A 『「私」だね。……だから女子に見間違えられるのかもしれないけど』

Q 『最後に、名前の由来を教えてくださいRE』

A 『えっと、風祈の「風」の字を私の名前の後ろに持ってきて、「薫風」……薫る風って言うのかな？ ……あれ、風薫るだっけ？ ……まあ、その言葉になってるだけかな』

主人公3

Q 『あなたの名前ってTE？』

A 『霧沢 風香（きりさわ ふうか）』

Q 『あなたの性別はなNI？』

A 『女だよ』

Q 『あなたの髪はどんな感じですか？』

A 『し、質問の意味がよく分からないんだけど……。まあ、腰くらいまでの銀髪かな？ いや、割と手入れは大変だね』

Q『あなたの体型を教えちゃおうZE!!』

A『ん、太ってもいないけど痩せすぎでもない感じかな。胸は瑞希と同じぐらいって所だね……身長は、多分163cmぐらいじゃないかな? 多分』

Q『あなたの顔はどんな感ZI?』

A『少し吊り上ったキツメで、目の色は黒か灰色が近くで見ないと分からない目かな』

Q『その由来HA?』

A『父親が外国人だからこの目と髪の色なんだよ』

Q『よくどんな性格って言われRU?』

A『気が強い……って言われるね。自治他共に認める気の強さと聞き及んでおります。……誰からかは知らないけど』

Q『どんな口癖なのかNA?』

A『くく かな? たま〜に出るし』

Q『一人称はなんだYO?』

A『「私」だね。……そりゃあ、女子だし』

Q『最後に、名前の由来を教えてくださいRE』

A『えつと、上の兄二人の名前をあわせると薫風って感じになるんだけど、兄二人合わせて風薫るなら、私は一人で風の香りって意味になって「風香」。「風薫」も同じ読みだから候補には有ったらしいんだけど、それだとなんかアレって事になってこうなったらしいね』

プロローグ（後書き）

描写が足りないよとの言葉は受け付けません。理由は作者が自分で理解しているからです

さて、今回の話では明久以外誰も原作キャラが出てこない……ただのバカですね！作者は。

そんな感じで（何がだ）暇つぶしにこれを読んでくれた方、ありがとうございます。

温かい目で見守ってってください。

……あと、ヒロインが誰が良いかも書いてくださると嬉しいのですが、書いて貰えますか？一番多かったキャラをヒロインに決定いたしますので……

第一問

文月学園に入学してから2度目の春がやってきた。今日は春休み明け最初の登校日、始業式の日だ。

少しサイズのでかい、慣れない新制服で、これからの高校生活を想像しながら、初めてこここの正門を通ったのがもう1年前になっつまう

と思うとなんだか感慨深い。

ほぼ満開となっている桜が校舎へと続く坂道に咲き誇っている。まるで新入生の入学を祝うかのようにな。

まあそんな風物詩的なことより、これから始まるクラス戦争や新たなクラスメイトとの出会いで頭がいっぱいだ。

とまあ、新学年特有のテンプレをモノローグで語ってみました。

ま、坂道が終わり校舎への入り口が見えてきたところに、ある教師がどっしりと構えていた。

「よ。某蛇の人」

「蛇の人じゃない、西村だと言っているだろう!？」

こんな春先だと言うのに日に焼けているのか肌の色が異様に黒く、どっしりとした体格

おまけに趣味がトリアスロンということもあり、生徒からは鉄人という愛称で親しまれている補習の鬼教師、西村先生。と言っても俺たちはスネークと呼んでいるんだが。

「まあそれはいい。ほれ、受け取れ。振り分け試験の結果だ」

そう言って渡されたのは2通の封筒。それぞれの封筒の表には大きく俺たちの名前、『霧沢風祈（薫）』と記されていた。

振り分け試験といわれるのは学年末に行われたテストで、そのテストの成績によってクラス分けがされるのだ。

普通の高校のクラス替えなら文系と理系で分かれるって感じだけど、この文月学園は少し違っている。

テストの点数が良い順からAクラスになっていき、1番低いクラスがFクラスということになる。

「まったく、こんな面倒くせえ事しなくても貼り出しゃいいのに……まあ世界的に注目された最先端システムが導入されてるってんだから仕方ねえか」

「相変わらず話が早くて助かるな。妙に達観したところといい、お前らが本当に高校生なのかが疑いたくなるな」

そりゃまあ、『原作』を知ってりゃこういう反応もするよなあ。

ってな訳で封筒を開けて中に半分に折られている紙を取り出した。

『原作』通りここに俺たちが1年間過ごす教室が書かれているらしい。

振り分け試験は二人とも最悪。ま、要するにあのクラスってことだろう。そこを狙うためにまじめに勉強してねえし、答えを書いてもいねえからな。

「風祈に薫。今までも言ってきたが、俺はなぜこいつらが『観察処分者』なのだろうと疑問に思っていた。もしかしたら本当はバカなんじゃないかと疑うほどにな」

「まったく、これだからスネークは、そんなどうでもいい考えにいたるなんて」

「そうだな、先生はこの振り分け試験の結果を見て失礼だと感じた。お前たちは」

紙を広げてみるとそこには達筆な字で大きくこう書かれていた。

『霧沢風祈&薫……………Fクラス。……………なんで?』

「変わった奴だ」

振り分け試験の結果なのにメッセージっぽいのが入ってるな。そこまで成績良かったか?……………そしてなぜ「ん」がカタカナ表記なのだよ……………。

「えっと、いや、これ間違いですよね！？　俺たちちゃんとやりましたよ！？」

「嘘をつくな。Fクラスを狙ってわざと全教科白紙で出しただろう。まったく、本来ならAクラスには入れるものを……………」

「あ、やっぱりばれました？　でも、Aクラスに入れるってのは買いかぶり過ぎですよ。俺はせいぜいEが良い所です」

「まったく、あの成績でEだったらこの学園は相当頭の良い奴らばかりだろうが。それにしても、Fクラスになつた理由はなぜだ？」

「あはは、あのクラスではちょっとやりたいことがあるんでね。今年の二年は楽しくなりますよ」

「そのせいで俺の苦勞が増えそうだがな」

「ま、そのぐらいの方がやり甲斐があるだろう？」

「……………否定はせんが」

「それに、負担を少しは軽減してやるからよ。……………プライマイゼロ。むしろマ―イ　みたいな感じになるかも知れんが」

まあ、そんな感じで俺の一年の幕開けと言っわけだ。

第二問

「私たちと言うイレギュラーな存在が居るせいでFクラスのメンバーが変わって無ければいいんだけど……」

俺の横を歩く薫がそう言う。

「俺たちの人数分増えるだけだろ。風香も順当にいけばAクラスのはずだしな」

今俺たちが居るのは、普通の教室の五倍はあるであろうと言う、皆さんお馴染みAクラスの教室。

……というか、実際に見るとひどい設備の差だな。世間体に弱いつてのが良く分かる。

「……ま、『生徒の学習意欲向上のため』って言うのを出すためにはしゃーねえか」

俺は軽く言いながら、Aクラスを過ぎてFクラスまで歩いていく。

「ヒヤッハア！予想通りボロい教室だＺＥ！」

あえてテンションあげて言ってみたが、この教室はやっぱひどいな。

『風祈に薫ー！』

と、そこでバカこと明久の声。見るとちょうど明久が走ってくるところだった。

「二人とも見た？あのＡクラスの設備。すごかったよね」

「ああ、たしかに凄かったな」

「あの分だとＦクラスも結構マシなのかな？」

「そうだね。このクラスも外見だけがボロいだけだよ」

と、原作を知っているから分かるだろうに薫が希望を持たせることを言う。鬼だな。

「だよねー。じゃあ入ろうか。すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

とガラツと扉を開ける明久。確か『原作』だと……

「早く座れ、このウジ虫野郎」

やっぱりか。

「聞こえないのか？ ああ？ ……と、風祈に薫も居たのか。悪かったな」

「いや、別にいいよ？」

「別にいいが？」

「ちょっと待つてよ、雄二！ 何でそんなこと僕には誤らないのさ！？」

「「お前がバカだから（だ）」」

「ひどいつ！」

「……まあとりあえず座れ。席は」

「決まってるんだろ？ そんなことは分かってるよ」

「あ、ああ。よく分かったな」

「まあFクラスだしね」

と、そんな会話をしていると、担任の福原先生が入ってきた。

ここから先は原作通りに進んでいくので明久の自己紹介パートから再開させて頂こう。

「 コホン、えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』
って呼んでくださいな」

原作どおりの明久のセリフ。さてと、俺たちは耳をふさいで、と

『ダアアーリーーン!!』

予想通りの野太い声の大合唱。不愉快にもほどがある。

「 失礼。忘れてください。これからよろしくお願いします」

む、次は俺たちの番か。まずは俺からだな

「霧沢風祈。得意科目は古文。趣味はモデルガンをいじる事。宜しく」

「霧沢薫。得意科目は現代国語。趣味は風祈と同じくモデルガンを
いじる事。一年間よろしく願いしますね」

薫の自己紹介でFクラスから歓声上がる。そりゃこいつの顔でに
こやかに宜しくなんて言われたら、Fクラスの奴らは一瞬でオチる
だろう。

一応言っておくが、趣味は『生前（？）』に居たクラスメイトが
自己紹介で使うことを妙に進めてきたからだからな？俺たちは特に
そついった趣味は無いぞ。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

俺らの自己紹介が終わったぐらいで、入ってきた人物を見たクラスメイトが誰からでもなくそんな声上がる。

良かったよかった。俺たちのせいで無くなったのかと思ったけど、単に俺たちの自己紹介の時間までずれただけか。

その彼女はピンク色のやわらかそうな髪が背中の中の辺りまで伸びていて、肌は透き通るように白い。更にスタイルは胸も含め抜群。

む？その後ろから誰かも　　って風香か。大方、俺たちに合わせてってところだろう。

風香には多少ブラコンの気があるからな。ま、言ってる俺も多少はシスコンの気があるけどな。

男だらけのFクラスで異彩を放っている彼女達。Fクラス勢は啞然としている。

そんなFクラスの中、平然さを保っていたFクラス担任　福原先生はその美少女たちに話しかけた。

「丁度良かったです。丁度自己紹介をしていたところなので姫路さん、霧沢さんもお願ひします」

「あ、は、はい。姫路瑞希といいます。一年間宜しくお願ひします」

「あ、はい。霧沢風香です。一年間よろしくお願ひします。風祈と薫をいじめたら絶対許さないので宜しく」

姫路はただでさえ小柄な体をさらに縮こまらせるようにして声を上げる。

……風香は全然緊張してないが。

『はい、質問です』

そんな彼女達に向けてFクラスのある男子生徒が右手を挙げた。

「あ、はいつ、な、なんですか？」

「なに？」

『なんでここにいますか……？』

聞きようによつてはかなり失礼な質問になるのだが、これは今現在この教室で担任の社長（中の人ネタなんて分かるか？鉄人に続いて二回目だが）と俺たち二人以外が思っている疑問だ。

「そ、その……」

緊張した面持ちで体を硬くしながら口を開く。

「私、振り分け試験の最中に熱を出してしまいました」

その言葉を聞き、Fクラスの生徒40人以上が『ああ、なるほど』
といわんばかりにうなずいた。

テスト途中の退室は0点扱い。試験終了後にこうすりや楽だったと
俺達が気付いたのは言うまでも無い。

「で、では、一年間よろしくお願いします」

若干クラスの空気に押されながらも姫路は自己紹介を終えて、空い
ている席、明久の前の席に安堵の表情を浮かべながら腰を下ろして
いた。

風香はその隣、ちょうど俺の隣になる位置に腰を下ろした。

「……雄二、ちょっと話があるんだけど」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しづらいから廊下で」

「別に構わんが」

「んじゃあ私も話があるから良いかな？」

その横で、明久と薫と雄二はそんなやり取りをして廊下に出て行っ
た。

「で？話って何だ？お前等」

「あ、うん。雄二、この教室の事なんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ、凄かったな。あんな教室は他に見たことが無い」

「そこで僕からの提案。せつかく二年生になったんだし『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん、しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

急に雄二の目が細くなる。警戒しているのだろうか。……どうかは知ってるけど。

「いや、あまりにも酷い設備だったからさ」

「嘘をつくな。まったく勉強に興味の無いお前が、いまさら勉強用の設備なんかのために戦争を起こすなんて。……そんな事ありえないだろうが」

「そ、そんな事無いよ。興味が無ければこんな学校に来るわけが」

「お前が此処を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だろ？」

「しまった！！ 雄二には僕がこの学校に来ている理由を話したことがあるんだった！！」

「……ま、姫路のため、だろ」

「ど、どうしてそれを！？」

「本当にバカだな、カマをかけたらずくにひっかかる」

「べ、別にそんな理由じゃ」

雄二の目から警戒の色が消えて、代わりに楽しげな笑みが浮かぶ。
な、なんてチヨロイんだ、明久……！！

「まったく、そんな言い訳は無駄だぞ、明久」

「気にするな、お前に言われるまでも無く、俺自身Aクラス相手に
試召戦争を仕掛けようと思ってたところだ」

「えっ、どうして？雄二も勉強なんて全然してないよね？」

「世の中学力だけが全てじゃないって、それを証明してみたくてな」

「……？」

と、ここまでがほぼ原作どおりの会話。だけど、ここから先が少し
変わってくる。

「で？薫、お前は何なんだ？」

「私はちよつとね」

と言って私は雄二に耳打ちする。

「ほお、そいつは面白い。試召戦争ではお前らが切り札になるな」

「と、まあそんなわけだよ。私の観察処分者の肩書きと学力を考え
れば何が起こるかわかるでしょ？」

「そんな顔して案外性格悪いな」

「雄二に言われたくないよ。一応Fクラスの良心だと思っしょ」

「まあそれはいいか。よし、そろそろ戻るぞ」

第二問（後書き）

- 1、木下優子
- 2、清水美春
- 3、木下秀吉
- 4、その他（誰がいいのかも）

ヒロイン決定アンケートです。
投票は感想からどうぞ。

これで秀吉になったらどうしよう……

第三問

『ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！』

と、原作通りの展開で事が進んでいく。

が、ここでイレギュラーな展開。

「そして、この二人の観察処分者には特殊能力がある。福原先生、お願いします」

「わかりました」

いつの間にか戻ってきていた社長が召喚フィールドを作り出す。

『なんだ？』

『観察処分者の利点ならさっき説明していたし……』

そんなことを口々にいう生徒たち。

「この兄妹……ってか風紀と薫には っと二人ともちよつと来てくれ」

「じゃあねえな。あの姿で何が起こるか分かってんのか？」

「すまん、今度何か奢るからな」

「よし、忘れんなよ？ シルバ アファミリー歴代発売品全てな」

「俺が悪かった。無茶言わないでくれ」

そんな雄二を無視しながら薫と二人で息を吸って、

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

ポンツとFクラスの畳の上にデフォルメ化された俺たちが現れる。

ここまでは普通の連中と同じだ。だが、

『やっぱりこの視点は怖いね』

もともと高い薫の声だが、さらに高い声で喋る。

『おい、この声どこから聞こえてるんだ？』

『分からん。おい坂本、この声はどこから聞こえてるんだ？』

Fクラスの奴らは分からないらしい。雄二はニヤリと笑い、

「その声の出所は ここだ」

と、俺たちの召喚獣を指差した。

『ほらな、こいつら啞然としてやがるよ』

その言葉に俺が口を開くと、Fクラスの男子はざわめきだした。

そう、これが俺たちの特性。召喚獣を召喚すると、召喚獣になり戦う。そしてその間の本体は行動不能。もちろん召喚獣の感覚もある。これで俺たちは観察処分者であろうと無かろうと常に召喚獣と感覚がリンクするってことだ。

おかげで精密作業は思いのままなだけだな。なんせ自分の体だし。そして、これにババアとの交渉で手に入れたあの力が加われば無敵だろう。

「おい坂本。これって余計に危険じゃないか？こいつらだけ実際の戦争をするんだろう？」

「大丈夫だ。そいつらは実際の戦争をやっている様だが、痛みは観察処分者が受ける痛みと変わらん。死にはしないさ」

そう、これもババアへ使った交渉の材料だ。どうやら転生と観察処分者の設定が加わるとこういう使用になるようだが、痛みは酷くなくても体感的な恐怖もあるんだから武器ぐらい決めさせる。ってな

そうしたら俺と薫の二人がこの体のことを調べさせるのを条件に承諾してくれた。それなら安いもんだ。

やけくそにヒヤッハア！！　してやるぜ。

『んで？もう戻っていいのか？だったらこのフィールドの取り消しをお願いしたいんだが』

「ああ、そうだな。福原先生。ありがとうございました」

雄二がそう言うのと福原先生は召喚フィールドを消してくれた。やっぱり結構優しい人だな。中の人の特シヨンは著しく違うけど。

「ふう、あの体は楽しいっていえば楽しいけど、人前になると複雑なんだよね」

薫の言葉に俺は力の限り頷く。

ああ、特に玉野と優子にはリアルな恐怖を抱いたからな。すげえ腕力で俺たちを抱きしめるもんだから死に掛けた。

「さらに、この二人の学力は本来、Aクラスのレベルだ」

と、雄二が追い討ちと言わんばかりにそんなことを言っている。

だから言うほど高くないと思うぞ？せいぜいBが良いとこだったの。

つっても代表がねも……カスなら絶対行きたくねえしな。

『Aクラスレベルが五人（俺、薫、雄二、姫路、風香だ）なら俺たちにも勝ち目があるな！』

『ってことは』

『システムデスクは見えたも同然だ！！！！』

そんなことを言うFクラスのバカ共。さて、足がかりであるDクラス戦の使者は誰が行くんだ？さすがに明久は止めさせた方がいいと

思うが……。

「だが、少し考えが変わった。やはりDクラスは飛ばしてBから攻めるぞ」

また『原作』と違う展開か。ねも……カスのクラスからとはな。

「と言うわけで明久にはBクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

どちらにせよ明久か。……………仕方ない。

「皆！BクラスのカスはCクラスの小山と付き合ってやがるぞ！！」

『ナニイ！？ クソ！！ 情報提供感謝する！！ 風祈一級審問員
！！！！』

えっ、俺そんな結構上の役職だったのか？

『我ら異端審問会は異端者を許さない』

ドス暗いオーラを放ちながら異端審問会はBクラスへと向かっていく。

「まだ殺すなよー」

俺は適当に言って異端審問会を送り出す。

第三問（後書き）

試験召喚獣になるって言うのは複線です。いつ生きるかは分かりませんが。

と言うかこんな駄文を見てくださる方、ありがとうございます。

あと、男言葉がおかしいと思ってにもこやかに流しておいてください。

さて、一万超えたら番外編を書こうと思うんですけどそんなにアクセスが来るのやら……いや、ポジティブに行けば行けるはず！

そんなこんなでドタバタしていく訳ですが、『原作』と少々変わる場所も出てくるかと。イレギュラーな者を混ぜるとそうなっちゃうんですよね。

では、また明日もご愛読お願いします。

……アンケートの方も感想などからお願いしますね？いまだに一票も来ていないなんて……（泣）

第四問

さて、結論から言って異端審問会のメンバーはしっかりと宣戦布告をしてきたらしい。

んで、そんなこんなで今日はBクラス戦だ。

今現在、俺たちは召喚獣でBクラスの教室の前にいる。

俺たちの仕事は扉の前をこじ開けること。ま、俺たちの武器なら容易いな。

さて、ここで俺と薫の武器を説明してやる。

早い話が、現実に使えないならチート能力を召喚獣で使っちゃおう！と言う考えに至ったわけだ。

これは400点オーバーの能力と同じく、出すたびに点数を消費する。しかも一個しか使えないって制約付きだ。

ただし、俺たちが400オーバーしても特殊能力は付加されない。

変わりに600点オーバーすると特殊能力が出るようだ。

んで、今回使用する二次的能力だが、ビリビリ姫の能力でもいっとくか。

因みに、俺たちの召喚獣の服の描写が無かったので言っておくと、使用する能力を使っている者が着る服の上に学ランを羽織るって感じだ

。

イメージとしては、仮に明久の召喚獣で例えるなら、学園都市の第一位の能力を使うと明久の召喚獣が服の下に白い縞々の服を着るって感

じだ。

「これでも食らっつけー！」

「いっけえー！！！」

コインを召喚獣の小せえ指ではじいて標準を合わせる。

もう一度指に当て 放っ！！

バッチイッッ！！！！

との音と共に、Fクラスのメンバーが戦っていたBクラスの奴らをなぎ払う。

この能力は人間へ当てるか当てないかを設定できるので今回は当てないにシフトしてある。だから危険もないな。なんでも俺たちへの配慮

らしい。

さて、どうやら召喚していたカスの近衛兵たちも、俺たちの点数を100点ほど使った超電磁砲で消し飛び、後はカスまで一直線。

「ちょっと待て！さっきから俺の描写カスしかねえじゃねえか！？」

「うるさいよカス。不快感を与えるのは禁止」

「その発言で俺が深く傷つくんだが！？」

「……………チツ、カスの癖に……………」

またカスが騒いでいるがそれは無視。さて、今度こそ

「姫路。宜しく頼むぞ」

「あ、は、はい。風祈君。分かりました」

その言葉と共に、姫路の召喚獣はカスの召喚獣に肉薄し、大剣で一閃した。

Fクラス	姫路瑞希	V S	Bクラス	根本恭二
現代国語	399点	V S	0点	

『原作』通りの進み方ではなかったが、この先の交渉は『原作』通りだった。

変わったのは根本……じゃ無かった、カスを女装させるのが雄二の嫌がらせになった事とかだな。

んで、それも終わった後、俺と薫は家に向かっている。風香は秀吉と演劇部で絶賛活動中だ。

家つてのは木下家のことだ。『原作』で親が居たかは覚えてないが今回は親が海外行つて居なくなっていて、家もでかくなっている。

木下家に住むようになったのは去年に風香が優子と仲良くなったのがきっかけだな。

なんか同じクラスで意気投合して、兄妹で暮らしてるって言ったら自分の所も兄妹二人暮らしだから一緒に住まないか？ってな話になった

らしい。

「しかし、何か少しずつズレて行ってるな。Dクラス戦が無い事
と
言い」

「ここまできたらとことん変えちゃうつても良いかも知れないけどね」

「ま、とりあえずAクラス戦で頑張ってみるか。腕輪も使ってたな」

「たしか『原作』では5対5で三つ教科の選択権があったよね？」

「ああ。順番的には優子に……………モ」

『モブじゃないです！！（泣）』

なんか電波を受信した。バカ（作者）の中で準レギュラーとレギュラーの間を揺れ動いている彼女からの切実なる願いを。

「…………佐藤美穂に工藤愛子に同性愛者（久保利光）」

「落ち着いて風祈。利光だけ逆になってる」

うっかり間違えちゃったぜ。

「後は霧島か。雄二にしっかり言って置かねえとな」

「『原作』通り勉強しないだろうしね」

「ついでに輸血パックも持って行っておくか。秀吉やムッツリー二用に」

「って言うか流血沙汰に慣れて対処まで頭が回るってのも結構怖いよね。一年前はリアルにホラーで怖かったのに」

まったくだ。順応性って物は怖えな。

と、そんな会話をしていると木下家についた。

家の中に入ってリビングへ向かうと、下着姿で『伝説の木下で貴様を待つ』と言う例の訳の分からん本を読んでいる優子がいた。

「まったく、一応俺たちは異性なんだからちよつとは恥ずかしいとか考えないのか？」

「別にいいじゃない。楽な格好で乙女小説を読みたいのよ。私は」

そのせいで兵器が生まれそうになったがな。お前を真似て風香が下着姿で居るって言う。

「まあどうせ今更なんだけどね。一年前からずっとだし」

今だから言えることだが、なぜか俺たちは性欲と言うものが皆無だ。転生してからずっとこのことで、優子の下着姿を見ても何も感じないくらいに無い。

……健全な男子高校生としてはまずいよなあ。これ。

「ああ、そうそう。明日アンタたちって私たちのクラスに宣戦布告に来るでしょ？うちの代表がアンタ達の代表と二人っきりで話したい

ってさ」

会談と称して雄二と二人っきりになる気だな、霧島。

まあ良い、雄二が明久の分の肩代わりをしてるかの如く不幸になっていくが、それは今度雄二に味方してやって何とかしてやるう。

「分かった。雄二に伝えておこう」

「宜しくね。……でも代表なんで嬉しそうだったんだろ？」

「そりゃ決まってるだろう。雄二が好きだからだ」

「あーなるほど………ってええ！？そうなの！？代表って坂本が好きだったの！？」

やっぱり気づいてなかったのか。ま、別に言っても良かったよな？

「うん。そうだよ？確か　小学校の頃からだったかな？」

「へー………そうなんだ！。代表がねえ」

「おいコラそこのおばちゃん。戻って来い」

なんか優子がトリップしている様なので今日はもう部屋に戻っておくか。明日はAクラス戦だしな。

第四問（後書き）

結局一票も来ないよチクショウ！こうなったら大量にルートを作つてやる！まずは優子ルートからだい！

……いきなりすいませんでした。反省は特にしておりません。（反省しろよ作者^{バカ}）

と言うか、マジで投票お願いしますね？結構凹む……

さて、次回はAクラス戦（前編）をお送りします。お楽しみに。

第五問

「おい、お前ら。Aクラス戦だが……」

朝、Fクラスの全員が集まったところで雄二がそう切り出す。どうやら昨日の夜に霧島と話してたらしい。大方、不法侵入とかされてな。

「代表五人を選び、一騎打ちで三回勝った方を勝ちとする。と言う勝負になった。科目の選択権は向こうに二回分ある。勝負は十時からだ

」

『原作』通りのルールで勝負だな。まだ何か引つかかるが……

「正直、周りの連中には不可能だと言われてきたにも関わらず、Aクラスに勝てる見込みがあるのは皆の協力、頑張りがあつてのことだ。

それには感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

雄二がほぼ『原作』通りのことを言い、それに明久も返す。

『おい。俺たちが本当に勝てるのか?』

と、Fクラスの誰かがこんなことを言い始めた。それに雄二はニヤ

りと笑い、

「そんなことは決まってる。良いかお前たち、うちのクラスは」

『最強だ!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

そしてその後も『原作』通りの展開で事が運んでいく。今、Fクラス
のメンバーの団結はかなり強いことだろうな。

「では、両名共準備は良いですか？」

Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生がそう言う。この人が立会人だ。

「ああ」

「……問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。こちらの方が人数も入るし、当然ながら腐った畳のFクラスはやる気がでない。

「それでは、一人目の方どうぞ」

「アタシから行くわよ」

「わしが行こう」

優子VS秀吉、か。

俺は持っていたクーラーボックスを床において中を探る。……これは違うな。ムツツリー二用だ。

……って、そういえば今回はCクラスに行っていないから優子がキレる理由は無いんじゃないかねえか？

「姉上。悪いのじゃがこれも勝負じゃ。使いたくは無いのじゃが」

「

「何する気？」

「この『伝説の木下で貴様を待つ』と言う本を全校生徒に姉上の声で」

「ちょっと来なさい秀吉」

さすが秀吉だ。わざわざフラグを作るなんて。この輸血パックも無駄にならないですんだし。

「え……？いや、ちょっと待って。その武器って反則じゃない……の？」

「あきらめろ」

今の俺の武器は翼だ。己の心に纏う闇が溢れし時、漆黒の翼が発現せん……見たいなことではないが、一方さんの黒翼を発現。

俺はその黒翼を優子の召喚獣に叩きつける。その衝撃で煙が舞うが、晴れる前に二撃三撃と攻撃を加えていく。その煙が晴れた頃には優子の召喚獣は跡形も残っちゃいなかった。

「一戦目はFクラスの勝利ですか。……では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

今度は佐藤VS明久の対決。

……なんてやらせるわけが無いだろう？

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場に居る全員にお前の本気を見せてやれ」

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

「あれ？気づいた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「それじゃ、あなたは………！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけど、実は僕」

何を勘違いしてるのかは知らんが、こいつは

「左利きなんだ」

正真正銘のバカだ。

「さてと、それじゃあやろうか。試験召喚^{サモン}」

「あ、はい。試験召喚^{サモン}」

Aクラス	佐藤美穂	V S	Fクラス	霧沢薫
物理	389点		178点	

「あー、私の負けだね。さすがに、この点数差は無理だったかな」

薫が苦笑いで言う。……ま、方や四百点に届きそうなヤツだしな。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムッツリーニがここで立ち上がる。こいつが勝てばこっちのリーチだ。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは工藤愛子。『原作』ではムッツリーニが勝っていたが、今回はどっちが勝つかな。

「科目は何にしますか？」

高橋先生が科目選択権のあるFクラスの生徒、ムツツリー二に尋ねる

「……………保健体育」

ムツツリー二最大の武器がコールされる。

「キミ、土屋君だっけ？保健体育が得意みたいだね？」

工藤がムツツリー二に話しかける。

「でもボクだつて結構得意なんだよ？…………キミと違って
実
技だね」

「……………実技」

ムツツリー二がそんなことを呟く。大丈夫か？勝負が始まる前にや
られやしないか？いや、もうすでに俺のこの発言がフラグじゃね？

「……………ぶはっ」

「お前バカだろう！？」

呟いた次の瞬間にはムツツリー二は大量の鼻血を出して床に倒れて
いた。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよ
かったらボクが教えてあげるよ。もちろん
実技だね」

「ぶはっ！」

ムツツリーニを支えに行っていた明久が鼻血を出して倒れる。

「アキ、大丈夫？」

島田が明久に駆け寄る。呼び方がこれなのは『原作』と違って去年からだ。因みに、姫路もその頃から明久のことを名前で呼んでいる。

「う、うん。大丈夫だよ美な　　殺気！」

島田に起こされていた明久がそこから一瞬ではなれる。そこにはコンパスやらの文房具。

『許しません。豚の癖にお姉さまに近づくなんて……………』

次々と飛来する文房具から明久が逃げ回る。と、分度器などが工藤の方へ

「ちょ、まずいつて！」

薫がそんなことを言っただけで明久と雄二を遠くへ投げ飛ばす。何がまずいん　　なるほど。理解した。

分度器などは工藤の体を掠っただけで特に怪我はしてないようだが、

「男子生徒は全員目を瞑れ！！特に、今選手じゃない奴らが目を開けていたら、グッバイ上半身と下半身を実行するからな！！」

服は別だ。どんな力で投げてるのか分度器は工藤の下着までも切り裂き、上半身は裸になった。

こんなものを見たらムツッリーニがどうなるかは分かるだろう。当然

「……………死して尚、一片の悔い無し」

まあ今回は悔いが無くていいだろう。じゃないと工藤が哀れだ。

「とりあえずこれを」

「あ……………ありがとう」

薫が自分の本体から引っぺがした制服を工藤に渡している。うむ。こうしてみるとますます男子っぽいな。

「高橋先生は救急車を、そこでのん気にしてるバカ二人はそのクーラーボックスから輸血パックを取り出せ」

その後によってきた救急隊員と、俺たちの懸命な延命措置で何とかムツッリーニは一命を取り留めた。

特殊部隊っぽい奴らが来たが、あれは高橋先生に関係は無いよな？間違っって呼んだとかじゃ無いよな？

ついでに、清水。お前には後で O S E K K Y O U（学園都市の第一位流の。拷もnゲフンゲフンとも言つ）を必要があるな。

第五問（後書き）

次回でAクラス戦決着です。そして、結果はどうなるのか。

あ、一応『原作』とは違う進み方になりますので、暇だったらどうなるかの予想でもどうぞ。

では、次回も『バカとテストと介入者』をお楽しみにしていただければ幸いです。

.....長いなこれ。略称を考えようかな？

第六問

結局、特殊部隊っぽい奴らはムツツリーニの血の後始末をした後帰って行った。

あれはこの筋の者なんだ。血を見て納得したように頷いていたところを見る限り、やっぱり裏関係なのか？

「……こ、これで二対一ですね。次の方どうぞ」

若干戸惑いながらそう言う高橋先生。恐らくムツツリーニの出血にまだ戸惑ってるんだろう。

次のカードは

「あつ、は、はいっ。私ですっ」

「それなら僕が出ようか」

姫路VS久保か。

Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	VS	4409点	

「これで二対二です」

高橋先生がディスプレイを操作してそう告げる。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

「俺の順番だな」

霧島VS雄二。これで雄二が集中していて、且つ大化の改新が出れば俺たちの勝ちだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方法は百点満点の上限ありで延長戦無しだ!」

雄二のその言葉にAクラスの連中がざわつく。高橋先生は問題を用意している。

……ん?延長戦無しなんて言って無かったよな?同点だったらどうするんだ?

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

と、そこで戻ってきた高橋先生の声が聞こえた。霧島と雄二は視聴覚室に向かっていった。

『不正行為は当然失格となります。いいですね?』

『……はい』

『わかっているさ』

ディスプレイに表示された視聴覚室では、ちょうど問題が配られた後だった。そして、その二人の手によって問題用紙が表にされる。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

（ ） 年 平城京に遷都

（ ） 年 平安京に遷都

（ ） 年 鎌倉幕府設立

問題は以上です。

「……………はあ!？」

問題が出てないぞ!？雄二が勉強したから出なくなったのか?どちらにせよこっちは引き分けかよ!？

「では、限定テストの結果を発表します」

高橋先生のその言葉でディスプレイに結果が表示される。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 100点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 100点》

「おい。引き分けだぞ?延長戦をするのか?」

「でも坂本が延長戦無しって言っただけだったか?」

AクラスやFクラスの連中が口々にそう言う。ここまで来て負けつても癪だし、せめてこっちの設備は手に入れておくか。

「なら俺たちにお前らの設備の一段階下 つまりBクラスの設備をくれないか?設備はあるだろう?」

そう。試験召喚戦争のルールでは下位クラスが負けたら一段階下の

設備となる。とある。

ならば上位クラスが宣戦布告して負けた場合はどうなるのか。という疑問をババアに尋ねたところ、

「その時は上位クラスが一段階落とされるよ」

らしい。つまり、Aクラスが宣戦布告をして負けた場合に用意される施設があるはずなのだ。Bクラスの設備がな。

「確かにあるけど、それってこっちにメリットが無いじゃない」

「確かにそうだな。だから」

ここで俺は一拍置いて、

「残りのAクラス全員VS俺と薫で戦って、勝ったらその設備を貰う。それなら勝負だから文句は無いだろう」

反則級の力を持って交渉を行う。

「ったく。シケた遊びではしゃいでんじゃねエよ」

某第一位のセリフを言いながらAクラスを倒していく。ま、『反射』を使うやつが二人もいるんじゃ勝てるわけがねえよな。

「さて、これで全滅か？こんな力を使って悪いとは思っけど、まあ許してくれや」

気がつくのと周りにいた召喚獣が全て消えていた。さすが核にも耐えるって定評のある能力だな。おかげで点数の消費が激しいけど。

Fクラス	霧沢風祈	& Fクラス	霧沢薫
古文	624点	24点	& 現代国語
			628点
			28点

実に600点の消費。こんなに消費するとほぼ勝つのは不可能になるから普段は使えないんだが、集団戦ではかなり強いな。30分限定だ

けど。

「……じゃあBクラスの設備を」

「いや、違っさね」

そう霧島が言いかけたところで別の人間の声が混じる。と言っかれは……

「Fクラスの生徒が大量のAクラスの生徒をたった二人で倒したんだ。それでBクラスの設備を渡すってのも悪いだろう?」

「なら俺たちにどうしろと? ババア。Aクラスの設備を明け渡させるのか?」

雄二の問いにババアは首を振って、

「それでも引き分けは引き分けだからねえ。だから工事をさせてBクラスの設備をAクラスの設備に作り変えさせてやるよ。それならどち

らにも被害は無いからねえ」

つまり、Aクラスの設備でこれからは居ると……

『よっしゃあ! システムデスクだ!!』

Fクラスの連中がそう叫ぶ。まあ今ならいいだろう、あそこまで喜んで。

「ただ、工事には時間がかかるからねえ。学力強化合宿のほうを先にやって置いた方がいいかもねえ」

そのババアの呟きに、俺たちは「またか……」と呟いたのだった。っていうか話が歪みまくってるな。

第六問（後書き）

Aクラス戦決着！どちらもFクラスの設備にしておくには可哀相なクラスだったので平等にこうしました。

あ、今回は構想からできていた話をやるので強化合宿はその次からになります。いわば六・五問ですね。

さて、もうヒロインは優子さんにしておこうかなと思います。理由は作者が好きなキャラだから！

佐藤さんはあとがきコーナーの常連さんにしようかな。

第六・五問

「おいコラ待てやこのボケが」

俺は召喚獣の体でとある女の顔を掴んでいる。

何でこんな事してるのか意味不明だと思っから説明しよう。

「アンタたちに客が来てるよ。何でも『試験召喚システムで召喚獣となつて戦う生徒が居ると聞いたので会ってみたい』だとさ」

全ては俺たちを休日呼びつけたババアのこの言葉から始まった。

「別に良いが、どこに居るんだ？」

「試してみたいことがあるらしいから結構広いこの部屋に行つてもらつてるよ。さっさと行つてきな」

「試してみたいこと、か。別に死ぬようなことも無いし良いんだけど

どね」

確かに俺たちが召喚獣の状態で戦死した場合は、俺たちの意識が本体の方に戻るだけだから今のままでも死ぬようなことは無い。だが

……

「明らかに怪しい気がするんだけど……」

薫の心配は俺も思っていることだが、とりあえず行ってみて、生死に関わるようなことだったら逃げれば良いだろう。

で、待つてると言う部屋に移動したのだが、どうもこの部屋は教頭室っぽい。

待つていた奴つてのは金髪碧眼でスタイルが良く、白衣を着た女だった。

「えーっと、いきなりで悪いんだけど、二人ともこの装置に寝てもらえるかしら？」

その女が指を指す先にはカプセルのようなものが二台。その後の説明を聞いて、まあ命の危険は無いだろう。と判断し、俺たちはそれの中

に入る。

「それじゃあスイッチを入れるわね」

その女の言葉と共に視界が真っ白に塗りつぶされ

「あ、あれ……？失敗……？」

その言葉と共にカプセルが砕け散り、俺たちはそこから落ちる。

む？さっきの女がやけにでかく感じるな。って言うかこれって召喚獣の身長と変わらな

「それじゃ。私はこれで」

「おいコラ待てやこのボケが」

ここで冒頭のあの会話につながるのである。

「貴様……今何をした？」

薫が恨みを込めるような目で女を見る。対して女は焦った様に、

「いやね。私神様なんだけど、手違いでこの世界に送っちゃって、恒例のチート能力もつけてあげてないから召喚獣の効果を本体に移して

あげようと思っただけ」

「……………それで？」

「そ、それで、あの装置はそのための機械だったんだけど、失敗しちゃったみたいで……………」

「なら私たちの本体はどこにあるのかな？」

「いや、その……………ね？今出てる声っていつもと同じ声でしょ？だから……………」

「つまり、本体が召喚獣の体になったと。そういうことか？」

「そ、そうそう！察しが良いね。それじゃ説明も済んだし」

「だから待てって言ってるだろうが」

窓から逃げようとした自称神様を捕まえる。力も召喚獣と変わらねえな。

「い、いや、私も他の神の手伝いしなきゃ駄目だからさ。もう帰らないと」

「自称神。仮にお前が神だったとして、俺たちの体はいつ治せる？」

「あ、それはたぶん一生む……………」

「こいつを誂え、スベル・エラー凶剣」

「ストップ！私が悪かったからストップ！！」

首元に凶剣を突きつけたが逃げられてしまった。……チツ。さつさと殺つときゃ良かったか。

「とにかく、その体が本体になっちゃった物はしょうがない。特別にフィールドが無くて動けるようにしてあげるからそれで許してね」

「試験召喚戦争の時以外は点数の消費も無くせよ。それで少しは許してやる」

「それぐらいなら良いけど……って言うかキミ達、言うほど怒っても無いね。どっちかって言うとなんか嬉しそう」

「「はあ？」」

俺が嬉しそうだと？元の体に戻れませんって言われたのに嬉しくなんかなるはずが無いだろう。

「まあとりあえず、また何かあったらテレパシーでも使って伝えるからね」

そう言い残して自称神は消えていった。

「はあ……明日から学力強化合宿だつて言うのに、どうしようか」

薫の憂鬱そうな声にはただただ頷くばかりだ。そう言えばこれって戦死したらどうなるんだ？

ちょっと試してみるか。たしか古文のテストがまだ補給テストを受けてなかったはず。

Fクラス 霧沢風祈

古文 24点

どうやら自称神はこう考えることを予想して召喚フィールドを出して置いてくれたらしい。

手近な物で自分を攻撃して、と。

Fクラス 霧崎風祈

古文 0点

……む？0点になったのに何も起こらんな。と、思っていると上に羽織っていた学ランがバラバラになって床に落ちた。

なるほど、この学ランが戦死の肩代わりをしてくれるってところか。

「さて、次は学力強化合宿だな。のぞき騒ぎとかも押さえとかねえと」

とにかく当面の問題は学力強化合宿だな。普段から使えるんだったらまあ何とかなるだろ。

第六・五問（後書き）

ついにあの複線が使えた……召喚獣になって戦うと言う複線が使えるかどうか不安だったのですが、今回思い切ってやってみることにしま

した。

これは書こうと思った頃からできていたことで、『神とのチート関係の会話を物語の途中でやる』と言うのをやってみたかった。と言うど

うでもいい考えも使えました。

さあ次からは学力強化合宿。もう少しはちゃんと読める文にするぞ
ー！

あ、因みにですね。文化祭は無くなったわけでは無く、入れ替わっただけですのでご心配（？）なく。

第七問

結局あの後、某忍者漫画の術で巨大化して（と言っても普通の人間サイズまでだが）清水の家まで行ってO S E K K Y O Uをして帰っ

ておいた。

清水はそれはもう、あのごろもn O S E K K Y O Uを受けたスパイかの如くガタガタ震えていた。

これで工藤とかの貴重な一般人に迷惑が関わらなければ良いんだがな。

ピリリッピリリッ

と、携帯が簡素な音を出す。……メールか。誰からだ？

『あなたの秘密を握っています』

あの脅迫文がメールには書いてある。……せめて写真とかも付けて送って来いよ……

『握ってンなら見せてみやがれ。だいたい、お前みてエな三下に見つかる秘密なんざ大したもんじゃねエよ』

こんな感じの文章を送り返しておく。文が一方さんっぱいのは気にするな。ただ単に俺が好きなんだだけだ。

ま、今のはこの学校の生徒の物じゃねえだろうな。

あれを下にかなりスクロールさせたら『ばらされたくなければ10日間までに10人の人間に送りつけよ』と書いてあったから。

ま、いわゆるチェーンメールってやつだ。この学園で俺に脅迫文を送って意味があると思ってる奴も居ねえだろうからな。

「……何気にこんな写真が入ってるんだけど……」

風香のその言葉と共に出された写真を見る。そこには文月学園女子制服を着た薫&男子制服を着た風香。ふむ……

「さほど問題なことでもないだろ。お前なら別に男装姿が流れてもいいだろ?」

「まあそうだね」

「ちょっと待って!それは私の女装が流出するのは別にいいって言ってるの!?!」

「お前は今更だろ。ムツツリ商会に結構売ってるぞ?だいたい、一般人称が『私』の癖に女装姿が流出する程度で焦るなよ」

「最近、ますます秀吉みたいな扱いをされてる気がする……」

うなだれて言う薫。そりゃあ俺もそうやって接してるしな。

「んじゃ、面倒くせえがFクラスの奴らにこの体のことを説明しておくか。……いや、あの五人組だけに伝えた方が良いか」

秀吉に優子に風香にはもう伝えてある。あのあと三人に言われて、一つと言う制約も外させて置けば良かったと心底後悔したが、今更どう

にもならんしな。

「そういえば、担任は誰になったのかな？一応Aクラスと同じ設備にはなったけど」

「そこは微妙に気になるところだな。大方、ババアのことだから『アンタたちは満足して勉強しないって可能性もあるからねえ』とか言っ

てスネークを送りつけてくるんだろうけどよ」

言いながら俺はボロっちいFクラスの教室へ入る。そこに居たのは縛られて床に転がされた雄二とスネーク……

「「お邪魔しました」」

「さて、薫に風香！今のをどう誤解した！？」

「お邪魔じゃねえから助ける！異端審問会に捕まってるんだよ！」

「え？変態プレイ中じゃないの？」

「こいつら……俺を何だと思ってやがる……」

「……朝一緒に登校してきたら、いきなり雄二が連れて行かれた」

隣にいる霧島が呟く。なるほど、また雄二は霧島と一緒に登校してきて異端審問会に見つかったのか。

「うおっ翔子！？いつの間にそこに居たんだ！？」

「何言ってるのさ雄二。このぐらいいつものことでしょ？」

「とりあえずHRを始めたいんだが……」

薫たちの会話にスネークが額に手を当てながら言う。どうやらしおりを配るみたいだな。

そういえば今回の異端審問会はスネークの前でもやってたな。溜まりに溜まってるのか？

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。」

まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば問題ないはずだが」

前の席から回ってきたしおりを後ろに回していると、スネークのそんな言葉が聞こえてきた。とりあえずスネークは俺のあの予想と同じよ

うな理由で来たらしい。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

その言葉にしおりを開くと、そこには『Fクラスの生徒はAクラスと共に貸切電車で向かうこと』と書いてあった。ふむ、やっぱり歪みがある

るな。今更って感じたが。

「Fクラスの生徒とAクラスの生徒は半分に分けて行くから、しっかりと半分に分かれるように」

スネークのその言葉を最後にHRは終わりを迎えた。

車窓を流れる緑の多い風景を見ると、いつもの町から遠く離れた土地に来ていることが実感できる。

などと爽やかな事が言える訳でもなく、実際には

「王様ゲーム！」

い
え
ー
い
！
！
！
！
！
！

雄二の言葉に続いて言つたのは俺、薫、風香、明久、秀吉、優子、ムツリ、二、姫路、島田、霧島、工藤、久保の十二名。

この十三人が王様ゲームの参加者だ。

「明久、ルールの説明を頼む」

「OK。ここに一一十二番までの数字と王と書かれたくじがあります。この王様のくじを引いた人は、他の番号を引いた人に命令ができます。」

す。そして、王様の命令は

絶対！！！！！！！！

「じゃあいくぞ。せーの!!」

『王様だーれだー！！！！！！』

雄二の叫びに全員でくじを開く。俺は王様じゃねえな、誰だ？

「あ、私ね」

そう言って手を上げたのは優子。なんか嫌な予感が……

「それじゃあ、三番と五番と九番が」

「僕だ」

「わしじゃのう」

「私だね」

三番に明久、五番に秀吉、九番に薫が反応する。あの二人に何の命令をだすんだ？

「異性の服を着て隣の車両に行ってくる！」

「「なんだって！？」」「「なんじゃと！？」」

「三人とも、王様の命令は？」

「「「絶対……………！！」」」

なぜかムツッリーニが持っていたセーラー服を着て隣の車両へと向

かう。この車両は二両編成と言う脅威の少なさだから片方にしか扉は無

い。

あの三人が隣の車両に行った時に久保が呟いていた『僕が王様になったら、吉井君に何を命令しようか……』

の言葉で俺は、こいつにだけは王様を取らせてはいけないと深く思った。

「誰も疑問に思わなかった……」

「私と秀吉はガールズトークに入れられそうになったよ……」『ガールズ』って意味をわかってるのかね」

「じゃあ、二回戦！行くのじゃ！」

『お——！！！！！！！！！！』

「せーの！」

『王様だーれだ！……！……！』

「あ、ボクだね」

次の王様は工藤愛子。

「それじゃあ、十二番が七番に、一番が十番に」

俺が七番だな。だれだ？その十二番は？

「顔のどこかにキスを！」

「（ガタガタガタガタ）」

工藤の言葉に雄二が尋常じゃない勢いで震えている。

「（おい、どうした？雄二）」

「（考えてみる、そんなことしたら翔子が浮気したって攻撃してくるのは余裕で想像出来るだろうが！）」

小声で雄二とやり取りをする。雄二の心配はいらねえと思うがな。なぜなら

「……………十番は私」

雄二の相手は霧島だからだ。っと、俺の相手は

「十二番は私ね」

いつの間にか俺の横に来ていた優子がそうらしい。まさかの異性に当たるとは……………いや、同性のが良いって訳じゃないけどな。

「まあいいか。さ、早くやつちやってくれ」

「う……………そんなやつつけ仕事みたいにやらなくても……………私だって初めてなんだし……………」

優子のそんな呟きは俺には聞こえなかった。

「まったく、ヘタレめ」

優子は俺の頬に、雄二は霧島の額にキスをした。どうせなら雄二も、もっと別のところにキスしとけば良いものを。

「うるせえ。じゃあ三回戦！行くぞ！」

『おー！……！……！……！』

「せーの！」

『王様だーれだ！……！……！……！』

「あ、僕」

「おっとすまん。手が滑った！」

久保が言い終わる前に王と書かれたくじを奪い取る。ついでに俺のくじを公開することも忘れずにな。

「（ナイスだ、風祈！久保は絶対明久に命令を出すからな）」

「（……さつき、明久の番号を覚えてくれと言われた）」

アイコンタクトで雄二とムツリーニの二人と会話する。……久保よ、なりふり構ってねえな。お前に何が起こったんだ……。

「仕方ねえな。風祈のくじを全員見ちまったからもう一度引きなおそう。せーの！」

『王様だーれだー！！！！！！』

「おや、私です」

お前は何でいるんだ社長！今このクラスの担任じゃねえだろ！

「よし、僕だー！」

王様は明久か。さて、何の命令をする？

「それじゃ、三番と八番は、鉄人に『好きです！付き合ってください！』って告ってきて！」

「てめえ明久！そんな事言ったら、完全に誤解されるだろうが！なんて恐ろしい事言いやがる！」

「吉井君！君はそれで良いのかい？」

被害者は雄二と久保か。女性メンバーに当たらなくて本当に良かった。

「いや、なんかこれが仕返しになるって気がしたからさ。なんでだろ？」

あの王様ゲームの仕返しか。しかし、なんとなくでも分かるものなのか？って、今更そんなこと言うまでも無いか。

その後、雄二は『私は教師をからかった事を反省しています』の札

を首からかけて戻ってきた。久保が無いところを見ると、日ごろの
行い

の違いか。

「それじゃラストー！せーの！」

『王様だーれだ！……！！……！！』

「む、俺だな」

王は俺か。そうだな、別に命令したいこともねえし……

「一十二番までの全員は、今からの俺と薫の話聞くこと」

つてな訳で説明に数分。

「なるほど。つまり、お前らの体は召喚獣の体だと。んで、外部の
研究者の話では直るか分からないってことか？」

「まあ、そう言うことだね」

自称神の話はばかしてある。なんか言っちゃいけないような気がする
しな。

「おい、お前たち。着いたぞ」

スネークの言葉で全員が荷物を持って立ち上がる。その後の質問攻

めを適当にあしらいながら旅館までの道のりを歩いていった。

第七問（後書き）

なんか一番長いであろう話に……

特に実のあることはしてないのに長くなるとは……なんかいろいろと駄目な気がする。

そんなわけで『バカとテストと介入者』読んでくださってありがとうございます。
うございます。

強化合宿編では男子全員ののぞき騒ぎとかは無いので安心(?)してください。

では、次回も暴走の予感がしますが、読んでくだされば幸いです。

番外編一、俺が私で私が僕で私が俺で……以下略だぜ！

「……おい、これはどういうことだ……？」

「それを私に聞くかなあ……」

今俺の横にいる姫路並みのスタイルを持つ者とそんな会話をする。

「俺らでも分からないんだから誰も分からないんだよ」

生まれる性別が違えばさぞやモテたであろう美男子がそう言う。

「そうだよ！僕だって分からない」

「アキちゃん、お前は黙れ」

「チクシヨウ！言い返せない！」

バカが頭を抱えながら叫ぶ。

「アキちゃん……可愛いです！俺の家にお持ち帰りしたいです！」

「……ウチも持ち帰りたいわ」

「暴走すんなその二人。まったく、今日が休日だったからよかったものを……」

「あの……皆さん大丈夫ですか……？」

「……こうなったら雄二をお嫁さんにする」

「なってたまるか翔子！私だって逃げ切ってやる！」

「……こんなことになってもムツツリ商会は営業を続ける」

「ワシは何も変わってない様に見えるのじゃが……？」

「秀吉！アンタ俺の胸がないって言いたいのか！？」

「佐藤、お前も大丈夫か？坂本夫妻、お前らはあまり暴れるな、家が壊れる。ムツツリーニ、お前はどうかしても変わらないんだな。木下

兄妹、お前らは名札か何かで目印を作っておけ、そっくりすぎて見分けがつかん。……あ、ヤベ。……それと優子、お前は今は無いのが普

通だから安心しろここまで一気に言うのは疲れたぜヤッホイ」

「うーん……ムツツリーニ君にボクの色仕掛けが通じなくなっちゃったな」

「工藤、お前らはすでにお似合いのカップルだから安心しろ」

「ええっ！なに言ってるのさ風祈君！」

私の言葉に顔を真っ赤にする工藤。さて、この時点でおかしいと気づいた人が何人いるだろうか。いまだに気づいてない奴は明久以下の学

力になっちまうぞ？

まあ要は……誰が送ってくるのかは分からんが（大方自称神だろうが）霧沢兄妹に送られてくる仕送りが結構たまってるから、『どっかで――

日家を借りて遊ぼうぜ！』となったわけだ。

んで、朝目が覚めると全員性別が代わっていたと言うわけだ。一人称も性別にあってないと変わるみたいだな。

つまり、何を言ってるか（ry）だ。うん。

説明になって無いとか、どこの御天墮し（エンゼルフール）だと言うツツコミは俺も思っていることだからしないでくれ。

薫「だけど、これが直らなかつたらどうしようか……主に一人称とか」

明久「そうだよね、僕もアキちゃんの呪縛から逃げられなくなるよ……」

工藤「ボクもちよっと心配かな」

「……」お前らは（アンタらは、三人とも）いつもと変わらないだろ（でしょ、ってないです）「……」

妙なシンクロで三人にツツコム。一人称が私、ボクは性別逆転しても違和感が無い……と言うかそっちのが合ってるだろう。

アキちゃんの呪縛から逃れられないとか言ってる奴も結局逃れ切れてないからな。

「……ここは撮影会でも開いてこの状況を楽しむべき」

「ムツツリーニ、君はその写真はニダース貰おうこの状況の深刻さに気づくべきだよ」

「注文するな明久。だいたい、何で私がこんな格好を……」

「……大丈夫、今の雄二は可愛い」

因みに、全員性別逆転しているので服も変わっていたりする。女子たちはズボン、残りは全員スカートだな。

「面倒くさいからお前らの名前も作るか。えーっと……」

「じゃあ私が引き継ぐよ、アキちゃんは良いとして、雄二が優美、ムツツリーニが康子でどう?」

「それが一番無難だな。それじゃ、優美に康子宜しくな」

「……お前にもつけたほうが良い」

「そうだな。なら……風子でどうだ?」

「まって! 僕は何でアキちゃんで良いの!?」

「そんな事言ったって、普段からそう呼ばれてるんだからしょうが

ないだろ」

「ちっ、まあ良いか。それじゃ、暇つぶしついでに向こうの奴らの名前も作ってくるか」

そう言って女子たち（いや、今は男子たちか？）の元まで移動する。まずは……っと、

「霧島が翔慈、佐藤が満、優子が幽輝、姫路が和希、島田が実、工藤が愛斗、風香が風夜ってところか？」

「……それでいい」

「僕もそれで……」

「俺、なんか幽霊の幽じゃ無かった？」

「なにいつてんだ、優子の優に輝くで優輝に決まってるじゃないか」

「和希ですか……良い名前ですね」

「ウチ、なんか同情的な感じで名前をつけられた気がするんだけど……」

実際そう言う意味も込めてつけたからな。

「んじゃ、康子の希望通り撮影会でもやるか？」

つてな訳で撮影会が終了してからの深夜

「いやぁ今回の性別逆転、楽しかった？」

「たぶんこの世界は夢だと思うんだが、なぜお前がいる？自称神よ」

「たまには苦労を労おうと楽しいことを開いたのに自称は無いんじゃないかなあ？」

「どうせまた手違いかなんかだろ。言い訳ばかりすんなよな」

「うつ……まぁそれは置いて、とにかく楽しかったの？楽しくなかったの？」

「まぁ楽しかったっちゃ楽しかったな。あれがムツツリ商会に並ぶと考えると少しゾツとするが」

「それはまぁ見ていて面白かったらよしとして」

「さて、こいつの写真を全校生徒にばら撒いておくかな」

「あ、もうこんな時間だ！じゃあね！」

そういつて自称神は消えていった。……………逃げたな。

まあ、あれが加工される頃には学力強化合宿付近ってところか?どうでもいいが。

番外編一、俺が私で私が僕で私が俺で……以下略だぜ！（後書き）

終わり方が微妙！って感じがしなくても無いですが、その辺は気にしない方向で。

さて、五千アクセス超えたらの番外編ですが、いかがでしたでしょうか？

……作者的にはもっとも駄文の話だったと思いますが。

ふと、性別逆転をやりたいなと思って作ってみたんですが、原因がないと作れない。と言う問題に直面し『ああそういえば自称神がいた

ね！』と思い使ってみました。

いったいこの自称神はどういう立ち位置でそんなに本編に絡むのやら。少なくとも今のところはそんな可能性は無いですが。

では、今回のバカとテストと介入者を読んでくださりありがとうございました。

第八問

合宿所（いや、旅館か？）に着いて、俺たちは男女の部屋にそれぞれ荷物を置いた後、男子組みの部屋に集まっていた。

今日は予定より早く着いたせいで昼食が無い。だから弁当はあるんだけどな。

と、姫路が妙にもじもじしながら、意を決したように口を開く。

「あの、皆でお弁当を食べませんか？」

その姫路の言葉に全員が頷き、弁当を分け合うことになった。

で………すみませんでした。

「へー、姫路さんの弁当っておいしそうだね」

「あ、明久君、食べてみますか？」

「うん。それじゃ、頂こうかな」

「ストップだ。明久」

明久が姫路の弁当を品定め（が正しいんだっただか？）しているとこ
ろで、俺は明久を止める。

「ちょっと待ってる。すぐに戻る」

俺は自分のカバンまで歩いていき、すぐに目当てのものを引っ張り
出す。

「よし、もう良いぞ」

「？まあいいや。それじゃ、頂きまーす（パクッボタン）」

バイオ兵k……姫路の料理を食った瞬間、明久が倒れる。

……まずいな。血の気が引いてきた。

俺は先ほど取り出した機械で明久に電気ショックをかける。AED
様様だな。オイ。

「……あれ？僕何をしてたんだっけ？」

俺の適切な処置により復活した（妙に復活が早い気がするが）明久
が首を傾げながら言う。

どうやら、さっきの弁当で明久は記憶が飛んだらしい。……生物の防衛本能って可能性もあるが。

「どうしたんだ？明久。いきなり倒れて。それに、いま風祈が出していた機械も気になる」

「まったく、吉井君ったら瑞希ちゃんの弁当が美味しいからって倒れちゃうなんて」

「へ？そうだったかな？」

「美味し過ぎて倒れちゃったのよね？よね？」

「はい！確かにそうでした！」

俺の妹がこんなに怖いわけが無い（略して俺妹……ってどうでも良いな）って言葉が一瞬浮かんだが、何が怖いって、殺気を出しながら笑顔

で明久に言うつてところだな。

……心なしか、風香の周りに紫電が散っているような気がする。

「やっぱり薫ちゃんの弁当美味しいです……負けてられません」

「相変わらず薫は料理がうまいな」

「あはは、ありがとう雄二に瑞希。ただ、瑞希はもう一度『ちゃん』の使い方を勉強してこようか」

そんな昼食が済んでから数分後、

「あ、そういえば私、皆さんのためにお菓子を作ってきたんですけど」

「ほう。それは嬉しいのう。ぜひくれぬか？」

「あ、はい。どうぞ」

「ありがたく頂くのじゃ。では　　って風祈！？なにゆえわしから奪い取るのじゃ！？」

「気にするな」

「風祈君。木下君から取らなくてもまだありますよ？」

「ねえねえ瑞希。このフィナンシェのレシピを見せてくれる？」

「あ、はい。良いですよ」

薫が姫路からレシピを受け取る。

「……ねえ、この酒って何を使ってるの？」

「あ、それはエチルアルコールですよ」

「このバカ！アンタは何する気なんだ！これはどう見ても犯罪計画の材料でしょ！？」

「？なんでですか？」

「……じゃあ、この三つを混ぜたら何ができる？」

「クロロホルムですよね？」

「分かってるなら作るのを止めようか！こんなもの食べたら大惨事になるよね！？」

「そうですか？」

「だーもう！ちょっとこっち来て！今から食用の料理を叩き込んでやる！」

薫が姫路の手を引っ張って部屋から出て行った。

『……じゃあ、肉じゃがの作り方は』

『えーっと、塩酸と硝酸』

『

『もうすでにおかしいよね！？それで作っても王水と言う毒が出来るだけだよ！そんな肉じゃがはバイオ兵器として分類されると思うよ！』

？
『』

そんな言い合いには無視して、俺たちは薫のカバンから引っ張り出したまともなフィナンシェを食べる。

あの会話で他の奴らも姫路の料理の恐怖を感じ取ったのか、「姫路（さん、瑞希）の料理は絶対に食べないようにしよう」と言う言葉を全員

が呟いた。

全員で一息つくと、扉がノックされる音が聞こえ、誰かが入ってきた。

「あの薫お姉さまと美波お姉さまはいらっしゃいますか？」

清水か。なぜか薫のことを女だと思って追いかけてる奴だが、今回は何のようだ？

「薫は姫路に一般的な料理の作り方の指導中だ。島田ならそこにいるぞ」

「そうですか……いえ、やっぱりあなた方にも見せた方が良くかも知れませんか」

そんなことを呟く清水。なんのことだ？まさか覗き騒ぎのフラグか？

「どうしたの？美春。って、その紙袋はなんなの？」

清水が持つてる紙袋を指差す島田。あの中にカメラでも入ってるのか？

「いえ、これはですね……」

そう言つて紙袋の中身を畳の上に広げる清水。中に入っていたのは

手紙×2（Fクラス宛、Dクラス宛と書いてある）

ビデオ×2（こちらにもFクラス宛とDクラス宛がある）

だ。俺たちの部屋は待遇がAクラスなのでビデオデッキがあるんだが、Dクラスにはないから使わせて貰いに来たつてところか？

早速Fクラス宛のビデオを再生する。そこには暗幕で部屋を暗くし、黒子の衣装（ジャッジメント）ジャッジメントについても風紀委員の白井さんじゃない

ぞ。

パペット ペットの全身バージョンのような感じだな）を纏った人物の姿が。って言うても、ババアの仕業だろうな。

そもそもこんなことを出来る権限を持つのは学園長であるババアしかいねえ。

『元気にやつてるかい？各クラス代表。その手紙にも書いたけど、明日から特別企画のサバイバル戦争を開催するよ』

「……この声、学園長」

ムツツリー二があっさりと見破る。まあ妖怪の声なんて簡単に聞き分けられるか。

『サバイバルでは二つに分かれて戦ってもらっただけだねえ。その封筒に班分け表があるから明日の朝8時に指定の場所へ集まりな。』

それじゃ』

その言葉を最後に通信は切れた。封筒つて、これのことか？

俺はFクラス宛の封筒を開けて、中に入っていた紙を取り出す。そこには

『学力強化合宿、特別企画。サバイバル大戦争についてのお知らせ』

これは二年全員で白と黒に分かれて明日から強化合宿終了までの計三日間やる、この旅館全体を使った大掛かりな試召戦争だと思ってくれ

ればいいねえ。

ただし、討ち取るのは各グループに10個渡されるバッジだよ。

普通の召喚獣もそのバッジにだけは触れる設定しておくからねえ。

そして、相手のバッジを10個、三日目の五時以降に仮設学園長室まで持ってくればそのチームの勝ちだよ』

と書いてある。そして、もう一枚の紙にはFクラスの班分け表が。……この部屋にいる俺たちは9班だからと、

「わしらは黒のようじゃのう。あとは……須川や横溝たちが白かのう」

秀吉が指差したところを見ると、確かにそう書いてある。

「じゃあ、後で薫と姫路さんに伝えておこうか」

「……なぜだ？何か悪寒が……？」

「そうだな明久。雄二、お前はドンマイだ」

班分けで恐らくあの班と同じになるだろうからな。

しおりに書いてあった、風呂は混浴なので水着を着てはいること。って言うのもこいつにとっては危険な規則だろう。

俺たちの入浴時間はAクラスと同じ時間だしな。

「それじゃ、私たちは帰るわね。明日に備えて勉強と補充試験をやっておかないと」

「おう。んじゃ、三人ともがんばってくれ」

女子組みが出た部屋をで、薫たちが戻ってきて事情説明をした後、俺たちも勉強と補充試験を受けて今日は終了となった。

第八問（後書き）

サバイバルバトルは『学力強化のためには試召戦争のようにやる気を出させるために行う』ということを学園長が考えましたので始まりま

す。

本遍では書いてませんでした。この戦争で勝った方には『最大の貢献者の命令を一つだけかなえる』と言う特典までついております。貢

献者と言つのは何もバッジを多く取った人と言つわけではありませんせ

ん。
……ええ、今で察しの言い方は分かったと思いますが、恐らく最大の貢献者になるのはあの人です。

などと言つて見ましたが、察しの言い方でも分かるのやら。普通は分からないはずですが。ヒントは男性以外！

微妙に必死です。男子全員での覗き騒ぎが無いとか言つたせいで一瞬やつちやつたかなと思つたのは内緒でございます。

では、次回もバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

やっぱり長いですね。真面目に略称を考えましょうか……

……ついでにどうでもいいですが、ネタにしたクロロホルムって何

混ぜれば良いんですけどっけ？覚えてないんですよ……。

第九問（前書き）

昨日更新できなかったー！？マジすいません！

あ、でもでも、一昨日二話更新でしたので許して

……はい。すみませんでした。

第九問

「おいお前ら！朝だぞ、起きろ！」

朝七時、スネークのそんな声で俺以外の奴らは目覚めた。

「朝っぱらから暑苦しいな。スネーク」

「言つな、自覚している。それと、その呼び方は止めるって言うた
だろう」

「悪い。じゃあ、マジンガーで良いな」

「むしろ悪化してるだろう！？はあ……もういい。スネークでも鉄
人でもいいぞ」

額に手を当てながらそう呟くスネーク。

そのまま奥へと進んでいったスネークは、いまだに布団から出ない
雄二と明久を引っ張り出そうとし、布団から出まいとする二人と言
い争

い始めた。

「うつせえな。黙れよこの屑共が」

そんなとある人間の呟きで一瞬で部屋の空気が凍ったが。

「お、おい、風祈。そ、それはお前が言ったのか？」

「そ、そうだよね風祈！！　そう言うのはあまり言ってはいけないと思うよ！」

「す、すまん。俺は出て行こう。お前たちも早く来いよ、朝食に遅れるな」

「あの鉄人が逃げただと！？」

スネークはこのとある人間から発せられる重圧に耐え切れなくなつたのか部屋から出て行つた。

「あー、一応言っておくが、今言つたのは俺じゃねえぞ。そもそも、声も高かつただろ？」

「……聞き覚えのあるアルトの声だった。だから、今の声は」

「低血圧じゃからのう、こやつは」

ギギギギツと壊れたおもちゃのロボットのように明久と雄二は振り返る。そこに居るのは当然

「私をバカ面でジロジロ見てんじゃねえよ、ゴミ共が」

俺の兄弟である霧沢薫だ。

「マジスイマセンっしたあ！」

雄二と明久が薫に頭を下げ、アイコンタクト会議が開始される。

「（おい、あれはなんだ？低血圧って言うのにも限度があるだろうが！普段の性格からは想像もつかねえレベルだぞ！？）」

「（そうだよ！鉄人を威圧感だけで黙らせるなんて、普通出来ないよ！その辺のチンピラよりも怖いし！）」

「（あー悪い、説明忘れてた。木下家でもあったんだよな、こんなこと）」

「（あれはびっくりしたのじゃ。朝起きたら、姉上にだろうと暴言を言っておったのじゃ）」

木下家での薫の暴言としては、演劇バカ、墮落女、仮面兄弟などがここに書けるレベルの言葉だな。他にも入れちまったらこの作品に指定

が掛かっちゃう。

「（とにかく、あいつは二時間もすれば目が覚めるはずだから、それまで我慢してくれ）」

「（二時間だと！？）」

「（そんなに時間が掛かるなら、どうやっていつものテンションで学校に居るのさ！）」

「（は？決まってるだろ？朝四時にゃー起きてるんだよ）」

「（朝四時！？そんな時間に起きてちゃんと寝てんのか！？）」

「（その分早く寝てるからな。弁当も作るから時間が無くなるんだろっよ）」

「（前に一度、あの調子で弁当を作っても貰ったら、それはもうひどい出来じゃった。卵焼きを作るのに塩が袋から半分なくなっておったか

らのう……あとなぜかお茶の葉も一箱）」

「（……あれは危険。下手なことを言つと殺される）」

「（さすがムツツリー二だな、良い勘してるぜ？あ、ついでに言っておくが、風香にも気をつけるよ？あれも薫と同じようなテンションだか

らな）」

「（今頃、女子部屋のほうもパニックになっておるかのう。あれを知る者もおらのじゃし）」

一方、その頃の9班の女子部屋

「（ねえちよつと、瑞希から話しかけなさいよ!）」

「（そんな!ひどいですよ美波ちゃん。さすがにあの風香ちゃんは怖すぎます!）」

「（ウチだって怖いわよ!あんなスケバンみたいな風香なんて!）」

「（私だって同じですよ!あんな風香ちゃん始めて見たんですよ!）」

「……………チッ」

「（怖い!早く食堂に行って皆と合流したい!）」

「!」

そんなこんなで食堂にて、

あ、因みに、俺たちの設備はAクラスと同等なので二班に一つの食堂だったんだが、班分けしたら一班余ったので俺たちだけは一班で使っ

ている。

ってなわけで今度こそ食堂にて、

「「「「「.....」」」」」

うむ、いい感じにドス暗いな！

「（どういうことですか風祈君！なんで薫ちゃんまでスケバン風なんですか！）」

「（お前ら兄妹はどうなってやがる！内二人が低血圧の兄妹ってなんだよ！）」

「（.....しょうがないだろ、そう言う奴らなんだから）」

「（昨日は相当勉強しておったからのう。ゆえに起きれなかったのではないか？）」

「（.....道理で寝顔写真が手に入らないと思った）」

「（僕、今度薫にゲームを貸そうと思うんだ.....）」

「（ウチも聞かれたレシピを教えようと思うわ.....）」

「（まあほかつとけば直るからさっさと朝食食って集合場所に行くぞ）」

「んで、そんなこんなで集合場所」

「風祈、誰に話しているの？」

「気にするな明久。ただの独り言だ」

「ふーん。……あれ？雄二は？」

「ああ、雄二は」

『翔子、なぜか俺の手に手錠がはまってるんだが』

『大丈夫。試召戦争が始まったら取るから』

『そうか。だがおい翔子、お前何もって

ぎゃあああああ！？』

「あそこにいるぞ。たった今気絶したかな」

「うん、見えたよ。雄二、後三十分で起きるかな……？」

現在時刻は午前八時半。三十分後の九時からサバイバルバトルのスタートだ。

俺たちの陣営である黒は、俺、薫、風香、秀吉、明久、雄二、ムツツリー二、姫路、島田、優子、霧島、工藤、佐藤つてのが主なメンバー

だ。久保は白みたいだな。

バッジを持つてるのは今上げたメンバーの中から俺、薫、風香以外の奴らが持っている。

バッジ保持者には何かがあるらしいが、『黒はAクラス代表がいるからハンデとして教えないし第一の効果もないよ』とのババアからの言

葉で何があるかは教えてもらっていない。

ま、白との戦いで見つけるしかないってことだな。ババアもいやらしいルールを用意してやるし。

「日程が大幅に変わったので新たなしおりを配る。お前たち、しっかりとしおりに目を通しておくように」

スネークのその言葉が部屋に響く。どうやらこの戦争では黒白各陣営に担当教師がいるようで、その教師を試召戦争以外なら使うことも可

能らしい。

んで、召喚フィールドはこの旅館全体らしく、生徒が口に出して科目を指定すればその科目にあったフィールドが横に約10メートルの長の

さで出現するらしい。

「あ、皆おはよう」「おはよう皆」

「「「「今起きたのかよ（ですか、の）！？」」「」」」

「「「「「（やっと起きたか）」「」」」」

「さあ薫に風香、こっちに来てくれ。ルールを教える」

たった今完全覚醒した二人にルールを教えて、そのあと少し過ぎた三十分が経つ。

「そつえば、また私たち何かしてた？」

「美波や明久もやけに優しかった気がするんだけど……？」

「大丈夫だ。何もしていない」

今俺たちは黒の本陣で会話をしている。雄二の話ではスネークが伝令役としてくるらしいが……

「霧沢兄妹、坂本からの伝言だ。『三人は分かれて階段の上下に一人ずつ、残った一人はその階に現れた敵を殲滅していつてくれ』だそう

だ」

「了解だスネーク。では行ってくるでしょう」

「私が上に行くよ」

「なら私はこの階担当になろうかな」

俺が下、薫が上、風香がこの階と分かれて行動開始だ。なぜかこれまで動かして貰えなかったが、その鬱憤を誰にぶつけてやろうか。

「上と下に行く奴が決まったのならその二人に伝言がある。『上は学習室Bの前へ、下は仮説視聴覚室に向かってくれ』だそうだ」

「援軍つてどこか？まあ良い、だったらさっさと行った方が良いしな」

「で、ここが学習室Bの前だけど……あれかな」

私、霧沢薫は学習室のB前にいる。あれは……横溝君だろうか？

「10人がかりだったのに散々手こずらせやがって……止めだ！」

腕輪のような能力を使う横溝君。このままじゃ戦ってる彼女が戦死してしまう……だけど、

「サイモン試獣召喚、アイギス魔刃の書に」

その言葉を言うと同時に、床に手を触れると彼女の召喚獣の周りに乳白色の光が出現した。

なぜか横溝君が使っている能力は、やはり異能の力認定されているらしく、アイギスの効果で容易く防げた。

「なんだ！？いきなり特殊能力が消えたぞ！？」

アーマメント
「麗血開花つと」

うろたえる横溝君に金の鎧を着て接近し、全力で蹴り飛ばす。

黒陣営 霧沢薫 VS 白陣営 横溝浩二

物理 178点 VS DEAD

音速を超える速度で吹き飛んだ横溝君の召喚獣は、もはや跡形も残らなくなっていた。

「よっ、と。……そういえばなんで横溝君は腕輪の特殊能力を持っていたんだろう……？」

横溝君からバッジを奪い取った後、それを考えながら私は部屋を後にする。

「んあ？ あれは……なんだ？」

「おう、風祈！ やつと来たか！」

「……あれを倒してほしい」

「はいよ、坂本翔子様」

「おい待て風祈！ サラツと翔子と俺を夫婦にするな！」

俺が一階に着くと雄二とさかも
上を指差して倒せと言ってきた。

霧島が数メートル先の斜め

成程、確かに『横』に約十メートルなんだから『縦』は言ってねえ
な。

夫婦の二人が指差した先には、白い翼（と言ってもメルヘン野郎の
じゃないぞ）を生やすカスの召喚獣が。大方腕輪の効果なのだろ

白陣営 根本恭二

数学 198点

「腕輪の効果じゃない……？ どういうことだ？」

カスの得点は400点を超えていない。なのに特殊能力を持ってい
る……？

「まあいい、試獣^{サモン}召喚つと」

黒陣営 霧沢風祈

数学 187点

カスが翼から火の玉の様な物を撃ってくる。あれは遠距離系の能力か？羽ばたいてってのを見ると普段の試召戦争には向いてない気がする

が……

「どうだ！腕輪の力が使えない俺でも、バッジの第一の効果なら使えるんだよ！」

なるほど、あれは腕輪の力では無くバッジの力ってことか。どうやらあれが俺たちの陣営に無いバッジの能力のようだな。

「そうか、教えてくれてありがとうよ、ね・も・と・く・ん。だが」

そこで俺は一拍置いてある武器を作り、

「貴様に空は似合わねエ」

ドガアアンツツ！と爆音を立てて根本の召喚獣が地に落ちる。たった今使ったのは『六星DB』『バレッテ―ゼフレア』だ。動きま

で封

じるから重宝できる武器だな。

「さて、止めは任せたぞ？坂本夫妻」

「……分かった」

「だから坂本夫妻って呼ぶな！」

言いながら雄二と霧島の召喚獣はカスの召喚獣に肉薄し、消し飛ばしていた。点数の問題だろうな、AとBクラス（点数だけだが）のコンビ

に残った点数で勝てるとは思わん。

「さてと、そのバカが教えてくれたおかげで俺達側にないバツジの効果は分かったが……」

「……第一の効果と言うことはまだ他の効果もあるってこと」

「確かこの戦争では『何らかの事情で召喚獣の召喚が出来なくなつた者は通常のルールでの補習の義務は無く、本陣にて待機すること』」

てのがあったよな。……そこから探してみる、何か分かったら教えてくれ」

「了解だ。俺ももう少し相手を倒しておく」

第九問（後書き）

この試召戦争ではあまり大人数を一箇所に集めることが出来ないの
で会話がしつかり出来ます。

せいぜい四、五人程度なので会話に入らない人が出ないのですよ。

王様ゲームの時などの大人数でやるゲームの時はあまり気にならない
のですが、たとえばFクラスで話していてムツツリー二がそこに
居る

のに会話に参加しなかったりなどのことが起こってしまうとかなり
気になるわけです。

まあこれは単純に私が駄文しか書けないというのが作用している物
ですね。

さて、どうでもいい言い訳っぽい物をしていましたが、今回の話は
どうだったでしょうか？

………そうですか、描写を増やせですか。ですがそれは 無理
です！作者の技量の問題で今の量が精一杯です。

まあそれでもこれを読んでやるといの方は次回もお願いしますね。

第十問

「おう明久、バッジのことなんだけどな

」

廊下で明久に会った俺はバッジの第一の効果を説明した。このバカでも何か分かるかもしれないからな。

「うーん。そのバッジにもう一つの効果があるって言うのはつまり

」

『さっき階段で一個バッジを取ったらしいわ!』

『三階でも一個取ったらしい!』

明久がそこまで言った言葉は、白陣営から聞こえてきた言葉でかき消された。

「大丈夫? ムツツリー」

「……………面目ない」

「仕方ないって、保健体育じゃないんだったらさ」

「……………その代わり、バッジのもう一つの能力を探してくる」

私、霧沢薫とムツツリーニこと土屋康太は廊下を歩いていった。

と言うのも、さきほど学習室Aまで言ったところ、ムツツリーニが小山さんの召喚獣にやられていた所を見つけて、黒の本陣までつれてっ

ているからだ。

「戻るときにはこのバッジも持ってって いや、ムツツリー

ニ。小山さんに合うまでちょっと一緒に居て」

「……………？分かった」

そのまま数分歩くと、小山さんを発見できた。さっきまで誰かと戦っていたようだけど……………誰だろうか？

「はあ……………はあ……………うそ、もう追っ手が来たの……………？」

白陣営 小山春美

英語W 56点

「試獸召喚つと」
サモン

ポンツと体が縮んで召喚獣のサイズになる。

普段の私生活で使っている術は試召戦争の時は使用禁止といわれたので強制的に解けると言うなんともご都合主義な設定。ご都合主義
って

いいよねッ …… すいませんでした。

黒陣営 霧沢薫
英語 W 138点

「(ムツツリーニ、ちょっとさ これお願いできる?)」

「(……………お安い御用)(グッ)」

ムツツリーニに頼んだことをやり易くするため、出来る限り時間を稼ぐ。

明久のような操作技術も無くて点数が下の相手は容易く倒せるが、
それでは目的が達成できないからだ。

「……………ああ、そう言えばこれがあったね」

また甲冑を身に纏い、能力を発動する。

今回の能力は、認識倍加の毒。バイフランド相手の感覚を八分の一にする。と言

う能力だ。

召喚獣でやると相手の召喚獣の反応速度が八分の一になるらしい。

「なによこれ！なんで動かないの！？」

「がんばって八倍の速度で動けるようにしてね」

と、肩をトントンと叩かれた。振り返ると、そこにはムッツリーニの姿が。

「（ムッツリーニ、さっき頼んだことできた？）」

「（……………問題ない。ただ、本当にこれはやってよかったのか？）」

「（ご苦労様。それはババアも意図したことだろうから良いんだよ）」

「あんた達さつきから何はなしてるのよ！こっちに集中しなさいよね！」

「あれ？集中していいの？なら、さっさと倒してあげるよ」

言って小山さんの召喚獣を一閃する。そこからバッジも取って、これで私が把握してる限り二個のバッジを手に入れたことになる。

「あれ！？さつき取ったバッジが無いじゃない！」

「どこかに落としたんじゃないの？」

などと私は返したが、実際は私がムツツリー二に『取られた自分のバッジを取り返してきて』と頼んだのだ。

この戦争のルールに補習の義務は発生せず、何らかの事情で召喚できなくなった者は自軍に待機することと言っている。

その中の『何らかの事情』に戦死も含まれていて、バッジ保持者は戦死者とはみなされない。と言う仮説を私は立てた。

それに、バッジを“三日目の午後五時以降”にもって来いと言うのば、それまでなら奪い合いもOKという意味も含んでいるだろう。

だから、一度奪い取っておいてムツツリー二で試してみよう、と私は思ったのである。

ただ、相手チームにも知られていないこのルールを（予想が合っているかどうかは別にして）わざわざ知らせるのはこちらが不利になるので

やりたくない。

故に本陣まで行ってから試した方がいいのである。

「さ、ムツツリー二。戻ろうか」

「……了解」

「そういえば明久、さっき何を言いかけたんだ？」

白陣営の奴らをぶっ飛ばしながら明久に尋ねる。

「ああ、そうそう。つまりさ、それはバッジ保持者は戦死をしても復活できるってのじゃないのかなって思ってたさ」

「……根拠は？」

「ドラク だよ？」

「ゲームじゃん！……いや、以外にそれも当たっているか？」

とりあえず雄二に話してみるか。と結論付けて俺たちは本陣へと戻っていった。

「なるほど。確かに言った通りだったな」

本陣へと帰ると、雄二、霧島、薫、ムツツリーニが話しているのが見えた。

「ねえねえ、四人とも何してるの？」

「ああ、これはな」

薫が言っただけらしい推測とムツツリーニで実験したらしいこのことを雄二が語る。

「くそう、僕だけしか気づいてないと思ったのに……！」

「明久、そもそもお前が気づくようなことを誰も気づかないなんてこと無いだろう」

「ひどいよ雄二！」

「……いつものこと」

「まったく、カップルみたいだ」

「……雄二、ちょっとこっちに」

薫の不用意な発言で雄二が連行されて行った。さすがに不憫だから

助けてやるか、

「あー坂本夫妻ってホントお似合いの夫婦だよなー！」

「そうそう！どんな障害も乗り越えていくって感じのね！」

俺の言葉に負い目からか薫が乗る。と、向こうから上機嫌で戻って来る霧島と珍しく無傷な雄二の姿が。

「（マジで助かったぞ二人とも）」

目でそう語りかけてくる雄二。

「（たまにはこんな感じでもいいんじゃないかと思ってな。いつも折檻ばかりだろ？）」

「（それに、私の不用意な発言が原因だったからね）」

「（とにかく助かったぞ。下手をすると無傷で戻れたのは初かもしれん）」

哀れな男だな、雄二。

と、そんなことをしているうちにゾロゾロと黒陣営のメンバーが戻ってきた。戦死者も結構居るが、バッジ保持者はやられて無い様なので

安心だな。

「皆、今俺たちは向こうからバッジを四個奪った。それも皆が戦死

を恐れずに戦ってくれたおかげだ」

雄二が全員そろったのを見計らって前に出て言う。

「バッジ保持者以外の戦死者は一日立ったらもう一度補給試験を受けて参加できる。まだ一応戦争は続いていることになっているが、その

間にでも皆には勉強をしておいて貰いたい」

「……いくらこっちに雄二たちが居ても向こうはバッジの特殊能力と言う武器がある。それに皆が勝つには今の点数じゃ足りない」

「Fクラスの中でも一番バカな明久でさえ勉強するんだ。お前らまともな頭を持つやつらなら勉強にも耐えられるだろ？」

霧島が言葉を引き継ぎ、挑発するように雄二が言う。

『当たたり前じゃあ！！！！！！！』

クラス中から響き渡るその声。やはり坂本夫妻は人の上に立てるタイプだな。

「ならば全員今は牙をとげ！目指すは勝利、ただ一点のみだ！」

『了解！！！！！！』

「……やっぱり、雄二は優秀」

「いやいや、どっちも優秀だろ？ホントお似合いの夫婦だな」

「……嬉しい」

「まてまてまて。風祈、さりげなく翔子に結婚式場のパンフレットを渡すな」

演説から戻ってきた二人に声をかける。……雄二もさっさと認めりや良いのに。

「お、もうこんな時間か。さっさと風呂に入って、今日の疲れを癒すか」

雄二のその呟きに、ムツツリー二が鼻血を出して死体と化していた。大方、風呂のことでも想像したんだろう。

……どうでもいいが、こいつはこの風呂が混浴だっことを忘れてやしないか？

第十問（後書き）

次回は大浴場ですよ！混浴ですよ！……あ、スタンガンは持ち込みじゃ駄目ですって！

なんか大浴場でテンション上がる私はどうなのでしょう……

そんなわけでバカとテストと介入者第十話はどうでしたか？

出来れば楽しんでくださると嬉しいのですが……そしてまだ終わらないサバイバル戦争には何話かかるのか！の予想もしたければどうぞ（笑）

徐々にあとがきじゃなっていく気がするのでこの辺で終了です！

では次回も『バカとテストと介入者』をよろしくお願いします。

第十一話

「確かに時間も場所も決まっていなと聞いた。だが、ここでのバトルは無いだろっ!?」

「風祈! そっちにいったぞ!」

雄二の声で前を向いて襲い掛かってきた相手の召喚獣を殴り飛ばす。

風呂に入って例の如く騒いでいたらこれだ。白の連中が風呂場の壁を破って襲ってきた。ハリボテだったらしい

こっちのメンバーは先に帰っていった木下兄妹を除いた恒例の十人、対して相手は三十人はいるな。

「ちょっと! 僕が戦死しそうだからヘルプ! ヘルプミー!」

「……………加速」

明久が助けを求めたところでムツツリーニが明久の相手を倒す。その横では佐藤が五人ほど相手をしていた。

ご苦労様だな、佐藤にムツツリーニ。っと、残りは後十人か。

「……………風祈、薫と雄二と本陣に戻って欲しい。本陣の方も心配だから」

「了解だ、霧島。あ、ムツツリーニも連れてって言いかな?」

「……それはいい。風祈が何したいかが分かったから」

「そうか。おい、雄二、薫、ムツツリー二！本陣に行くぞ！」

戦っている三人に呼びかけて手を引き、風呂を出る。残ったメンバーでも十人ぐらいなら勝てるだろう。

「おお、今のところ本陣は無事のようだな」

「風祈、なにやらあったようじゃが、どうしたのかのう？明久が抱きついて離れぬのじゃが……？」

「ああ、あの後白の連中が襲ってきたんだよ。でも、あのメンバーならたいしたことは無いはずだから心配はしなくてもいいと思うよ」

「それと明久。お前はそんなに姫路や島田、ついでに玲さんにばらされたいのか？」

「はっ！な、何のことかなあ風祈君。僕は何もしてないんだからそこでなんで姉さんが出てくるのさ」

「風祈よ。明久の姉はどういったものなのじゃ？」

秀吉が不思議そうに首をかしげて聞いてくる。

俺たちは以前に中学校の繋がりからか、明久の家にいたときに突然来た玲さんに会ったことがある。

……それはまあ、黒歴史に認定されているので説明の方は割合させてもらう。

「（風祈！秀吉たちに姉さんのことを話さないでよ！あんな姉がいるってばれたら恥ずかしくて生きていけないよ！）」

「（大丈夫だ明久。そんなことは分かっている。知人の妹の小学生に『バカなお兄ちゃん』なんて呼ばれてるお前が、恥ずかしいって心を持

つレベルの姉だってことはな）」

「（ひどい！その言葉で僕の心は深く傷ついた！）」

「秀吉。明久の姉は頭の良い人だから、すごく明久とは仲がいいんだよ。もはや弟ってレベルじゃないぐらいに」

うん。薫は嘘は言っていないな。

「なるほど、明久の姉は自分の体の一部と言うレベルまで弟がすきなのか。良かったな、明久」

「あはは、そうだね雄二。僕の姉さんで本当に良かったと思うよ…
…きつと普通の人じゃ耐えられないだろうからね（ボソッ）」

「ん？何かいったかのう明久？」

うん。薫は嘘を言っていない。雄二が何か間違えて感じているような気がすんのは気のせいだな。

「あはは、なんでもないよ秀吉。ただちょっと薫から料理を教わってただけさ」

明久にしてはまだまともな言い訳だな。たまにちゃんと教わってるから信憑性がある。

「薫が教えてるといえば、姫路の料理はどうなったんだ？ちゃんと直ったのか？」

「あはは、雄二。ちょうどさっき作ってもらった料理があるから食べてみなよ」

そう言つて薫が奥から肉じゃがにカレーにカルパッチ、それにフィナンシェを持ってきた。……何か薫が遠い目をしているな。まあいいが

。

「さあどうぞどうぞ。食べてよ。こんなに作っちゃってどうしようかと迷つてたところなんだ」

「そうか？じゃあ遠慮なくいただきます」

雄二のその言葉で、まずは肉じゃがを食べる。……ふむ。

「美味しいね……王水入りの肉じゃがを作ろうとしていた人の料理とは思えないよ」

妙に達観した顔で明久が言う。たしかに、これはうまいな。

「さあさあ、次は口直しにフィナンシェをどうぞ」

薫のその言葉で全員フィナンシェを食べる。

「おお、またもや美味しいのう。やはりバイオ兵器と呼ばれていた頃が嘘のようじゃ」

これまたよく出来たフィナンシェだった。よかった。これでバイオ兵器はこの学園から消え去ってくれたか……

「じゃあ次は、カレーとカルパッチョをどうぞ」

そう促されて秀吉と俺はカレー。明久と雄二はカルパッチョを食べた。

「……おお。これも美味しいンゴパッ」

言葉の途中で全員食べた物を吐きながら机に突っ伏す。な、なんだ？今の味は……

「はは……いやあ、まさかの『米を研ぐときはクレンザー』、私が

渡したカルパッチョのレシピにあったバルサミコ酢を『酢酸にバルサン

を加えた物』。と勘違いしているとは思わなかったさ……三途の川を見た気がするよ」

「ど、道理でさっきの薫は顔色が悪かったわけだ。こんな物食ったら、普通死ぬぞ……」

「それでもまだましな物だよ。それは私がひたすらいろんな物を入れて中和してったから。オリジナルの方は……」

訂正だな。姫路の料理は全種薫が教えるまで確実に食べ物が出来るとは限らん。

もう姫路は『アースフレイカー原典創作』とでも名乗ればいいんじゃないだろうか。原典的效果とかそのうち出るんじゃないかね？

「だけど、この二つ以外は良く出来ていたよね。学園祭は喫茶店でもやろうか？」

「そうだな明久。Aクラスの設備だから広いだろうし、薫に限定なら姫路とかもいるんだから飲食店ならいいかもな」

あ、喫茶店は変わらねんだな。と、こっちにあきれた顔でやってくる奴が。

「アンタまたやってんの？さっき吐いたので学びなさいよ」

「今回は私じゃないよ。この四人に食べさせてあげたから」

「あれ？そういえばムツツリー二は？」

「ああ、ムツツリー二なら俺が敵の本陣まで行かせた」

やってきた優子と薫の会話でムツツリー二が居ないと今更ながらに気づいた明久の問いに答えておく。

「なんで行かせたのさ？一緒に居た方がいいと思うんだけど？」

「お前はホントにバカだな、明久。今風祈の考えてることはたぶん中学生でも理解できるぞ？」

「しょうがないじゃないか！そう思っちゃったんだから！」

「まあつまり、明久のために噛み砕いて説明するとだな、目には目を、歯に歯をって感じだ」

「？どういうこと？」

心底不思議そうな顔で明久が尋ねてくる。こいつは……

「明久、つまりだな、戦争って物はやったらやり返すの繰り返しで起こるだろ？それをいま風祈はムツツリー二に指示したんだよ」

「ふえ？つまりどういうこと？」

「だからな、明久。俺たちはさっき風呂で襲われた。だったら、向こうをこっちが襲ってもいいだろ？幸い、こっちには兵器があるんだか

らなのです……マジスイマセンでした（土下座）」

「ふ、風祈。なんで誰もいないほうに土下座してんの？」

「気にするな明久。ただ、いろんな意味でヤバイと思っちゃっただけだ」

因みに、その兵器と言つのは姫路のバイオ兵器ではなく、明日になると機能する特別製の目覚まし時計だ。しかも、ボイスが言い終わるま

で終わらず、頭に響くという嫌がらせ物。

それをあいつらの部屋にある目覚ましと取り替えて置いておく。するとあら不思議！明日の向こうの目覚めは最悪です！

「そういえば風祈。目覚まし時計とは聞いていたが、どういうものなんだ？」

「はっはっは。それは明日のお楽しみと言っやつさ。とりあえず、確実に　　だかな」

「？　なんていったのじゃ？　風祈？　良く聞こえんかったのじゃが」

秀吉が小首をかしげながら聞いてくる。こいつは男に見られようとする気が無いのだろうか？

「気にするな四位。なんでもない」

「ならば良いのじゃが……名前を呼ばれなかった気がするがの……？」

「風祈、その四位って何に？」

「はっはっは、気のせいだ十二位 明久」

そう言うてにこやかにカレー（姫路作）をもって明久に言うと、明久は顔を青くしながら、そくだよね！と叫んでいた。

「そつえば、代表たち遅いわね？」

「そうだな。以外に手こずってるのかも知れねえが……」

「……………指定通り、取り替えてきた」

言いかけたところでムツツリーニが扉を開けて入ってきた。大量の目覚まし時計をもつてな。

「ご苦労様、ムツツリーニ。その目覚まし時計も改造しとくからちよつと貸してね？」

「……………俺はこんな物いらない。むしろ死ぬ」

薫の言葉にムツツリーニが首をフルフル振りながら答える。若干青いのは俺の説明を聞いた所為だろう。

「ムツツリーニ、お前が持ってた目覚まし時計ってどういう細工がしてあんだ？」

「…………それは、お前らが使ってみて知ればいい。ただ……なんでもない」

恐らく、そのなんでもないは不安を増大させるだけだろう。

「で、これからどうするの？そもそも、僕達は何やればいいのかな？」

「俺達の役目はここの守護だ。戦死者ばかりだから実はボロボロなんだよ」

まだ戦死してなかった連中（主にFクラス）は遊びに行っている。呑気なことだ。……んあ？あれは

「確かに、見た目は軍隊だけど、実は小隊って人数ね。バッジも復活されるなら取られたら」

「待て優子！その話はするな！」

先ほど見つけた物体にムツツリー二と共に近づいて調べる。

……くそっ、ついさっきまでぶっ壊れてたようだが、振動かなんかでもう一度動いちまったのか。

「ねえ風祈？なんでそんなに慌ててるの？」

「明久。これが何か分かるか？」

忌々しい機械を明久にかざして尋ねる。

「え……分からないよ？」

「これは盗聴器だ。だから、今の会話も聞かれちゃったんだよ」

盗聴器を召喚獣だからこそその力で握り潰しつつ説明をする。

「……この盗聴器は、持ち主のパソコンにデータがいくタイプの物だった」

「恐らく、これを仕掛けたのは清水だろう。しかもこの後から清水の連絡を聞いた白が一気に来るぞ？」

「ちつ、厄介なことだな。こうなると、翔子たちは向こうにいてよかったかも知れねえが……」

「確かにあいつらは十人倒せば問題ないがな。だが、こっちは洒落にならんぞ？」

三人で話していると、後ろから明久が声をかけてきた。何だ？

「あのさ、三人とも。さつき清水さんから貰ったこれも同じ物かな……？」

「その通りだ生ゴミ。風祈にムツツリーニ。そこの生ゴミを今すぐ道路に投げ捨てる」

「……雄二。それは燃えるゴミだから焼却炉の方がいい」

「待って二人とも！なんで僕の手足を掴んでいるの!？」

雄二とムツツリー二が明久の手足を掴んだところで明久が振りほどいてしまった。俺は明久が持っていた盗聴器を握り潰しつつ、

「薫。そのバカの所為でバッジ保持者がどこにいるかが殆ど割れた。お前はあいつらの方へ行っててくれ」

「了解。こっちはよろしく頼むよ？」

「ああ。お前もさっさと行って来い」

薫は走って風呂場のほうへと向かっていった。さて、俺達も勉強の成果を見せるときが来たな。

「風祈よ。ただでさえ少ないのに薫を向こうにやってよかったのかのう？」

「大丈夫だ秀吉。こっちは優子がいるんだからな」

「そうよ。こっちは私よりも遥かに強い風祈がいるんだからね」

「……………（俺と優子の睨み合い）」

「なぜ謙遜勝負しておるのかのう」

「いつもこんななのか？秀吉」

「僕、風祈って冷静沈着な人だと思ってたんだけど……………」

「姉上と話すときは大体あんな感じじゃ。学校ではあまりないんじ

やがのう」

秀吉たちがなんか話しているがそれは無視だ。

「突入！」

『おおーーーーー！』

俺と優子が睨み合っていると扉を開けて白の奴らが入ってきた。邪魔な奴らだ……今俺は忙しいんだよ。

「斥候部隊ってどこか？それでこの人数ってのも

風祈？」

「雄二、こいつらは俺が一人で叩き潰す。腕輪の力も使ってな

サモン
試獣召喚」

何になるかは知らんが、腕輪の力は使える点数ある。が、毎度毎度ポンツと音を立てて縮むってのも締まらん。

黒陣営

霧沢風祈

古文

750点

「悪いな。恨むんだったら自分らの入ってきたタイミングを恨んどけ」

そう言いながら俺は右手に魔力の波動、左手に春雨&フツノミマタの剣を作り出して持つ。

オーバーソウル
「OSスピリットオブキャノンソード」

魔力で大砲を形成し、そこからスピリットオブソードが打ち出される新型のチート武器。これが俺の腕輪の効果だ。

つまりは、『本体が思い浮かべた能力と能力の融合、強化』ってことだ。

だから、点数消費も一方通行ほどじゃねえが激しい。マイナス400点だからな。

その代わりなのは知らんが一度腕輪を扱える点数まで上げれば再び試験を受けるまで使えるけどな。

「さあ、本陣で待機しているお前らのお仲間にも来てもらわねえと全滅しちまうぞ？言っておくが、この砲台は弾数無限だからな」

「ねえ、あれって完全に悪役のセリフじゃない？」

「本当じゃのう。なんか壊れたのかのう？」

「風祈があんな雄二みたいなこと言うなんて……」

「くそつこの馬鹿あきひなの言葉が否定できないっ」

「雄二！？なんか呼び方がおかしかったよね!？」

後ろから聞こえてくるそんな言葉は無視。つと、撤退を始めたな。

さすがに弾数無限が聞いたか？

「さてと、向こうの方はどうなっているかな」

「あら、援軍いらなかった？」

私が大浴場の方へ行くと、腕輪組（風香、瑞希、翔子、ムッツリー二、愛子）が殆どの白陣営の連中を倒しているところだった。私も今回腕

輪が出る点数までいけたから使いたかったんだけどなあ。

「ちょっと来るのが遅かったからね。でも、美穂ちゃんがバッジを取られちゃったから取り返してこないと駄目なんだよね」

「……美穂はよく頑張った」

「ありがとうございます！皆さん」

むう……なんか非常に腹が立つなあ。取り返してこようか。

「じゃあちよつと私が取り返してくるよ。すぐ戻るからね」

そのまま召喚獣サイズになって白陣営のほうへと走っていく。程なくして先ほどまでいたと思われる白の集団が見つかった。

黒陣営

霧沢薫

現代国語

776点

「凍露の毒クリオスタット&不可侵の毒コルドン&雷霆の毒発動フォルミナ」

これぞチートコンボ。時間凍結、絶対攻撃&絶対防御、絶対粉碎が合わされば無敵に決まってるよね。

「たっだいまー」

「制圧早っ!」

戻った途端に風香に突っ込まれてしまった。

そんなに早かったかな? 攻撃が楽しくて何分立ったかはわからなかったけど。

……あ、時間止めてたの忘れてた。

「ほい、佐藤

美穂さん」

「あ、ありがとうございまひゅ！で、でも、まだあれから五分くらいしか立ってませんよ？」

なんかパニックられて舌嚙んだ。そんなに下の名前で呼んだのが駄目だったのかな？一応呼び捨てではないけど。

「って、うわーホントだ。確かにこれは早いわ」

「……相変わらず、薫は超人的な力がある」

「って言うか、そもそもいまは召喚獣なんだから超人的でしょ？」

翔子の言葉に美波が突っ込みを入れる。確かにそうだね。

「そつえば、ボクたちのところに来て良かったの？どっちかって言うと本陣のが大変そうなんだけど」

「ああ、その点は大丈夫。700点オーバーした守護者がいらつしやるから」

「……風祈か（風祈君ですね、風祈君だね）」「……」

全員で声をそろえたかのごとく同時に言う。

「ってなわけで、本陣の方へ戻りましょー」

その言葉と共に私は皆と一緒に黒陣営の本陣へと帰っていった。

第十一話（後書き）

だい凶をよく引く凧です。お久しぶりです。やっとテストが終わりました。

メールもやっていないので結果なんて決まってるじゃないですか

ダレイオス三世の問題が駄目でしたね。絶対に間違えました。

めんどくさがらずにしっかりと先生の話聞いておくべきだと痛感しました。

などと必死で作ってみました。ちょっと苦しいですね。誰も結果などに興味ありませんし、何よりあとがきで書くことじゃありません。

一応テストの結果は最初の四文の中に書いてあります。ホントどうでもいいことです。

で、今回も微妙でしたと思いますが、更新復活していきなり一回更新から二日に一回に変えるなんて何言ってた。って話ですが大目に見てください。

それでは、また次回でお会いしましょう。

番外編二 あれ？何で

お前明久の曾祖父だよな！？ハッ！周りには花畑

「正直に言う。俺は今、非常に後悔している。十分前の自分を殴り飛ばしに行きたい」

雄二が風呂のサイドで暗い顔をしてそう言う。

「よし分かった。お前を今から殴って来てやる」

俺はちよつとタイムスリップして雄二の前まで行き、殴り飛ばしておく。そして風呂に戻ると、

「風祈、いきなり頬が痛み出したんだが、お前何かしたか？」

「数秒前の自分に聞くといいZE？」

などと俺は適当に返しておく。一応、全力で殴り飛ばしたら死ぬかと考えた配慮で威力を弱めたというのに……。

「お、来たみたいだぞ」

悠然と歩いてくるのは坂本夫妻の坂本翔子。モデル体系のような足取りでやってきた。

「……雄二。私の水着、似合う？」

「……お、おう……」

霧島が小首を傾げて問うと、雄二は顔を赤くして顔を逸らしながら

そう答えた。

と、優子がこっちを向いて顔を真っ赤にしながら、

「風祈、私の水着、似合う？」

「たぶん」

「……そう。よかった（ヒュッ）」

「はっはっは（サッ）」

優子が目を狙って出してきたチヨキを身を屈めてかわす。

俺は普通の人間（？）なんだから、目潰し食らったらマジで目が見えなくなるか視力が劣るんだが……。

『あ、あの。薫さん。この水着、私に似合ってますでしょうか？』

『うん。似合ってると思うよ？可愛いし』

『そ、そうですか！ありがとうございます！』

遠くの方では微妙に顔が青い薫と佐藤が何かやっている。何の会話をしてるんだあの二人は。

どっちも女子の水着で。

「風祈よ。何ゆえワシと薫と明久は女物の水着なのじゃ？明久にいたってはウィッグまで着けておるし、理由が分からぬのじゃが……」

「それはな、秀吉。明久は面白いから、お前と薫はヒデカと言う第三の性別らしいからだ。因みに、その性別はお前と薫だけだ」

「ワシはれっきとした男じゃぞ！？木下兄妹なのじゃから」

「ああ秀吉。それは違つぞ。お前らは木下姉妹だ。し・ま・い。ここが重要だな」

「じゃからなぜに姉妹なのじゃ！？男と今言つたばかりであろう！？」

「それは明久の言葉に対するお前の反応の所為だ。諦めろ」

俺がそう言つと秀吉は顔を真っ赤にして言葉に詰まる。……こいつもバカだな。

「あ、あのさ。なんで僕がこんな格好するの？」

「僕じゃありませんよ明久君！私です！」

「そうよアキ！今はアキちゃんなんだからちゃんと女言葉使いなさいよー！」

「なんでば……私までこんな目に遭うのよお」

お、明久が僕と言い掛けて睨まれた。頑張つたな、明久。

「……………お、俺は……………こんなとこで死ねない……………！」

「ホラホラ、ムツツリー二君、輸血パックだよ。早く血も止めて、ゆっくり休みなよ」

「……………俺は、撮影をしなければいけないんだ……………！」

「だからボクが耐性をつける特訓をしてるんじゃない、いい加減慣れなよ。ムツツリー二君」

工藤とムツツリー二が俺達の近くでそんな会話をしている。

と言うかお前ら絶対付き合ってるだろ。……………あ、ムツツリー二がその特訓を思い出したみたいだな。鼻血が吹き出てやがる。

「風祈、アンタも土屋君の写真買ってるの？」

優子が何かを心配するような顔で問いかけてくる。……………そうだな、確かに買ってるか。

「買ってるぞ？主にお前のだが」

「え……………それって……………？」

実際、身内みたいなもんなんだからな。身内の写真が誰かに売れるのは可能ならば阻止したいところだろ。

……………薫、風香、秀吉が優子の写真より圧倒的に売れていて、俺が買

い占める暇もないくらいに人気だつて事は言わない方がいいだろうな。

「風祈、久保はどこ行つた？」

「ああ、利光君ならあそこにい……る」

俺が風香の指したほうを見るとなんか久保が高速で動き回って明久を撮影していた。

「……バカな。俺が写真の腕で負けるだと……！」

「はいはい。とにかくその鼻血を止めようね」

ムツツリーニが鼻血を出しながら愕然としていて工藤が輸血パックを取り出しながら答える。

……妙に工藤の手際が良いのと言い、お前ら確実に付き合つて同棲でもしてるだろ。

「……久保がいる事に関しては誰も疑問に思わないんだな」

そもそも久保は白陣営だから敵だつた気がするが……。まあ良いか。明久……アキちゃんさえいれば攻撃してこないだろうしな。

「風祈、なんでいきなり召喚獣の姿に戻つたの？（ボタボタ）」

「あ？なんで俺が小さくなつてる上にお前は鼻血を出してやがる！？」

なんかいきなり召喚獣サイズになって優子に抱きしめられていた。

『薰さん、可愛いです！』

『え！？ちよ、アンタもそう言う人種かあ

！』

向こうでは薰が佐藤に同じ事をされている。あいつはまだ良い。佐藤には多少なりともあるからな。だが、優子には

「ふ、風祈よ。何ゆえお主は顔を真っ赤にしておるのじゃ？」

「き、気のせいだ秀吉」

「絶対気のせいじゃないと思うんじゃが……」

意外にも……な。って言うか、なぜかそう言う感情が出てきたと？

もしか、優子の下着姿を見慣れすぎて性欲が全くないように感じていた。って訳か？……よー分からんな。

「つて、ちよ、優子！そんな力込めツ！折れる折れる！」

バキベキボギイツ！！と召喚獣の体から人間の力では鳴るはずのない音が聞こえてきた。こいつはどんだけ力が強いんだよ！？

『……雄二、浮気は許さない』

『翔子！？何が浮気だ！風祈と薰を見ただけで浮気なのか！？』

『……薫をジッと見るのは駄目』

『分かった。分かったから翔子、アイアンクローを止める。……つてうおッ！？そっちは熱湯だぞ！？』

チャプン。と投げ飛ばされたはずの雄二が最小限の音で熱湯の風呂に沈んでいった。

……どうでもいいが、この学園はホントに金をかけてるな。良く見ればサウナとかまである。

「風祈、だんだん顔が青くなっていったけど、大丈夫なの？」

「はっはっは、大丈夫だと思うか？すでに痛みが無いレベルにまで達したさ」

俺はシニカルに、朦朧とした意識で明久に言う。

意識がなくなる直前で聞こえた、

『姉上！そんな体では風祈の体が折れてしまうぞ！？』

『アンタ、アタシが胸が無いって言いたいの？そうなのね……』

『風祈に任せつきりだったから私だけじゃ纏めれないってえ！』

と言う会話は早めに記憶から抹消しておいた方がいいだろう。

……その後、白陣営の敵が来て、高速で久保は帰り俺達は相手をする羽目になった。

はい。と言うわけで風呂（？）の話です。

実は風呂に入ったシーンが無いと言うのは内緒です。

では、今回の感想を優子さんに聞いて見ましょう。

優子「え、えつと……写真……かな（ポツ）」

はい。盛大に勘違いしていますねー。まあとりあえず着実にフラグを立てようと思いますが。

実際、今回も前回よりはマシだと思いますがアレでしたので、次回からの本遍のほうも楽しんでいただけたら幸いです。

それではこのあたりで筆を置かせていただいて、

また皆さんにお会いできることを願いつつ

何となく作家っぽい終り方してみましたが微妙すぎますね。ええ、そうです。私も作家さんに失礼だと思います。

因みに、美穂さん×薫のフラグは分かりにくいでしょうが突っ込みは……まあしたかったらどうぞ（笑）

それでは次回のバカとテストと と、忘れてました。

前々からたまに言ってたバカとテストと介入者の略称を募集させて

いただきます。

バカっぽいのや、一見すると意味が分からなくなる物などを作者は欲しています。

ただ、そのままの感じはちょっと……な感じです。例としては『バカテスト』……普通に駄目ですね。『介入者』……うん。もう少し捻ろう

か。

見たいな感じです。今の二つは友人が出した案です。なめているのでしょうか。よほど愉オブになりたいと見える。

それでは今度こそ、次回のバカとテストと介入者を宜しく願います。

第十二問

「お、戻ってきたか」

「お、戻ってきたか」

俺が白陣営の敵を倒し尽くすと、風呂場に残った組が戻ってきた。

俺はあまりのショックでか気絶した白組を座標移動で飛ばしてから出迎える。

「ホント超人的な力を持つてるわね。変な事件から使いまくってるけど」

「そういえば疑問に思ったんですけど、風祈君の召喚獣の能力って腕輪の効果以外で一度にたくさん使えなかったんですか？」

島田と姫路がそう言う。

「そもそも腕輪の効果なんだから使えるわけ　使えるわけ…」

…」

そういえばあった。そんなルールをぶち破る能力が。某ガチムチの。

「……アックアの力使えば、容易い事じゃねえかくそつ、腕輪の能力に強化を増やしておいてよかったぜ」

ってか、ババア分かってたな？　言えよチクショウ……。

「仕方ねえ。とにかく、今日一日は点数アップに専念するか」

「その点は問題ない。明日も専念してくれ。今から反則かも知れないが、感知タイプの結界を張っておくから、敵が来て俺らが呼ぶまで勉強」

強と補給試験に専念しとけ」

雄二に言っただけ俺はとある術者が扱う結界を使う。つつつても、相手が来ても知らせる気は無いがな。

「風祈、ホントに昨日も来なかったのか？」

そんなこんなで戦争最終日。

あの後には結局誰も（昨日は俺が来るだろうと予想してたんだが）来なかった。

大方、清水辺りが最終日に動けとか言っただろうけどな。

余談だが、Fクラス組みと白陣営の枕は、鉄人のプロレス（？）勝負の話を話し終わるまで流し続けるといふ物だ。朝っぱらからそんな物聞

かせられたら体調最悪だろうな。役には立たなかったが。

「当たり前だろ。そんなことより今日に専念しろ」

「そつだよ雄二。専念してないと勝てるものも勝てないよ？」

「いつもの機転を働かせなさいよ」

「これから頑張ってくださいね！」

雄二が明久と島田から応援（？）を受ける。

姫路は雄二に言っただけだが、実は明久に向かって言っている。

「……そういえば、一番バッジを取った人って誰だった？」

「確か……薫だったか？覚えてねえけど」

優子の質問に僅かに考えて返す。

「私だったっけ？まあいつか」

「私のほうにはバッジ保持者が居なかったのに……」

薫が首をかしげて風香が微妙に暗い顔をしている。

「……どちらにせよ、まだまだ残ってるから挽回できる」

「確かにのう。じゃが、霧島よ。今回は全員で相手の本陣を狙うのか？」

「……それはさっき違つと雄二が言つてた。まずは三階の階段を押さえるつて」

霧島と秀吉がそんな会話をしている。

「………最近、撮影出来なかった」

「もうそろそろ撮影止めたら？ムツツリー二君も清水さんが居るんだから引退していいでしょ？」

「………俺は、あれに負けるわけには行かないんだ………！」

ムツツリー二よ、なぜにこの会話で鼻血を出す？最早工藤を見ただけで鼻血を出してないか？

「まあいい。それじゃ、黒陣営！出るぞ！」

『おつしやあ………！！！！！！』

雄二が後ろに居る連中に叫びかける。………なんか、黒陣営の連中今までFクラスのノリが移つてないか？

「おや。吉井君たちじゃないのかい？」

「はい、なぜか彼らはまた少し待機して行く様にと言われていましたから」

私 佐藤美穂は落胆して言った久保君に返答しておきました。

「じゃあ勝負をしようか。試験召喚」

「試験召喚！」

「……………なんだい？その点数は？」

「前に、女の子みたいな顔した男の子が、こう言っていました。『好きな人はまだいないけど、いたらきつと頑張れる』って。彼は誰かの受

け売りって言うてましたけど

」

黒陣営	佐藤美穂	V S	白陣営	久保利光
数学	465点	V S	398点	

「私も最近、心からそう思ったんです」

「……久保、なんだ？その点数は？」

黒陣営	久保利光
数学	27点

「さっきの戦闘で戦死にはされなかったけどボロボロになってね。もう止めを刺していいよ」

「そうか？なら遠慮なく」

久保のバッジを奪い取って俺はそこを去る。だれだ？なんか毎回毎回、バッジ保持者は点数が削れてる気がするが……まあ気のせいだろう。

「こっちにはバッジ五個に向こうは三個ってのは上出来だな。元から明久が駄目なのは分かっていたが、姫路と工藤が抜けるのは割りと痛

い」

雄二が苦々しげな顔をしてそう言う。バッジを取られたのは雄二も言った通り、明久、姫路、工藤だ。

明久と姫路は人海戦術に、工藤は久保にやられたらしい。

「す、すいません……」

「大丈夫だ。確かに痛いとは言ったが、お前の穴ぐらいは明久の代わりに俺がフォローしておく」

「……………問題無い。愛子の仇は俺が討つ」

「ごめんよ、皆。戦死しちゃって」

「あ、明久。お前は本来姫路のフォローをする予定だったんだから、後でしつかりとやって来いよ？」

「へ？何のこと？」

上から姫路&雄二、ムツツリー二、明久&俺だ。ムツツリー二が工藤と付き合ってることはハッキリしたからいいとして、島田のフォロー

もしておかないとな。

「島田。今度明久とデートに行かせてやるから」

「へ？……………あ、ありがとう」

俺がそう言つと島田は一瞬理解が出来ないような顔をしてから、顔を真っ赤にしてお礼を言ってきた。

「例には及ばん。で、今何時だ？」

「あ、今は三時半だつて。『後一時間半せいぜい頑張つて逃げ切つてねえ』って妖怪が言つてたらしいよ」

「風香、私達が言ってるババアもアレだけど、妖怪も……………それでもないか」

薫が言いかけて、『原作』での明久たちの言動を思い出したのか認めていた。

「……私が道を開くから、美穂と風祈と薫と風香は行って来て」

「アタシたちが止めてる間にさっさと全部集めてきてよ?。」

「はっはっは、なめて貰っちゃ困るな。そもそもこの距離から狙い撃ちできるんだぞ? 問題あるか」

実際、某兵器の銃を使えばさっさと殲滅できるんだがな。

「それではワシらの出番が全く無いからのう。まあ、三人ならいけるじゃろ」

秀吉がそう言う。こいつはこいつでどこで戦ってたのかセーラー服を着ている。何してんだ。こいつは?

「んじゃ、行くか。時間もいい感じだろ」

雄二のその言葉で俺達は再び出撃する。

ただし、戦闘シーンはいつもどおり鬼コンボをやっているのだから割合
させて貰うねッ …… ホントすいませんでした。

「さ、さすがですね。風祈様に薫様。一瞬で倒すとは……」

「なぜに様付け……？ まあいいや、いつものことでしょ？ 私達の能力は」

「まあ腕輪の能力って『元となる能力を作る点数はこの能力で作る物に関係しない』ってあるからな。統合に400点使うだけで。一方通行（

アクセラレータ）に未元物質、ダイクマター超電磁砲と原子崩しレールガン使ったらボコボコだよな」

それはもう、こっちとしては楽しかったが、向こうからしたら恐怖以外の何物でもないだろう。

「んで、もう俺達は言っても良いか？ 早く俺達の願いを叶えて貰いたいしな」

「ええ。どうぞ、風祈様。ですから、私をお許しくださいお許しくださいお許しくださいお許しくださいお許しくださいお許しくださいお許しください」

「

「うん、ごめん。まさかそこまで聞くとは思ってなかったわ。ホラ、怒ってないから顔を上げて、そんなんじゃ美波に嫌われるよ？」

「薫様……はいっ！そうですねっ！」

ああ、麗しき友情……じゃねえけど、これはほっといてさっさと行くか。

「風祈、もう終わったのか？」

「ああ雄二。いつもどおり瞬殺だ」

「お前の瞬殺は文字通りそうだから怖い」

現在、俺達は仮説学園長室の前に来ている。時間も過ぎたから行くても問題ないだろ。

「おや、やっぱりアンタたちかい」

「雄二、なんでこの部屋に醜悪な老人のオブジェがあるの？」

「落ちて着け明久。それは妖怪だ」

「アンタたちは相変わらず失礼さね!？」

俺達がガラツと扉を開けて部屋に入ると、ババアがそんな事を言うて来た。明久と雄二はいつもの事なので放置しておく。

「やっぱりって事は、俺達の側を勝たせようとしてたんだな？」

「うっ……そ、そんなことないさね」

「そもそも、トップクラスの学力を持つやつがこっちに多すぎるんだよ。保健体育や国語系とかのも含めてな」

「アンタも察しが良過ぎるねえ。気づかないふりをしてくれればいいのに」

「まあ、今は回りにバレないけどな」

「? どういうことさね？」

「簡単だ。声のベクトルを操って俺と薫とババアにしか聞こえないようにしてるんだよ。一応、黙ってた方がいいだろうしな」

「それについては感謝しておくかねえ。実のところ、アンタたちがいる所じゃないとまともな奴にならないだろうからねえ」

それについては全力で頷けるな。主に久保とかは暴走しそうだから

な。

「んで、誰が栄えある特典を貰えるんだ？」

ベクトル操作を切ってババアに尋ねる。もう必要ないからな。

「おや。それについては」

ババアが部屋にいる奴らを見回す。

「ここにいるから言っとくかねえ。栄えあるMVPは」

「きつと僕だよね！頑張ったんだし！」

「あの、明久君。今言うところだったんですけど……」

「明久、そんなにO S E K Y O Uをして欲しいのか？」

「スイマセンでした！どうぞお続けください！」

「と言うわけだ。ババア、さっさと発表を頼む」

「アンタたちはいつもこんなんだねえ。それじゃ、発表するよ、MVPは」

そこでババアは言ったん言葉を区切る。

「佐藤美穂さね」

「……へ？あたしですか？風祈さんか薫さんじゃなくて？」

少なくとも俺達じゃないってのはババアが回りを見回した時点で気づいたが、そうなる毎毎回バッジ保持者の体力を削っていた奴だろ

う。と思っていたが、それが佐藤だったって事か。

「……………美穂、願いは何？」

「え……………えつと……………」

霧島の言葉に佐藤は顔を真っ赤にして、

「薫さんと一日一緒に居たいですっ！！」

と宣言したのだった。……………それぐらい直で言えばいいのにな……………？

第十二問（後書き）

やっと終わった……以外に長く続いたサバイバル。

当初の予定では三話程度で終わる予定でしたが、番外編を含めると割と長くなりました。

結構疲れる話でしたが、楽しんでいただければ幸いです。

八話＋十二話＋番外編の五話になるとは思いませんでしたが、割と楽しく書けました。

駄文についての反省はしていません。最早今更です。

って言うか風祈は女の子の事が全然分かってませんね！直で言えばいいのになんて　　なんて……。

よく考えると皆の前で言う方が恥ずかしい気がしますね。それでも直接では言いたくないのです！って感じなのですが。

あ、恐らく次回はもう一度番外編で佐藤さんと薫のデートをする予定です。お楽しみに（笑）尚、佐藤さんはこれからキャラ崩壊するかも知れませんが、ご了承ください。

番外編三 あれ？何気にこれってデートっぽいのか？

「薫さん、次はあそこに行きましょう！」

「ああ、良いけど……願いつてこれで良かったの？」

「良いんです！そう言うことは聞かないでください！」

「う……ごめん」

薫が佐藤に腕を引っ張られながら映画館の方へと向かっていく。

……なんとなく佐藤のキャラが違う気がするが、あれが素か？

「おい、風祈。行かないのか？」

『……まずはあれを撮影するのもいいと思う』

電話の向こうで雄二とムッツリー二がそんな事を言う。と言うのも雄二が、

『普段から俺で遊んでるからこれを機にあいつも弄ってやろう！』
とか言い出したからだ。因みに、俺達は今別々に行動して薫達を見
てい

る。

「（風祈、美穂と薫を見るのはいいけどぶち壊したら許さないわよ？）」

「（おいおい優子。俺がそんな事をする奴に見えるか？どうでも良い奴ならまだしも、今回は妨害しようなんて気はさらさらねえよ）」

現在俺は優子と行動している。雄二はムツツリー二と、明久は島田とデートに行かせてやろうとしたら姫路も誘ったので、島田にボコられ

て姫路と島田の二人に連行されていった。

ただし、人の恋路を邪魔するやつは天罰が落ちると相場が決まっているもんだ。

『……雄二、邪魔するのは駄目』

『うおおっ、翔子！？何でここにぎゃアアあああああ！！』

『ムツツリー二君、ボクらも映画を見に行こうね？』

『……仕方ない、撮影は諦める』

うむ、さっき呼んどいた二人が来たようだな。優子が『人の恋路の邪魔はさせない』と言ったから呼んだが、今思えば恋路ってどう言う事

だ？

「薫さん、何見ますか？」

と、そんな事をしている内に映画館まで来ていたらしい。佐藤が薫

に何を見るか尋ねている。

あるのは……『砂漠の黙示録』（七時間）戦争……か？

『愛とロマンス』（三時間）ラブストーリーだな。

『私と霧夜と転生世界パート1』（十時間）うっわー、一番つまらなそうだな。って十時間で三部作なのか！？

『ブ・チ・コ・ロ・シ・てやんぜエこの三下がアああああああ
ツッー！』（二時間）アクセラレータ一方通行＆麦のんさん！？

……一部変な物が入っていたが、薫達が見る映画は『愛とロマンス』のようだな。一番普通っぽいものだからってのもあるんだろうが。

「すみません、この映画のチケット二枚お願いします」

「はい。女子学生二枚ですね、此方になります」

薫「……………」

ドンマイ、薫。

『ムツツリー二君、このラブストーリーを見ようか』

『……俺は別にかまわない』

『なんでここで鼻血を出すの！？』

「女子学生一枚と男子学生一枚ですね。此方になります」

ムツツリー二と工藤も同じ映画を見るのか。

『明久君！あれを見ましょう！』

『ちょっと瑞希！私にもアキを持たせなさいよ！』

『二人とも！僕は金欠って言って……！ああ！スイマセン！僕が悪かったから腕を捻らないでええええええええ！』

「鬼二枚に瀕死の男子学生一枚ですね。此方になります」

なぜそんなカテゴリまで値段があるんだ。オイ。

『……雄二、これを見よう』

『翔子、それは十時間あるよな？そんなに長いと疲れないか？』

『……大丈夫。雄二が隣にいれば私は良い』

『そうか。じゃあ、俺の手枷も解いてくぎゃアアああああああ！
？』

『……これを二回分』

「はい たった今気を失った男子学生と失わせた女子学生無駄に二回分ですね？」

二十時間にもなるのに良いのか……？そしてなぜそこまで詳細に力
デゴリ別になっている！？

「風祈、アタシ達も見に行かない？」

「そうだな。なら……『愛とロマンス』を見るか」

一応、薫達と同じ映画を見ておこう。何となく気になるしな。

……そして、若干『ブ・チ・コ・ロ・シ』の方は気になるが、『私
と霧夜と転生世界』なるものは見たくねえ。つまらん予感がする。

「はい。カップルですね。此方になります」

「……カップル……ふふっ」

チケットを受け取ったら優子が何か呟いていた。なんか怖いのでそ
っとして置こう。

「いやぁ……カップルが見るのに向いてる映画だったな」

『愛とロマンス』はありきたりつつたら聞こえは悪いが、恋人が死ぬタイプの映画だった。

……いや、うん。こういう話に感動しない自分が怖くなってきた……。

「薫さん！今度は向こうに行きましょう！」

「分かったから引つ張らないでって！」

薫がまた佐藤に腕を掴まれて連れて行かれる。どうやらクレープ屋に行くらしい。

「さ、優子。泣いてないで行くぞ？」

「な、泣いてないわよ！」

優子が否定しているが、目元を腫らしながら言われても説得力は無いな。

「『ラ・ペデイス』って……確かあいつの家だったか？」

「？ 誰の家なの？」

「とある同性愛者の家だ。何となく嫌な予感がするから対処法を考

えとかねえと」

あの店長が暴走しないとも限らんしな。

「この辺で他の連中は消えたようだし、俺らもあんま薫のことは気にしねえで行動するけどな？」

あんま気にしすぎるのもアレだしな。

「音域^{カテナ}呪縛の毒つと、本当に暴走するとはな……」

『ラ・ペデイス』に入った直後、店長が襲いかかろうとしていたので、直に能力使用＆拘束しておく。薫達が帰ったら解いてやるがな。

「ああ、清水さんの所だったの」

「ああ。……ん？ あいつらは何かサービスして貰ってるようだな。なんか突っ返そうとしていやがる」

優子が視線を向けていた方を見ると、薫が首をブンブンと振ってケ

ーキつぱいのを突き返そうとしていた。

大方、クレープを頼んだらケーキまで一緒に来て『サービスです』とか言われたんだろう。

……若干面白えな。

「まあこの店長は物陰に入れておくとして、優子は何を頼む？何なら半分づつ食うか？」

「今に始まったことじゃないけど、考えていいなさいよ……。ま、私はこれでいいけど」

「んあ？俺はコーヒーだけで良いが、お前はクレープ頼まなくて良いのか？」

「良いのよ。私クレープが大好きって訳でもないし」

「お前が良いなら良いが……あ、すいません。紅茶とコーヒーを一つずつお願いします」

俺は近くにいたバイトと思いき女性に声をかける。その女性はニヤリと微笑んでから、

「ただいまキャンペーンにつき、学生のカップルさんには彼女にクレープをサービスしております」

と言った。それを聞いてまた優子が、『カップル……』とか呟きだしたが、取り合えず欲しいクレープを指差していたので注文しておく。

注文が届くまでの間、極力今の話題に近づけないようにしながら駄弁っている、チンピラ……いや、それはチンピラに失礼だな。三下の

ような男達が十人ほど入ってきた。

「しかし、あいつらも何をやられたって言うのかね？　女子二人にも勝てないなんざ、良くもまあ俺達のグループにいたもんだな」

「しょうがないだろ？　しかも、あの……なんつったつけ？　木下秀吉だったか？　アレと一緒にいた女子が妙に強かったらしいだろ？」

それを聞いた優子が、立ち上がりかけながら言う。

……どうでもいいが、何時元に戻ったんだ？

「あいつらっ、何したのよっ！」

「落ちて着け優子。お前は店の人に謝って来い。それと、この金を修理費に当ててくれて渡すといってくれ」

ポンと財布から二十万ほど抜いて優子に渡す。因みに、今日秀吉は、風香と一緒に演劇を見に行ってるはずだ。

「へ？それって」

優子が何か言おうとしているが、それは後で聞こう。

「やっぱ、あそことあそこにいる奴もヤッ

」

ミツシィー！と床に亀裂が入り、三下の一人が言った言葉は途中で発生できなくなった。

あ……ありのまま、今のことを話すぜ！

『俺が踵を不良の一人の頭に叩き落したら、その不良の頭が地面にめり込んでいた』

な……何を言っているのか分からねーと思うが、俺も何されたか分からなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

超能力だとか催眠術だとか、そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

「デメエ！何しやる！」

「おや、三下様。私の踵落しで始まる交渉術はお気に召さなかったと？」

「そんな交渉術があるわけねえだろうが！いい度胸だな！相手をしとやるよ！」

「それでは、地震で繋ぐ交渉術をお楽しみください」

ナイフを取り出した相手に言って、俺は地面を思いっきり踏みつける。

それだけでさらに床に亀裂が入り、三下達の持っていたナイフを床に落とす。

それでも、この周囲のベクトルを掌握しているので、建物は揺れないし、この音も周りには聞こえていないはずだ。

「そして、恐怖で締める交渉術をお楽しみくださりありがとうございます
いまし たっ！」

蹴り飛ばしてから邪眼の効果で一分の悪夢^{ユメ}を見てもらう。これだけやっておけば問題は無いだろう。

三下共は最初に沈んだリーダー^{リーダー}っぽいのを抱えて逃げた行った。だが、ここに居て貰っても邪魔なので逃げた奴らに投げつけて置く。

……俺らの紅茶とコーヒー代を財布から抜き取ってから。

「風祈……あの、その……」

「ちっ！逃げるぞ優子！あいつら、見つからねえのを良いことに通報しやがった！警察に來られると面倒だ、行くぞ！」

千里眼で見回すと、あの三下共が携帯で警察を呼んでいるのが見えた。この惨状を見られると厄介だな。

俺は優子の手を握って店から飛び出す。

「はあ、はあ、はあ。風祈、もう十分離れた？」

「ああ、悪かったな、いきなり走らせて」

「別にいいわよ。私が殴ろうとしたのを止めてくれたんでしょ？それぐらい安いもんよ」

「そうか、俺もそう言う器量の在る女性と結婚してえよ」

「へっ？ななななな、何言ってるの！？」

俺が呟いた言葉に優子は顔を真っ赤にして叫んでいた。どうしたんだ？こいつ。

「まあでも……やっぱり悪かったな」

「〜！……それはさっき言わなかった？」

「ああ、それじゃねえ。お前の貴重な休日を潰して悪かった。って

意味のことだ」

「そんなこと別にいいわよ。第一、私が誘ったんだから誤るのは私の方でしょ」

「それでもだ。それじゃ、最後にどこに行くか？時間的に後一回回れると良いって所だが」

「うん。じゃあ、お詫びのしるしにアニメイトで好きなだけグッズを買わして貰いませよ。いいわよね？」

「別にいいが……アニメイトで何買う気なんだ？」

「そんなのいつもの物に決まってるじゃない」

決まってたのか……。いや、こいつなら有り得ない話じゃ無いな。

俺は優子先導の元アイトまで向かっていった。……どうでもいいが、これって規制がいるのか？ あーあー、アニメイ……規制がず

れるのはまあ良いか。

「すう……すう……すう」

「さつき鬼みたいな事をしてきたのに、随分と可愛い寝顔よね」

私は、風祈の頬を突きながら呟く。今の時刻は深夜一時半。買ってきた本に没頭していたらこんな時間になっていた。

「にしても、廊下で寝るなんてバカなのかしら？」

「む……優子……。大丈夫だ」

「……ひょつとしてコイツ、私を心配してくれていたのかしら？ 秀吉が向こうにいるから秀吉の心配って訳でもなさそうだし……」

「……大丈夫か？ そんなに震えて？」

やっぱり心配してくれているようだ。普段と違ってこう言った素の風祈の言葉が聞こえると、やっぱり嬉しい。

……う。我ながら思いついた事を呪いたいけど、しょうがないよね。うん、しょうがない！ 勝手に動いちゃうんだから！

「……ん」

キヤアアアア！ やっちゃったアあああああ！ く……唇に！ 恥ずかしくて死にそう！

「……あ、姉上？何しておるのじゃ？そこで悶えて」

階段のところで秀吉がこっちを見ていた。私は、後の秀吉が言った人間離れした動きで秀吉の背後に回る。

「忘れなさい！今見たことは全て忘れなさい！」

「あ、姉上！？あつ、違つ！その間接はそつちには回らなつ……！」

余談だけど、後で聞いた話では秀吉はちょうど私が床で悶えてるときに来たらしい。

……良かった。唇にキスしたことがバレなくてホントに良かった……。

番外編三 あれ？何気にこれってデートっぽいのか？（後書き）

はい。ちょっとしたフラグを立てた（？）っぽいのと、フラグの確立です。

佐藤さんと薫のデートのはずが、風祈と優子のデートの話に……。いずれオール佐藤さん視点での話や、オール優子視点での話を書いてみたいですが、力量的に出来るのやら。

因みに、本格的に風祈や薫が仲の良い人を傷つけられた場合は、全てにおいて豹変するので注意です。

その二人が現れるときはグロイです。十五禁です。

前書きにて登場は書いておくので、文化祭編中は前書きを見ておいた方がいいかもです。

学園祭は番外編を含めて五話の予定です。変わるんだったら増えるはずです。

それでは、次回の『バカとテストと介入者』を宜しくお願いします

第十三問

「へえ……やっぱりAクラスの教室は綺麗ね」

「お菓子とかまであるよ。カロリーは取れそうだね」

風香と明久がAクラスの設備に変わった教室でそう言う。明久よ、お前はそれだけなのか？

「特に設備で変わったところは無いようだし、一応今日やる予定の『学園祭についての話し合い』の準備でもしておくか？」

「なぜか今日一日は話し合い＆必要な物の注文になっているからね、一応準備しといた方が良いかも」

俺と薫がそう言うのと、今いるFクラスのメンバーは机を後ろに除けたりというのを不気味なほどの速度でやり始めた。

恐らく、動力源は薫の命令ってことだろうな。

「あれ？そういえば坂本は？」

「島田、雄二は」

「さ、坂本君っ！？どうしたんですか！？何でそんなにボロボロなんですか！？」

「……霧島にボコられてあそこでぐったりしているぞ」

島田の質問に雄二の姿を探していると、教室の入り口に雄二が投げ込まれてきた。……あいつ、死んでないよな？

「……昨日の写真、一枚百円」

ムツツリー二が俺の近くまで来てそう言ってきた。

「ムツツリー二、あんな場面で撮影もどうかと思うぞ？とりあえず全部貰っておくが、お前も後半は取れてないだろ？」

「……気づいていたのか？」

「あの二人は俺が呼んだからな。そりゃ」

「風祈！ おまえかつ、翔子を呼んだのは！」

ムツツリー二と話していると、さっきまで死体と化していた雄二が掴みかかってきた。

「なんだ雄二。何の文句がある？」

「大アリだ！お前はあの恐怖が分かるのか！？スタンガンで気絶させられ、起きればゴーレムみてえな物が殴りかかって来るところで、そ

こで逃げようとしたらまた翔子にスタンガンを当てられ、また目が覚めると今度は兵士らしき奴らが血を噴出してるんだぞ！？」

話を聞いてもどという趣旨の映画なのかさっぱり分からんな。そん

なのが十時間ならそりや地獄だらうよ。

「まあ……ドンマイ」

「そんな星でごまかそうとするな風香。おかげで俺は……おふくろにからかわれるし翔子は既成事実とか言い出すし……！」

そう考えると悪い気もするが、雄二にとってそんなことはいつもの事なので問題ないだろ。

「仕方ないだろ？ ああいう事をするとな罰が下るんだよ（しかも、あれが薫にバレるのはまずいだろ？）」

「天罰で済むのか……？（そうだったな。ならこの話はこの辺で終わるか）」

「いつものことだろ（ついでに、昨日の秀吉と風香の事を話して起きたいから階段まで来てくれ。そこが一番話しやすい）」

「さりげなく納得しそうになったから怖い（分かった。……昨日何かあったのか？）」

そんな会話をして、雄二と二人、廊下まで出て昨日の三下共の話をする。

雄二の顔が怒りの形相になったり、シバいた話の時にはニヤツと笑ったのが見えていて面白かったな。

「そこまでやれば復讐に來ないだろ。それは薫に話したのか？」

「ああ、風香は頑なに言わなかったがな。俺が三下共の心を読んだときに全部見たから話しておいた」

「まあ、それが賢明だな。風香は意地張って話さねえし、薫は後から知ったらそいつらを殺しに行かないとも限らん」

「完膚なきまでつてとこまでは行かねえが、さすがにやる気も無くなる筈のトラウマを植えつけておいたと思うからな。俺もお前の言う通

り復讐には来ないと思う」

そんな会話をして教室に戻る。後にこれが、スイッチを入れる事になるなんてのは、この頃の俺達は誰一人考えてもいなかった。

「雄二、何の話をしていたのじゃ？」

「お、おう秀吉。ちょっとゲームの話だな」

「雄二、なんで皆に聞かれないように廊下に出たの？ゲームの話な

ら別の良くない？」

無駄に鋭いバカだ。さて、フォローしておくか。

「明久、『イギリスの首都は？』」

「え？えつと……ワシントン……！」

「ロンドンだバカ。こんな問題よりも遥かに難しい問題が出るが出る勉強のゲームをお前に聞こえるように話しちまったら、お前の頭がシ

ョートしちまうだろうが」

「チクシヨウ！否定できないっ！」

まさか中二……あれ、もつと前に習うんだっただか？まあその辺で習う問題も答えられないとは……大丈夫か？コイツ。

「そつえば、確か今日は一日学園祭についての話し合いと発注で潰れるんだよな？」

「うん。確かどうだったと思うけど……」

「よしっ！Fクラス！校舎で鬼ごっこやるぞ！」

雄二がいきなり言い出した言葉にFクラスの連中は不満そうな声を上げるが、次の雄二の一言で『絶対に捕まるものか』と決意した。

「つかまったやつには鉄人からの補修と姫路の料理（薫が教えてない料理）を食わせよう」

『おっしやー！！！！絶対に逃げ切つてやるぜ！』

「ああ、それと、鬼はスネークだぞ。ホラ、そこに居る」

俺の行った言葉でクラスの連中（風香、秀吉、俺、薫、島田、姫路を除く）は教室から脱走していった。

「全く、あいつらは……お前たちも捕まえるのを手伝ってくれないか？」

「別にいいぞスネーク。ならあいつらで言う鬼が俺らだな」

【はあい どうもどうも神様です】

ふと頭の中に自称神の声が響いた。また手違いってやつか？

【そうなのよね、最近、手違いが多くって困るわ】

人の人生終了させといてよくもまあ軽く言えるな（爆）

【（爆）つける人に言われても……まあそれについては謝っとくけど……でもでも、彼らはなんかちょうど転生したかったんだと言ってた

よ？】

ら、て。また二人も手違いだったのかよ。

【それについては謝ってるでしょ？だからこれで丸く収めるって事で】

まあ、俺に関係ないし別にいいけどな。

【あ、アンタたちにも関係してるから。それじゃ、チャオ】

そこでテレパシーは切れた。俺たちにも関係している？……まあいいか。

「それじゃ、捕まえに行きましょう」

ふと周りに集中すると、風香が笑顔で教室から出て捕まえに行くところだった。

「つつうか、さっきの話はなんだ？ たんだ？ 俺達にも関係しているってよ」

「さあ？ まあ、気にするだけ」

そこでふと窓に目を向けた薫の動きが止まる。なんだ

「うおおおおっ！？危ねえ……今のはまさか？」

「ちよつと！二掃射目が来るよ！」

「怖すぎるだろオオオおおおおお！！頼むぞオ！魔刃の書アイギスウウ
ううううー！」

隣の校舎の屋上あたりから銃弾が飛んできた。マシンガンって所か？

威力の割りに床に傷がついていないから召喚獣の力かと思ったが、
予想通りだったようだな。

「あれが無効化できなかったら、この大きさでも召喚獣の私達は危
なかつたね……」

「ああ、っていうか、まさかとは思うが……今のはあの変人か？」

「自称神の言うのがあの変人だったら、もう一人は哀れな男だよね
……」

「あいつって事は……理系ってか理科専門で最強の点数が取れるや
つか。あの変人はオールラウンダーだから多分Aクラスだろう」

「ってことは、あの二人までこの世界に転生してきたって事でしょ
？」

「ああ、……この学園が今以上にカオスになるぞ……！」

仕方が無いので俺は雄二に連絡を取って全員を教室に戻すように指示した。

今思えば……俺達の行動を思い出せばどこのクラスに来るなんて予想できたんだがな。

「まったく、お前達は……転校生が来るというのに」

『転校生？』

『転校生だって？』

『先生！男ですか！女ですか！』

「男だ。ホラ、入って来い」

ガラスと扉を開けて入ってきたのは

「ハッハッハア、どうもー水坂利春で」

ダアンツ！と俺と薫と風香は扉を閉める。

「「「なんでお前がこつちに来るんだアあああああああああああ
ああ！！！！！」」」

「あー、お前ら言うておくが、このクラスには二人の転校生が来るぞ？」

「なんだとスネーク！？ってことはキョンも来るのか！？」

俺達が周りを見回しても誰も居ない。今俺達が押さえつけてる扉の先には利春しか居ないようだから……あ、後ろがあつた。

「俺もいるぞー」

「了解です雪崎来兎君。今すぐ跪いて下さい」

「ああ……って俺はしねえよ！？なんでんな事やらなきゃ行けねえんだよ！？」

「戯れ」

「戯れ！？」

雪崎来兎、通称キヨンが利春とそんな会話をしている。……利春？
なんで入ってきてるんだ？

「ハッハッハ、どうもー皆さんの水坂利春です。いやー最近寒く
なってきましたねえ。相方の風祈、薫、風香さん」

俺達は三人でスパアン！と頭を叩きながら、

「今は春と夏の間だから寒くなってるねえし、そもそもさっきの攻
撃がなんなんだとか聞きたいことが山ほど在るんだが……」

「ハッハッハ、どーだい？面倒くさいテンションだろう？」

「『『確かになあ！！』』」

変人だ。なのに俺達の通っていた中学では女装が似合うランキング
一位（薫はすでに女子扱いだったため、女装ではなくボーイッシュ
な女子

が普通の女子の格好をしたら勝ち目は無い。と言われて審査対象外
だった）だってんだから意味が分からねえな。

「ふ、風祈君。知り合いですか？」

「なんかメガネをかけて校則違反もしてない割りに、テンションが
変な気がするんだけど……」

「あーコイツはな、俺の……」

俺がそこまで言いかけたところで薫と風香が助け舟、

「この二人は親戚の友達の友達の見知りの友達の見知りの他人の子供なんだよ！」

「そうそう！通称拳銃オタクの変人と言われる男なんだよ！」

「あの自己紹介のときの言葉を考えた男だ。射撃精度や拳銃に対する
」

「拳銃以外にも爆弾とかも詳しいわい！」

『面倒くせっ！……！』

クラス全員総ツツコミだった。

「兵器に関する知識がめちゃくちゃ在る男だ。お前らも思った通り、めちゃくちゃ面倒くさい」

「……手違いで殺されたと言われ、こいつがバカテスの世界に転生したいとか言い出してな。秀吉がグホオッ!？」

どこから取り出したのか大砲の弾がキョンの腹に直撃して吹っ飛んでいた。……一瞬利春がちっさくなつてすぐに元に戻ったな。まさか…

…

「おい利春。お前もしかして、試召戦争のときは体の大きさが変わるか？」

「ああ、そうだけど？ハッハ、どーだい。面倒くさいだろう？」

「……お前それ、気に入ったのか？鬱陶しいけど」

中学の頃はこんなとある芸人みたいな言い方はしてなかったけど、高校で何かあったのか？

「いや、気に入ってないけど」

『面倒くせっ！！！！！』

今回は俺含め利春以外の全員が叫んだ。出会ったばかりなのにここまで言わせるのはコイツが面倒くさいのか、Fクラスの受け入れが早い

のかどっちなやら。

「とにかく、なんか決めるんでしょう？だったら早くやらないと」

「ああ、そうだね風香。ホラホラ、雄二、準備するよ」

「なんで俺の名前を知って……？まあいいか。分かったぞ、利春。それに」

「あれはキヨンでいい」

「そうか。じゃあ宜しくなキヨン」

「俺は雪崎来兎だけだな。まあ、宜しく」

「まあ、俺も宜しく」

そう言っでいつものメンバーと二人は握手をしたのだった。

学園祭までカオスな展開になる気がするが……大丈夫だよな？

第十三問（後書き）

はい。言い訳はしません。だけど、一つだけ聞いてください。

………しょうがないじゃないですか！！ちよつとこのメンバーを使いたいって思っちゃったんだから！！！

初っ端から言い訳でしたが、今回の話はどうでしたか？

新キャラの『水坂利春』と『雪崎来兎』のモデルは友人です。名前は適当に付けました。

あ、因みに友人Aは霧沢風祈の名前の元になったコンビニのリーダーがモデルです。なんともいえぬ人です。

コンビ名使用の許可は貰っていても、こんな話に登場させていると知れば怒られる気がします。相方のほうはなぜか大爆笑していましたが。感性が意味不明です。

今回は限りなく駄文だったような気がするのですが、お楽しみいただけたら幸いです。

では、次回のバカとテストと介入者も宜しくお願いします。

………徐々に略称が集まってきたので結構幸せだなあと思っています。

暇が無くて返事を返す暇が無いですが。

第十四問

今日は利春とキヨンの事でちょっとあったが、本来の予定は学園祭でやる出し物を決める。と言うことだったはずだ。

尚、さすがはFクラスとも言つべき順応性の早さで利春とキヨンは一瞬にして受け入れられた。

んで、今は何をやるかを決めているところだ。

「はいはい。それじゃ、出し物について決めるから意見の在る人は手を挙げて」

進行役の薫がそう呼びかける。それに最初に手を上げたのはムツツリー二のようだな。

「はい、ムツツリー二」

風香に指されてムツツリーニが口を開く。

「……………写真館」

「……………はい、他に意見在る人ー！」

「おい、薫に風香、一応候補なんだから書いとけよ。って言うか、ムツツリーニが言う時点で何を言うか分かってただろ？」

「確かにそうだけでも……………」

薫がそう言うが、風香が仕方が無い。とでも言いたそうな感じでディスプレイに表示させる。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

「じゃあ次……………横溝君」

薫が今度は横溝を指す

「メイド喫茶　　と言いたいけど、流石に使い古されている気がするので、ここは斬新に男女逆転喫茶を提案します」

『斬新ではあるが……女装するのか？』

『女子の男装なら見てみたいが……野郎の女装を見てもなあ……』

「ワシは絶対に嫌じゃぞ！」

「私だって嫌だよ！」

薫と秀吉が拒否してしまった。……しかたない。

「利春、服の調達頼めるか？」

「軍服なら」

「……キョン。服の調達を頼む」

「了解」

服の問題はこれで解決された。なんで即答で宣言できるのかがちょっと引いたが、利春が用意するよりは喫茶店らしいだろ。

「皆、俺達がメイクをやつてやるから安心しろ。なに、ニューハーフとしても生きていけるレベルにまで作り変えてやるさ」

『そこまで出来るなら……』

『いいんじゃないか？俺もやってるし』

Fクラスから女装趣味の奴が出てしまった。ここでカミングアウトとは悲しいやつだ。

「じゃあ、投票はしないで男女逆転喫茶でいいですか？」

「「いやです」「

「はい、決定」

「「なぜに!?!」「」

風香が薫と秀吉を無視して強制決定。どちらにせよ、あいつらがやる。と言つまでまってるやれないだろうしな。

「じゃあ、発注と練習をしておかないとな。風祈、メイクの方を頼む」

「了解だ雄二。それじゃ、キヨンと発注を頼む」

俺が言うと、雄二はキヨンを連れて、分かっている。と言って歩いていった。

さて、俺もこいつらにメイク(?)をしないとな。

「さーで、それじゃ、男子諸君、そこに一列に並んでくれ」

俺は、そういつて男子を並ばせると、とある能力者の能力を使わせてもらった。

「おい風祈、こいつらは誰だ？」

「決まってるだろ雄二、あれはこのクラスの男子（利春、ムッツリ
一二、明久、薫（？）、秀吉（？）俺、キョンを除く）連中だ」

「どう見ても美少女にしか見えん……」

「あの人の能力をなめて貰っちゃ困るな。メイクってレベルじゃね
えから男女逆転喫茶つっても、どいつが男子だったのかは分からね
えと」

「思うけどな」

戻ってきた雄二とキョンにメイク（？）後の男子連中を見せる。全
員美少女と言っても差し支えないレベルの顔だ。

「じゃあ、私達は裏方に回ろうか」

「そうじゃな。それが良いと思うぞ」

「……捕獲」

ムツツリー二の眩きで周りの男子が薫と秀吉の二人を捕獲する。…
…逃げられると思ったのか？

「まあ、その五人はそれで良いとして……そのゴツイ二人も出来るか？」

「中国人としてやれば行けるかと」

「ああ、それもそうか」

「「かとじゃねえよ！」」

とりあえず、全員女装させるとしようか、どうせ明日だし、問題も無いだろ。

「んじゃあ、俺も着てメイクしてっ……どうした？なんでそんな顔で俺を見ている？」

「風祈君は……ずるいですっ！」

「風祈……ウチはあんたを恨むわ。そんな大きな胸で……」

「よし分かった。ちょっと待つんだ。ウィッグつけて詰め物したただけで、なぜにそこまで恨まれる？とにかく、俺は薫とは違ってだな

」

「実際、私達は血が繋がってるんだから、風祈も女装すれば似合うよね」

姫路と島田への対応に困っている俺に風香の声が聞こえてきた。
：こづいづのって結構傷つくな。元が完全なる女顔じゃないだけ、
余計

に。

「これで少しは私達の気持ちを分かってくれれば……」

「あ、それは無理。だってお前らはメイクしなくても女顔だし」

「ねえ、何で僕だけゴスロリの服なの？」

俺と薫がよく分かん会話をしていると、明久が暗い顔でそう呟いた。

「それはな……とある誰かがその服を希望したからだ」

「へ？それって誰？」

「……『世界の意味』か？」

実際、俺らが女装コンテストの服を思い出して着せたんだがな。ま、所謂『世界の意味』で良いだろ。

「他の人たちは着物なのに……」

「一応そこは意外性狙ってるんだろうな。後でお前の分も発注しておいてやるから」

尚、着物の方は何故かキョンが持っていたので、全員に配っておい
た。発注したのはカーテンやら手頃な机などだ。

「それで、私達が決まったのは良いんだけど、他のクラスはどうな
ったの？」

「いまだに決まっていなかったこのクラスがさっき決まったから、各クラスのプリントが出来たぞ」

と、風香がそう言うと、いつの間にか消えていたスネークがプリントを手に戻ってきた。

「何々、概要だけ言えば…… Aクラス【ウェディング喫茶】 Bクラス【迷路】 Cクラス【天下 武道会】 Dクラス……む、何だこれ……」

ティッシュ」

『ティッシュ!?!』

Dクラスの出し物を読み上げたら全員に突っ込まれた。だって……なあ。

「えーっと、これには、『Dクラスの出し物はティッシュを使ったティッシュのためのティッシュ』……って書いてあるね」

「なんか……意味が分からないわ」

風香が読み上げた言葉に、島田が答えたものの、他の連中も似たよ

うな反応をしていた。

「まあ、次、Eクラス【ユニフォーム交換喫】だね。私達のところは男女逆転喫茶にしても、Dクラスが何なのかがすごく気になるよ……」

「

薫が続きを読み上げる。Bクラスとかはまだしも、Dクラスのこれはなんだ？かなり気になるぞ……。」

「そ、それは忘れるとしても……Cクラスは……」

「こやつらはなんなのじゃろうか……そもそも、規制が入る時点で使っては駄目じゃろうに」

「と言うよりは、このラインナップでこっちに客が来るのかどうかの疑問がかなり残るんだが……」

「その辺はまあ、このレベルならピーターも来るだろうし大丈夫じゃない？なんてったって、こっちには料理の女神様が着いてるんだし」

「さ」

利春が言った通り、薫の昔の異名は『料理の女神様』だった。今は前よりレベルアップしているが、呼ばれてはいないがな。

「……………それよりも、撮影機材の方が重要」

「盗撮のか？」

「……………（ブンブン）」

「図星か。ま、なんなら、ばれない所に隠しておいてやるが？」

「貴様ら、教師の前でそんな話をするとは良い度胸だな」

俺と雄二とムッツリー二がそんな会話をすると、スネークが呆れ顔で突っ込んできた。

「一応、そういった物が有ると学校側も便利だろ？ だったら良いじゃないか」

俺がそう言つと、スネークは額に手を当てて、

「それが否定出来んから困る。そういえば、お前らが言っていた教頭の動きだが、お前らの召喚獣化の原因を調べるのに忙しく、連日の徹

夜で疲労がたまって入院しているぞ」

「そうか。なら大丈夫だ。サンキューな、スネーク」

「？風祈、何の話だ？」

「ああ、それに関しては気にしないでいいよ」

「こっちにも」

「いろいろと」

「面倒くせえ事が」

「あるんでな」

雄二の質問に俺達は返す。因みに、返答は上から利春、薫、風香、俺、キョンだ。所謂転生組みつて所だな。

一応念のため、教頭が何か妙なことをやらないかと警戒していたんだが、入院していたのなら何もできないだろ。こればかりは自称神に

感謝しないとな。

「にしても、昨日はいろいろと面倒くさかったな」

「へ？雄二もどこか行ったの？」

結局雄二は口を滑らすか。仕方ないから、またフォローしてやらないとな。

「雄二、昨日は俺達で如月ハイランドのチケットを買いに行ってたんだよな？」

「……あ、ああ。そうだったよな」

「へー、私も美穂と行っても良い？」

今になって雄二も気づいたか。やっぱり霧島の話になるとコイツは頭の回転が鈍くなるな。

「ああ、別に良いが……お前昨日、佐藤と出掛けてて何かあったのか？」

「い、いやいや、何にも無いですよー。私はいたって普通に映画とを見ていましたからー」

「目を泳がして言うセリフじゃないかな」

キョンの突っ込みに薫が今度は顔を逸らした。そして、コイツは何があっただんだ？

呼び方もさん付けじゃなくなってるし……？

「まあなんにせよ、全員銃火器をもって接客するって事で」

『却下（だ。です。よ。だよ）』

どこまで好きなんだコイツは……。利春が銃火器を好きなのは知っ

てたが、ここまでとは……。

あ、それと、余談だが、利春とキヨンは自称神に俺達の主な記憶を共有させられたらしいぞ。

つまりは、今までここで言ったことだな。言う様なほどでもないが、一応って所だ。

第十四問（後書き）

今回はやっと学園祭一日目です……。

とある作品とクロスオーバーの可能盛大。

そして、『バグ&バカとテストと召喚獣』のコラボも次々次回にしようかな。と考えています。

何が起こるかは私次第（オイ）

学園祭編が終わったらアンケートの方も終了しようかと思います。

投票してくださる方はお早めに！。

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

第十五問

「おい、チビツ子。お前誰を探してるんだ？」

俺達が呼び子をさせられて、ビラを配り終わって戻ると、雄二のそんな声が聞こえてきた。

「えつとですね……優しいお姉ちゃんです！」

「そうか……あそこに三人いるんだが？」

「待つのじゃ雄二よ。なぜにワシが候補に入っておる？」

そんな会話をしているFクラスの中へ入ると、「あっ来ました！」と言う声と共に鳩尾に強烈な痺れが。

「優しいお姉ちゃん！お帰りですっ！」

「……風祈。葉月ちゃんは誰に言ってるの？」

「お前に決まってるだろうが薫。それと葉月、ナチュラルに俺の上に乗るな。鳩尾に入ってる」

俺がそう言つと、Fクラスにいた子供 もとい、島田の妹の
島田葉月は「ごめんなさいですっ」と言つて俺の上から降りた。

割と酷いダメージなんだよな。これつて。

「いい加減覚えなよ薫。瑞希が綺麗なお姉ちゃん。私が……自分で
言つのもなんだけど、可愛いお姉ちゃん。薫が優しいお姉ちゃんで
しょ

？」

「はあ……最近、お姉ちゃんで反応しそうになるから怖いよ……」

薫が額に手を当てながら呟く。

「そついえば葉月。何の用だ？お前の姉ならあそこに居るだろ？」

「えつとですね……。『ちょっと話があるよ』つて妖怪さんが言つ
てました」

「話？何だ？」

「『とにかく来るんさね』って言ってました」

妖怪つつうのはババアで間違いないとして、話って何だ？

俺たちがいるからズレがあるのか、召喚大会も無いし、何なんだろうか？

「とりあえず言ってみないことには始まらないから、行こうか」

「ホラ、早く行くぞ」

「ああ、あんた達は乗り気なのね……」

声がした方に目を向けると、扉に持たれかかっている利春とキヨンの姿が。

こいつ等も行く気なのか。だったら一応、雄二と明久も連れてくか？

「雄二、お前も着いて来てくれ。それに、バカなおにいちゃん明久も行くぞ」

「ああ、分かった」

「何か僕、変な呼ばれ方しなかった？」

「気のせいだ」

と言うわけで、俺、薫、風香、利春、キヨン、明久、雄二の七名で学園長室へ行くことになった。

「それで？何のようだ。ババア」

「アンタは年上への敬意って物が無いねえ」

雄二の言葉にババアが額に手を当てながら言う。

「なら、何のようだ？ババア長」

「その呼び方は今までで一番酷いさね！？」

ババアが俺の言葉に突っ込んだが、直に落ち着いたらしく、口を開く。

「まあね……アンタたちを呼んだのは、クイズ大会の景品の白金の腕輪を取り戻して欲しいんだよ」

「あ、やっぱり欠陥があつたんだ」

ババアが言った言葉に利春が納得した様な顔で返す。

「なんで欠陥があるのかアンタが知っているのは気になるがそうさねえ」

「それで、何の効果があるんだ？」

「えつとねえ……『召喚フィールドの作成』、『主獣と副獣の二体召喚』、『能力の融合』、『能力の増強』さね」

雄二の質問にババアが記憶を頼りにと言うように返す。最後の二つは俺たちが大まかに理論を纏めてババアに渡したやつだ。名前が安易に

なっ たがな。

「で？結局なにが問題なんだ？」

「それがねえ……『主獣と副獣の二重召喚』は平均程度の点数で暴走するのさ」

「……………明久用だ（ね。な）……………」

「待つてよ皆！何で平均以下の点数だって知ってるのさ！」

「……………いやいや、あなたはバカでしょう……………」

「なんでこういうときに完璧にハモるんだあ！」

明久が頭を抱えてしまった。まあ、白金の腕輪の問題は許容範囲だ。ノリで渡したプログラムだって俺達が作ったんだしな。

「それと、如月ハイランドのプレオープンチケットもあるのか？」

「そのチケットって何枚あるの？」

「カップル五組分さね。どれか一組でも引つかかってくれば、それだけで『ここで結婚したカップルがいる』ってジンクスは完成するか

ら、多い方がいいのかもねえ」

「ま、それは良いとしても、そのクイズ大会って本当にクイズで終わるのか？」

「それがねえ、こっちとしても召喚獣を使った催しじゃないといけないから、四ブロック作って、各ブロックの優勝者と準優勝者でタッグ

を組んで一斉に戦おうと思うのさ」

「ちつ、面倒くせえが出てやるよ。何時からだ？」

「ああ、それは これからだよ」

早く言いやがれ。雄二も明久も出ないらしいが、急ぐに越した事は無いだろ。

「さあさあ、出場者の皆さん！今回のクイズ大会の司会を務めるのは私、新野スミレと」

「学年主任の高橋洋子です」

「さあ、始めましたクイズ大会。これから突っ込みこみで答案を出していくのでご覧ください」

『問一。女装といえば……？』

『中目黒善樹の答え』 『杉崎君っ！』

何で居るんだよっ！

『問二。貴方の夢は？』

これって質問じゃね？

『杉崎鍵の答え』 『ハーレム!』

予想通りだけど、何で居るのよっ！

『問三。 貴方が嫌いなのは?』

最早完璧に質問に移行してるよねえ！

『鳴海歩の答え』 『兄貴（鳴海清隆）』

知ってるけども！って言うかアンタ死んだんじゃないの!?

『問四。 碧陽学園といえは!……?』

最早単体で狙い撃ちにしている!?

『遊兎の答え』 『私!』

ああ、一瞬誰か分からなかったわ。 まだその名前諦めてなかったんですねえ！幽霊のユウさんよお！

『問五。貴方の口癖は？』

これってクイズになってるのか？

『式見螢の答え』 『死にてえ……じゃなくて勘弁してくれ』

予想通りっちゃあ予想通りかね？

『問六。葉賀ユイが書く絵といえバ？』

ああ、これは答えれる

『吉井明久の答え』 『ロツテの』

そこはバカとテストと召喚獣と答えようか！

などという訳の分からん問題が続いて……

「おおーっと！これは凄い！Fクラスの霧沢風祈さんが優勝だあ！」

なんか優勝したな。つつうか、急にマトモな問題になったから全員着いて行けなくなったのか？

「なぜに私は口癖で間違えたんだろ……？」

あれはどういう定義で間違いを決めてるのがさっぱり分からんな。

「で、明日に決勝だっけか？」

「ああ、他のブロックで勝てたのか？お前らも」

途中であった利春とキヨンとそんな会話をしながらクラスに戻ると、男女逆転喫茶は大繁盛していた。

風香は別ブロックのここからだと言選が遠い会場に居るはずだ。

「……おい、杉崎鍵。なんでお前がここに居る？」

「？ああ、宜しく。いやあ、この学園は女子のレベルが高いなあ」

「そう言つことじゃ無しに。って言うか、深夏さんは?」

「なんで深夏の名前を知つて……? ああそうか、先生が言つてたな。知り合いだつて。そつから聞いたのか」

なんだ。俺達はあの先生と何の繋がりがあるんだ。

と、扉がガラツと開いて、

「おい、鍵。なんかアタシ達を襲つてきた奴をシバいたんだが、コイツどうする?」

「何だと深夏! 大丈夫か! ? 怪我無いか! ?」

「ドサクサにまぎれて胸を触ろうとするんじゃないやねえよ! あつくそ! 髪をストレートにしようとするな!」

雄二SIDE

……何だあの二人。イチャイチャしてるな。

俺、坂本雄二が碧陽学園の二人に抱いた感想は、そんな物だった。

だが、椎名深夏とか言うのが入ってきてから風祈と薫の空気が冷たいものへと変わって行った。

「おい、椎名。今なんて言った？」

「ん？ああ、先生が行ってた奴か。えっと……アタシ達を襲ってきた奴を」

「いや、もう良い」

風祈がそこで止めると、ムッツリーニが駆け込んできた。

……どうしたんだ？血相変えて。

「……どこかの不良グループに、風香と霧島と姫路と島田姉妹、木下姉妹と佐藤が攫われた」

.....は？

「そうですか、土屋君。それはありがとうございます」

俺がムツツリー二の言葉を理解できないで居ると、風祈が妙に他人行儀な呼び方でムツツリー二の名を呼んでいた。

「.....防犯カメラに写っていた」

「そうですか、本当に風祈君が設置しといてくれてよかったですね」

今、薫と風祈の近くに居るFクラスの生徒は、ガタガタガタガタガタと震えている。

恐らく、ムツツリー二があのだ二人に情報を渡すごとに周囲に殺気が渦巻いていつてるからだな。

「オイオイ、遊びにきたら随分と面白そうなことになってるなア」

先ほど来ていた、明久の親戚とか言う吉井百合子が笑みを浮かべながらそう言っていた。

「ああ、百合子さん。ちょっと手伝いを頼めますかね？」

「ああ、手伝ってやるよ。ただ、私は前に潰したからなア。どうなるかの保障はできねエぞ？」

「むしろ、そうしてもらった方がいいんですよ。俺達も、殺戮はやる気だからな」

百合子はさらに深い笑みを浮かべ、

「分かった。協力してやるよ」

と宣言したのだった。

第十五問（後書き）

次回は恐らくグロイです。

それと、多分短めです。

更新ペースは変わりませんが。

だってしょうがないじゃないですか！グロイのは調べるのに時間が掛かるんですよ！

しかも元来、私はグロイ物が苦手なのに……！

ただし、ならなんで書くんだよ。と言う突っ込みは聞きません。

唯一つ言うなら、何となく！（黙）

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします

グロ注意！な十五・五問（前書き）

この話は、会話をする事がある主要キャラの出番が絶対的に少ないです。

なぜなら、下手すると、残酷描写付ける。とか言われるからです。

言っほどグロくはないかもしれませんが、一応念のため警告を。

心臓の弱い方、怖いものが苦手だという方。読んでいる最中に外などでこれの感想を叫ぶ方。

などに一つでも当てはまる方は読まないことをお勧めします。

別にこれと呼んでいなくても、物語に然したる影響は出ないので、飛ばしても構いません。

ここまで散々警告したんですから、もう良いですよ？

コンコン

あれ？窓から誰かの手が

グロ注意！な十五・五問

「
開け」

風祈がそう言うのと、先ほどムツツリー二に聞いていた廃工場が光の向こうに見えた。

風祈と百合子と薫はそこを通って行く。

「雄二、こっから先へは着いてくるな。一生物のトラウマになる」

薫が俺にそんな事を言う。

「翔子たちは私がそっちに送ってやろう。そっちで受け取ってくれれば良い」

百合子がそついった瞬間、光の道が消えた。

あいつらが消える直前に聞こえてきた、

『おい、こいつらどうするっ。』

『やっちゃまっていいだろ。ここなら誰にも邪魔されねえ』

『じゃあ俺はこの黒髪の子貰っぜ』

『あ、ズリイ、だったら俺は、こっちの気の強そうな巨乳の子を貰うぜ』

と言う言葉で、Fクラスの温度が一気に低くなり、杉崎と深夏が持っていたグラスがバリンという音と共に割れた。

「ここから先は、客観的な文でお楽しみください」

「どうもオ。デリバリーデスでエス」

百合子が廃工場に入った瞬間、そんな事を言う。

「な、何だお前」

言いかけた不良一が床に沈む。

と言うのも、百合子がベクトルを操作したからだ。

「確かにな。私達が油断したのが原因だったのは分かってるんだよ」

薫が自嘲的な目を不良グループに向ける。

「だがな」

そこで風祈は言葉を切って、

「「それでお前等が許される理由にはならねエんだよ!!」」

風祈は一瞬百合子に目配せすると、すぐに門をもう一度開いた。

「へ？何が」

「いいから行くぞ。ここに居たらアイツらの邪魔になる」

戸惑う姫路たちを連れて、百合子は門を通って出て行く。そして、すぐに戻ってきた。

「おっとオ。逃げようっ たってそオは行かねエぞ」

逃げようとしていた不良の一人を、百合子はベクトル操作で地面に縫い付ける。

「まずは一人目だ。どこまで痛みに耐えられるかが見ものだなあ？」

ニヤアと、被虐的な笑みを浮かべて薫は不良の一人に狙いをつける。

次の瞬間、その不良の手の爪が全て剥がれた。

「なッ……がアアあああああああああ！？」

「オイオイ、どうしたんだよ。こんなので音を上げて貰っちゃ困るぜ？」

薫の手から、カラカラと音を立てて不良の爪が落ち、さらに笑みを深めた薫が、一步一步その不良に近づいていく。

その光景を見た不良たちが、再び逃げ出そうとするも、百合子のベクトル変換で足を捕られ、その場から動けなくなった。

「知ってるか。人間ってのはア。大事な者を守るためならどんな事だって出来るンだよ」

百合子がそう言った瞬間、床に縫い付けられていた不良たちの足が吹き飛んだ。

「愉快ですねえ、ゴミ共よお」

風祈が被虐的な笑みと共に言うと、不良の一人が銃を風祈に向けた居るのが見えた。

「がッ……あああああああああ！？」

次の瞬間、銃を撃った不良の手が、ぐちゅり、と果肉を潰した様な音と共に開いた。

「ざーんねーんでーしたあ。どーですかあ？腕が開いた感じはあ？」

彼が使った能力は、不可侵の毒。^{コルドン}絶対攻撃と絶対防御を持つ、最強クラスの力だ。

要は、廃工場に落ちていた石を拾い、その効果を纏わせて投げつけただけ。

ただし、念動力で異常なほどスローに手を通過していったので、痛みは反射で受ける痛みの非ではないだろう。

「あー楽しい。ヤベエな！！」

グチャッ！！　　という音と共に風祈は不良の一人の腕を踏み潰す。続いて、念動力で別の不良と立たせ

「オイ。知ってるか？こうな、目に指を突っ込んで」

風祈はニヤニヤしながら立たせた不良の目に指を突き刺す。

グチュ。　　という音と共に、指が不良の眼球を潰し骨を砕いて侵入して行く。

「こう、上にクイツと上げると面白い事になるんだぜ」

言いながら、軽い拳動で風祈が指を動かすと、ブチュッ！　　という音がして透明な液体が流れ出てきた。

「これなら、私はいらなかったかもなア。結構楽しいけど」

「イヤイヤ、貴女が居てくれたから逃がさないで仕留められるんですよ。感謝してるぜ？」

ニヤニヤと、不良グループが苦しむ光景を見ながら百合子が呟いた言葉に、風祈が返答する。

「おっと、足がねえのに逃げるなよ。うっかり手まで切っちゃったじゃねえか」

風祈は、芋虫のように動こうとする不良たちを見ると、軽く手を動かしてそう言った。

最初は不良たちも言葉の意味が理解できていなかったようだが、すぐに自分の腕が取れたのを見て絶叫した。

「うるせえな。もう少し静かに出来ないんでーすーかあ？」

侮蔑の目を向けている薫がそう言う。

「オイオイ、この程度で気絶するなよ？何度でも痛みは復活させて

やるからよお」

そう言うと、風祈と薫は大嘘憑き（オールフィクション）で不良たちの破損した部分を元に戻す。

そして、薫はもう一度爪を剥がし、風祈は不良たちの足の指から順に輪切りにしていく。

「死ぬると思うなよ。死んでもそれを『無かったこと』にしてやるから」

「オイオイ、もっと良い声で啼けよ。ホラホラ、出来るまで何度でも繰り返してやるからよ」

「だーから、逃げようとすんなって言ってるだろオが。いい加減諦めろ」

彼ら三人は被虐的な笑みを浮かべ、今までのことを繰り返していった。

「おっと、忘れてた。一応、お決まりのセリフを言わねえとなあ。
罪人。テメー等は罪を犯した」

「八人の乙女を攫い、四人の乙女を誘拐未遂。それに加え、二十人の乙女を暴行殺人、加えて、罪の無い人々を七人虐殺した。これは許さ

れることじゃねえ」

「故に、グリモアリスが刑を執行する」

風祈と薫は、エンメルトの利剣を使って、不良たちの額に柄を押し付ける。

瞬間、ジュツと言う肉が焼ける音と共に、男達の悲鳴が響いた。

風祈と薫はそれを冷たい目で見下ろしながら、

「しかし、本当に人間ってのは怖いよな。誰かを傷つけられたなら」

「どんなことだろうと、平気でやってのける」

後に死後地獄に落とされ、現世で心が破壊されて捕まる（もつとも、今現在でさえ、洒落にならない文字通り『死ぬ』痛みを与えられる

事に

なるのだが）彼らが解放されたのは、深夜になってからだった。

その彼らの心が壊れる最後に聞いたものは、

[illegible]

と言う、狂気に落ちた人間のような声とも、悲鳴とも言えぬ声だった。

「おつとオ、向こうの連中にも渡しておかねエとなア」

その少し前、何か思いついたような顔をした百合子は、光の残滓に不良三人を適当に掴んで投げつけると、再び風祈と薫の拷問を見るのに

戻った。

余談だが、その時Fクラスに投げ込まれた三人は、その後は捕まったのには変わりないが、まだ真つ当な暮らしをしていた。

もつとも幸せだったのはこの三人だろう。さらに、地獄送りにまでなつてないのだから。

……杉崎鍵と椎名深夏の二人と、FFF団の異端審問会、明久に雄二にムツツリー二にボコボコにされるのだが。

【まあ実際、あの二人はグリモアリスじゃないんだけどね。私がいるんな人たちの世界勝手にくつつけてこの学園に来るように仕向けたか

ら、あれも効果を發揮するけど。しかも、罪状は間違つてなかったし。私が情報を言つただけだね】

神の適當さにも困つたものである。

【アンタに言われたくないけど……それに、今は忙しいのよ。転生者もたくさん居るし、フォローしなくちゃならないし】

グロ注意！な十五・五問（後書き）

うん。別に、グロくないですよね。

対して怖くもないし、さりげなく（？）百合子さん登場させるし。

しかも多重クロスの話にフラグを立てているという。

因みに、百合子さんは自称神に会って、この世界へと一時的に飛ばしてもらっています。

この話で怒らねければいいのですが……。

あまり人の作品のキャラは出さない方がいいのに、許可が出れば学園祭編の最後の話で出さしていただくつもりです。

……怒られないかな（ドキドキ） （黙）

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

第十六問

「ホントにすまなかった。この責任は切腹でも何でもして払おう」

「そおか。だったら私が
だろ」

「冗談だ。そんな事できるわけねえ」

俺が言った言葉に、百合子が反応したので、手を差し出したところ、冗談が通じねえな。と言われてしまった。

百合子はその後、自称神に言って元の世界に戻ってくる。と言って教室から出て行ってしまった。

「そもそも、二人が監視カメラを設置しておいてくれなかったらどこに行ったかもわからなかったんだし、謝る事無いじゃない」

「そうですね。薫たちは良い人なんですから、責任なんてありません」

「いや……言い切られても困るんだけど……。はあ、まあいいや。ホラ、私達は怒ってないから、立って」

風香に促されて俺と薫は床から立ち上がる。昨日は一日中やっていたからという暇が無かったんで、昨日に回してしまったお詫びを込めて朝

の準備時間にやらせてもらった。

ただ、なぜか一昨日から優子は俺と目を合わせようとしないんだが、俺、何かしたか？

「た、だ、し。今度は普通に店員と呼び子をしてもらうよ？」

「はあ……分かったよ。っと、衣装はどこ？」

風香の言葉に薫がため息をつきながら返して服を探すと、ロッカー（注文品）の中に超ミニな和服が。

もはやこれはサイズが合っていないんじゃないかと思うぐらいの短さだ。少しでも動けばパンツが見えてしまいそうだな。

「……昨日までこんなデザインでは無かった気がするのだが……」

「俺の嗅覚をなめるな」

絶対にそう言うことに使う才能ではないと思う。

「杉崎君……どうかな？似合う？」

「うおっ！？中目黒。何だその格好は！？」

「えつとね……その土屋君がこの服を貸してくれたんだ」

「なんでお前は女物の服をもらって自分が着る物だと思っんだ……！」

「え？杉崎君もあるよ？」

「は？えーっと……なんか、俺のロッカーまである……」

中目黒と杉崎がそんな会話をしていると、教室のドアがガラッと開いて、生徒会メンバーがやってきた。

「ちょっと杉崎！2・Fの皆さんのお手伝いをちゃんとしなさいよ！」

「アカちゃん。あなたもう一度キー君の女装姿が見ただけでしょ」

「しっかりやってください先輩！真冬だって……真冬だってゲームしたかったんですから！」

「……なんか、僕、あの子と共感できそうな気がするよ」

入ってきた生徒会メンバーの言葉を聞いた明久が、真冬の方を見てそんな事を呟いた。

……まあ、ゲームとかを買って食塩水で生活する羽目になっているコイツと、廃姫である真冬とは相性がいいかも知れねえな。

「と言うか、アンタ等も手伝ってくれるのか？此方としてはありがたいが、何も出ないぞ？」

雄二が訝しげに彼女達を見ている。と、再び扉がガラツと開き、とある教師の姿が。

「真儀瑠先生……もう来れたんですか？」

「ああ、昨日でこの学園長との話し合いは終わったからな……む？お前……」

「な、なんでしょう？」

と、真儀瑠先生が俺のことをガン見していた。……何だ？

「ああ、お前が後輩が電話で言っていた、霧沢姉妹か。どうやらこれが終わった後、何かやるらしいから覚悟しておけよ？」

「いや、字が違うし」

気がつくと、俺たちの周りには誰もいなくなっていた。この先生に呑まれたのか？

因みに、優子と佐藤は百合子が帰って行った後にAクラスに帰って行った。

「さあ！皆、この五人が決勝戦で宣伝して来てくれるから、これから忙しくなるぞ！準備は良いか！」

『才　　！！』

「ならば戦闘開始だ！全員着替える！」

なんか、俺達へのプレッシャーまで掛かってきた。まあ、出場者が……なあ。

「それじゃ、生徒会の連中も宜しく頼むぜ？」

「ああ、まかせとけ」

俺の言葉に、杉崎が笑みと共に返してきた。

他校の生徒が参加するのはルール違反かも知れねえが、大丈夫だよな？

「それでは、第一回、クイズ大会決勝戦〱召喚獣バトルの部〱を始めます！」

「それでは、承認します」

『試獣召喚（サモン！）』

高橋先生の言葉で、全員が召喚獣を召喚する。

……内四人が小さくなるとは、なんて面白いチームだ。

あ、出場者は、俺&薫（どちらも縮む）と利春&キョン（どちらも縮む）と風香&優子と常夏コンビだ。

「おい！今纏めただろ！？」

「うるさいなあ。何の話をしているの？」

夏か……常夏コンビの片割れの言葉に薫が反応する。

「いやいやいや！そこまで言ったならわまで言えよ！絶対嫌がらせだろ！？」

「利春にキョン。あれ倒せば後はどうにでもなるから、二人で頼む」

「はっ！風祈提督殿！」

「なあ、俺はコイツをどうしたら良い？」

「それは知らん。つつうか、俺よりもお前の方が長く一緒に居るだろ？」

「はぁ……分かったよ。とりあえず、常夏を倒せばいいんだろ？」

俺達の会話が終了すると、利春はマシンガン、キヨンは巨大な装置を作り出した。

「以前は消されてしまったから、今回はその憂さ晴らしじゃあ！」

「プラズマ砲発射用意……三」

利春が引き金に指を書け、キヨンの言葉で装置の砲身にエネルギーが溜まって行く。

「……二」

「お、おい、夏川。逃げた方が良いんじゃないか？」

「……」

「そ、そうだな良し！霧沢兄妹の後ろに隠れるぞ！」

常夏コンビが俺達の方へ召喚獣を走らせてくる。

「あ、そうそう、優子。なんでお前俺と目を合わせないんだ？」

「い、いや。そんなこと無いわよ」

「明らかに逸らしてるよね……この間チケット買いに行ったときに何かあったの？」

「へ？チケット買いに行ってたの？てつきり私は優子とデートだとばかり……」

「そ、そんなわけ無いでしょ！？なんでそんな変な事言つのよ！」

「おい！お前等この勝負、まったくやる気ねえだろ！」

俺達が会話していると、常が召喚獣と一緒に走りながら言うて来た。

「確実に面倒くさくなったよなあ！せめて常夏コンビぐらいで呼んでくれよ！」

「おっと、盛大にすべったあ！」

俺は、スピリットオブソードでなんとも贅沢な足払いをかけると、常の方が倒れる方向を薫に向かうようにしておく。

「薫、ゴメン」

風香が謝ったと同時に、常の手が薫の胸に顔を埋めた。

まあ、詰め物だから本物な訳無いけどな。

「あ……す、すまん。こ、こんな事するつもりじゃ……」

そのチャンスを逃す利春たちではない。

「ゼロ。プラズマ砲発射ア!!」

「ハッハア!一斉掃射だぜエ!!」

チツと言う音がしたかと思うと、夏のほうの召喚獣は跡形も残らず消し飛んでいた。

常の方の召喚獣は俗に言う蜂の巣状態になって殆ど消し飛んでいた。

Fクラス	水坂利春&雪崎来兎	VS	Aクラス	常夏
コンビ				
総合科目	4125点&2758点		3157点&31	
65点				

「ついに俺達は試験召喚システムにまでそんな扱いを受けたのか!」

「っていつか、あいつ等Fクラスの成績じゃねえだろ!」

「おお、キヨンが意外に良い点だ。もうちょい悪いかと思ったんだ

「がな」

瞬殺された常夏コンビを無視して、俺はキョンを見る。

「お前等だつてこれぐらいの点数は持つてるだろ？」

「利春は元々頭良かったけどね」

因みに、この勝負ではその後、残りの二チーム（つまり、風香&優子と利春&キョンだな）が降参して、俺達の優勝になった。

「あ、ちょっと借りますね」

風香が高橋先生からマイクを受け取る。

「皆さん。我々はFクラスの男女逆転喫茶のメンバーと、Aクラスのウエディング喫茶の者です」

「Fクラスの男女逆転喫茶は、此方のこの子を見ても分かるように、非常にレベルが高いです」

「そして、Aクラスのメンバーも、ここに居るのは一人だけですが、彼女を見ても分かるように非常にレベルが高いです」

優子が薫を前に出してFクラスの紹介をするので、俺も優子を前に出してAクラスの紹介をしてやる。

ただ、俺が言った言葉に優子がまた顔を赤くしたのは何でだろうな？

「……希望とあらば……」

と、そこで薫は言葉を切って俺達を見回し、小声で「試獣召喚^{サモン}」と言うと、俺達にも促してきた。

俺たちも同じく「試獣召喚^{サモン}」と言うと、ポンツと俺達の姿が小さくなり、召喚獣となる。何故か現在は女性用の和服だ。

「此方の姿での接客もいたしますので、ご希望の方は店員の方へお申し付けください」

薫が言うと、会場から様々な声が聞こえた。

『へえ……あの子結構可愛いねぎゃあああああ！?』

『ふん……。他の女を見て鼻の下を伸ばして』

『そんなわけ無いだろ！？たえあってもそれはいのりだよ！』

『クラゲ、お前もかなりバカだな』

一角からはどす黒い雷電が発生していた。

『
在れ』

『わわっ、蛭！あの服ちよつと似合っよねって言っただけじゃん！
木刀もって襲ってこないでよー！』

『そっだよ兄さん！私と似ているんだから兄さんも似合っに決まっ
てるじゃん！』

……もう一角からは木刀を持って立ち上がる少年とそれから逃げる
幽霊の姿が……。

「それでは、お暇でしたらお手元の案内を見て、AクラスとFクラ

スへとご来店ください」

とりあえず優子が纏めて俺達は舞台袖に引っ込んだ。

その後舞台から聞こえてきた常夏コンビへの非難の声を聞いて、俺達は数秒間あの二人に合掌していた。

あ、因みに、利春の召喚獣の能力は甲冑の上から軍服、改造制服とよく分らん服に、銃火器を作り出す能力。

キヨンの召喚獣は、甲冑の上から白衣を羽織ってその上に改造制服と此方もよく分らん服に、理科が少しでも関係している物を作り出す力だ。

なんでも、神が不公平だから。との理由でこの二人も肉体と召喚獣をリンクさせられたらしい。ただ、普段は人間サイズになっているらしいがな。

第十七問

「これが白金の腕輪ねえ……意外と軽いんだ」

「そうだね。もう少し思いかと思っていたけど、そこはあのババアが技術者として優れているって事かな？」

「ってな訳で、これはお前等五人にやるよ」

風香と薫の会話の横で、雄二に『召喚フィールドの作成』の能力を持つ腕輪を、明久に『主獣と副獣の二体召喚』の能力を持つ腕輪を、秀

吉に『能力の融合』の能力を持つ腕輪を、ムッツリー二に『能力の増強』を持つ腕輪を渡した。

秀吉は腕輪保持者と居なけりや意味は無いし、ムッツリー二も保健体育以外には意味が無いが、ハンデとしてはちょうどいいだろ。

「おい、本当にこれを俺達がもらってもいいのか？お前らが優勝したんだろっ？」

「ああ、それは要らないからいいよ。むしろ、私達が使うよりも有

効利用してくれるだろうし」

「そもそも、優勝したのは実質三チームだし、俺達の実力があればその腕輪もあんまり意味無いだろ？」

「……確かに」

明久はこの会話について来れてなかったが、とりあえずそうだよね！と叫んで纏めていた。

……逃げたな。

「ああ、お帰り。宣伝ご苦労さん」

「まさかこんなに効果があるとはな。大繁盛じゃねえか」

「もっと売り上げを上げるために銃を全員に」

「……却下（だ）ね。だろ。です！。だよ！」

杉崎とキヨンの会話に利春がああ発言をして、近くにいた杉崎、キ

ヨン、知弦さん、深夏、真冬、会長が突っ込んでいた。

あいつはどれだけやらせたいんだ。アホだろ……。

「で、後は何すんだ？」

「ああ、後は」

『……雄二。いる？』

「後は任せたっ！」

雄二は一瞬の判断で窓から飛び出していった。

そういえば、今何時だ？……ああ、なるほど。だから霧島が来たのか。

「翔子ちゃん。雄二は窓から飛び出して行ったよ」

「……ありがとう」

「ああ、それと、このチケットも預けておくよ。今度のプレオープンのために一緒にデートでもってことで」

「……ありがとう。二人とも、やっぱり良い人」

薫と風香が霧島とそんな会話をしていると、廊下の遥か遠くに雄二の姿が。

えーっと？口の動きから察するに……。

『翔子を』

翔子を？

『見えないように遠ざけてくれ』

翔子を見えないように遠ざけてくれ。ねえ……。

「霧島、ちょっとこの布を被ってくれ」

「……分かった」

バサアツと霧島が某猫型ロボットの秘密道具を被る。すると、雄二がこっちへ安心したような顔で戻ってきて、

「ああ良かった。翔子はもう別の場所に行ったみたいだな」

「そうだね、雄二。霧島さんにあそこまで思っただけで貰えるなんて幸せだよ」

「んあ？何だ明久。いつもならその話をすると思いが掛かってくるのに、どうかしたのか？」

「いやいや雄二。ただ純粹に哀れだな。と思っただけ」

「哀れ？どう言う事だ？」

「だって その横には霧島さんが居るし」

明久が雄二にその言葉を言った瞬間、雄二は瞬時に俺と薫を見て廊下に出ようとした。

「……雄二、逃がさない」

「うおおおおお！？誰も居ない場所から声が聞こえるぞ！？下手な怪談より怖い！」

「さて、雄二たちも飯のようだし、一緒に食いに行こうぜ」

霧島に顔を捕まれて動けない雄二の横で、俺が恒例のメンバーを誘うと、全員俺達について来てくれた。

向かう先は屋上だ。

「オイ明久、お前から逝けよ」

「（嫌だよ雄二！そう言う雄二こそ逝きなよ！）」

「（お主等、字が違うと思うのじゃが……）」

「（大体あの字であつてゐるんじゃない？）」

「（まさか、瑞希が私が教えてない料理まで弁当に入れて来るなんて……）」

「（……気をつけないと、ああなる）」

「（尊い犠牲を無駄にしてはいけないわ……）」

「（クソッ、鍵の奴、あんな見せ場を作るなんて）」

「（そこなのですか！？なんか論点が変わだと思ひます！）」

「（全く、軟弱者めえ！）」

「「「「「「「「「「（……イヤ、お前が言うの！？）」「「「「「「」」」」」」」」」」」」

上から、雄二、明久、秀吉、俺、薫、ムツツリーニ、知弦さん、深夏、真冬、利春。

そして、最後に突っ込んだのが今上げた中の利春以外の全員だ。

俺達の目の前にはキヨンと杉崎の死体が。

キヨンは利春に姫路作のおにぎり（スペシャル製）を強制的にねじ込まれて逝き、杉崎は、

「美少女が作ってくれた物を危険物とはいえ無駄に出来るか！」

と叫んでバイオ兵器を食べて逝った。

「？キヨン君と杉崎君はなんで倒れたんでしょう？」

……姫路、いまだに自分の料理がポイズンクッキングである事を理解していないんだな……。

「（あんな物を食ったら死んじゃう！ここはあれで行くぞ！）」

「（OK雄二）」

明久と雄二はそんな会話をすると、俺に目配せしてきた。

「第一回！（雄二の言葉）」

「運が良いのは誰だ！決定戦！（明久の言葉）」

「『『『イエ
！！！（俺と薫と秀吉とムッツリー二の合
の手）』』」

「明久、ルールの説明だ」

「OK雄二。ここに先ほど即興で作ったくじがあります」

明久がポケットからくじを取り出して全員に見せる。

「これを引いた人は姫路さんのおにぎりを食べて逝き、最後までおにぎりを食べられなかった人が敗者です」

実際、このルールは食うのを避けるためのルールだ。むしろ、敗者を狙うのがこっち側の目的だろう。

「へ？なんでそんな取り合いを……？」

「きつとおにぎりの取り合いになったのよ。それで勝負で丸く治めようという感じなんじゃないの？」

「……明らかに、別の理由の気がするんだけど……」

姫路のバイオ兵器の恐怖を知っているはずの島田も気づかないのか……風香は理解しているようだが……。

「それじゃ行くぞ！せーの！」

『ドローー！……！』

「「「「何か違う（違います。違うわ）……！……！」「」「」

なんでドローー！？

それを置いといても結局残り四個のおにぎりを食べさせられたのは、

「チクシヨオオオオオオオオオオ！！」

雄二と明久と秀吉とムツツリー二だった。結局こいつ等か。哀れだな。

「さて、飯も食ったし戻って店の方を手伝いますか」

復活早っ！……って、杉崎なら普通か。

「ああ、それと、雄二。当初の予想売り上げを大幅に上回っているぞ。霧島になんか買ってやれ」

「なんで翔子に俺が買わなきゃならないんだ！？」

「それは気にしない気にしない」

そんなこんなで、大繁盛の男女逆転喫茶に俺達は戻り、残りの日々も大売り上げで学園祭は終了した。

第十七問（後書き）

学園祭ついに終了。

いや、正直に言えばこれ以上は私の力では書けないという事なんですが……。

ですが、常夏コンビも割りと傷つかなかった（？）し、個人的にはまあ……うん。的なレベルです。

次回はちよいちよい出てきていた某作品のキャラたちも何故か含めての打ち上げパーティーです。

恐らく描写がもっとも少ない話になるでしょう。

なぜなら大して動かないから！

それでは次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

……いまだに一つも略称がきていない……。どうしようかな……。

番外編四 多重クロスって言うか、キャラ崩壊っばいんだぜ！（前書き）

キャラ崩壊、多重クロスが苦手な方はお気をつけください。

あの作品のキャラの魅力を一割も引き出せてませんが、楽しんでいただければ幸いです。

「あれ？何か先生が違う！胸がバーンってなっていない！」

「ふふん。今日は私マテゴ組みなんだ。どうだこのピチピチの若さ」

真儀瑠先生が自慢げに胸をそらす。

「でも……………」

そう言つて、薫が風香に姫路、知弦さんの方へと顔を向けた。

「「「……………」」」

「…………くつ。だが将来はああなるんだから問題は無い！」

「いや、先生。その頃に間に合つてこそなんじゃねーのか？」

俺がそう言つと、真儀瑠先生（ここから先は真儀瑠先輩の方が分かり易いか）は顔を背けてしまった。

……………ちょっと悪い事したかな。

「だが、今日の先生が攻略対象なのは事実！ヒヤッホウ！」

「……はあ。死にて……勘弁してくれ」

なんと呼ぶか……蛍でいいか。蛍が傘に言葉の途中で睨まれて急遽変更していた。

杉崎は……まあ、あれは最初っからだな。

「私もあの者たちと同じ学校に行ってみたいですね」

「あそこに入るには姉上はとうが」
「

「そういえば、軋軋。ダイフクと言う物をご存知ですか？」

「は、……はい……」

「それは……ここにあるのでしょうか？出来れば食べてみたいのですが……」

「す、すぐに買ってきます！」

アカロシアに年の話をしかけたオドラが、アカロシアの平手打ちで床にめり込み、それを見た軋軋がガタガタ震えながら買いに行ってしまう

った。……あの力……やっぱ強えな。

「お姉さま！久々に会えて美春は嬉しく思いますー！」

「ああ、愛しいアコニット！多忙で会えなかった私を許してくださいまし！」

「だからウチは普通に男がすきなわ！あつそのあなた！助けて！」

「アザレア……流石に人界では自重しなさいよ……あ、誓護。ちょっと……」

「えーっと……僕はどっちに行けば……？」

「「うるさいですわこのペド野郎（豚野郎）！」「」」

「ペドに豚！？酷くない！？」

「紹介文でキモイシスコン野郎といわれた男が何に言ってるんだ。そんな呼ばれ方恒例だし」

俺が追い討ちをかけると、誓護はいじけてしまった。うーん。さつきからどうも追い討ちを掛ける係りみたいだな……。

「話が合いそうですね……」

「そうですね……美春とここまで話が合いそうな方は始めてみましたわ……」

なんか、アザレアと清水の同性愛者同盟が出来ていた。……ん？あつちでは……。

「だからね、軌軌にあそこまで（殺意の）思いを送ったのに全然答えてくれなかったんだ」

「僕も分かるね、それは。僕も吉井君に（愛の）思いを送っているのに、彼は全然気づいてくれない」

……恐らく、お前達の送った思いはベクトルが真逆だろう。

それでもなんか合うな。赤兜と久保。あそこで明久が悪寒を覚えたようだから、今頃軋軋も悪寒を覚えたんだろうがな。

と言うか、今計算してみると、この場に同性愛者が四人（一人は分らんが……多分あそこまで思っているのなら入れておいていいだろう）

もいるって計算になるな……カオスだ……。

と、全員がまた移動していき、分かりやすい構図に……。

エリアー。姉グループ

「それですね、オドラは私の顔に泥を塗るような真似を……」

「ああ、それ、あたしにも分かるところがあるわ」

「……私は、一時期恨まれていた感がありました」

「私は、アキが葉月に取りられそうで……」

「大丈夫だよ。明久君も犯罪はしないだろうからさ」

そう言う問題ではないと思う。

「だからさ、風祈もこう……ちょっとした、乙女心を分かってないっていうか……」

なんか優子が良く分からん話を始めたので、次だ次。

……なんで俺はあのグループから上条さんが向けられるような視線を向けられてるんだ？

エリア二。妹グループ。

「だからね、兄さん。いまだに死にてえって言う癖直ってないのよ」

「そうだよねえ。プロポーズしたのにどうかと思うよ」

「と言うか、ユウさんは神様なのですか？」

蛍のあの口癖、いまだに完全には抜けてないんだな。

そして真冬よ。恐らくお前の抱いていた幻想を粉々に打ち砕くような発言が出ると思うのだが……。

「それで、誓護はプロポーズしといて妹にベタベタと……」

アコニットさんよ。その愚痴はあそこのシスコン野郎に言ってくれ……いや、ペド野郎か？

エリア三。弟グループ。

「姉上も、まだ言っていないのだから見逃せばいいのにな？」

「オドラさ」

「おっと、明久。俺のことはキングと呼べ。畏怖と畏敬を込めてな」

キングことオドラが明久にビシッと指を突きつけてそう言う。

……端から見ると、結構バカっぽいって言うか、ナルシストっぽいって言うか……。

「なら、キング。僕もキングの考えには共感できるよ……」

どこか遠い目をして明久が呟く。あの二人は割りと気が合っただな。

方や華奢な体で、方や筋骨隆々の男だが。

「つまりだね。あの」

赤兎がまた口を開きかけたので、次だ次。

エリア四。一人っ子(?)グループ。

「つまりだな。後輩は……」

「ああ、分かりましたから、真儀瑠先輩。愚痴を吐くのは止めてください」

「えつと……」

真儀瑠先輩の愚痴を、雄二が困り顔で聞いていた。横では佐藤が何も言えずになっている。

「明久君は……鈍感すぎます!」

姫路が酔っ払って叫んでいた。

……ん? 酔っ払って? 誰だ! 姫路に酒飲ませたの!

「ですから……メールアドレスを交換しませんか?」

「メールアドレス……なるほど、では、そのケータイと言っのをくださいまして?」

俺が紙に文字を書いて上に上げると、アザレア姫は魔性を使っていたようで、メールがどういった機械で出来るかどうかなどを理解したよ

うだった。

ただ、なぜ魔性を知っているのか？って目を向けられたが、答える訳ねえだろ。

そんなわけで、俺はアザレア姫にケータイを放り投げて、その場所はほつつておいた。

……アイツと接触した事で、肝試しの際の『清水美晴だったものが『光の王』みたいな魔性を使わねえ事を祈るか……』

使っちゃう気がするが……幻想殺し（イマジンブレイカー）か魔刃アイギスの書を使って止めておくか。

エリア五。兄（？）グループ。

「はあ……カオスにも程があるでしょ」

「？薫、どうしたの？」

「いや……なんでもないよ。誓護」

薫がどこか遠い目をしながら呟く。

一緒に回っていたが……なあ。

「杉崎……第二の主人公としてがんばってね」

「螢……ああ！俺、もうすぐ皆卒業しちまうけどがんばるぜ！」

なんであるの二人はあそこまで仲良くなっているんだ？

……まあ、同じ作者の作品の主人公同士だからか。

「まあ………何で君達が知っているのかは分からないけど、アコニツトの麗血開花アーマメントはそっちで自由に決めていいよ」

「そうか………いや、勝手に使ってもよかったんだが………それは筋が違うだろうと思ってな」

俺は伊吹怜人（いや、クリソピルムか、亡失せし麗王って呼んだ方がいいか？）と話して、何故かメタ発言ばかりするクリソピルムに若干引

きながらも、一応あの麗血開花アーマメントの力を勝手に設定する許可をもらった。

何となくモヤモヤするからな……。

番外編四 多重クロスって言うか、キャラ崩壊っばいんだぜ！（後書き）

因みに、これは次回に続きます。

なぜかどうでもいい番外編（しかも駄文）の癖に二話跨ぎの感じに……。

今回は杉崎が合コンといえば。と思っているんだろっなあ……と私が勝手に考えている話です。

次回もキャラ崩壊注意な話になるでしょうが、苦手な方はご注意ください。

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しく願います。

『ただけ好きだよ！……！』

全員総ツッコミだった。

「……あ、私だよー。やっぱり、会長こそが王様に相応しいよね！」

セリフからも分かる通り、今度の王様は会長こと桜野くりむさんだ。

「えっと……あ、杉崎三番だね。なら、三番は、副会長を辞める！」

「何ですか会長！？」

「……だって、杉崎……この間の送辞とか答辞とか……」

「言い返せないぜ！チクショウ！」

まあ、そんな事したら大惨事なので、転生組みが全力で止めた

……何かすいませんでした。

「あら、私ね」

『ガタガタガタガタ……!!!!』

全員がガタガタと震えた。なぜなら、今回の王様は……

紅葉知弦だからだ。

「して、知弦様、ご命令は？」

「そうね……ならく自主規制の内容なので規制させていただきます
>でどうかしら」

『鬼iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!』

ぜ……全員……大号泣だった。

……震えが止まらねえ……。

「さて、次の王様は……」

「あ、俺」

「さあ次だ」

『おおー！！……！！』

「ちょっと待てえ！！何で俺が引くとそうなるんだ！！」

……なんか、残念なことにも引いてしまったキヨンが喚いているが、
無視無視。

「次は私ですわ」

アザレア姫が王様のようだ。

「あ、アザレア……あなた……何を命令するの？」

「その人形遊びが趣味のペド野郎の番号を見て、わたくしのアコニットから離れていただくのも手でしょうけど……」

そこでアザレアは考える素振りを見せ、

「一番が七番に、五番が十番に、十二番が三番に、二番が四番に、二十番が二十四番に、二十五番が六番に告白するというのはどうでしょう」

「う？」

.....

一番、蛭、七番、島田

五番、杉崎、十番、姫路

十二番、……俺、三番、知弦さん

二番、薫、四番、傘

二十番、明久、二十四番、深夏

二十五番、雄二、六番、ユウ

……アザレア姫、絶対お前、俺等の番号視ただろ。

「「「「「えっと、じゃあ……好きです」「」「」「」

「「「「「ああ……はい」「」「」「」

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』

『ガタガタガタガタガタガタ』

はい。その後、蛭はマテゴの女子組みから、杉崎は生徒会組みから、俺はなぜか優子から、薫は佐藤から、明久は島田と姫路から、雄二は霧島から、それぞれお仕置きを受けた。

……明久が、『二人とも！そんなに僕のこと嫌右腕がねじ切れるように痛い！いいいいいいいい！！』

って言うてたが……もう少しあいつは乙女心を理解した方がいいと思うな。

……？アザレア。なんで『お前が言うな』的視線を俺にぶつけてるんだ？俺、なんかしたか？

『はあ……あの人形趣味のペド野郎と同じですのね』って何だオイ。俺があいつみたいにデリカシーが無い訳ないだろ？

その『気付かないものですわ』ってのが腹立たしいが、分かったのならいい。

その後も一騒動あったが、特別言うことではないので飛ばしてもらおう。

ただ、これから……あの『原作』ではあれがあるんだから、そろそろ始まるタイミングなんだよな……。

あれはあれで、身体能力的な問題でチートの気がするし……いや、俺達は元からチートなんだがな。

番外編四 多重クロスって言うか、キャラ崩壊っばいんだぜ！何故が続いたパ

いつもより短め、内容薄い。な今回、本格的に暇つぶし以下になつてきた気がします、読んで頂いた方はありがとうございます。

感想くださる方がいるのに、なかなか感想返せなくてすいません。

この小説を書くのに忙しいのです。無謀にも一個増やしてしまったので。

さて、今回のバカとテストと介入者はどうでしたか？前述したとおり、自分的にはダメダメでしたが、これを楽しんでくださった心の広い方がいらしたのなら恐悦至極にございます。

……やっぱり（誤字ではない）、私には堅苦しい文章は似合いませんね。

あ、それと、略称は期間延長させていただきます。

それでは、次回のバカとテストと介入者と、ここで宣伝することではないですが、もう一つの小説の方も宜しく願います。

第十八問

「「「ハイ来ましたこう言つの！！！」「」「」

利春を除いた

転生組みは、声を揃えて叫んだ。

……と言つのもだな、事の発端は俺と雄二と明久で歩いていたらこ
ろから始まるんだ。

以下回想へGO！

「
君たちに、決闘を申し込むわ」

南国の海のような、あざやかなターコイズブルーのリボンを投げつ
け、高名たる“文学少女”は凜と宣言した。

その“文学少女”
天野遠子の傍らで、「ああ、言っちゃっ
た」
と頭を抱えていたのは井上心葉だ。

あの小説の二人組みが、俺が予期していた通り、このタイミングで来てしまったのだ。

大方、そもそもの始まりとしては、あの二人が図書館に行くとかと
言う話になり、姫路に会って、『明久君が……ワッフルを坂本君に
あげ

ちゃったんです』とか言っただろう。

なぜ俺が巻き込まれたかは分からないが、あの文学少女の目には俺
と雄二もそう言う関係に見えるのか？

……だとしたらショックなんだが……。

んで、もっと前の展開としては……

「そのカップル……………！待ちなさい……………」
「い！」

後ろから遠子先輩の声が響いた。まあ、雄二と明久が乙女フィルターを通すとカップルに見えるのかもしれないが、俺には関係ないので無

視だ。

「止まりなさ~~~~~い、前のバカップル~~~~~」

バカと言う単語が聞こえた瞬間、横のバカ二人は立ち止まり、後ろを振り返った。

「ほ、ほら……（ぜいぜい）私のカンに間違いは……（げほげほ）なかったでしょ（ぜはぜは）。やっぱり、デキて……（よろよろ）」

「あの、遠子先輩。そんなによろめきながら勝ち誇られても……」

俺が引き気味に言うと、心葉は不思議そうな顔を俺に向け、

「どうして遠子先輩を知っているの？」

と聞いてきた。

「ああ、有名だからな、“文学少女”こと天野遠子とその助手の井上心葉ってのは」

俺が、あながち嘘でもない答えを返すと、遠子先輩は再び勝ち誇ったような笑みを浮かべて、

「ほ……ほら（ぜいぜい）私は……（ごほごほ）嘘をついて……（げげげ）なかったでしょ（ふらふら）」

「いろいろと危ないです。遠子先輩」

俺と心葉の声が重なる。

……この人は、実際に見ると本当に運動が向いていないということ
が分かるな。ある意味すげえ。

「今、バカと叫んだようだが、明久に何か用か？」

「ひどいよ！雄二。どうして、僕がバカで、バカが僕になるのさ！」

「それは、お前がバカだからだ」

「否定はしないけど、親友に向かってあんまりだ!」

「認めるのか、おい」

「え、えつと……」

心葉が明久の本質（見ればわかるか）に気付いたようで、軽く引いている。

恐らく、彼の心の中では、

『頭悪そう』とか、『半端にアイドル顔のお笑い芸人』とか思っていることだろう。

「おい、バカ×2。お前等があまりにも意味不明なことから、心葉が引いているだろうが」

「ん？ああ、すまん。あまりにもコイツがバカなもんだから、教えてしまった」

「ごめんね。雄二があまりにもバカすぎるから、ちょっと引かせちゃって」

俺が言うと、この二人は心葉に謝罪していた。

……バカはいいのか、バカは。

「んで？お前、誰だ？」

雄二がある程度体力が回復したであろう遠子先輩に話しかける。

「その子も言っている様に、ご覧の通りの“文学少女”よ」

「はあ？」

雄二は、コイツ絶対バカだ。と思っている呆れた目で遠子先輩を見ている。

「で？遠子先輩。誰に用があるんだ？」

「よく聞いてくれたわねっ。私があるのは、君達よ、坂本君に風祈君」

「俺も？」

……なんで俺まで巻き込まれているんだ？また世界の歪みでも始まったか？

「聞いた？雄二に風祈。用があるのは二人だって！バカは僕じゃなくて雄二の方だったんだよ。ヤッター、バンザイ！」

「……うるさい（うるせえ）から、そっちのバカ（おバカさん）はちよっと黙って（ろ、て）！」「」

俺、雄二、遠子先輩の一喝で、明久が「ガーン」と仰け反る。

……口でガーンっていう奴……初めてみたな……。

「単刀直入に言うわ。二人とも、吉井君と別れて頂戴」

遠子先輩のその言葉に、明久が手をバタバタさせて、呂律の回らない舌で訴える。

「ちよちよちよちよちよと、それ何？まるで僕とこの二人が付き合っているみたいじゃないか」

「ええ、三人は愛し合っているのでしょうか？」

「『『な訳あるかあ

！！！』』』

俺は遠子先輩に詰め寄り、目を見て訴える。

「遠子先輩、あなたは勘違いをしている。ここまで聞けばどういうことが分かるな？」

「ああ、なるほど、そういうことね。じゃあ、坂本君は吉井君と別れて、風祈君と付き合って頂戴」

「なんでそうなっちゃいますう

！？」

「誤解しないで。わたしは男同士がいけないなんて言つつもりは、毛頭ないわ。真実の愛に、年齢も性別も種族も、関係ないもの」

「俺達はいいつにそんな感情抱いてねえけどなあ！！」

俺と雄二は、声を揃えて憤怒の形相で遠子先輩に詰め寄る。

「けどっ！」

「聞けや！」

「瑞希ちゃんと優子ちゃんの純情を踏みにじった罪は、許せないっ」

この辺のセリフは結構変わってないけども！何故優子がそこに入っているのかのツツコミもしたいが、一番の問題はこの人の頭だ！

そんなわけで、この後遠子先輩が雄二と俺に決闘を申し込む、あのシーンに繋がる訳だ。

そして、週末の土曜日、あの『原作』通り、召喚獣でバトルすることになった俺達は文月学園校庭の特設ステージに集結したのだった。

『僕は、ヌードモデルもコスプレも出来ませんよ』

……心葉よ、お前は、その認識に間違いがあることを知ることになるだろう。なぜなら……井上堅二をなめてはならないからだ。

と、俺がこの後に続くであろうあの騒動を思い出して、ちょっとだけ心葉に同情する。

「何よ！風祈君の名前がないじゃない！」

遠子先輩が喚いているが、あれは無視だ。

何であんなことを言っているのか説明すると、対戦表に俺の名前が無かっただけで、その理由としては、

『事前のテストでわざと0点を取ったから』の一言で済ませられるな。幸い、やったテストは保健体育だったし。

ま、誤解されたままって言うのも腹立たしいので、誤解を解くための文を書いて、ついでに賄賂として恋愛小説をセットで遠子先輩の方へ

と投げつける。

念動力でちょうど手に収まるように投げたので、普通に受け取って読んでくれた。

…… 良し。理解したようだな。これで俺の誤解は解けただろう。あの人の至福の表情と、興味本位で行橋の異常アブノーマルを使ったら

流れてきた、

『至福』、『快樂』、『興味』と、心を映す鏡の毒アバーシュで読んだ、

『この二人に合作を書いてもらおう』と言う感情を読み取ったとき、あの賄賂を贈るんじゃないか。と思ったのは、言うまでもない。

と、雄二が意地の悪そうな笑みを浮かべて、

「の予定だったが、急遽その連中から出すことにした」

「あら、なら私も参加しようかしら」

雄二の言葉に、麻貴先輩が、しめたと言わんばかりの表情で壇上へ

と上がつて来た。

第十九問

……で、

選手となったのはムッツリーニ、俺、島田、利春、雄二。

対して、聖条学園チームは、遠子先輩、心葉、琴吹、麻貴先輩、……謎の外国人（麻貴先輩が用意した選手のようなが、明らかに高校生には

見えないほどごつく、本名不明のサングラスをかけた黒人だ。表記はグラサン）。

断言して、あの外国人と雄二は戦う気は無いだろう。

あそこで戦う予定なのが恐らく明久であるのと、勝負の科目が、誰も連勝せずに行けば英語なので、全く勝ち目は無いからだ。

あの『原作』と同じく、これは勝ち抜き戦のルールのようなが、雄二は保険として俺と利春を入れたか？

「それでは、一回戦を始めます」

文月学園の教師（名称不明）の掛け声で、遠子先輩とムッツリーニが中央まで進み出る。

「一回戦の科目は、保健体育！」

教師がそう宣言した瞬間、歓声とムッツリーニコールが。

「残念ね土屋くん」

遠子先輩が三つ編みをなびかせ、悠然とムッツリーニを見つめる。

ムッツリーニは、流石というべきか遠子先輩のスカートと足の境界線を視線を動かさずに見つめ続けている。

「……………（じー）」

「わたし、保健体育にはとっても自身があるのよ」

「……………（じー）」

ムツリーニ（バカ）は、ひたすら遠子先輩の膝小僧のあたりを見つめている。

「……………（じー）」

「……………（じー）」

「……………（じー）」

「わたしは、ポーリーヌ・レアージュの『O嬢の物語』も原初で読んだ文学少女よ。夜這い満載の『源氏物語』も、エロスてんこもりの『

今昔物語』も、官能の宝石箱『千夜一夜物語』も完全攻略し、団鬼六先生も美味しくいただかせてもらったわ」

あの人は何言ってるんでしょうねえ！年頃の娘さんのはずですが！

その遠子先輩の言葉に、バカばっか観客はムツリーニコールを止め、どよめく。

「団鬼六先生を、オカズにしただと！」

「顔も赤らめず、堂々と言い切ったぞ！」

「なんて男前なんだ！文学少女！」

感嘆の声（？）に気を良くした遠子先輩が、調子付いてさらに胸を
そらす。

「えへん！××縛りも、×××××縛りも、漢字で書けるし、××
×も、××の種類も、×××××が×××したときの立たせ方も、×
××

×の抜き方も、体位全般も、即刻レポートに纏められるわ！×××
も、×××××も、完璧に、各国のスペルで綴れるのよ！」

「文学少女、すげー！」

「すげー！」

「すげー！」

遠子先輩の口から次々と放たれる淫語、放送禁止用語（精神衛生上、
こっちのブロックの連中は×の所はピー音で聞こえる）の嵐に、琴

吹は

耳から首筋まで顔を真っ赤に染め、固まっている。

「止めてください！遠子先輩！それは文学少女ではなく、ただの下ネタ好きのおっさんです！保健体育、全然関係ないです！そんな恥ずか

しい問題、テストには絶対出ませんっっ！」

「……………一般教養（ボソッ）」

ムツツリーニが、騒ぐほどのことでもないように呟く。

そのムツツリーニの言葉に、遠子先輩が力チンとし、言い放つ。

「涼しい顔をしていられるのも、今のうちだけよ」

向かい合う二人の声が、重なった。

「「試^{サモン}獣召喚！」」

ムッツリーニと遠子先輩の足元に、それぞれ魔方陣が展開された。

そしてそこから、ムッツリーニ&遠子先輩のデフォルメされた姿である、召喚獣が出現する。

「わっ、か、可愛い」

琴吹も、風香に優子や、姫路、島田などと同じく、可愛い物好きなように、目と頬を輝かせた。

ムッツリーニの召喚獣は、例によって忍者の外見、遠子先輩の召喚獣は、中世の騎士のような、甲冑に身を包み、天を貫くような巨大な槍

を持っていた。

「おおっ！文学少女、強そうだぞ！」

「槍、でかつ！」

あの二人の点数が、掲示板に表示される。

『文月学園	土屋康太	V	聖条学園	天野遠子
保健体育	560点	VS	540点	
』				

客席が大きく揺れた。

「ムツツリー二に負けてないぞ！」

「エロ少女、すげー！」

遠子先輩の召喚獣が三つ編みを跳ね上げながら、巨大な槍を意気揚々と振り回し、突進する。

つて……あの召喚獣の三つ編み長っ！召喚獣の倍はあるんじゃないか？

「さあ！覚悟しなさい！」

びゅん！

槍が気合と共に、ムツツリー二の召喚獣に振り下ろされた。……が、

すかつ

すかつ、すかつ。

すかーつ。

「全然当たんないじゃないですかっ！」

「操作が下手にも程があるでしょ！」

「え？あら？あら？おかしいわね」

心葉と風香の、キレ気味のツツコミを受け、遠子先輩は首をかしげていた。

運動センスゼロと言われる遠子先輩に、召喚獣の操作がうまいとも思えなかったので、予想通りっちゃあ予想通りだが、槍が明後日の方向

に向くのは下手にも程があるだろ。

「ええい！当たれえ！当たれええ！」

落ち着いて攻撃すれば当たるであろう武器の大きさなのに、槍を振り回しているんだか、槍に振り回されているんだか分からんから、到底

当たることはないだろう。

と、そのとき、遠子先輩を（膝小僧の辺りをジッと集中的に）見ていたムツツリー二が、ぼそりと呟いた。

「……………加速」

ムツツリー二の召喚獣が、マトモな人間の目なら追えなくなるほどの速度で遠子先輩の召喚獣の背後に回った。

「速っ！」

そのまま小太刀を抜き、遠子先輩の召喚獣に切りかかる。

と、心葉が麻貴先輩に貰っていたメモを思い出したようで、琴吹の制服のスカートに手をかけた。

「ゴメン！琴吹さん！」

心葉が思い切り琴吹のスカートをめくり上げ、琴吹の悲鳴が会場中に響き渡った。

因みに、観客（主にFクラス）の連中に見せるのは哀れな気がしたので、一瞬だけ観客の視力を奪っておく。

「いやあああああああああああああ！」

その光景に、ムツツリーニが鼻字を拭いてぶっ倒れる。

そのわずかな間に、例の如く、どこから取り出したのか分からんカメラ（レンズは血に濡れている）を琴吹に向け、カシャカシャカシヤとシ

ヤッターを切り続ける。

「えいつ！」

動きを止めたムツツリーニの召喚獣に、遠子先輩の召喚獣の槍が、

ついにヒットした。

それが倒れるのと、召喚獣が倒れるのは、完璧に同時だった。

ステージに仰向けに倒れたムッツリー二は、この上なく幸福そうな顔をしていた。

「信じられないつつつつ！」

女子二人の声が重なった。

……………ん？二人？

「ゴメン。でも僕見てないから」

「僕はあれを見ていないって言ってる僕の腕がねじ切れるように痛い痛い！ー！」

心葉が口にしたとたん、ビンタをもろに食らっていた。

明久はまあ……………いつもどおりボコられている。

「余計悪いっ！てか最悪！もお、もお、いやあああああ！」

「アキつてば、最低！」

琴吹は、もう一度心葉の顔を引っぱたき、島田は明久の両肩の骨を外して、真っ赤な顔で走り去っていった。

ああ、大体予想できていたが、あの報われない二人組みが居なくなってしまった。

「さあさあ、次は誰が相手かしら？」

遠子先輩が、ある程度操作に慣れたようで、得意げに胸を張っている。

「おお！風祈が来たぞ！」

俺がステージに出ると誰かの観客席からのその言葉で、心葉が手元の紙を覗き込む。

そこには、『霧沢風香。圧倒的な点数を誇る、古文のスペシャリスト。同じく、双子の兄弟に現代国語のスペシャリストである霧沢薫がい

るする』と書かれていた。

実際、俺は文学少女と戦いたかつたんだよな。どっちが古文で点数が上か。あれからまた上がって、人間離れしてきている気がするが、そ

こはまあ、愛嬌って事で。

「ふふん、このまま文学少女の私が、貴方達全員のお相手をしてあげる」

調子に乗って、遠子先輩が無い胸を張る。

「「試^{サモン}獣召喚！！」」

正直言えば、この人の数学の2点も見たかつたのだが、俺的には勝負が優先だ。

例によって、召喚から少し遅れて点数が表示される。

『文月学園	霧沢風香	V	聖条学園	天野遠子
古文	835点	V	835点	
		S		

』

「同点だぞ！」

「どっちもすげー！」

「あの二人……人間か？」

観客のそんな評価。まあ、俺にとってはいつものことだ。

「やるわね……。文学少女のこの私と互角だなんて……。特別に、文学少年の名を上げるわ」

「いえ、いいません」

「って、なに！？可愛い！この子可愛いわ！」

「遅えなオイ！今気付いたのかよ！？」

俺が遠子先輩の言葉に即答すると、その直後に俺が召喚獣になっていることに気付いたようで、キャラ崩壊していた。

「まあ、始めましょうか」

俺がハンデの為に、使う武器を一つに限定しようと思い、考えながらいうと、遠子先輩はあわてて槍を召喚獣に構えさせた。

俺は…… 良し、今回はあの武器にしよう。腕輪の能力も使わないで。

「鋼金暗器、弍之型『龍』！鎖鎌！！」

俺は、まず小手調べに鎖鎌を放って槍を絡め取るうとする。

だが、遠子先輩も異様な呑み込みの速さで、あっさりとそれを槍で防御してしまった。

「ていつ！」

「参之型『極』、大鋏」

槍の攻撃を大剣で缺んで止める。そして、いったん後ろに飛んで距離をとり

ブーメラ
「武羽冥乱！」

「やっ！」

今度はブーメランを飛ばし、それもまた遠子先輩に槍で止められる。

そこからしばらく、同じようなことが続き、壱から四まで行ったとき、勝負は動く。

「当たれえ！」

「よっ！」

遠子先輩の繰り出す槍を避け、天高くジャンプする。

「『堅固な物は一点を集中して狙え』『水でもいずれは岩に穴を開ける』……五之型『暗』！魔弓！！！」

魔弓を遠子先輩の召喚獣に向けて放つと、かなり慣れてきた遠子先輩は、あっさりと槍で矢を受け止めてしまったが、俺の狙いは果たした。

。

「えっ！？槍が……！」

バキバキと亀裂が入り、遠子先輩の召喚獣の武器である槍は一瞬後、バギン！と音を立てて粉々に崩れた。

二丁三回は同じ箇所をきり四までの型を当て続けたから、そこだけ相当脆くなっていた。だから今の攻撃で粉々に砕け散ったのだ。

「さあ、これで俺の勝ちですね

六之型『無』」

俺は、鋼金暗器の魔道具の核を、遠子先輩の召喚獣に巻きつけ、バラバラとなった暗器はその核へと戻っていく。つまり

ドスドスドスっ！と言う音が鳴って、遠子先輩の召喚獣に鋼金暗器のパーツが突き刺さった。

その連続攻撃により、遠子先輩の点数は0点。これで、俺の勝ちだ。

「くやしい

！！文学少女の私が、国語で負けるなんてえ

！！」

「ある意味、初めてまともに戦った気がするぞ……。とりあえず、疲れた……」

そんな言葉を漏らしながら、俺と遠子先輩は自分達の控え場所（？）に戻っていく。

……って、俺はまだあるんだったか？

俺は、戻っていた道を引き返し、ステージの中央まで歩いていく。正直言って、心葉とは戦いたくないというのが本音だ。遠子先輩との戦

いで、気力使い果たしたし。

そんなわけで、心葉ファンの人々には非常に申し訳ないのだが、科学では全得点使って兵器を作り、同点で引き分けた。

そもそも、利春に後は任せるからな。まあ、いいだろ。

第十九問（後書き）

心葉君の描写が無くて申し訳ない……。

ただただ、心葉君の召喚獣も、イラストにしたらカッコいいと思うので、その辺はご容赦ください！

……はい。すいませんでした。実際は描写できなかっただけです。なんか想像できなかったのです。

と言うわけで（何がだ）次回でこの対決シリーズは終了です。その次の話のモデルは、“文学少女”と殺された莫迦^{モウカ}の予定です。

すでにお気づきの方もあると思いますが、これは主に『文学少女』はガーゴイルとバカの階段を昇る』がモデルとなっています。

ただし、ガーゴイルの話は出来ません。いろいろ事情があるので。

そんなわけで、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

第二十問

利春VS麻貴先輩の勝負は、総合科目での勝負だ。

どちらも頭が良いので、どこまで点数を取れているのかが見ものの勝負となっている。

「ハッハッハア。勝負だア！」

「悪いけど、これに勝ったら遠子がモデルになってくれる」

いつも通りの利春と、麻貴先輩の言葉で遠子先輩が、「そんな事言っていない！」と叫んでいた。

「「試獣^{サモン}召喚！！」」

ポンと、利春の召喚獣と、麻貴先輩の召喚獣が出現する。

麻貴先輩の召喚獣は、それまでの二人と同じく甲冑を着て、手に筆を持っていた。

……なるほど。能力はあれか。

『文月学園

水坂利春

V S

聖条学園

姫倉麻貴

総合科目

4 2 3 4 点

V S

4 2 3 7 点

』

「まずは、ワルサー P 3 8 か」

利春は、手に銃を作り出し、麻貴先輩は、空中に筆を走らせる。

一瞬後、利春が放った銃弾を、麻貴先輩の召喚獣は緑色の盾で防御していた。

「ちっ！」

「次は これよ」

麻貴先輩は、再び空中に筆を走らせ、槍を打ち出す。

対して利春は、床にしゃがみこんだ姿勢のまま、床を転がって避ける。

利春が、超電磁砲（第三位の方ではない）を打ち出すと、麻貴先輩は黄色の鏡のようなもので、超電磁砲を受け流していた。

「……なんで、あの二人は超次元的なバトルをやっているの？」
「」

その光景を見ながら薫、風香、明久が声を揃えて言う。

そもそも、召喚獣はぬいぐるみ程度のサイズのはずなのだが、あの二人は明らかに人間よりでかいサイズの兵器や盾などで戦っている。

ガチャガチャガチャ！と音が鳴り響き、どういった兵器なのか俺にはわからんが、少なくとも試召戦争の規模ではない大きさの兵器が、
音

を立てて形態を変える。

「これで二個……」

利春が呟き、麻貴先輩の召喚獣が飛ばす大剣を避ける。

「発射ア！」

「甘いわ」

利春が、先ほどの謎の兵器の砲台から下位安定式プラズマ砲を撃つが、麻貴先輩は筆で盾を作り、一瞬だけ耐えている間に斜線上から避け

た。

「今度はこっちの番ね！」

麻貴先輩が空中に筆を走らせ、ベルトのような物を利春に向けて飛ばす。

「くそっ！」

利春は、少し避けたが、淵まで追い詰められてベルトのような物に拘束された。

「これで私の勝ちね

止めよ」

「ハッハッハア。そうですね。止めですね麻貴先輩。これで終わりです」

相変わらず妙なテンションの利春が、そう呟く。

あいつの手には、先端が赤くなっていて、小型のスイッチのような物がある。

……なるほど。

「おい。皆ー、耳塞げー」

俺が言うと、選手の全員は首をかしげながらも耳を塞いだ。

……いや、違うな。転生組みは納得の表情だ。

「三……」

利春がカウントダウンを始める。ゼロになったときに、あのスイッチを押すのだろう。

「
カチッ
」

ドガン！と爆音が鳴り響いて、麻貴先輩の召喚獣の筆や足元が吹っ飛んだ。

……ってオイ。

『カウントダウンの意味は何だア

！！』

「別に何もないわい！」

『なんなんだよお前え

！！』

とまあ、相変わらずの意味不明さだったが、麻貴先輩の召喚獣は先ほどの爆発で消し飛んでいるので、コイツの勝ちだ。

……釈然としないにも程がある勝ち方だったな。

本来は、最初にあの足場にC4あたりを仕掛けて、筆にも隙を突いてつけていたのだろうが、攻撃のタイミングを誤らなければえらくカッ

コいい勝ち方だったものを……。いつものことだが。

「良い勝負でしたよ、麻貴先輩。遠子先輩をモデルにする計画には、協力しましょう」

なんか……真っ黒な同盟が出来上がっていた。遠子先輩……ファイト。

「オー、ワターシのデバーンデースネ。さあ、完全無欠と呼ばれた私の」

『何で急に饒舌!?!』

……あれって……似非外国人だったのか……? 突然流暢な日本語に……。

「な……なんか、遠子先輩に風祈の事で愚痴を言っただけなのに……
……凄いことになっちゃったわ……」

私 木下優子は公園の滑り台の上で、先ほど見てきたシュールな光景を思い返していた。

あの謎の外国人は、吉井君が相手をする事になったのに、いろいろあって、瑞希が相手をしていた。

まあ、結果として勝ったのだけれど、瑞希と共に、思い人の愚痴を言ったらここまで大事になるなんて、思いもしなかった。

「最低っ最低っ最低っっ、さいっっってえゝゝゝゝゝ！」

私がいる滑り台の下で、この滑り台にしがみついて叫んでいる聖条学園の生徒がいた。

確か……琴吹ななせさんだったかな……？

「井上なんか大嫌いつ、バカバカバカ！」

どうやら、彼女は井上心葉君のことが好きなようだ。私がそんな事を思うことがあるから、間違いは無いだろう。

あの怒りようだと、井上君に見られるのはいいけれど、他の男子に見られるのはイヤだと言った所だろうか？

それは風祈の機転を誉めるばかりだけど……。

「ばかぁ！井上のバカぁ！バカ、バカ、バカ、バカアアアア！」

しくしく泣いている琴吹さんを見ると、恐らくイライラを紛らわす為に走っていたであろう、美波が、やってきて、公園のブランコを

いきなり蹴り上げる。

「バカ！バカバカっ！バカっっ！他の女の子にはデレデレして！ウチだって、ウチだって女の子なんだからあっ！」

ガシッ！ベシッ！ブランコが戻ってくるたびに、さらに勢いづけてけりまくり、しまいには宙高く舞い上がったブランコが一回転し、片方

の金具が外れて上のほうにぐるりと絡まってしまった。

「バカバカ、アキなんて アキなんて
」

ふーふー息を吐きながら、美波は唸っている。

……とりあえず、降りようかな。

「し（み）……島田さん（美波）？」

後ろから遠慮がちに声をかけると、琴吹さんの声と重なってしまった。美波は、ぎよつとした様子でこちらを振り返り、見る見る顔が赤く

なっていた。

「じっ！琴吹さんに、優子……」

十分後

私達はベンチに三人並んで腰掛け、愚痴をこぼしあっていた。

「うちだって、本当はアキの前で、可愛くしていたいのよ。なのに、アキがあんまり鈍感だから、つい殴ったり蹴ったりしちゃうのよ」

「風祈も、どれだけアピールしても気付かないのよ……。だから、たまに関節技をかけたとかしちゃうの」

「あたしも、井上の前に出ると、顔が強張ってキツイと言っちゃうの」

「わかるわ、それ。だいたいね、アキも悪いのよ。ウチのこと完全に男扱いで、ウチがどれだけアピールしてもボケまくりなんだもの」

「私も、異性としてみてもらっていない気がする。なんか……友人止まりみたいなの？」

「井上もね、あたしがこっさり見ていたら、『ごめん、ぼく、睨まれることした？』なんて、謝るんだよっ」

「ぐす……ウチが、髪の毛を五センチ切っても、リボンの色を変えても、完全スルーだし」

「私も！ヘアピンを変えても、全然気付いてもらえなかった」

「あたしもそう……。スカートの丈も、ヘアピン変えても、全く気付いてもらえなかった」

「それって、女の子はショックよね」

「うんうん」

「本当にアキって、バカで間抜けなんだから」

「風祈は、鈍感で、風香とかに目を向けるシスコンで、」

「井上なんか頼りなくて、ぼーっとしてて、とりあえず謝っとけば
いつか、見たいな感じで、」

「瑞希にばかり、優しくして」

「風香や秀吉とは、家でもよく一緒にいるのに」

「遠子先輩の言うことは、聞くくせに」

「「「あんな奴、もう知らない」「」」

三人でこぶしを握り締め、憤然と言い放つ。

「け……けどさ、やっぱり、気になっちゃうのよね」

「うっ……わかる」

「あたしも……」

「なんかこう、バカなやつほど放っておけないってゆーか……憎めないってゆーか……つい、かまいたくなっちゃうとゆーか」

「「うんうん」」

「それに、ただバカなだけじゃなくて、いいところも、いっぱいあるのよ。友達思いで、くだらないことにも一生懸命で、アキがいるだけで」

「周りが明るくなって……」

「風祈も……どんなときでも頼れるし、趣味も隠さず接しられるし……たまに、一緒に出かけてくれたりするし……」

「井上もねっ、あたしが困っているとき、親切にしてくれたの。それに、本当の井上の笑顔は、最高に素敵なんだよっ」

三人で、はーっと溜息をつく。

「結局、同じコトの繰り返しかー」

「うん……」

「あゝあ、ウチが井上君だったら、琴吹さんみたいな美人に惚れられたら、すぐ気がつくのに」

「あたしも、風祈君だったら、木下さんみたいな美人の気持ち^{ひと}が、すぐに分かるのに」

「私だって、吉井君だったら、美波みたいな可愛い女性に惚れ^{ひと}られているんだったら、すぐに付き合っているのに」

「私なんて、琴吹さんと違って、秀吉と見分けがつかないぐらいペツタンコよ」

「ウチも……前にアキに、背中と間違えられたし……」

「ううん。二人とも、ウエスト細いし、足も長いし、雑誌のモデルみたい」

「琴吹さんのこと、ななせって呼んでもいい？こんなに話が合う人初めて」

「私も、呼んでいい？一緒に、鈍感な彼について話していきましょ」

「あたしも、二人が他人とは思えないし、こっちも、二人の事を、美波と優子って呼んでもいい？」

「もちろん」

「美波、優子」

「ななせ」

私たち三人は、熱く手を取り合った。

そして、数日後

「……優子、帰りに、愛子たちと遊びに行かない？」

「ごめん、代表。先約があるんだ」

「……デート？」

「げほっげほっ。そ、……そんなじゃないよ……ただ」

Fクラスのほうをちらりと見る。ここからじゃ耳に入る訳ないけど……。

「鈍感で、何も分かってくれない、同居人の愚痴を、語り合ってるだけ」

第二十問（後書き）

はい。こんな感じで、『文学少女』と、乙女に集う召喚獣』がモデルの話は終わりです。

あの外国人はなんだったのでしょうか……。作者の私にも分かりません。

少なくとも、カタギの人間ではないようです。

さて、次回の話は、この話の続きです。数日後といったところでし
ようか？

それでは、次回のバカ介を宜しく願います。

……あ、この略称は、レフィル様の案です。

略称は、来るたびに使っていこうと思いますので、案を出してくだ
さる方は、お暇でしたら出よろしいので、願います。

第二十一問

天野遠子先輩や、井上心葉（シンバと読んでしまう者もいるが、コノハだ。……今更だが）が、俺達のいる、文月学園にやってきたのが数日

前。

そう、まさか、ああなるなんてな……。

って感じに、あの謎の外国人も明久が倒したのだが、明久が、

「直接会いに行って、姫路さんを元気付けてくれたお礼を遠子先輩にしよう」と言うので、文章が好きだということを伝えて、

「感謝の気持ちを込めて書け」と言ったら、普通に書いてきた。

んで、確認した後、面白そうだからそのまま出しておく。

が、文法も漢字も、欠片もあっていなかったなので、恐らく

一方、その手紙が届いた頃

「うん、あまあい。初々しくて、ふわふわしていて、コットンキヤンデーみたい。瑞希ちゃんと優子ちゃんの恋が、成就するといいわ

ねえ」

「姫路さんと木下さんのお礼の手紙ですか？字もきれいだっだし、確かに遠子先輩みたいに手紙を食べることが出来たら、きっと美味しい

んでしょうね」

「ええ、すつごく美味しいの。お菓子みたいに甘くて食べやすくて、つつい食べすぎちゃいそうだわ」

「良かった。っそれなら、今日の三題噺はいりませんよね？」

「いいえっ。それとこれとは話が別よ。別腹と言ってもいいわ。だ

から早く早くっ」

「はぁ……。そう言うと思いましたよ。分かりました。あと少しですから大人しく待っていて下さい」

「うんうん。心葉君は物分りが良くて助かるわ」

「こんな時だけ調子のいいこと言って……。あ、そうだ」

「どうしたの、心葉君？もしかして、風祈君と合作を書く気になった？」

「それは彼が嫌でしょうから駄目です。……で、文芸部宛に、その、風祈君から二枚の手紙と、吉井君からの手紙が届いていたんですよ」

「え？なにに？何かの相談かしら？」

「この前のことのお礼の手紙と、風祈君はお礼の作文もセットみたいですよ」

「吉井君まで手紙を書いてくれたのね。今日はおやつがいっぱいで嬉しいわ」

「ぼくは先に読ませてもらいましたから、食べちゃっていいですよ」

「そう？それじゃ、いただきます」

「どうぞ」

「まずは、風祈君の手紙から……はむっ。もぐもぐ。じゅっく
ん」

「美味しいですか？」

「美味しい！流石風祈君だわっ。瑞希ちゃんの手紙も美味しかったけど、これは……そう！三十年熟成されたビターチョコレートの味がす

るのっ！」

「……それ、腐ってません？」

「そう言う比喻表現なのっ。すっごく美味しいってこと！」

「まあ、分かりましたけど……それで？次は何を食べるんですか？」

「次は、風祈君の作文を食べましょう。きっと、美味しいわ」

「ぼくはそっちの手紙は読むなってメールで言われましたけど……まあ、そうでしょうね……」

「はむっ……うん。あま……しくしくしく」

「ど、どうしたんですか！？遠子先輩。急に泣き出して」

「ぐすっ……最初は、ヒロインが楽園で気楽にブランコを漕いでいて、動物達とお話していたんだけど……」

「けど？」

「急に《叫びの神様》が現れて、腕を三本持って行ったり、その代わりに貰った、美味しい黒炭を食べていたら、気付けばヘアスプレーに」

「なっちゃって、紅天狗様が傍らにいたの……」

「待ってください、先輩。誰ですか叫びの神様とか紅天狗様とかつて」

「しかも、最後には前に心葉君が書いたリンゴも出てくるし……」

「ああ、あれですか……。って言うか、どついう話ですか、それ」

「注意書きに『これは夢の話です』って書いてある時点で気付くべきだったわ……」

「ガチの夢ですね。……あれ？何か落ちて なになに？『注意。これを読んだら、頭がぐんにやりして気分が悪くなるので、基本的

には読まない事。食べるのは、責任を取らないが、食べてもよし』ですって、遠子先輩」

「うう、遅い！その注意が、遅いわ！食べちゃう前に見えるように入れておいてよね！」

「あ、裏にまだ書いてありました。えっと、『明久の作文に、口直しの話を入れておいたので、明久の手紙を読んだら食べてください。困

みに、そっちを書いたのは薫です』と」

「なんで吉井君の手紙を食べた後なのかしら？まあ、とりあえず……はむっ」

「どうですか？」

「……………」

「遠子先輩？」

「……………うっ……………ぐすっ……………」

「せ、先輩！？大丈夫ですか！？」

「美味しくない……。さっきのよりも、酷い味がするの……」

「それって一体どんな味なんですか？まさか……マシユマロをキムチにつけこんで、チヨコレートをかけた。とか、そんな酷い味ですか？」

」

「あのね、洗濯用の洗剤をお風呂用の洗剤で溶いて、台所用の洗剤にふりかけたような味がするの」

「先輩。それ、食べ物が一つも入ってないです」

「これは酷いわ！文章に対する冒読よ！改行や句読点とか以前に、誤字脱字、慣用句の誤用、主語と述語が不明確とか、とにかく全然なっ

ていないわ！」

「そ、そうなんですか。吉井君、いくら風祈君と同じクラスにいるからって、国語が得意な訳じゃないんですね」

「瑞希ちゃんはあるなりに良い文章を書けるのに、吉井君がこんなだと二人の将来が心配だわ！」

「遠子先輩。急に話が飛んでいますよ」

「いいえっ。全然飛んでないわ！だって二人が文通を始めたら、風祈君と優子ちゃんはどうまく続くのに……ってなって、そのうちお互

いに

気まづくなつて破局してしまうのよ!」

「今時文通なんてしますか?メールならともかく」

「とにかく!これは二人の危機よ!瑞希ちゃんの為にも、吉井君に国語の基礎を教えてあげないと!文月学園に行くわよ心葉君!」

「ええっ!?!今からですか!?!」

「勿論よ!善は急げって言うでしょう?」

「はあ……。分かりましたよ」

「あ、でも」

「なんですか?」

「その前に三題噺と、薫ちゃんの話を書いてからにしましょう。腹が減っては戦はできぬ、よ」

「結局、僕が書かされることには変わらないんですね」

「書いている間に、薫ちゃんの作文を食べておくわね。ぱくっ……」

「どうしました？遠子先輩。そんなキラキラした目で手をブンブン振り回して」

「おいしい……！美味すぎるわ……！さっきの風祈君の作文もかなり美味しかったけど、これは異常よ！現代国語のスペシャリストは伊」

「達じゃないわ……！」

「はあ……そんな物の後だと、微妙にプレッシャーがかかるなあ」

「心葉君には心葉君の良い所があるから、それを出してくれれば大丈夫よ」

「う……なんか、言いくるめられた気がするけど……まあいいか」

第二十二問（後書き）

内容薄！

な話です。本当に、薄いにも程があるでしょう。程が。

次回は、もう少し身を入れて書きますので、読まなくならないで下さいね？

ああ、薫や風祈の文才が、私にも欲しい……。

それでは、次回のバカ介を宜しく願います。

第二十二問

「おい明久、珍しい連中がいるぞ」

放課後、薫たちも秀吉の部活を除けば、大した用事が無かったので、四人（俺、薫、風香、優子だ）で帰ろうと校門に向かっていると、前に

いた雄二と明久が、例の二人組みを見つけていた。

……やっぱり、そこもあるのか……。

「あれ？天野先輩に井上君？どうしたの？」

天野遠子先輩＆井上心葉は、怒っている表情と、苦笑いの微妙な表情で校門前にいた。

って、俺たち見つけて手をブンブン振っているな。遠子先輩。

因みに、あの時あったとある一件から、心葉とはかなり仲良くなったということ、ここで言うておこう。

「まあ、それはそれとして……吉井君っ」

「あ、はい。なんですか天野先輩」

「どうしてまだ坂本君と愛し合っているのっ。瑞希ちゃんはどうしたのっ！」

「遠子先輩、それはただの友情です。愛し合っているわけではないです」

薫がツツコムと、遠子先輩は聞こえないふりをしている。

……確信犯？

「遠子先輩止めてください！酷い言いがかりですよ！」

流石に、後輩二人から責められると、聞くらいしい。

「心葉君。私の言った通りでしょう？きつと吉井君が文章を上手にかけなくて、しかも優子ちゃんと風祈」

「遠子センパイ！？ちょっと向こうでお話しましょうかあー！？」

うおっ！？……なんか、高速で優子が動いて、遠子先輩を捕まえて校舎裏に消えていった。

「……あれって……どうしたの……？」

「薫、聞いている駄目なこともあるんだよ」

風香が薫を諭していた。

なんか後が怖そうなので俺も聞かんが……なんだったんだろっな？
優子の名前が出た後は聞き取れなかったんだが……？

「ごめん、吉井君。遠子先輩がまた暴走しちゃって……。何を言っているのか良く分からないよね」

「ごめん、井上君。その話の途中で遠子先輩が消えちゃったから、さっぱり分からないんだけど……」

なんか……優子がスマン。心葉にも、苦勞をかけた気がするな……。

「ま、普通は分からないだろうけど」

「「けど?」「」

薫が言うと、心葉と明久は声を揃えて聞き返した。

それに薫は、哀れむような顔をして、

「雄二の命が、風前の灯ってことかな」

「はい?」

「風前の灯ってどういう意味だっけ?」

もちろん、薫の言葉の反応は、上が心葉、下が明久だ。

……明久、お前、あの『原作』の方ではちゃんと意味を理解していたじゃないか……。まさか、いまいち意味が分からずに使っていたのか

？

『……雄二。吉井と愛し合っているって、どういづこと……？』

『しょ、翔子！？ちが……っ！そんなのは根も葉もない言いばかりで……っ！』

気配も出さずに現れた霧島は、雄二の頭を鷲掴みにしていた。

そのあたりに耳を澄ますと、恐らく雄二の頭蓋からギシギシと良い音が奏でられていた。よく生きてるもんだ。

「前にも言ったけど、私は男同士が不潔だなんて言うつもりは無いの。でもね、瑞希ちゃんと言う人がいながら、吉井君と熱烈に

「

いつも間にやら戻ってきていた遠子先輩が、そこまで言ったところで心葉に口を塞がれていた。

流石心葉だ。雄二のピンチに気付いてくれたらしい。……が、

『……熱烈に、ってどういう事なの……！』

『ぐあああああつ！さらに頭蓋が軋み始めたぞ！？翔子、お前は俺を殺す気なのか！？』

些か遅かったな。熱烈につて単語が出る前に黙らせるべきだった。

「まあ、あれはいつもの事だから置いて置くとして、心葉、遠子先輩の暴走を止めてくれ」

「遠子先輩！止めてください！坂本君の生死に関わりますから！」

「そうよつ。心葉君の言う通り、女の子の恋は命がけなんだから！それなのに、吉井君は瑞希ちゃんを裏切って、坂本君と新婚夫婦みたい

にイチャイチャ

」

パキユツ

遠くで、何かが握り潰される音がした。

「あ、あの……。坂本君の首が不自然な曲がり方をして、ぐったりとして動かなくなってるんだけど……」

「気にしないで、あれはいつもの事だから」

「そ、そうなの？」

『……雄二。向こうでゆっくり話を聞かせてもらっ』

『……………（ぐったり）』

心葉が、風香と共に霧島に引きずられて校舎の影へと消えていく雄二に、手を合わせていた。FFF団の連中に見せてやりたいところだ。

「そもそも、何で吉井君は瑞希ちゃんと帰らないのっ！やっぱり、愛し合っているんでしょっ！」

「それは特別補修があったからで、時間が無かったんです」

因みに、参加者は雄二と明久で、俺達はこの等のコーチとして残

っていた。

ま、教師を超えた点数だから、仕方が無いんだろうが……。

因みに、優子は風香と教師に頼まれた事やっていたらしい。風香に聞いても、何も教えてくれなかった。

「ほら遠子先輩。吉井君と姫路さんの仲には何の問題も無さそうですよ。だから大人しく帰りましょう」

「いいえっ。問題は大有りよ！吉井君、補習の科目って何かしら？」

「えっと……科目は古典ですけど」

明久がそう応えると、遠子先輩は勝ち誇ったように胸をそらして、

「ほら見なさい、心葉君。吉井君の国語力が原因で二人の仲がうまく行っていないのよ。これはなんとしても、“文学少女”の私と薫ちゃん

と、“文学少年”の風祈君が何とかしないとイケないわ」

「遠子先輩！そう言うのは『小さな親切大きなお世話』って言うんです！」

「私……少女じゃないんだけど……」

「遠子センパイ！？俺はそんな名前要らないって言いましたよねえ！？」

「三人とも冷たいわっ！そうやって瑞希ちゃんがまた悲しい思いをしても構わないって言うのねっ」

何故か、俺と薫の言葉をスルーして姫路の話に移りかけた時、

「あの、私がどうかしましたか？」

帰り途中であろう姫路がいつの間にか近くに来ていた。

「瑞希ちゃん、ちょうど良かったわ！」

「こんにちは、遠子さん。今日はどうしたんですか？」

「こんにちわ、実はね、今日は吉井君の頭が心配でここまで来たの」

「なんか僕、サラッと悪口言われたような……」

それは俺も心配だから、間違っではないけどな。

「遠子先輩！それだとただの悪口です！」

「あ、そうね。ごめんなさい。そうじゃなくて、私達は、その……」

「はい」

「吉井君の思考回路に致命的な欠陥が無いかと心配になってここま
で来たの」

「遠子先輩、それは丁寧勝つ正しい日本語で言いなおただけです」

「ご、ごめん吉井君！別に遠子先輩は悪気があって言っただけじゃ
ないんだ！ただちよつと暴走しちゃってるだけで！」

心葉があたふたと手を振っている。

……この二人は、ある意味で明久と同じだな。黙ってりゃ、かなり知的な奴に見えるんだが……。

「瑞希ちゃんも吉井君の成績が心配でしょう？」

「あ、えつと……。そ、そうですね。確かに最近は何やら良くなっているみたいなんですけど、来年一緒のクラスになる為にも頑張っても

らわないと……」

「そうよね。心配よね」

「そう言う遠子先輩だって、十分心配なレベルなんですからね！受験生のくせに！」

「う……それはいいの。サインやコサインは文通には使わないもの」

「……二点」

俺がボソツと言うと、遠子先輩が「な、何で知っているの!？」と言ってきた。

それは適当に流しておいて、話の続きを促す。

「まあ……と・に・か・く!二人の今後の為にも“文学少女”の私と薫ちゃんと、“文学少年”の風祈君が吉井君に古典を教えてあげるわ

っ。さあ、教室に行きましょう!」

そう一方的に告げて、遠子先輩はずんずんと校舎に向かって歩いていった。

んで、俺は巻き添えに優子まで誘って、教室に向かっていく。

どうせ、勉強をやっている暇は無いからな。

第二十三問

明久が源氏物語を全然知らなかったことは皆さん知っていると思うのだが、まあ、そこは特筆すべきところではないのでいいだろう。

それで知ったことと言えば……優子が明久の頭を本気で心配し始めたところか？

なんか……

『瑞希ちゃんがかわいそうだわ……私のほうも鈍感バカだけど、それ以上に』

とか呟いていた。

……姫路が明久のことを好きなのは『原作』を見なくても、普通に見ていれば分かることだが……優子の言う鈍感バカって誰のことだ？

まさか、雄二とか、秀吉とか、久保のそう言うあたりか？

つと、なんか考えていたらイラッときたので、この話はここで終了だ、終了！

この後は、教室付近からスタートだから、そのあたりは理解しておいて欲しい。

ザワザワザワ……

Fクラスの教室前まで来たとき、多くの人のざわめき声を、私

木下優子は確かに聞いた。

吉井君が、風祈や薫に勉強を教えてもらっているのに、上達できない理由が分かった気がするわ……。

「?どうしたのかしら?」

遠子先輩が声のする方に目をやる。

私もその視線を追ってみると、その先には放課後だと言っのに人だかりが出来ていた。

勿論、誰かが勉強をしている訳でもないし、予習をしている訳でもなかった。

「吉井君。文月学園って放課後でもああやって残っているのかな？」

「うん……。確かに遊んで残っていることは多いけど……」

井上君と吉井君がそんな会話をしていた。

遠目からなので良く分からないけれど、教室前の人たちは遊んでいるように見えなかった。

どちらかと言うと、何かを遠巻きに見ていると言ったところだろうか？

そういえば、Ａクラスは遊んで残っていることが無かったな……。

などともうでもいい事を考えていると、吉井君が様子を見てくると言っただけに近づいていった。

何があるのだろうか？

ふと、横に立っている風祈を見ると、彼は苦笑いの表情で額に手を当てていた。

今の彼の心情としては、『ムツツリーニ……お前はなんてバ力なことで死んでいるんだ』と言ったところだろうか？

同居が長くて、さらに……
だと、顔や雰囲気からある程度の考えなどは読み取れる。

……って、死んでる？だれが？

考えてみると、風祈は前にも坂本君が代表に殺されたりとか、吉井君が臨死体験をしたとか、そんなことがあると言っていた。

言ってみて気づいたが、私も秀吉を半殺しにする事だってあった。
(なぜか風祈達からは全殺しといわれるけれど)

もう少し考えてみると、ふと、愛子の顔が浮かんだ。

彼女は、土屋君と付き合っているらしいし、似た者通しであるのだが、土屋君が自分の話を聞いて、ちょっと（いや、かなりかな？）

鼻血を

出すのを面白がっているから、それが自分の体にかかって死んでるように見えるのかもしれない。

『ム、ムツツリーニ！？一体何があつたの！？』

風祈の考えではあそこに倒れているらしい土屋君を見に行っていた吉井君が、そんな叫び声をあげていた。

……本当にあそこに土屋君が居たんだ。と、改めて、この、何か……先のことを知っていそうな兄妹をすごいと思った。

「？なにかしらって、キャツ！」

井上君が見に行つたので、私も見に行こうと近づこうとすると、風祈に手を引つ張られた。

なんでも、「いつもよりもグロイから、お前は見るな」って理由らしい。

その横では薫が風香に、「あそこはイラストかされてないんだてから、女子は見ちゃダメ！」と言っていた。

対して風香は、「えー。あれはあれで面白そうなのに」と不満そうな声を漏らしていた。

結局、そのやり取りは、最後に薫が、「じゃあ、私が見てきて大丈夫そうだったら来ても良し」と言って終了した。

ただ、自分も女子のような容姿の癖に、こう言う時だけは割とカッコいい（？）事を言うんだな。と思い、美穂が惚れた理由が少し分かった

気がした。

正直言つて、私も家で薫のことを異性と見たことは……無いとは言えないが、無いに等しい数しか異性として捕らえたことは無いので、そ

れを一ヶ月程度（美穂が言っていたのはもう少し短かったっけ？）でこの辺のことまで見抜けた美穂は、意外に男を見る目があるんだろう。

『ああっ！ムツツリー二の命より大事な、音声データが奪われている！！』

『吉井君！？それよりも、明らかに土屋君の命の方が大事だからね！？』

と、向こうのほうで、吉井君と心葉君が言っているのが聞こえてきた。

……流石はFクラスと言った所だろうか？

友人の命よりも、音声データのほうが大事って言えるなんて……。

「んじゃま、どれほどグロイか見てくるか？」

「ま、それが良いよね。風香も、なんか見たがっているし」

と言って、風祈と薫は吉井君たちのいる教室へと歩いて行った。

さて、聞き分けの無い、我等が妹を説得する為には、俺達がアイツが見ても良いというレベルでなければならぬ。

ま、シスコンの自覚はあるので、いつもの鼻血以上に今回は暴行が加えられているのだから無理なのだが、一応確認しておこうと言う訳だ

。

どっちにしろ、優子にも見るなといってあるし、あの二人で話させておけば多少の時間は稼げるだろう。

その稼いだ時間でムツツリー二にビニールシートなり何なりを被せれば良い話だ。

「……………これは無理だな（だね）」

予想通りと言うか、予想以上にグロかったので、ビニールシートをかけて誰からも見えないようにする。

これを女子が見た日には、一生物のトラウマになるんじゃないか？

あ、遠子先輩は言うほど気持ち悪がってなかったか。

因みに、遠子先輩は俺達よりも前にムツツリー二の死体を見ていた。

「やれやれ。翔子の奴、最近どんどん凶暴になって
ん？こ
れは何の騒ぎだ？」

そこで、雄二登場。

「あれ？雄二、もう解放されたの？」

「ああ、アバラを二本ばかり持っていかれたがな」

「ふん。そんなことより、雄二、これ見てよ」

「え！？吉井君、今の坂本君のセリフ、『ふん』とか、『そんな
ことより』で済ませて良いものなの！？」

心葉がツッコミを入れているが、このFクラスではいつもの事なの
で諭しておこう。

「これは……ムツツリー二か。……グロイな」

「だよね雄二。しかも、音声データまで奪われているんだよ」

「なんだと！？なんて非道なことをつ。犯人め……ムッツリーニの敵は俺が取ってやるぞ！！」

「ああ、坂本君も、土屋君の命は大して尊重してないんだ……」

「気にするな心葉。ああいった怪我をしても生き返るのが奴等だ」

そう言うと、心葉は、大体分かるって言いたそうな顔をしていた。

あれ？こいつ等って、実は不死身か？

「あの、明久君。風香ちゃん達が話しているんですけど、あそこには何があるんですか？」

姫路が明久にビニールシートを指差して尋ねていた。

「あれはね、ムッツリーニの死体なんだよ」

「吉井君！？土屋君はまだ生きてるからね！？」

「そ、そんな、土屋君が……！？」

「まあそれは、仮にムツツリー二が死んでも蘇生出来るから言いとして……これは変だよな」

「だよな、大量の鼻血はいつものことだけど、この痣とかはおかしいよね」

「そうだな。これは明らかに他者に暴行を加えられた跡だな」

姫路の相手を、興味の対象をムツツリー二の死体から姫路に向けるのめかねて、風香の元へと送り返しながらそう話す。

「つまり、これは殺人事件って事ねっ」

急に、遠子先輩がやってきて、こぶしを握り締めて言い放った。

「土屋君の無念を、私達で晴らしてあげましょう！」

……別にいいが……ってあれ！？利春とキョンってどこいったんだ？

キヨロキヨロと二人の姿を探すと、扉を開けて二人が入ってきた。

そこまで行って尋ねてみたところ、

「秀吉に言われて小道具を運ぶ手伝いをしてきていた」

らしい。キヨンの苦勞の跡が、服とかから感じれるが、その事を話のはあまりにも哀れに思えてきたので、言わないでおいてやろう。

第二十四問

さて、妙に張り切っていた遠子先輩の命で、俺達は情報収集をすることとなった。

「と、集まった情報はそんなところだな」

「分かったわ」

遠子先輩が、俺達が集めた情報を聞いて、考える。

「……………うん……………」

「見事なまでに手がかりがありませんね」

ま、心葉の言う通り、集まった情報は、『教室に居なかったからわからない。戻ったらムツツリー二が倒れていた』

しか集まってねえから、大したプラスにはならない。

「そうなのよ心葉君。これじゃ、土屋君に暴行を加えた犯人どころ

か、犯行時刻すら分らないのよ」

「……あれ？これって変じゃない？」

「どうしたの？木下さん」

優子が、何かに気付いたような声を上げて、考えていた明久が反応する。

気付いたってどこか？

「いや、だってさ、全員が『教室に居なかった』って答えたのよ？
帰ったわけでもないのに、何で皆教室に居なかったのかしら？って
思っ

て」

「なるほどな。確かにそれはおかしい。もう一度聞いてくるとしよう」

雄二が立ち上がり、須川の方まで歩いていく。

『須川、さっきの話の続きなんだが……』

『ん？ああ、それな。それはムッツリーニの
』

そんな会話を数人と交わした後、雄二が戻ってきた。

「どうだったの？」

「どうやら、ムッツリーニの秘蔵写真が風で外にばら撒かれたから、全員で取りに行っていたらしい」

遠子先輩の言葉に、雄二が全員に聞こえるようにして返す。

「……………それはおかしいな（わね）（ね）……………」

俺達が声を揃えて言うと、心葉が困惑した顔で聞いてきた。

「えっと……何がおかしいの？」

「ああ、心葉。実はな、ムッツリーニと言う男は、名前からも想像できるように、かなりのスケベなんだ」

キヨンの言葉で、ビニールシートを被せられているはずのムツリ
ーニの死体が、ピクリと動いた。

『かなりのスケベ』を否定するように、首を振ったように動いたの
で、まあ、息はあるだろう。

「で、そのムツリーニが秘蔵写真をばら撒くなんて失敗はしない
と言ったこと」

利春がキヨンの代わりに答えた言葉で、心葉は納得の表情になった。

「えっと……つまり、土屋君は、自分で秘蔵写真をばら撒いて皆を
教室から遠ざけたって事かしら？」

「そうみたいですわね、遠子先輩。でも、土屋君はなんで皆さんを教
室から遠ざけたんでしょう……？」

「姫路さんの言う通りですよ。秘蔵写真と言うからには、大切な物
なんでしょう？どうして土屋君はその大切な写真をばら撒いたんで
しょ

うか？」

姫路の疑問は、心葉も抱いていたようで、二人で聞いてくる。

「だから……えっと……」

明久が、なにか言おうとしても、ばら撒いた理由が分かわ無いのか、言葉に詰まっていた。

「はぁ……明久、愛子のことを忘れてない？」

「あつ、そうか！ムツツリーニ、話を聞きたがっていたしね！」

薫の助け舟に、明久がようやく気付いたような顔になる。

「そう、ムツツリーニは愛子に『風呂場でのシャワーの使い方を聞けなかった……！』て悔やんでたからね」

「そうだったな。ついでに、最近本名を呼ばれていないって愚痴ってたな」

「まあ、とにかく、それでムツツリーニが鼻血を出したのはいいと

して、後は犯人を見つけないと！」

明久が、気を取り直すように言って、俺達はまた考え始めた。

「……あ、清水を忘れてた」

考え始めて数分。

俺は、すっかり忘れていた清水のことを思い出した。

あの『原作』でも、アイツが結構鍵を握っていたと思うから、一番使えるだろうな。

もしかしたら、あの『原作』じゃない犯人かもしれないし、あいつに聞いたほうがいいだろ。

「……ああ、そう言えば、忘れてた」「」「」

転生組みの連中も、思い出した表情になって言った。

「ああ、そうか。清水さんならムツツリー二と同じくらいの情報通だよな」

「ああ、Fクラスにはムツツリー二が居るから俺達に縁は無いが、他では結構人気らしいぞ」

納得の表情で、明久と雄二が頷いている。

「……ただ、問題があつてな」

「そうだな、アレがある」

雄二と利春が、頷きながら話す。

「遠子先輩、ちょっと、話を聞くのに協力してもらえますか？」

「へ？優子ちゃん。どうしたの？」

「いえ、清水さんのことでちょっと……」

遠子先輩と優子が、そんな会話をする。

「ん？そういえば、島田はどうしたんだ？アイツがいれば、遠子先輩を使うことも無くうなるんだが……」

「あ、あの……美波ちゃんは、『鈍くて分かってくれない男の愚痴を語る会』で話す内容を纏めてくるって、帰っちゃいましたけど……」

姫路がそう答えると、優子が、「ああ、私も纏めておかないといけないわね」と言っていた。

……いや、なんでもないだろう。何となくイラッと来たが、気のせいだと思っしな。

「しかし、明久もなんで気付かないかね」

俺が言うと、優子、風香、遠子先輩から、『お前が言っな』的視線を向けられてしまった。

前のアザレア姫の時もそうだが、なんなんだ？明久が鈍いつてのは

事実だろ？

「ねえ、アレって何のこと？」

と、心葉が俺にそう尋ねてきた。

「まあ、なんと言っか……」

俺が言葉に詰まったので、明久たちが引き継ぐ。

「なんていうか、その……奥ゆかしい胸が好きと言っか……」

明久が言いにくそうに言って、

「男装が似合うやつと言っか……」

キョンも言いつらそうに言い、

「私はあまり分からないんだけど、……ふっ……」

優子が自分の胸を見て、どこか諦めたような声を出して、

「要するに……その……」

風香がその先を言うか言わないかを迷って結局言わず、

「「要するに、貧乳好きなレズ娘だ」」

利春と雄二がサラッと言った。

「いやぁー!!」

遠子先輩が、利春と雄二の見も蓋も無い一言に悲鳴を上げてしまった。

「絶っっ対に嫌です!! 私には、吉井君や坂本君や、雪崎君や水坂君と違って、そう言う趣味はありませんからね!!」

「「「俺（僕）にも無い!!!!」」」

「とにかく、その案は却下! なら、薫ちゃんか風祈君がやれば良い

じゃない！」

「いや、私達は……ねえ？」

「ちょっと、なんか俺達がトラウマになっちゃったようで……それは流石に止めたいと言つか……」

俺が遠子先輩の言葉に、拒否の意も込めて返すと、皆が黙ってしまった。

「……困ったわね……清水さんはその……薄い方が好きみたいだし、この場にはそんな人なんて私以外……」

「大丈夫だよ、優子。ペツタンコって訳じゃないのは良く知ってるから」

……風香よ、それは、追い討ちをかけてるようにしか見えないぞ？

一応、お前は姫路と同じく、巨乳の部類に入るんだからな？

「ま、俺はあんま胸の大小に興味はねえけどな」

どうでも良いが、風香に胸が大きい娘のことをどう思っているかをアイコンタクトで聞かれたので、返す。

俺が言うと、優子は顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。

……？アイツ、どうしたんだ？

「でも、本当にどうする………？」

利春が、悩みながらそう言う。

と、明久が何かに気付いた顔をして、

「……あ」

「どうした？明久？」

「あ、うん。雄二。あのさ………」

「？」

明久は心葉のほうを見て、一言、

「井上君ってさ、女の子みたいな顔しているよね」

第二十四問（後書き）

HAHAHA、なんてこったい。

これ書いてる間に、終わり直前でデータが吹っ飛びました。

ギリギリで書き上げられたけど、かなりやばかった……。

+なかなか感想返せなくてすいません。

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

第二十五問（前書き）

またまたクロス……。

因みに、クロスはグリモアリスです。

そして、清水が人間離れを完璧にしているよー。

第二十五問

明久の発言で、心葉を女装させて清水に接触することが決定した。

で、俺がやつてもよかったんだが、道具もないし、面白いため、遠子先輩に麻貴先輩を呼んでもらってメイクしてもらったこととなった。

「止めましょうよ！こんなの絶対無理ですって！すぐにはれちゃいますから！」

心葉が、首をブンブン振りながらそう言う。

対して、遠子先輩はと言うと、

「いいえっ大丈夫よ心葉君！実は私も、前々から心葉君には女の子の格好が似合うと思ってたの！」

「それって、僕にとって凄く嫌なカミングアウトです！今まで僕をそんな目で見てきたんですか！？できれば、そんなことは遠子先輩が卒

業するまで聞きたくありませんでした！」

「心葉君なら凄く綺麗な女の子になれると思うわ！私が保証します！」

「僕の話聞いてください！」

普通なら噛み合はずなのに、噛み合っていない会話。

自分の意思とは無関係に、マイナス方向に行きそうな行動をさせられる。

まあ、つまり。

「井上君」

「え？何、吉井君」

明久は、口論で疲れた心葉を宥めるように、たっぷりと感情を込めて言う。

「井上君って、僕と似ている気がするよ」

「……「謝れ（謝って）明久。今、お前は人として最低な悪口を言ったぞ（言ったよ）」……」

「ごめんなさい、井上君。明久君も悪気があつて言つたわけじゃないんです」

「ごめんなさいね、井上君。吉井君も、多分悪口を言おうと思つたわけじゃないようだから」

「えええ！？どうして僕と似ているって言つただけでそんなに責められるの！？」

微妙に明久と似ていることだ。

勿論、さつき俺が利春や薫たちと声を揃えて言つた通り、それは人として最低な悪口だが、不遇のところが近いって事だ。

ほぼ、バカテスの世界観のせいだろうが、不憫な男だ。

「さて、そろそろ心の準備は良いかしら、心葉君？」

麻貴先輩が、心葉の変身セットの中から何かを選びながら尋ねる。

「心の準備なんて、全然出来てません」

「そう。それじゃ、始めましょうね？」

「あの、麻貴先輩？僕の話、聞いてますか？」

「いいえ、全然」

につこりと、笑顔でそんな言葉を返す麻貴先輩。

……鬼です。

そして、二十分後。

「綺麗っ！凄く可愛いわよ、心葉君！」

「うお……っ。こりゃ凄いな……」

「井上君、本当に女の子みたいです……」

「心葉…… 本当に女子みたいだな…… 秀吉っぽい感じか？……」

「心葉、本当に似合っているな……」

「心葉よ…… まあ、モデル、頑張ってくれ……」

「井上君…… 実は女の子とか……」

「井上君、下手すると、女子よりも似合ってるわよ……」

「心葉、私よりも遥かに女子に見えるよ……」

「……それは無い……」

そこには、完璧なる女子がいた。

「……僕、今日ほど遠子先輩の後輩であることを後悔した日はありません……」

心葉が、沈んだ口調で言う。

が、それも外見にマッチしているので、より一層女子っぽさがアツプするだけだ。

「って、僕、実は女の子でもないですからね！？風香さん、変な誤解を抱かないでくださいよ！？」

が、直後に心葉が全員の発言を思い出してツツコム。

「ご注文通り胸は殆ど作らなかったけれど、これで良かったのかしらっ。」

「ああ、これくらいで丁度良いはずだ。大きいとマズいし、かと言って何もないと万が一接触した場合に疑われる場合があるから

」

言って、雄二は心葉の胸をペタペタと触って確認する。

すると、丁度そのタイミングで

「.....」

霧島が、教室の前を通りかかった。

「.....」

「.....」

心葉（女子ver.）の胸に手を当てたままの姿勢で固まる雄二と、それを冷やかな目で見下ろしている霧島の様子が、とても印象的だった。

た。

「俺.....この折檻を無事に切り抜けられたら、白くて大きな犬を飼おうと思うんだ」

雄二が、死亡フラグの塊であるようなセリフを虚ろな目で呟く。

「……坂本雄二、集合」

「行つて来ます!!（ビッ）」

「「「「「「「「健闘を祈る!!!!!!!!（ビッ）」「「「「「「「

「」

雄二の敬礼に全員で返し、あいつの勇姿を見守った。

……生きて戻れよ、雄二……!!

雄二の姿が消えて、ドアが閉まる。

とても言語には出来ないような音と、勿論映像ではR85にでもなりそうな映像が、扉を透かして俺達には見えたが、一瞬で能力発動を止

めた。

俺達が能力を切ってすぐに聞こえてきた、『あ、無理。これ、絶対死んだわ』と言う、妙に冷静な声が惨劇を物語っていた……。

と、ガラツと扉が開いて、秀吉が教室へと入ってきた。

「ゆ、雄二が、凄い勢いで暴行を受けておったのじゃが……どうしたのじゃ？」

あの惨状を目の当たりにしたようで、声が少し震えている。

「まあ、今回は……誤解を招くような場面を見られたんだ。多分、後で復活するだろうけど」

「それより、秀吉はどうしてこんな所に？」

分かっているだろうに、利春が秀吉に尋ねる。

「うむ。演劇部で使う為に机やら椅子を持っていくのを手伝ってもらっていたんじゃが、椅子が一つ足りなくてのう。それを運びに来たの

じゃ」

教室内を見回す秀吉。

と、遠子先輩と麻貴先輩と心葉（女装）に、初めて気がついた。

「んむ？おお、前に姉上に紹介された先輩じゃったか」

「あら？ああ、秀吉ちゃんね」

「ワシはちゃんではないのじゃが……」

遠子先輩が納得したように手を叩くと、秀吉は渋い顔で否定した。

「さ、秀吉？椅子があつたなら、さっさと演劇部に戻りなさい……」
「？」

「あ、姉上！？何故そんなに殺気だっておるのじゃ！？ワシが何かしたかのう！？」

殺気がビシビシと感じられる口調で、優子が秀吉にそう言う。

……秀吉の命も、無いかなあ……。

秀吉は、微かに震えながら椅子を持ってスタスタと出て行った。

「それじゃ、心葉君の艶姿も拝めたい、あたしはそろそろ戻るわ」

「すみません、遠子先輩の我儘のせいでこんなことまでさせちゃって」

「別にいいわ。愛する遠子の頼みだし。それに　心葉君も良いモデルになりそうだって分かったし」

「えええっ！？嫌ですよ！？僕はモデルになんてなりませんからね！？」

「じゃあ、またね。遠子、心葉ちゃん、文月学園の皆さん」

「ちゃんじゃないですー！！！」

心葉の心の底から響くような叫びも無視して、麻貴先輩は歩いていってしまった。

「痛てててててっ！姫路さん、痛いって！何で怒っているの！？」

「知りませんっ。遠子先輩、心葉君、行きましょう！」

明久が、麻貴先輩の後姿をじっと見ていると、ムツとした顔の姫路が頬を引っ張っていた。

「そうね。グズグズしていると皆が帰っちゃうわ。行くわよ心葉君！」

「あ、ちょっと！僕は嫌ですからね！こんな格好で出歩くななんてわああっ！引っ張らないでください！」

「ま、待ってよ！僕も行くから！」

嫌がる心葉の腕を遠子先輩が抱えて、姫路の先導の元、俺達はDクラスに向かった。

ピロピロピロ。

「……………む？メールか」

と、俺のケータイに届いたメールは、以前メルアドを教えられた清水からの物で、本文には、

【Dクラスの横の階段で待っています。そっちに来て下さい】

との内容だった。

……………？何で知って

俺は、ケータイを使って誓護に連絡を取り、その後プルフリッヒの振り子を作って、アコニットに通信する。

【……………人間が、なんで通信できるのかも聞きたいけれど、何の用かしら？】

【まあ、そう言うな。そこに居る誓護から話は聞いてるだろ？アザレアに連絡を繋げてくれ】

【……………まあ、良いわ。誓護も、信用できる親友だって言ってるしね】

どうやら、アレから数度メールや電話でやり取りをするうちに、親友までいけたらしい。

まあ、それはそうとして、

【んじゃあ、宜しく頼む】

【ええ、少し待っていて……】

そこで、アコニットとの通信は切れた。

その直後に、誰かからの通信が来た。

……アコニットかアザレア姫か？

【よう、風祈】

【……何のようですか、オドラさん】

【キングだ。俺様のことはキングと呼べ。畏怖と畏敬を込めてな

と、普段なら言うところだが、俺様はその全てを知っている
お前

に興味がある。別に、キングじゃなくてもいいぞ】

【ま、それはキングで良いとして、何のようだ？】

【いやな、俺様は恐らく、どう足掻いてもお前に勝てないだろう？
お前のことを姉上に聞かれてそう答えたら、だったら一度コテンパ
ンに

やられてこいと殴られてな】

【……それは、俺とキングで勝負をしろと？】

【まあ、そんなところだ。いくら俺様が喧嘩慣れしていても、お前
には勝てないだろうから、お手柔らかに頼むぜ？】

【そもそも、嫌なんだが……。まあ、考えとく】

【つとエクレールがこっちを睨んでいるから、もう通信は止めさ
せてもらっぞ？それじゃあな】

【ああ、エクレールと幸せに】

【げほっ！？お、お前、言うじゃねえか……】

それで、キングの通信は切った。

そこから数分して、アザレア姫からの通信が入る。

【……なんのようでした？私は、あのペド野郎と違って、忙しいんですのよ？】

【いや、まあ、な。お前……清水に何かしたか？】

【ああ、そう言えば、私も驚いたのですけれど、彼女は本当に人間なのでして？】

【……お前の話から、大体予想が出来るが、清水が人間なのかって聞かれると……『多分』人間だな】

【まあ、そうでしょうね。なにせ彼女、私の『テリゲナシス悟りの毒』を、劣化版とはいえ使えているんですもの。範囲は……そのの

二年校舎一つ分つて所ですわね。縦幅はかなり小さいですわよ】

【……そうか。やっぱり、予想はしていたが、覚えたんだな。ア
イツはアイツで、『始原の書』^{イグニス}の炎的な物を受けたんじゃないね

えのか？】

【洒落にならないことを言わないでくださいまし。まあ、興味が出てきましたから、たまに私に通信することも、やぶさかではありません

わよ？】

【あっはっは、ご冗談を。ああ、そうだ。アカロシアとの繋がり、おめでとう】

【……なんで知ってますの？】

【さっきオドラが通信してきて、カマをかけたら引つかかった】

【まあ、良いですわ。それに、エクレールも、婚約決定しているのに、いまだに私の衛士^{スクード}を続けているんですわよ。ずっと――

緒に居れば良いと言つのに……】

【ハイハイ、あいつが可愛いのはわかったから、愚痴言わない、愚痴。それじゃ、まあ、なんかあったら連絡するさ】

【ただし、多忙のときに連絡は答えられないので、そのときはしっかり理解して貰いますわよ？あ、ついでに言いますと、彼女、時折人間

離れることがありまして、その時は完全に使いこなしていたんですのよ】

【……ああ、それは……分かる。むしろ、お前と清水が接触した時点で、使いそうだなーぐらいは思っていたしな】

【まあ、人間が使っているのも危なそうなので、使い始めたら貴方が止めてくださいまし】

【あいよ。んじゃあ、まあ、ガンバ】

【……貴方に応援されるまでも無く、最初から全力ですわよ】

そこで、アザレア姫との会話も終わった。

「……清水……お前、ドンドン人間離れしてないか？」

空中に呟くと、清水はメールで、

【人間離れって言いました？】

と返してきた。

どうやら、劣化版なだけあって、声は聞こえるとき時と来ないときがあるらしい。

第二十五問（後書き）

清水さん……。

あなたはどこまで行くのですか……？

まあ、私が突っ走らせるんですけどね。

とまあ、無駄に長い今回の話、どうでしたかね。

クロスがかなり多いこの作品ですが、此処まで見てからには、もう最後まで見てやるぜー！って感じで皆さんが見てくださると最高です。

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

第二十六問

「何でも聞いて下さい」

「あ、あの、清水さん、だっけ？顔が近いんだけど……」

「美春、で結構です。心場お姉様」

清水は心葉の姿を見るなり、凄い勢いで食いついた。

……つつても、『デリゲナシス悟りの毒』で見てたと思うんだが……。

まあ、実際に触れるのも良いと思ったのかもしれないな。

「み、美春さん？君は確か、島田さんのことが好きだったんじゃないの？」

「……お姉様は、良いんですっ」

言って、清水は頬を膨らませて拗ねた顔を作った。

あー。なるほど。

「美春と言つものがありながら、他の女の子と浮気をするなんて、お姉さまは裏切り者です。だから、別にいいんですっ!!」

やっぱり、あのことが不満だったらしい。

琴吹と島田が話している光景でも、見えたって所か？

「心葉く　　じゃなくて、コノハちゃん。とりあえず、聞くことだけ先に聞いておかないと」

風香が心葉にそう言う。

「そ、そうだね。美春さん。ちょっと良い？」

「はい」

「Fクラスにの土屋君って居るでしょう?」

「いません。この世界の男は、風祈様しか居ません」

まさか範囲が拡大しているとは思わなかった。

因みに、薫と秀吉は男の分類ではない。

「やれやれ、そっちがそう言う構えなら、こっちももう此処には用は無いな。どうやら清水は何も知らないようだから、もう此処には用は

無いな。他の」

「文月学園二年F組土屋康太、通称ムツリーニ。身長162?体重48kg、得意科目は保健体育で、苦手科目はそれ以外の全て。俊敏な

動きやその卓越した情報収集能力を生かして、自らの性的探究心を満たさんと行動する男がどうかしましたか？」

「ああ、うん。美春さん、詳しいね……」

「お姉さまのためなら、美春の全ては通常の二千倍に活性化します」

最早誇張と笑えないところが怖いな。

「その土屋君なんだけど、今日の放課後、彼が襲われたんだ。そのときに彼が誰にやられたのかわからないかな？」

心葉が尋ねると、清水は少し考える素振りを見せた。

「清水、何も分からないんなら良いんだ。とりあえず、今回の埋め合わせとしてお前と趣味が合う男を一日貸すから」

言って、俺は利春を前に出す。

俺が言っのを遮った意味をしっかりと受け取ってくれたのか、清水は、

「分かりました。そう言うことなら、これで」

と返ってきてくれた。

とりあえず、利春の制御（いや……この二人を一緒にさせたら、どっちも暴走するか？）はコイツに任せる（押し付けるとも言う）として、そ

ろそろ面倒くさくなってきたこの茶番に終止符でも打つとするか。

「んじゃあ、情報提供サンキューな。暴走させないようにしろよ?」

「あ、最後に一つだけ!……いえ、風祈様。後で少し気になる物を見つけたので、メールで送りますわ」

清水がそう言って、俺達は清水の前を後にした。

……いや、アイツがもし暴走したら、アーマメント麗血開花せんとも限らんしな。

そんなことになったら……危険すぎるな。ホントに。

……が、なんだ? 気になるものって……?

「さて、お前等、犯人が分かったか?」

キヨンが、そう全員の顔を見回して言う。

「まだ分からないわよ」

優子が、そう返すが、そこでキョンは息を吸って、

「ヒントはな」

「……これはFクラスで起こったんだ。そして、ムツリーニは工藤愛子と話していたんだよ」

俺、薫、風香、利春でキョンのセリフを横取りしつつ全員に言う。

「へ……？それが何……」

「あっそつか！そう言うことだったのね！」

「なるほど、考えてみれば、簡単に分かりそうな話だな」

「……えっと、どういふこと？」

俺達の言葉で、優子と雄二は犯人が分かったようだが、明久は分か
つてないようだった。

「はあ……明久。Fクラスといえば、代表的に上げられる組織は何
だ？」

「え？ 異端審問会だよね？」

「なら、異端審問の対象は何だ？」

「へ？ 対象……あつ！」

明久がやっと気付いたようだ。

が、心葉と遠子先輩は流石に理解できないようで、首をかしげている。

「なら、心葉君に、遠子先輩。Fクラスと言えば、嫉妬深い、女子
と良い感じになるのを許さない。この二つなんです」

「……？ つまり、どういうこと？」

「あつなるほど！つまり、ムッツリー二君と工藤さんが一緒に話しているのを見たから、Fクラスの子に殴られたのね！」

「違います」

俺が遠子先輩が自信満々で言った言葉を否定すると、遠子先輩は涙目になってしまった。

「あー、なんと言いますかね……半分正解です」

「半分？どう言う事？」

心葉が首を傾げて聞いてくる。

「ま、それはFクラスの前でやるとしようか」

利春が言って、俺達はまず、Fクラスの連中の注目を教卓側に集める事を開始した。

「あ、心葉、さっきの制服、また貸してくれるか？」

「へ？なんに使うの？」

「着る」

「着るの！？え！？風祈君、そんな趣味だったの！？」

「違うわっ！着るのは女子じゃなくて一番似合う奴だわ！」

「へ？……吉井君？それとも、水坂君？」

「どっちでもねえよ。いや、さっきのお前よりも、女子っぽく見える奴さ」

「皆ー。ちょっと、こっち注目ー」

薫が、Fクラス生徒全員の前でそう言う。

「ああ、着るのって、薫君だったんだ」

「違うぞ、薫ちゃんだ」

「私はちゃんじゃないからね!？」『今は』が抜けてるよ!？」

「にしても、薫は見事に似合うな。他校の制服なのに」

そう、今、薫は聖条学園の女子制服を着ている。

さつき心葉から貰ったやつだ。

『お、なんだなんだ?』

『あそこの二人の女子、確か聖条学園の生徒じゃないか?』

『本当だな。何のようだ?』

『あの生徒、薫に似てないか?』

『確かに似ているが……偶然って凄いな』

『まあなんにせよ、正座するか』

『そうだな。正座だ』

とまあ、これが、Fクラス連中の評価である。

これが薫と分かんとは……さすがFクラス……。

「えっと……風祈君。土屋君をいじめた犯人って、誰なんですか？」

「ん？ああ、姫路。それはさっさと分かるぞ。ただな……」

「えっ……それって良いんですか……？」

「問題ない。そもそも、アレな奴らばっかだ」

姫路に耳打ちして、同じような内容を遠子先輩、優子、心葉にも言っておく。

因みに、心葉は今の一瞬で女装姿に再び戻した。

「さて、今俺達は、ムツツリーニ暴行を加えた奴を探している」

キョンが、不憫なくせによく通る声でそう言う。

「一応言っておこう、女子は、潔い男子を好むらしい。さらに、今名乗り出れば、その五人の女子から貰えるぞ？ 後から言うのは無しだ

がな」

『『『俺がやりました!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』』』

「『『『『『潔い方々ですねえ!?』』』』』」

まさか、これだけで一斉に反応するとは思わなかった……。

「ま、それじゃ 女子五人による、ビンタを与えよう」

俺が言うと、Fクラスの連中は歓声を上げた。

……そういえば、清水の気になるものって何だ？

気になりつつメールを開くと、清水からのメールが届いていた。

そこに書かれていたものは

「……そりゃ、アイツの样子がおかしいってのは分かってるけどな。
……嫌な予感が当たっちゃったかも知れねえな」

俺は、一週間ほど前に見たニュースを思い出し、今の清水の情報を照らし合わせると、ニュースを見て思った俺の『直感』とでも言うよう

な物を少し恨めしく思った。

【差出人：清水美春】

【件名：先ほど言った気になるもの】

【先ほど言った、気になるもののデータです。恐らく、彼女は言っていないでしょうから、送って置きますわ。

それと、彼女、このデータを見ても分かるように、何か様子が変わっているんですよ。

風祈様も、ご自身の気持ちにゆっくり向き合ってみてください。きっと、大丈夫ですから】

付属データが一件あります。

【補給試験、結果。

受験者、木下優子。

得点：全教科50点以下】

番外編五 俺と優子とホントの気持ち

……少し前から、優子の様子がおかしい事には気づいていた。

が、なぜ優子の様子がおかしいのかが、寝ても覚めても考える

それを文字通りしているかのように考えてみても、原因が見つから

なかった。

勿論、俺や薫、風香などに落ち度があったのかもしれないし、優子はAクラスなので無いとは思いつし、秀吉はFクラスなので、俺達が見て

いる。

むしろ、俺達はキレさせたら恐ろしいと言う、まあ……事実なんだが、不本意な噂が広まっているので、あいつ等がいじめにあうことは無

いだろう。

なら、なぜ優子の様子がおかしいのか？

それは、一週間前に見た、飛行機テロの件が関係していた。

今回は、そんな話

「……これは……誰にも言わない方がよさそうだな」

俺は、心葉たちに頭を下げた後、少し学園長に用がある。と言って
皆と別れた。

清水が言わなかったということは、他の連中には聞かれない方が良
い物なのだろう。と睨んで分かれたのだが、どうやら正解だったら
しい

。

気になっていたので小走りになって移動し、ムッツリーニのカメラ
からでも死角になるところでメールを見た。

そのメールについていたデータを送ってくれた清水には感謝する。

なぜなら、それが無ければ、俺は自分の思い過ごしか。とても言うて、考えることを止めたかもしれないからだ。

流石に、それは無いとは思うが、優子の様子が変わったというのは、普通の人間から見ればあまり分らないことだろう。

まずは、一週間ほど前から『伝説の木の下で貴様を待つ』なる乙女小説を、新刊が二、三巻あるのに呼んでいないだとか、

たまに妙に落ち着かなくなる（ニュース番組などを見るときは、逃げるようにいなくなってしまう場合もある）とか、

秀吉と二人きりになるのを避けている時があるとか、

そのくせ、寝るときまでそわそわしていて、たまに寝れてない（これは流石に見かねて、三日目ぐらいからは俺が優子の部屋の前で扉に寄り

かかりながら寝ている）とか、

とまあ、上げればキリが無いような他愛の無いことだが、おかしい

のは確かだ。

薫も風香も、勿論秀吉も今のところは気付いていないようだが、さすがに一ヶ月、二ヶ月、と続いていけば気付くだろう。

あまり大勢で踏み込まない方が良さそうな事だし、理由を把握しないで踏み込むのは止めた方が良くに決まっている。

ただ、優子だって最早俺の家族だ。

家族が微妙におかしいんだったら、心配するのは当たり前だろ？

第一、俺は前の世界（か？）では親が居なかったし、実を言えば風香だって本当の兄妹じゃない。

俺と薫と風香は、それぞれ遺伝子的には同じところもあるだろう。

ただ、俺と薫は双子だが、実は風香は親戚の子供だ。

と言っても、俺達がまだ生後五ヶ月ぐらいの時に親戚が交通事故で亡くなって家にやってきたらしいから、三つ子と言っても良いとは思う

。

この事が書かれた手紙を見つけたのは中学に入っすぐ、家の掃除をしていて押入れの奥から見つけた。

俺達の両親は飛行機テロで死んだのだが、まあ、良くあるだろ？

小学生ぐらいの子供が両親の死を聞かされても、意味が理解できていないって思われることって、漫画やゲームでだって結構ある。

実際、俺はそれを妙に冷めた心で聞いていたが、まあ、莫大な遺産を狙っていたやつらの養子に行く気も無かったし、

何より、俺は親族でも近しい奴しか信用しない。

両親が莫大な遺産を残したって言うのもあるかもしれないが、結局は血の繋がっていない親が居ると、薫や風香が虐待やらなんやら……ま

あ、何されるか分からんってのが大部分を占めるだろう。

親族だって、俺達の親が死んだら居なくなっただ訳だしな。

まあつまり、家族の繋がりが薄かった俺としては、家族を助ける、大事にするってのは当たり前ってことだ。

持ちつ持たれつ、それも、家族っぽいだろ？

つと、話がそれたな。

まあ、結局、俺が言いたいのは、もう少し優子に頼ってもらいたいってことだな。

肉体労働的な事だけじゃなく、悩み相談をされるぐらい、信用されていたってのが俺の本音だ。

ま、異性だし、心の底から信用できないのかもしれないが、まあ、出来ればそこまで信用して貰いたいって思うことはないか？

例えば、仲の良い友人、またはあまり面識の無いクラスメイトなどが居たとする。

もしもそいつに、ディープな悩み相談をされたら、大した事が言えないと分かっているのに、つつい嬉しくなるって事もあるだろう？

それはつまり、そいつから信用されているって事だ。

なら、兄弟の居る人には分かるかも知れないが、兄でも姉でも、弟でも妹でも、頼られたいと思うことってあるだろう？

それを過度に高めた感情が、俺が抱いている感情さ。

要は、寂しいってことだな。

話を元に戻そう。

まず、俺が偶然見たチャンネルでのニュースは、

『飛行機テロが起こり、飛行機の墜落は阻止した物の、日本に子供を残して外国に働きに出ていた日本人夫婦が、原形を止めないほどにぐちゃぐちゃになって犯人と共に亡くなった』と言うものだった。

どうやら犯人が壁に取り付けようとした爆弾をその夫婦が取ろうともがいているときに、うっかり飛行機テロが爆弾のスイッチを押して爆発させてしまったらしい。

当然、飛行機の機体を吹っ飛ばすほどの力を持った爆弾を至近距離で爆発されれば、原形を止めずにぐちゃぐちゃになる。

むしろ、消し飛ばなかっただけでも凄いと思われる。

ただ、俺は自称神から後付的に貰った能力で、蘇生が出来る。

が、肉体の損傷が激しいと無理だ。

少し前に名前が載っていた気がするんだが……なんだったか……。

そんな疑問を、少し前までの俺は思っていた。

が、先ほど清水から貰ったデータからも分かるとおり、優子がおかしいのは一目瞭然だ。

そして、優子の様子がおかしくなったのはそのニュースが最初に報道されて以来。

更には飛行機を妙に嫌がることや、たまに泣いているときまであるのだから、関連性ぐらい察せれて当然だ。

まだ、何があったのかは想像できていなかった時とは違う。

清水に感謝を抱きながら、俺はまず、自分の気持ちに向き合ってみる。

どう言う意味かは分らんが、清水が向き合ってみると言うんでな。

.....

「.....優子を探すか。学校に居なかったら、家以外のどこかに来て貰おう」

俺は、最近すっかりお馴染みになってきた『^{テリ}悟りの毒^{グナシス}』で周囲を見回す。

勿論、俺のほうは完全版だ。

「.....お、まだ学校に残ってたか。適当に言って、あいつらと帰るのを避けたか？」

優子は、Fクラスの教室で座り込んでいた。

須川たちが異端審問に使うスペースがない。との理由で、上質な畳の上に机などが置かれた場所を作ったのだが、その端っこで体操座り

をしていた。

……アイツは、女子だからそんなことしない方が言いと思うんだが……。

つと、忘れるところだった。

「……………これで良し」

俺は清水宛に、感謝のメールを送った。

実際、アイツのメールがなければ、優子の異常に確信が持てなかったからな。

それに

俺は夕焼けに照らされたFクラスの前まで来ていた。

未だに優子は教室内で座り込んでいた。

俺は此処まで来て入るかどうか迷ったが、今言っておかないといずれ決心が鈍るだろう。

だから、俺は扉をゆっくり開けて中に入る。

「……優子」

「……あ、風祈。何？どうしたの？」

俺を見ると、優子はいつもと変わらない顔で俺に答えてくれた。

普段なら心配ないんだが、さっきの光景を見るとどうもな……。

「いや、優子。無理しなくて良い」

「無理？なんの事？」

優子は平然と聞き返してくる。

また、鈍る。

ここで自分が優子が隠している事を言うのは間違いなのかもしれない。

だが、俺は頭を振ってそんな考えを捨てる。

……「一々考えるのは俺の悪い癖だな。」

「…………飛行機テロ」

「っ！！」

俺の言葉に、優子は一瞬言葉に詰まって、そして

ポロポロと泣き出した。

「別に、そのことを俺達に言っただって良いだろ？なんでそんなに溜め込んでんだ？俺達が頼れなくても、秀吉ぐらいなら頼れるだろ？」

自分で言っていて少し傷つきながら、俺は優子の後ろに廻って肩に手を置きながら言う。

「だって……仕方無いじゃない……。いくら双子でも……私のほうが……上なんだから、弟を……傷つけないようにするのは当たり前でし

よ……？」

優子が、嗚咽を漏らしながらそう言う。

「だったら

」

俺が抱く感情を、俺自身で理解できていなかったことに、内心笑いそうになる。

そりゃ、寝ても覚めても考えるっていうか、心配するってのは家族
って認識しているのかと思っていたが、どうもそれだけじゃないら
しい

。

つまり、もっと大半を占める感情があったわけだ。

そう。俺はコイツに

「だったら、俺がお前のそばにずっと居てやるよ。それで、いつも
の調子を取り戻してくれや」

「……え？何それ……。プロポーズ？」

優子が顔を真っ赤に染めているのが後ろからでも分かる。

「どう受け取ってもらっても構わないぜ？まあ、ちょっとアレなセ
リフだが」

「？」

俺は、こんなセリフを言おうとしている自分に笑いそうになりながら、

「俺と一緒に……ずっと一緒に生きてくれ。優子」

「……………うん」

「ま。つっても、不死身にじゃねえが……なんなら、来世でも一緒に生きようじゃねえか？一生一緒に居て、守ってやるよ」

「……………うん」

コクリと、優子はか細い声を出して頷いた。

「サンキューな。そんじゃま、帰るか、優子！」

俺はポン。と優子の頭に手を置いてから優子の手を掴んで教室を飛び出す。

流石に遅い時間なので、校内には生徒の影が全く無かった。

「……ねえ、風祈……」

「ん？なんだ？優子」

優子は走りながらも顔をまた赤く染めて、

「……いつまで手、繋いでいるの？」

「ハッ。そんなの」

我ながら、バカップルっぽいので言っのを恥ずかしいが

「一生、に決まってるだろ？」

「……コホン。じゃあ、さっきのアレも嘘だったら」

「何言ってるんだ。俺は雄二と違って、逃げ回ったりはしねえぞ？」

今はまだ、結婚しなかったって良い。そもそも出来ないしな。

だが、それでも

「一生、俺がそばに居て守ってやるよ」

「嘘だったら、許さないからね！」

俺達は、夕日が照らす校舎を走りながら、そんな会話をしたのだった。

〳数日後〵

「あれ？どうしたの優子。何か機嫌がいいわね？」

「え？そう？だって、私の恋は成就したからさ」

「ええっ！優子、もう成就したの！？」

「まあそれでも、あんまり今までの関係と変わってないけどね」

「それじゃ、もうこっちは来てくれないわよね」

「私は来るわよ？二人のサポートをしてあげないとね。私だけ抜けるのも忍びないし」

「「優子……」」

「そんな感謝の瞳を向けられても……」

第二十七問

さて、まあ、いろいろあつて俺と優子は付き合うこととなった訳だが、まあ、関係は大して変わらない。

変わったことは、距離が縮まった事ぐらいか？

優子もいつも通りに戻ったし、何故か風香が良かったね。とか言っていたのがあったが、別に他の奴らの距離感が変わったわけでもない。

で、今日は文月学園に天栗浜高校階段部が来る日だ。

天栗浜高校階段部が来ると言っても、桔梗院のメンバー＋ も少し含むが、まあ他に用もないし、無駄にバスケ部とかが来るより良い。

なんでも、以前佐藤が言っていた時に、階段部が下見に来ていたらしいのだが、優子を探すのに必死で全く気付かなかった。（……いや、す

でに帰っただけか）

で、なんで階段部が来るかというと、ババアが階段部の噂を聞いて、

面白そうだったから呼んだらしい。

対戦らしいが、当然、普通のやつらはやろうと思わないだろう。

ならばやるのはタフで扱いやすい奴ら
つまり、俺達対階段部の対決と言う訳だ。

「よし、んじゃ、行くか」

俺達はカバンを持って、文月学園まで登校した。

「……なるほど、こんなところか」

俺はFクラスに着くなり、スネークに今日の日程を確認させてもらった。

今日は全学年で校舎を掃除するようので、様々なところに人がいるらしい。

……階段レースの醍醐味ってか？

「風祈、階段レースって、どんななの？」

「明久、昨日も言っただろ？俺達がやるのはラリー……指定数の階段の上り下りとチャックポイントを回ってゴールに戻るレースさ」

明久が俺に尋ねてきたので、返してやる。

昨日も覚え切れているのか心配だったが、やっぱり覚えきれてなかったか。

「で、手すりに触れてもいけないってルールが、階段レース」

利春が補足説明をする。

「しかし、向こうの学校は良くOKを出しているよな。結構危険だろ？」

「それに関してはいろいろとあって、非公認なのに認められた部活みたいだよ」

雄二の問いに薫が返す。

「ただし、俺達にはアドバンテージがほぼ無い。以前下見に来てい
るから、地形は向こうも知っているだろう」

キヨンがそう言うのと、明久は首を傾げて、

「あれ？でもさ、一回見ただけで覚えられるの？」

「それに関しては、向こうに天才ラインメーカーがいるから何回で
も見れるはずだ。むしろ問題なのは、向こうが階段掃除をしたとい
うこと」

とだな」

俺が言うと、今度は雄二も首をかしげ、

「？それがなんで問題になるんだ？」

「あー、それはな。雄二。生徒が使ってたら、階段に凹みやらが出
来るだろ？それを見られると、技に利用されるんだよ」

「で、私達のほうは階段掃除なんかしてないから、凹みとかが分からないって訳」

俺と風香で言うと、雄二と明久は納得したようだった。

「ま、危険人物は、寺城先輩と九重先輩、それに階段部最強の刈谷先輩と、波佐間勝一、一年の神庭幸弘だな」

「とりあえず、そこから四人は俺達が相手をして、初心者のお前等が残りを相手してくれ」

俺が屈伸しながら言うと、全員は頷いてくれた。

「始めましてっ、部長の九重ゆうこよ！」

「ああ、始めまして。Fクラス代表の坂本です」

雄二と九重先輩が向かい合って挨拶をする。

「早速だけど、私達は負けないからねっ！勝って、文月学園にも階段部を作ってやるんだからっ！」

「落ち着けゆうこ。……すまない、こいつはいつもこうなんだ、許してやってくれ」

刈谷先輩が雄二の手を掴んで宣言した九重先輩の頭を抑えながら雄二に言う。

「いえ……特に何もされてませんから」

雄二は引きつった笑みで刈谷先輩に返す。

「それじゃあ、人に接触したらその時点で失格だから、ぶつかるなよ？」

「それと、ほら、三枝先輩から貰った発信機。これを体に付けといてくれ」

利春が発信機を全員に配り、チャックポイントなどが小夏先生から

教えられる。

『チェックポイントは、一年Fクラス、購買、学園長室、生徒指導室。この四つの部屋の扉を必ず触って、上り五、下り七をこなすこと。』

尚、触る順番は問わない』

初心者の方に、少し簡単にしてあるルール。

因みに、今いるのは、文月学園が俺、優子、薫、風香、利春、キヨ
ン、秀吉、明久、雄二、ムツリーニ、霧島、工藤、清水、佐藤。

階段部が、幸弘、井筒、三枝、九重先輩、刈谷先輩、泉、美冬、波
佐間、水戸野、寺城先輩、慎、填島（妹）だ。

因みに、慎とはシスコンの点で意見が一致したので、一気に仲が良
くなったと言って置こう。

そして、小夏先生が、一戦目。と書かれたカードを上にする。

……さて、誰だ？

「俺が出るぜ」

……向こうは井筒か。

「……んなら、こっちは」

言って、残りメンバーを見回す。

『月光ダンシングステップ』に勝てるのは……

「バカだな。明久、頼むぞ」

「うん。分かったよ風祈 って、今僕をバカ呼ばわりしたよね!？」

「明久、事実なんだからしょうがないだろ」

「お前が言っただけだよ! 僕はちよつと勉強が出来なくて、頭が悪くて、テストで良い点が取れないだけだよ!」

「明久よ、世間様ではそれをバカと呼ぶのじゃぞ？」

……うん。まあ……勝てると思う。………多分。

「よっしゃあ！」

……うん。まあ、そりゃそうだよな。

「さて、棄て試合は軽く流して、二回戦を始めるか」

「風祈！さては貴様、僕が負けると思っていたな！」

「当たり前だろ、人がたくさんいる方に行つといて、風祈じゃなくても負けたと思うだろ？」

利春が冷静にツツコム。

まあ、俺の人選ミスのような気がしないでもないが……今の時間は

人通りが多かったからな

「次は私が出ます」

「それなら、私が出るわ」

泉と、風香が前に出る。

「二回戦は、ショットレースよっ」

「ゆうこ、それは相手に不利だろう」

九重先輩がそう言い、刈谷先輩が止める。

「良いですよ。そっちのが良いですし」

俺はその提案に乗り、屈伸などの柔軟体操を始める。

黒翼の天使対……ってか？

『用意……』

小夏先生が、そう書かれたプラカードを上げる。

私……霧沢風香は、走る姿勢を整えながら、隣にいる泉を見た。

彼女は、ジャンプ力が高くて人並み外れて高い。そして私も、まあ、人並み外れて高い。

彼女が出るようにあわせて出た理由は、単純に私が勝負をしたかったから。

昔からジャンプ力が高かったけど、黒翼の天使に勝てるかって言うのは分からないから（しかも、前の中学では、生徒会長をやっていたせい

で階段レースのようなことも出来なかったし）、以前階段部が来ると言う話を聞いてガラにも無く戦おうと思ったのだ。

パーン

と、小夏先生が持っていた陸上などで使う銃が音を鳴らす。

その音が聞こえると同時に、私達は階段へと走り出す。

私は二段飛ばしで階段を上っていき、踊り場で足を捻って反転。

これでタイムロスを極力減らして上げれる。

感覚的には、今ので階段二段分ほど離れたみたいだ。

二階に上りきる直前で、向こうから歩いてくる生徒を見つけた。

「すみません」

私は短くそう告げて、もう一度足を捻って反転。

「泉相手に差が五段か……」

刈谷先輩が、光点を見て言う。

「ええ、こりゃ、うちの二連勝かな」

三枝が、勝ち誇ったような調子で言う。

「ねえ、風祈。風香……勝てるの？」

俺は優子の問いにニヤリと笑って、全員に聞こえるように、

「風香を、俺の妹を甘く見ないほうがいいですよ」

「……ふっ」

屋上の扉を触って、その反動でバックステップで階段まで向かう。

行く直前に泉が驚いた顔をしていたのが見えただけ、一発で引き離すためにはこれが一番速い。

一段一段降りていつている途中で、泉が壁を蹴って飛んだけれど、それは予想の範疇だ。

降りながら下のほうを見る。

……人は無し。泉は今三階。足をかけるところは……。

ダンツと残り半分の階段を六段づつ飛び、着地した瞬間壁を蹴って反転せずに移動。

もう一度ダンツと踏み切り、大体の当たりを付けた場所に飛ぶ。

また壁を蹴り、今度は泉に追いつく。

……勝負は次の一階か……。

私はあえて泉を先に行かせる。

そして、筋肉が飛ばうと動いた瞬間、私も泉の方へと体を動かす。

「……ふっ」

もう一度短く息を吐き、階段ではなく、壁に向かって飛び

そこから踊り場の淵ギリギリまで飛んで、泉を抜き去る。

そして、着地の瞬間にまた壁を蹴って、もう一度飛ぶ。

これで、一勝。

自分でも通用することが分かったので、まあ、収穫だろう。

「お疲れ、風香」

優子が私にタオルをかけてくれた。

見ると、私も泉も汗びっしょりだった。

階段を飛ぶのは、思ったよりも疲れるらしい。

「お疲れ、『銀翼の天使』さん？」

薫が茶化すような感じで言う。

恐らく銀翼の天使とは、私のロングストレートが泉のように翼に見えたから、黒翼の天使にあわせてそう言ったのだろう。

「す、すごいわ！泉ちゃんに勝つなんて！これはもう、階段部に入れるしかないようね」

九重先輩が鼻息も荒く言う。

そんな彼女を、刈谷先輩が押し止めていた。

「んじゃ、三回戦。誰が出る？」

風祈が呟くと、向こうも次に出る相手が決まったようで、前に出てきた。

「あー、なら、刈谷先輩と幸弘、俺と薫で二体二の対決にしませんか？」

風祈が提案すると、小夏先生がグツと親指を突き出した。

「……なんかOKらしいので、それで良いです」

幸弘君が前に出て、そう返す。

それを聞いて風祈は、バキバキと首を鳴らしたり、屈伸やらをまた始めて、体の動作確認でもするかのようにしていた。

「さて、それじゃ」

「三、四回戦、始めましょうか？」

風祈と薫はそう宣言したのだった。

第二十七問（後書き）

コラボアンソロジの方、これで最後ですので、最後までお付き合いください。

……駄文ですが。

……さて、どうでもいい近況報告を一つ、

最近、PCで小説を書いていると、突然PCが消えてデータが吹っ飛びます。

これを書いてる最中、二回連続でデータが飛びました。……泣ける。

さて、そんなバカとテストと介入者、略称バカ介（候）を、次回も宜しく願います。

第二十八問（前書き）

今回は書いたら予想以上に長くなったので、二話に分けて。

続きは次回更新します。いわば禁書目録の二十一巻。

第二十八問

「用意……」

風香がそう言って、

俺達はそれに合わせて姿勢を落とす。視線は階段の踊り場だ。

「始めっ！」

風香のその言葉が聞こえると同時に、俺達は走り出した。

俺の前には刈谷先輩。後ろには幸弘だ。

薫は小柄な身長なので、流石に長身の俺達と同じ速度で上がること
はできない。

「よっ」

俺は踊り場まで行くと、すぐに反転し、姿勢を落として薫を待つ。

すぐに幸弘に抜かれたが、まあ問題は無い。

と、そこからすぐに薫が踊り場まで来た。

「行くぞ、薫……っとお！」

薫は俺が前で組んだ腕に乗り、俺はそれに合わせて思いっきり斜め前に跳ね上げる。

薫はそれにあわせて飛んで、階段を上りきる。

とりあえず、もう一度幸弘を抜いたから良いだろう。

俺は薫を跳ね上げた後すぐに体勢を立て直し、薫が走っていった校舎へと向かう。

まず俺達が目指すチェックポイントは生徒指導室。根拠は無い。一番狙いやすいと感じたからだな。

トントントンッと、リズム良く廊下を走る。

まあ、『静かなる弾丸』は出来るしな。

それに、さっきの階段のところで必殺Vターンも位置を見せてもらった。

「っと、すいませんっと」

「「すいません」」

前から来た一人を避けると、後ろで薫と幸弘の声が聞こえた。

幸弘は距離をつめてきているな。……離すか。

と、目の前にDクラスの集団が。

不規則に動くそれを『ダンシングステップ』でかわすと、一mほど前に刈谷先輩の姿が見えた。

……よし、補足。

俺はあえて足音を大きく出し、刈谷先輩の後を追う。

……よし、ここだな。

刈谷先輩が曲がったところで、刈谷先輩と同じペースで足を動かす。

もう一度回ると階段だが、刈谷先輩は予想通り、位置情報を確認する為にチラリとこっちを向いてきた。

「……しっ」

短く息を吐いてジャンプ。

そのジャンプで刈谷先輩の足を飛び越え、前に出る。

よし、刈谷先輩は気付いていないな。

刈谷先輩はそのまま真っ直ぐ行っただが、俺と薫と幸弘は階段を駆け上がる。

俺はさっきDクラスの連中が話していたのを聞いたが、幸弘は例の

『直感』だろう。

この先は確かに真っ直ぐ行けば生徒指導室だが、その前にCクラス全員で掃除が行われている場所がある。

人数的に考えても、ダンシングステップで抜くにはロスが大きすぎるルートだったので、俺はその道は外した。

階段を上りきると、柱の影から生徒の話し声が。

俺の少し離れた場所には、水の入ったバケツがある。

……わずかに逡巡して、俺はそこで止まった。

少しして、柱の影から現れた男子生徒と女子生徒が顔を出す。

「わっ」

「すみません」

男子生徒が驚いた声を上げて足が止まった瞬間、俺は一步大きく跳

んで切り返す。

その生徒を超えると、生徒指導室の扉が現れる。

その扉を触って反転すると、向こうから刈谷先輩が走ってきた。

ずいぶん遅かったところを見ると、やはりCクラスが居たのだろう。

俺はDクラスの連中が「あそこじゃなくて良かった」とぼやいてくれたことに感謝しながら、刈谷先輩とすれ違う。

次は食堂へ向かう。

俺と薫は階段を三段飛ばしで跳んで、ラストで勢いを殺してVターン。

流石に、黒翼の天使は出来るかつーの。

Vターンした瞬間に跳び。また三段飛ばしで飛び降りる。

どうやら、刈谷先輩と幸弘は別のチェックポイントへ行くようだ。

「ストップだ。薫、止まれ」

「へ？なんで ああ、なるほど」

俺達は息を整えながら階段の陰に隠れる。

今のうちに、息を整えながら薫を背負っておく。

少しして、柱の影から現れた男、スネークが階段に足をかけたと同時に俺は走り出す。

「あーばよ。スネークー!!」

俺はスネークの後姿にそう言ってから、薫を背負いながら走る。

実はこれは教師には黙っている行動だ。

学園長が言い出したのは確かだが、教師人には一切知らされていない。

だから、教師に見つかるのはそのまま妨害の危機へとなるんだ。

そして、薫を背負ったのは、薫がこんなナリなので、見た目通り男の中では体力が少ないからだ。

全力ダッシュで走ったので、一度休憩を取らせる必要があるが、そんなヒマは無いので、体力がある俺が走ると言う訳だ。

ただし、これの欠点としては、Vターンも静かなる弾丸も使えないって所だな。

幸い、今は人だかりもないし、ぶつかると言う問題は無いが、むしろそれがマイナスだ。

こんな直線コースで、直線コースに最適の走り方ができないのはちよつと苦しい。

そこから程なくして、食堂へと続く階段が見えてきた。

「……………な、なあ。……………薫……………」

「な、な……に？ 風祈……」

「しっかり……捕まってるよ……？」

流石に疲れてきたので、あまり喋りたくは無かったが、とりあえず薫にそう言うておく。

「……へ？なんで わっ！」

俺は階段まで助走をつけて、

「だぁ つしゃあい!!」

その勢いのまま飛ぶ。

「いくら何でもやっぱ怖ええええええええええ!!」

二人分の体重で飛び降りた為、異常に早く下に着き、足への負担も異常に強かった。

ってあ、疲れてんのに叫んじまった！……まあ良いか。

「ありがと、もう走れるよ」

足の痛みで着地の後も直に走らずにいると、飛び降りてから数瞬で薫が俺の背中から降りて走り出してしまった。

……むう。足が痛えのにな……。

俺はまだ痺れが残る足を無理やり動かしながら、走っていった薫を追いかける。

で、追いつくか追いつかないかと言うところでまたも生徒の集団。

……今思えば、あのババア。絶対階段レースの嫌がらせの為に全校で掃除にしただろ。

「すみません」

短く告げて、ダンシングステップで避ける。

さすがに、一年生は俺等を不審な顔で見るか。二年は無かったが。

またトントントンツとリズム良く走り、追いついた薫と階段への道を回

らないで薫に引つ張られて近くの教室へと入れられた。

薫に服を引つ張られたせいで首が絞まったので、首をさすりながら教室の扉の影からそつと外を見ると

「殺っちゃうよー。薫を背負っていい雰囲気になっちゃう悪い子は殺しちゃおうねー」

狂戦士が、金属バッドのような物を持って徘徊していた。

……今まで忘れていたが、秀吉や優子と一緒に住んでいるって、コイツらに言っただけだったな……。

もしかしたら、それがバレた時もうこうなるのかも知れん。

「（薫、サンキューな。まさか、あいつ等が我を忘れて俺に攻撃をしようとしているとは思わなかった）」

「（責任の一端は私にあるみたいだし、それに、風香が暴走しないとも限らないでしょ？）」

「（あー、そうだったな。ま、あのクラスに何人あの自己紹介のときの言葉を信じている奴がいるのかは分かんが）」

俺達はそんな会話をしながら、狂戦士が過ぎ去るのを待つ。

「……行っただか……？」

「向こうのチームに負けてなければいいけど……」

そう言っつて、俺達は教室から飛び出して走り出す。

さすがにわざわざ狂戦士の元へと行くことはないと思うので、購買の扉を触った後、一年Fクラスではなく、学園長室へと向かう。

第二十九問

「チツ。またかよ……」

俺達が一階の空き教室から飛び出して、階段を上がり三階まで行った所で、さっきのとは別の狂戦士を見つけた。

「おい、薫。どうする？一階行っても、狂戦士がいるかも知れねえし……」

「一応下を見てから決めようよ。もしかしたら一年Fの方にはもういないかもしれないし」

そんな会話をして、俺と薫は階段を駆け下りる。

タンツと、階段を駆け下りて少し前まで歩く。

そして、確認のために横を見ると

「……………」

「……………」

「殺っちゃうよー逃がさ逃がさな逃がさなーい」

狂戦士に出くわした。

狂戦士が振るってきた金属バットののような物を全力で避け、階段までダッシュで戻る。

「こんなところで、階段レースを増やすんじゃないーよおおおおお
！」

言いながら、俺は薫をつかんで全力で階段を駆け上がる。

コイツに時間を食ってる場合じゃねえんだよ！

と、三階まで言ったところで、

「……………」

「……………」

狂戦士、二体目に出くわした。

ゆらり、ゆらりと幽鬼のような足取りでこっちまで近づいてくる。

幸い、背後にはまだ狂戦士一体目はいない。

かと言って、前にいるコイツを抜けるかどうかも分からんし……。

「……………いけるか？」

俺は後ろをチラッと見て、考える。

こうしている間にも、狂戦士2は俺へと迫ってきている。

「じゃあねえ！飛ぶぞ！薰！」

抱えている薫の返事も待たずに、俺はダンツと踏み切って、階段を上ってきた狂戦士1の頭上を飛び越える。

飛び越えた後、また飛んで階段を下り、一階の階段の陰に隠れる。

俺達が息を潜めていると、狂戦士二人は俺達に気づくことなく、そのまま一階の方へと行ってしまった。

……危ねえ……。

とりあえず階段を上って三階まで行くと、さすがに今度は狂戦士もいなかった。

三年生は受験勉強のこともあってかグチグチ言いながらも、掃除をしている。

「「すいません」」

俺たちは三年生を避けながら、廊下の端から端までを駆け抜ける。

廊下を曲がる前に、大きく一步を踏み出して人が二人通れるぐらいの隙間を空ける。

「うおっ！」

「危ねえ！」

曲がった先から現れた常夏コンビの声。

そういえば、コイツらって俺の先輩だったな。どうでもいいが。

「すみません」

「ごめんな……さい！」

薫が壁を蹴って無理やり横へ飛ぶ。

俺は薫が飛んだ先へ戻って薫を受け止め、俺たちは走り出す。

走りながら俺は廊下についている窓を見て、俺達の行く方向に何があるのかを見る。

……三年って、バカなのか？

「薫。曲がって、お前の歩幅で十歩行ったら飛べるように歩幅を調整しとけ」

言って、俺は廊下を曲がる。

「よつと、すいません」

七、八歩行ったところで、足元まで来たバケツを飛び越える。

「すいません」

後ろから薫の声が届いた。

薫もバケツのあるところに着いたのだろう。

つつつか、バケツを一行に並べるか？フツー。

いや……ババアが命令したんだったらありえるか？

なににせよ、こっから先は三年生が廊下を拭いていて進めないので、階段を降りてもう一度上った方が良さそうだな。

俺達は階段を跳び降りて、学園長室付近の階段まで行ったところでその階段を駆け上る。

「……よし、これで三つか」

「そうだね。後一個だけど……」

学園長室前で、俺達は少し息を整えていると、こっち側にある一年Fの方へと向かってくる刈谷先輩＆幸弘が見えた。

「……あれは後、一年Fの扉を触ればチャックポイントは全部回ってるよな？」

「そうだね。狂戦士から逃げてる間に、結構差がついたみたいだよ」

……俺は少し考える。

一発逆転の方法……。

一瞬で一階まで降りる方法……。

一年Fクラスの扉……。

……ちょっと危険だが……これが良いだろ。幸弘も出来てたし。

「薫。今から二階に行つて、一年Fに瞬間移動するぞ」

「オーライ。なら、走ろうか！」

薫がそう言つて走り出す。

俺も慌ててそれを追いかけて、階段を駆け下りる。

「……刈谷先輩、結構人ごみで遅れちゃいましたけど……」

「いや、神庭。あのままのコースで行っても、階段の下り段数が足りないだろう。すでにクリヤしている俺達のが有利だ」

ああそう言えば、と幸弘は納得する。

「じゃあ、僕たちは校舎に入って、一年Fクラスに行けば勝ちですね」

「ああ。そうだな。……何事も起こらなければ、だが」

刈谷の言葉に首をかしげながらも、上履きを持って一年Fクラスのある校舎まで走る。

そんな彼等が走っている最中に、誰かの声が聞こえてきた。

『飛び込みで内臓破裂もあるらしいから、しっかり飛ぶぞ！』

『飛ばうとするとときにそういう事言っ！?』

『とりあえず、手を上に上げて一直線になってりゃ大丈夫のはずだが……』

『なんでこういう時に限ってそんなネガティブなの！？』

そんな会話を聞いて、幸弘は、

「（ああ、そういえば僕も前に飛び込んだことがあったな……。あれは……そう。陸上部との階段レースで……）」

そう幸弘が思っていた瞬間。

バシャンツ！と、誰かが水に飛び込んだ音が聞こえてきた。

その音に驚いて、プールの方を見ても、誰もいない。

ただ沈んでいるだけだろうか？

そう考えて視線を戻すと、すぐにプールへと続く扉が開いた。

中から出てきたのは

俺たちは、二階のプール上空まで来ていた。

予想通り、プールの金網から出れば一年Fクラスへと続く場所がある。

「飛び込みで内臓破裂もあるらしいから、しっかり飛ぶぞ！」

「飛ばうとするとときにそういう事言う！？」

「とりあえず、手を上に上げて一直線になってりゃ大丈夫のはずだが……」

「なんでこういう時に限ってそんなネガティブなの！？」

そんな冗談を薰と言って、俺は薰の腕をつかむ。

「冗談だ。さあ、飛ぶぜ？しっかり捕まってるよ？」

さすがに、離れでもして俺が腹から着水なんて事になったら、ホン

トに内臓破裂もありえるからな。

俺は薫の頭を胸に抱えて、今はもう使われていないのかとところどころ穴が開いていて、クモの巣まである踏み切り板に足を乗せる。

と、足が空中へ投げ出される感覚と、バキッと言う何かが折れた音が俺達の耳に聞こえた。

「へ？」

そのまま俺達は、プールに落ちていく。

こ、こんなの両手を挙げてるヒマはねえから、薫にだけ両手を上げさせて、俺は薫を一層強く抱いた。

一種の砲弾のように、俺と薫はプールに落ちた。

ゴボゴボと、プールの底まで沈んでいく。

……っ
って、死ぬわ！

バシヤツと薫を抱えてプールから上がり、薫と一緒に金網を開けて上履きを脱ぎ、教室まで走る。

金網を出た直後に刈谷先輩と幸弘が居たので、こっからは単純に走力の問題だろう。

飛び出した位置から、俺達は一年Fクラスの窓側の扉まで走る。

と、向かいに現れた刈谷先輩が、俺達よりも早く一年Fクラスの教室の扉を触って走っていった。

俺はガラツと一年Fクラスの扉を開け、勝手に侵入する。

ビチャビチャの服で掃除中の場所を走るのは気が引けるが、まあ、どうせ廊下を水浸しにしているから走って行っていいだろう。

出た瞬間に、丁度幸弘が廊下を曲がってこっちに来るところだった。

「おっ先」

幸弘を避けて刈谷先輩を追っかけ始める。

『静かなる弾丸』が一番この道にあっているな。真ん中に入いねえし。

廊下の曲がり角でVターン開始。

それを曲がると、刈谷先輩の後姿が間近に見えた。

俺は壁に向かって飛び、壁を蹴って廊下に着地。

で、トントントントンと大股で飛び、ゴールまで走り抜ける。

「あー、疲れた……」

俺は、さっき優子から貰ったタオルで体についた水を拭きながら、そう呟いた。

因みに、ゴールした順番は、

一位、俺。二位、刈谷先輩。三位、薫。四位、幸弘。

だ。

因みに、プールの水で服が体に張り付いた薫を見て、明久、雄二が姫路、島田、霧島に制裁を加えられたと言って置こう。

……ん？ムツツリーニ？アイツはいつも通りに鼻血を噴出したぞ？

……いや、いつも以上に酷い出し方だったか？

「これは完璧ねっ！もう、この学園に階段部を作るしかないわっ！」

「落ち着け、ゆうこ。まだ勝ってないだろう」

刈谷先輩が鼻息荒く言った九重先輩を宥める。

「別に、良いですよ。認められるかは知りませんが」

俺が何気ない調子で言うと、向こうの連中は固まって、

「それはいい心がけだわっ！さあさあ、早く誓約書でも書いちゃいなさい！」

「落ち着け。……それで、良いのか？こんな校則違反して」

刈谷先輩が俺の目を見て言ってくる。

「別に、そもそもこの学校に『廊下は走っちゃいけません』って校則なんか無いですし」

俺が言うと、再び前に出てきた九重先輩が同調してきた。

それを黙殺して、俺は刈谷先輩のほうを見てニヤリと笑い、

「それに、まだ先はあるんでしょう？」

と言った。

俺のその言葉に刈谷先輩も笑い、

「そうだな。まだ、先はある」

と返したのだった。

……と、キレイに終わったかと思いきや、

カチャン。カチャン。カチャン。カチャン。

そんな音が、手首の辺りで聞こえた。

……なぜか、何かが嵌っている感触がある。

「……………うむ」

「うむじゃねえよ！！なんで手錠を俺に嵌めるんだ！！」

と、なるほど、神出鬼没を目指すだけのことはある。と納得するぐ
らいの感じで現れた小夏先生は後ろを指差した。

……俺と二、三メートルぐらいのチタン合金製の紐（？）で繋がっ

た先にいるのは、優子だった。

左手首に俺と同じく手錠が嵌っている。

そして、他の連中も手錠で繋がれている。

一組は薫と佐藤。

一組は風香と秀吉。

一組は明久と姫路。

一組は雄二と霧島。

一組はムツツリーニと工藤。

一組は利春と清水。

一組は幸弘と美冬。

第二十九問（後書き）

『学校の階段』編、思いのほか速く終了です。

理由は、……まあ、うん。

疲れたからさ！コラボアンソロジーの方は疲れたんだよ！

……失礼、興奮してしまいました。

一応次回は、如月ハイランド編です。

果たして手錠は取れるのでしょうか？

それでは次回のバカとテストと介入者、略称候補バカ介を宜しくお願ひします。

第三十問

13 この鍵のうち、結局一つの鍵しか見つからなかった。

その一つの鍵は、運よく(?) 不憫だと感じられたキヨンと慎の手錠と一致した。

一応、鍵屋とかに合鍵を作って貰うように頼んで貰おうと、ババアの部屋まで俺達は向かった。

「ハア? 能力は使うな?」

ババアの部屋で、俺、優子、薫、佐藤、利春、清水、キヨンは入って早々そう言われた。

「そう。あの自称神様の小娘の言葉通りならば、アンタ達の超能力みたいなのは学園の試験召喚システムが関係しているらしいじゃない

かい」

ババアがこめかみを揉みながら言う。

「……で、もし使ったら暴走の危機があるのか？」

利春がうんざりしたような調子で言う。

「察しが良いねえ。技術者としては言いたくないんだが……そうだよ。ちよつと試験召喚システムに不具合が生じているからねえ」

ババアが本当に言いにくそうな調子で言う。

「……はあ、まあ、分かった。アレは使わんさ」

キョンもうんざりしたような調子で言う。

「……そう言えば、『学校の階段』連中の手錠はどうなるんだろうな……？」

「まあ、不具合が直ったらこれは外せば良いね」

薫がそう言って、俺達は学園長室を後にした。

……で、休日、如月ハイランドまで俺達（俺、優子、薫、佐藤、風香、秀吉、利春、清水、雄二、霧島）はやってきた。

すっかりあるのを忘れていたが、チケットが今日までしか使えないので行く事になったのだ。

バスや電車を使って二時間。

その間、俺達は手錠を昔能力で作っていた『塗った物が見えなくなる薬』を使って手錠を隠していた。

「やっと着いたか……」

俺達は、無駄にでかい入り口を見上げながら呟いた。

そのまま前に出ると、係員が居た。

「いらっしゃいませ」

その係員にプレミアムチケットを渡すと、係員は、

「少々お待ちください」

といって俺達に背中を向け、

「……私だ。例の客が来た。総員、配置に着け。絶対に仕留めるぞ」

「なんだその怪しげな通信は」

十中八九、他の来てない連中が絡んでいることは間違いないだろう。

「いえいえ別に怪しくないデスよ。さあ、こちらへどうぞ」

そう言って係員は如月ハイランドの中へと入っていく。

「さてさて、プレミアムチケットをお持ちの皆様には、写真撮影が

あります。少々お待ちください」

言って、係員はカメラを取りに行った。

「……雄二、あれ……なに？」

霧島が巨大な観覧車を指差して言う。

コイツ……遊園地に来たことがないのか？ 大体の遊園地は置いてあるだろうし……

「ああ、翔子。あれは観覧車」

「あれは中世ヨーロッパの処刑道具を巨大化したものだ。罪人を巨大な車輪で轢き殺す装置で、罪人を車輪のリングの外側にくくりつけ

てゆっくりと回転させ、じっくりと恐怖を与え……その体がついに一周して地面へと戻った瞬間　ぐしゃつ　と、巨大な車輪

に轢かれ、せんべいのように真っ平らになった礫死体の出来上がりと言っ訳だ」

「え……」

俺の横で、優子が固まっているが、気にしない。

「なんでそんな物なんだよ！？あれは観覧車だろ！？普通は楽しむ為の物だろうが！！」

雄二が、俺の嘘に慌てて反論してくる。

「悪いけど、それは嘘情報」

薫がそう言い。

続いて、利春が口を開き

「彼女を彼女と認めない、悪い子連れて行って人知れず始末する。それが遊園地の本当の目的で、遊園地が楽しいところと言うのは、彼女を彼女と認めない悪い子が素直についてくるようにカモフラージュをかねて、政府が流したデマなのだよ」

「と、言う訳で。さあ雄二、最後にあそこに行くか」

「誰が行くかつー！……いや、まあ。観覧車を最後に乗るってのも良いな」

雄二が憤慨しながらも、すぐに落ち着いてそう言う。

「霧島、さっきのアレは冗談だからな？微妙に信じてるように見えるんだが……」

霧島が、なんとも表現し難い顔で観覧車を見ていた。

……しかし、あの観覧車でけえな。普通の観覧車の二倍はあるんじゃないか？

「才待たせしました」

そんな事を考えていると、係員がカメラを片手に戻ってきた。

「それでは、カップルの皆さん、ポーズを才願いします」

後ろからも黒子の格好をした係員達が来た。

「……雄二」

「……翔子。なぜここでアイアンクローなんだ。これはカップルのポーズじゃないぞ」

霧島がポーズをとれといわれた瞬間、雄二にアイアンクローを食らわせていた。

で、

「ありがとうございます。この写真は、当パークの写真館に飾らせていただきます」

「待て待て、あの写真のどこがカップルの写真だ」

雄二が係員の言葉に突っ込んだが、係員はどこ吹く風で、

「それでは、皆様。ごゆっくりお楽しみください」

と言って去っていった。

……アイツはなんなんだ？ 似非外国人なのか、普通に外国人なのか
……

「まあとりあえず、どこへ行く？」

俺は隣にいる優子に尋ねる。

「とりあえず……あのきぐるみの人に聞いてみるわ……」

優子は一瞬考える素振りを見せたが、向こうの方を見て苦笑いの表情になってそう言った。

……その方向を見ると、

「やあ、僕の名前は」

「明久、首が逆だ」

首を逆にして出てきたきぐるみ（IN明久）の首をつかんで、正面に向ける。

「あ、ありがとう。どうりで前が見えづらいと……はっ！ぼ、ぼ、ぼ、僕は明久じゃないよ！」

バレバレなのに、どうにかごまかそうとする明久。

まあ、頭を逆につけるバカさと、ご丁寧にも手だけ着脱式になっていて、そこから伸びる手錠の鎖を見れば分かるがな。

因みに、俺達は今、明久の家に居候している。

さすがに、男を連れて行くのは親の許可が出ないだろうと踏んでのことだ。

俺達の家じゃない理由は、部屋が優子の趣味全快の場所があるからだ。

見られたら、今まで演じてきたコイツの苦勞が水の泡になるからな。

「まあいい。で、お勧めは？」

「あ、うん。僕のお勧めはね」

「フィのお勧めはお化け屋敷だよ」

利春の質問に答えようとした明久のセリフに被せるように、姫路がそう言った。

「よし、皆。お化けや敷以外に行こう」

「さて、お化け屋敷に行くか」

『おお　　！！』

雄二の言葉を見殺して、俺達はお化け屋敷へと向かう。

「四人でしか入れないのか」

俺達がお化け屋敷前まで行くと、看板に『四人までしか入れません』と書いてあった。

……まあいいが……雄二も大丈夫だろう。

「それじゃ、組み分けは。俺、優子、雄二、霧島と、薫、佐藤、利春、清水と、風香、秀吉で良いか？」

「それで良いわ」

「それで良いぞ」

「……それで良い」

「それで良いよ」

「それで良いです」

「それで良いな」

「それで良いです。風祈様」

「それで良いね」

「それで良いのう」

上から順に、俺が呼んだ順番だ。

「んじゃ、入るか」

言って、俺達は中に入る。

暗がりの中を一分ほど歩くと、お化け役の人が出てきた。

「……………」

「へえ、以外に良く出来てるな」

「「お疲れ様です」」

上から、霧島、雄二、俺、優子だ。

「良く考えたら、お化け役としても俺達は張り合いが無さすぎるメ
ンバーだったな」

「そう言えばそうだな。誰も怖がる奴が居ない」

雄二とそんな話を話していると、誰かの声が聞こえてきた。

どうやら、俺と雄二に声のようだ。

「なるほど。自分の声が聞こえてくるってのは中々怖いな」

雄二がそう呟く。

声の発生している場所の辺りに着くと、なんと言っているのかがは
っきりと聞こえてきた。

『やっぱり、姫路のが翔子より好みだな。胸も大きいし』

『だよな、やっぱり優子より胸が大きい姫路だな』

「.....」

「.....」

「.....（ダラダラダラ）」

「.....（ゴゴゴゴゴ）」

俺達の横には修羅がいた。

「チクショウ！手錠のせいで逃げらんねえ！」

雄二がそう叫んだとき、天井から何かが落ちてきた。

「天の助けだ！翔子！何か出たぞ！」

雄二がしめたと言わんばかりの顔で落ちてきた物を指差す。

「……気が利いてる（るわ）」

「釘バットだとう！？」

ダッシュで俺と雄二は逃げる。

が、手錠でつながれていると、逃げれてもせいぜい二、三メートルぐらいしか逃げられないので、解決策にはならない。

逃げながらアレは合成音声だと説明すること数分。

説明し終わるころには、お化け屋敷の外に出ていた。

「……予想外だ……キョンが合成音声を作れるのは知ってたのに……」

秀吉がこっちにいるから油断していた……。

第三十問（後書き）

更新停滞の言い訳を、活動報告で詳しく（？）説明していますので、言い訳を聞く気がある方はご覧ください。

多分、言い訳にしか聞こえないと思います。

バレンタイン特別話！AとFとバレンタイン（前書き）

話の流れをブチ切って、バレンタイン特別編です。

時系列的には未来の話。

バレンタイン特別話！AとFとバレンタイン

二月十四日早朝

朝、俺が学校に行くと、FFF団の連中が息を吸い込んでいた。

そして、全員で声を揃えて、

『バレンタインは聖・バレンタインの生誕を祝う日であって、女子
がチョコを渡す日ではないんじゃないア
！！！！！！』

「バレンタインは生誕を祝わないぞ」

雄二の冷静なツツコミにも、須川たちは無視して騒いでいる。

いきなり言い出しやがって……そして間違えるなよ……。

「で、落ち着いたか？」

『……ハイ。落ち着きました』

俺は、騒いでいたFFF団の連中に、邪眼で一分間の悪夢^{ユメ}を見せ、落ち着かせた。

見せた悪夢は、それを言っていると気分を害す人がいると思うので説明を避けさせてもらう。

ただ、それはもう恐ろしい物だったと言って置こう。

「にしても、なんでその程度で騒ぐんだ。別に、対して重要なイベントじゃないだろ？バレンタインなんて」

FFF団を解散させ、廊下を歩きながら俺は呟く。

今日は、一昨日から薫が風邪を引いて家で休んでいて、それを佐藤が看病。

風香は、薫と同じく一昨日から秀吉が風邪を引いたので看病中だ。

おかげで、それを伝えたときのFFF団の連中のテンションの落ち方が異常だった。

つと、もうそろそろ教室に戻らねえとな。

そして、大した事も起きず放課後になった。

「んあ？屋上へ？」

放課後、帰る用意をして優子を待つかとAクラスに行こうとすると、ムツツリーニに呼び止められた。

「……………（コクッ）」

「？なんなんだろうね？風祈」

明久が、俺にそう言うてくる。

ムツツリーニは、明久と俺と雄二に、『屋上で人が呼んでいる』と
伝えに来ただけのようで、俺の言葉に頷いた後は忍者のような動き
で消

えた。

「……なんだろうな？俺はそれよりも、翔子から婚姻届を取り返し
たいんだが……」

「ああ、それなら、俺が嚴重に保管できるのを作って、それをまた
鍵の違う同じ箱に入れ、と五回繰り返し返した箱の中に入ってるぞ」

「なんだと！？だったら、どこにあるか分かるか！？」

雄二が、俺が言った言葉に反応して、肩を掴んでガクガクとやって
くる。

「霧島の部屋にあるとか言ってたな。因みに、核爆弾にも耐える作
りで、日々暗証番号は変わっているぞ？霧島しか開けない様にな
って

いるしな」

言って、俺と明久は雄二に一撃をいれ、雄二を正気に戻してから誰かに呼び出された屋上へ向かう。

「……………ガハッ……………！（ブシャアアアア）」

「あ、明久君！？」

屋上の扉を開けて、数瞬。明久は血まみれになって倒れた。

な、何を言っているのかわからないと思うが、俺も何が起こったのか分からなかった。

……とまあ、冗談はこの辺にして、実際は、姫路がバレンタインのチョコを『男の子はこうすると喜ぶって、玲さんに聞きましたっ』と言

って胸に挟んでいたのが原因なんだがな。

そして、さっきから殺気がすごい。

前からと、校舎から、ライオン辺りなら殺せそうな殺気がする。

「優子、そんな顔するな。せつかくの綺麗な顔が台無しだぜ？（キ
ーン）」

「…………え…………そんな」

おえっ。俺の、自分でも言ってる吐き気のするセリフで、優子は顔を真っ赤にして黙ってしまった。

…………さすが杉崎。言われた通りにやってみたら、本当に怒りが静まった。

因みに、屋上にいるのは姫路、優子、霧島だった。

「…………雄二。チョコ、あげる」

「お、おう…………ありがとな、翔子」

顔を真っ赤にして、雄二が霧島からチョコを貰っていた。

……どうでもいいんだが、なんかこいつらって男女の関係が逆のよ
うな気がするな。

微かに嬉しそうな顔でチヨコを渡す霧島（こっちが普通男）と、顔を
真っ赤にして受け取る雄二（こっちが普通女）……うむ。やっぱり
そうだな

。

「……まあ、一応」

俺は、閉鎖空間^{トバリ}を発動して、この空間を俺達だけにする。

特に長い間いる気は無いが、一応だな。一応。FFF団に、KSH
団（あいつらは本当にうざかった。さながら卍一族のような）の連
中が襲

い掛かって来るかも知れん。

「ああ、そうだ。風祈……これ……」

「……ん。サンキューな。優子」

優子が薫に聞いてチヨコを力カオから作ってきたのは知っていたが、気づかないふりをして俺は受け取る。

「（……そういう笑顔を出すのは卑怯よ……）」

「ん？なんか言ったか？優子」

「なんでもないわよっ」

なんか切れ気味に怒られた。夏休みときとかいろいろあったが、未だにこの辺は分からんな。

二月十四日、深夜（朝）

「えっと……籍を入れるのはお二人ですか？」

「「はい」」

私と美穂は、市役所で籍を入れに来ていた。

結婚は早いほうがいいといつに無く強情に美穂が言ったので、私は引っ張られるようにつれてこられた。

多分、どこかに風祈と優子。風香と秀吉もいるはずだ。

「えつと……」

市役所の役員の男性は、困惑した顔を浮かべた後、意を決したように口を開いた。

「女性同士の結婚は、法律上出来ないのですが……」

「「^{ワシ}私は男だ（じゃ）アアあああああああああああ！！」」

「

市役所で、私と秀吉の絶叫が綺麗にシンクロして木霊した。

「はっ！夢！？」

ガバッと布団ごと起き上がる。

どうやらさっきのは夢らしい。

半端にリアルで、実際に正夢になりそうな気がするから怖い。

「……スースー……」

その音がするほうに向くと、美穂が私の眠っていたベッドに手を載せて、眠っていた。

窓の外を見ると、外は真っ暗だった。大体、深夜三時ぐらいだろうか？

どうやら、私を看病してくれている間に寝てしまったらしい。

とりあえずベットから降りて美穂をベットに入れてから、私は大き

く伸びをした。

究極的な低血圧の私が、寝起きでもこんなに機嫌がいいのは初めてなんじゃないだろうか？

と言っても、完全覚醒まで殆どの記憶が無いけど。

そんな事を考えながら、ふと机に目を向けると、ハート型の包みに入ったものが置いてあった。

「……これは、バレンタインのチョコかな？」

そう思って、“視”てみようと思ったけれど、やっぱり美穂の前で開けて、その時に見たほうがいいだろうと思って止めておいた。

一応作ってあった、クラスの皆に上げるのとは別の、家族に上げるのとは別の、美穂にだけあげる、私が一番力を入れたチョコレートを、

横において、さっきまで美穂がいた場所に座る。

さっきは半端に正夢になりそうな酷い悪夢を見たけれど、美穂が良
い夢を見れるなら良いな。

(翌日、風邪がぶり返しました)

二月十四日 深夜(朝)

「ワシは男じゃアアあああああああ……はっ！夢かのう？」

深夜に、正夢になりそうな悪夢を見たワシは、目が覚めてしまったのじゃ。

「……スースー……」

その寝息に気付いてそっちを見ると、風香が机で寝るようにワシのベットに手を置いて眠っておったのじゃ。

これでは風邪を引いてしまっし、なにより女子がこのような体制で寝るべきではないのじゃ。

結構キツかったのじゃが、何とか風香を持ち上げてワシのベットに入れることに成功したのじゃ。

なんにせよ、このようなことが出来れば男と変わらんじやろう。

そう思って窓の外に目を向けると、満月が綺麗だったのじゃ。

部屋の中も、満月の月明かりで幻想的な雰囲気を出してある。

「……んむ？なんじゃ？あれは」

幻想的な部屋の中を見回していると、何かの入った包みが見えたのじゃ。

あれは、バレンタインディのチョコかのう？

風香はくれると言っておったし、多分そうなんじやろうなあ。

まあ、これは大切に鍵をかけてしまっておいて、明日食べさせていただけかのう。

それよりも今は、先ほどまで看病してもらっておった礼に風香を看病しようかのう。

（翌日、風邪がぶり返しました）

二月十五日（朝）

「明久も今日は休みか」

俺が復活した薫と優子、佐藤と共に学校に來ると、明久以外の全員がそろっていた。

因みに、秀吉は　　うん。まあ……今日も風香が看病している。

「……風祈。明久から、これを受け取ってきた」

「ん？これは……手紙か。何を書いてあるんだ？」

ムツツリーニから手紙を受け取って、俺は手紙を広げて読む。

そこには真つ赤な字で、家で秀吉がダイイングメッセージのように書いていたのと、ほぼ同じことが書いてあった。

『……な、なんで……某ゲームのはぐれメタのようなチョコレートが出来るの……さ（そこから先は、腕の力が抜けて着いた血痕だけにな

っている）』

と書いてあった。

……姫路は、薫からチョコの作り方なんぞ習ってねえし、風香は、料理はそこそこ出来るがお菓子作りは本当にダメダメだ。

……油断していたな……。と言うか、これの三倍返しって殺傷能力を三倍なのか？

第三十一問

あまりにも張り合いが無さすぎるメンバーでお化け屋敷を終え、続いてどこへ行くかを相談する。

「お客様。ウエディング体験の方の準備が整いましたので、此方へ」

相談していた俺達の横に、キヨンと思しき男がやってきて、そう言った。

「以外に早くできたんだな。おっと、霧島。それは俺が預けに行つて来よう。絶対に横にならない様にするから心配すんな」

キヨンの誘導の元、ウエディング体験の会場へと向かっている最中に、霧島の持つカバンを指差しながら俺は言った。

「……相変わらず、風祈は何でも見抜いている」

「いや、雄二も結構見抜いているぞ？それに、俺は知っていることしか見抜いていないぜ？」

そんな事を霧島に言って、俺と優子は少し列から抜ける。

「赤屍さん。ちょっとこれを預けといってくれないか？」

人気のない場所で、俺はそう言う。

すぐに、俺の前にメイド服姿の女性が現れた。

「クス……了解しました。それでは、お楽しみください」

言って、彼女はまたシャツと消えていった。

彼女は俺がなんか莫大にある金で雇った赤屍さん。

選んだ理由は名前と常に微笑をしているところ、加えて運び屋だったらしいからだ。

全面的に某化け物の蔵人さんにかぶっていたので、何となく採用したんだが……ホントにあの人かも知れねえな。

あ、因みに、メイド服姿なのは本人の趣味らしい。俺の趣味じゃないかな？

「っと、早く戻らねえと場所が分からなくなるな」

俺達は、来た道を引き返して他の連中がいる所へと走る。

優子も赤屍さんのことは知っているので、特に驚いたりすることもない。

「……おい。何だこれは？」

「ウエディング体験を勝ち取る為のクイズデス。皆様が正解すればウエディング体験を行いマス」

例の場所で、まだ昼時ではないからか食事を飛ばしてクイズの席に俺達は座らされていた。

「……まあいいが、ほら、問題を出してくれ」

俺は似非外国人（俺はこれで統一する）に向かって言う。

似非外国人は、分かりマシた。と言って引っ込んでいった。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

会場に大きく、聞き覚えのある声でアナウンスが響き渡った。

《なんと、本日、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生達がいらっしゃるのです！》

……キョンは、そんな調子でアナウンスをする。

そして、今のアナウンスで、さっき雄二が口に含んだ水を噴き出した。

それを雄二に反射しつつ、会場内をキョロキョロと見回す。

思いのほか暗かったので、目当てのやつは見当たらなかったが、後で考えれば良いだろう。

《そこで、当如月グループとしては、高校生達を応援する為の催しを企画させていただきました！題して、【如月ハイランドウエディング

体験】プレゼントクイズ〜！》

妙なハイテンションさで、キヨンは言う。

そして、内容を簡単に話してクイズが始まった。

《では、第一問！》

全員がボタンに手を伸ばし、出題を待つ。

《あなた方の拳式は、どこで行われるのでしょうか？》

ピンポン！

雄二が、ボタンを押して答える。

「ナ ニア国！」

《正解です！！》

「なにいつ！？」

雄二が本気で信じられないと言っような顔をしていた。

……そりゃあ、これは出来レースだからな。

《こちらの方々の挙式は、当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【ナル ア国】で行われる予定です！》

「待ていつ！絶対その別名は今この場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

……とまあ、そんな感じでクイズが続いていき、

《正解です！それでは、最終問題です！》

その時の雄二の回答を完全無視して、最終問題まで入ろうとした時、

『ちょっとおかしくな〜い？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけが特別扱いなワケ〜？』

不愉快な口調で、俺を不愉快な気分になさせてくれる声が聞こえてきた。

その場の全員が声の主を探る。

すると、彼等は呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきた。

《あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか 》

『あぁっ！？ぐだぐだとするせーんだよ！おれちゃオキヤクサマだぞコルア！』

茶髪で顔中にピアスをつけた男が、威嚇するように大声を出す。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？』

『そうそう、オレたちがこいつらにクイズを出して、それに答えられなかったら、俺達にやらせるよ！』

《そ、そんな》

恐ろしいぐらいに棒読みな口調で、キヨンは言う。

そんなことには気付かず、そいつらはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクの一つをひったくる。

『じゃあ、問題だ』

チンピラ……これは浜面に失礼か。

……不良が、わざわざ巻き舌の鬱陶しい発音で言う。

『昔日本が使ったのは、宇宙戦艦何か答えろっ！』

『……………』

俺達は、言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか？』

確かにわからんだろうな。

なぜなら、俺は宇宙戦艦が昔にあったとは記憶していないし、そもそも昔て……。

《……………正解ですっ！おめでとつございます！》

そっから先は、聞くまでもないので、ベクトル変換で音を反射させてもらった。

「と、言つ訳で、新郎役のお前らには着替えてもらった訳だが……」

いつもの口調で、キョンが服を着替えた俺達に言う。

雄二がこの隙にと逃げ出そうとしているが、それは俺が腕を掴んで逃げ出せないようにしている。

「新婦役が来るまでに逃げ出さないように、気絶していてもらう」

雷帝状態と変わらぬ威力の電撃を食らい、俺の意識はそこで断絶した。

「……ったく……これで翔子が似合わなかったら逆に笑えるな」

舞台の上で、雄二が俺に向かってそう言う。

舞台の関係とかで、二組ずつになったのだが、お化け屋敷に入った組で言うことで、俺と雄二の組になった。

……っん……

「まあ、見れば分かるな」

そんな風に雄二と話していると、アナウンスが聞こえてきた。

「「……っ……」」

現れた二人に、俺たちは一瞬、息が出来なくなった。

「……雄二……似合う？」

「ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

雄二がそう言うと、霧島は、

「……嬉しい……」

霧島は、顔を俯かせて、泣き出した。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いている様に見えますが…
…？》

「……ずっと……夢、だったから……」

霧島の、涙混じりの掠れた声が響く。

《……夢、ですか？》

「……小さな頃からずっと……夢だった……。私と雄二、二人で結婚式を上げることが……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人

だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの夢……」

霧島が雄二の顔を見て言う。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方のようにです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか？》

と、優子が目を潤ませているのに気付いた。

「……どうかしたか？優子」

「いや……なんでもない……けど……一年前の夢が叶った感じがして……」

優子が、ボロボロと泣き出した。

ふー。流石に、こんな時に泣かれるのは俺も戸惑うんだが……。

と、観客席の方から、再び下衆の声が聞こえてきた。

「翔子……俺は……」

『あーあ、つまんなーい!』

雄二が何か言いかけたところで、そんな野次が。

『つてかちよーうける!あの年で夢がお嫁さんとかありえなくね?』

『あっちの女も、この程度で泣くとかありえねえ!』

『しかもブスばっかだしな!』

『にしてもクソつまんねえ所だな！さっさと出てこっぜ！』

……確かに、ウエディング体験で泣くのはありえないな。

せめて『体験』じゃない時じゃねえと。

「優子。ちょっとここで待ってる。皆はこれが続けていてくれ」

俺は、手錠をバキン！と音を立てて破壊し、全員分の手錠を粉々に砕く。

「なに、すぐに終わる。行くぞ、雄二」

「ああ。翔子、すぐに戻る。弁当、楽しみにしてるぞ」

俺は手首を動かして動作確認をしながら、雄二を促す。

雄二は霧島の頭にポンツと手を置いて俺の横まで来た。

「あー、ちょっと皆さん、目を瞑っててくださいね」

薫が、そう言いながら優子たちを一箇所に集める。

「因みに、調子に乗って見に行こうとしたり、ヘタに刺激すると強制的に参加させられるから……死ぬよ」

薫が満面の笑みで失礼なことを言う。

それに顔を真っ青に染めた明久が、

「か、薫……それって、この間のあの不良たちと同じように？」

「いやいや、口調がいつもと微妙に変わっているから、前回よりも酷……面白いことになると思うよ？多分、今回は切断よりも酷いんじゃない」

ないのかな？」

薫は鼻歌交じりに、非常に失礼なことを言う。

……だがまあ気を取り直して

「さー、楽しい楽しい、文字通りくパーティ>の始まりだ」

後で聞いた話だが、この後のウェディング体験は観客が多数気絶してやらなかったらしい。

なんでも、殺気が怖すぎたとかで、恐怖に震える人も居たそうだ。

「ちょっと良いか？」

俺は、雄二と壁に寄りかかりながらゴミ共を待つ……いや、これはゴミに失礼だな。なら何にするか……

「いや、別に大した用じゃないんだが……」

雄二が寄りかかっていた壁から離れ、タイを外しながら言う。

コイツらのおかげで俺は吹っ切れることが出来たんだ。

その辺をしつかりとお礼しておかないとな。

「「ちょっとそこまでツラお貸せ」「

第三十一問（後書き）

次回、グロ注意（？）な話になるはず。

生首程度では別にグロくないと言われましたが、一応グロ注意。

そしてあとがきを書くのが何気にキツイ……せきさんの気持ちが微妙に分かります。

それでは、次回のバカとテストと介入者を宜しくお願いします。

グロ注意な三十一、五問（前書き）

前回のあとがきと今回のタイトルにある通り、今回は多分グロ注意な回です。

苦手な方はご注意を。

因みに、実際に血は一滴も出ないはずです。

グロ注意な三十一、五問

風祈と雄二は、無駄に多い不良の相手を半分づつに分けてしていた。

ガッ！ゴッ！ドゴッ！と、人を殴る音が響き渡る。

「クソッ！なんでこれだけ攻撃してんのに復活しやがる！？」

「……まったく酷い事するなー。これは週間少年ジャンプでは規制されかねないいじめの描写だぜ？」

風祈はグググッと、不気味な起き上がり方で起き上がる。

そして、次の瞬間には傷がなくなっていた。

彼の周りには、バカッパルの片割れが呼んだ不良が六人。

全員合わせて十人だ。

「さて……と、お前等の底も知れたし、＜パーティ＞でも開始するか？」

余裕の笑みを浮かべて風祈は、スッと足を動かす、

「醒花陽暝流奥義

『貫指・闇蓮華』」

ドドドツと、近くにいた一人の男に足の指を突き刺す。

「がアあああああああああ！！？」

「おっと、この程度で満足してもらうのは恥だな。醒花陽暝流

『崩脚・黒百合』」

風祈は、踵落としを相手に繰り返す。

「（バカがつ。そんな単調な攻撃、防げない訳ねえだろ！）」

不良2は、それをガードしようとする。

「おっと、言い忘れていたが」

ゴシャツと、ガードしていたの腕が不良2の顔面に突き刺さった。

「この技はガード不可だ」

返り血を鬱陶しそうに払いながら、風祈は言う。

と、そこへ三人の不良が、金属バットで殴りかかった。

「焦るなよ。お前らにも参加券はある」

それを風祈は片腕で受け止め、

「『^{サンガイズ}血肉の毒』に、醒花陽暝流奥義
『烈脚・砲竜胆』って
なあ」

彼は、不良たちの脇腹を蹴り飛ばす。

不良たちは、血を噴出しながら吹き飛んでいった。

「……なるほど、そんなに焦ってるのか。なら、一気に招待しよう

か？」

彼は、身構えた四人を見ながら、

「『シン・バベルガ・グラビドン』……なるほど。確かに地球の重力を受け止めているような技だな」

強力な重力場を周囲に展開させる。

バキメキボキブチツと、不良たちの手足が砕け、体から分断された音が響く。

「……さてつと、今回の主役の番だぜ？」

彼は、最後に残った そして、侮辱した張本人の一人の女へと目を向ける。

「オイオイ、そんなに怯えるなよ。俺は何にもやっていないだろ？ほらアレだ、『僕は悪くない。だって、僕は悪くないんだから』ってや

つだ」

風祈は首をバキバキと鳴らしながら、

「いや……それとも、『酷い事をされたから酷い事をしてもいいんだ』のが良いか？誰に酷い事をされたのかは知らんが」

言って、彼は女のところまで跳躍。

「……ひっ！」

「潰れる」

ゴッシャア！と、女の顔が地面にめり込んだ。

「オイ、もうへばるなよ？第二ラウンド開始と行こうじゃねーか」

グイッと、女の髪をつかんで立ち上がらせる。

「おー、少しは美人になったな。まー、美人になるためにもう少しやっていこうか」

風祈は女を上^{うへ}に飛ばし、

「吹^ふつ 飛^とべ」

ベキベキベキッ！と、風祈に蹴^けられた女は木をなぎ倒^たして吹き飛んでいく。

「オイオイ、そんなに嬉^{うれ}し泣^なきするなよ。お前等のおかげで、俺は手錠^{ていとう}を切る事ができたんだぜ？当然のお礼^{れい}だろ？」

トンツと、風祈は女の前^{まへ}まで跳躍^{とつう}する。

「安心しろ、お前へのお礼^{れい}はまだまだ続く。さっきのやつらよりも念入^{ねんい}りにやつてやるう」

彼は、女の手を掴^{つか}んで立ち上^あがらせ、

「まだ序^{しり}の序^{しり}の口^{くち}だが……とりあえずこの如月^{ごとつき}ハイランドを空^{そら}から一望^{いちぼう}させてやるう」

彼は、ポイツと、軽い動作^{どうさ}で手を動か^はす。

どういう能力を使っているのか分からないが、女は空高く
上空一万ほど 飛んで行き、そこで千メートルほどの感覚で
上下

運動をした。

「ふむ。一方通行と物質創造ならこの程度は出来るか。一方通行の
触れる」アクセラレータ クリエイト って条件も

無視できるしな」

言いながら、風祈は女を地面まで下ろす。

「ん？おつとあれじゃ見えなかったか。なら、次は観覧車の頂上か
ら飛び降りてみようか」

女の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃになり、何の装備もなしに上空一
万メートルまで一瞬とはいえ飛んだので、真っ青になっていた。

「……………これ……………以上は……………」

「この俺に否定形は無い」

彼は女の言葉を一言で断じる。

「受動形、命令形、連用形、連体形、已然形、未然形、終止形、假定形、後はなんだったか？まあ別にどうでもいいんだが、否定形だけ」

認めていない。俺がやれつつたらやれ」

彼は観覧車の頂上のところまで転移し、女を立たせる。

「ほら早く……行けよっ！」

ドガッ！と女の背中を蹴り飛ばして頂上から落とす。

そして、女の顔が地面に接触しそうになった瞬間

「おっしー。もう少しでぶつかってたのにな」

風祈が足を掴んで止めた。

「あー、ほら。良く言うだろ? 『受けた恩は倍で返しなさい』って。まー、俺達の家訓は『受けた恩は万倍返し』なんだがな」

言いながら彼は再び転移する。

次に行ったのはどこかの山の中。山の中腹辺りだろうか。

「まー……少し趣向を変えてみようと思ってな。ほら、あちらからお出迎えたぞ」

風祈が指差した方には、ころころと転がってくる物体。

下のほうが悪くなっているそれはどう見ても

人間の首だった。

「オイ、どうした? 黙っちまって。あれはテメーの彼氏だろ?」

女はそれを見て恐怖が限界点を越えたのか、失神していた。

「ホラホラ、まだ雄二と霧島を侮辱した礼が残っているぞ？」

風祈は気絶した女を横たわらせ、

「白川流武術奥義

『真極・螺煌旋』」

バキンッ！と、螺旋の動きを描いて放たれた風祈の拳は、女の鼻に突き刺さりそんな音を出した。

「ふむ。一撃必殺のはずだが……まだ起きないか。なら

醒

花陽瞑流奥義

『空碎・霞桜』」

風祈は顔の骨がバキバキになった女をポイツと上に上げ、頭を挟むように踵と膝を打ち込む。

「はい。ドカン……っ」と

瞬間、女の顔から血が噴出した。

「内部破壊の最高峰見てーな技使ってやったのに……まだ起きねー

か？」

言いながら、彼は女を先ほど転がってきた首と一緒に蹴り飛ばす。

「……おっと、まだ足りないところだが、残念ながら」

不満そうな顔をして、彼は息を吸い、

「ジャスト一分だ。悪夢^{ユメ}は見えたかよ？……つつても、長いながーい悪夢^{ユメ}だな？」

瞬間、パキインと音を立てて周りの景色が割れて消えた。

後に現れた景色は、最初、不良たちが倒れた場所。

「一応この後のことも考えて、血の出ないやり方にさせてもらったが……次は容赦しねーぞ？……さて、あいつらに電話かけるか」

彼はパチンツと携帯を開いて、雄二に電話をかける。

「ああ、雄二。こっちは終わったぜ？とりあえず今から雑魚の処理

は俺がこつからするから、根源の方だけ宜しくな」

『ちょっと待て、あれからまだ全然立ってないだろ！？しかも、そこからってどうやって ドオオン！！うおっ！？危ねえ！』

電話口の向こうから、爆発音が聞こえてくる。

「おー、ちゃんと届いたか。ハートレス・ガンズの応用だったんだが……上手く言って何よりだ」

『って言うか、今の規模の違う技は何だ……まあいい。おかげで、一番ぶっ飛ばしたかったやつ of 所までの道が出来たな』

「おー、そんじゃ、頑張ってくれ。さっきの所で待ってるからな」

そこで彼は通話を切り、続いて優子への電話をかける。

「優子、もう少ししたら戻るから、それまでちょっと待っていてくれ」

『……へ？と言うか……惨殺死体が量産されるって薫が言ってるけど……』

「それはない。大丈夫だ。今回は、現実では血は一滴も出ていない」

『ならいいけど……それじゃ、待ってるわね』

「それじゃ、また後で」

首をコキコキ鳴らしながら、彼は携帯を切って歩き出す。

「っと、アフターケアは万全につてな」

立ち止まり、横たわる女の頭を自分の方へ引き寄せながら彼は言う。

「……^{テストメント}学習装置^{つて}、一通さんの能力で代用できたよな……。なら、コイツに別の記憶とかを植えつけとくか」

言って彼は女の頭に手を当てて目を閉じる。

彼が植えつけた記憶は、

一、『彼氏とのケンカ』

二、『人を殺した』

そして、『カップルを侮辱すると、死ぬほどの激痛が走る』と、

『坂本雄二、霧島翔子、木下優子、木下秀吉、霧沢風香、霧沢薫、佐藤美穂、吉井明久、姫路瑞希、島田美波、水坂利春、清水美春、雪崎

来兎、この十三名の半径十キロ以内に入った場合、死ぬほどの激痛が走る』

の制約と記憶だ。

これからは、一生殺してもいないのに人を殺した恐怖に怯え、文月学園に近づくだけで激痛が走ると言う、非常に面白い……ゲフンゲフン

……哀れな人生を送っていくだろう。

第三十二問

「はっ。ボロボロだな？雄二？」

「お前の流れ弾だ。何であれ、地雷まで巻かれてんだよ」

「その分威力は大してなかったから良いだろ？」

俺は、分かれ道の所で雄二を待ち、やってきた雄二とこんな会話を交わす。

「んまあ、その辺は俺が治してやるよ」

ガツと雄二の方に手を回し、聖女の微笑み（トワイライト・ヒーリング）で雄二の傷を癒し、服の傷を『大嘘憑き（オールフィクシヨン）』で

『なかったこと』にする。

「……相変わらず、何でもありだな」

「気にすんな。それに、ボロボロの格好でこれから行くつもりか？」

「……まあ、その辺は感謝するが……」

雄二はまだ若干不満そうな顔をしながらも、歩き出す。

「……うーん……ああ、そうだ！」ピコーンッ……！

「ん？どうした風祈。古いな」

若干物足りないが、さすがに誰かに憂さを晴らしするわけにもいかないので、風を受けつつ戻るとしよう。

「雄二、俺の背中に乗るか、自分で飛ぶか、どっちが良い？」

「……は？どどういうことだ？」

俺の言葉の意味が分からず、首を傾げる雄二の手を掴み、背中から白い翼を生やす。

「さア、レッツゴーってなア」

「ちよつ、そう言う意味かよ!？」

一通さんの様な口調で、白い翼を羽ばたかせ空を飛ぶ。

体感的に、今の時間は二時半ぐらいって所か？

さすがに待たせすぎるのもまずいな。雄二の方に時間を食っていたらしい。

「雄二、しっかり掴まってるよ?」

俺は雄二を背中に乗せて、言う。

「凄まじい無茶を言うんじゃないやねエええええええええええええええええ!」

ベクトル変換で雄二を守りつつ、軽めにマッハ三ぐらいで空を滑空した。

「うーっす」

瀕死状態の雄二を引きずりながら、先ほど千里眼で見た全員がそろった場所まで行き、そう言う。

「ああ、おかえり」

弁当を出しながら、優子がそう言う。

「悪いな、待たせちゃって。雄二が思いの他念入りにやってみたいでな」

雄二を霧島の方にポイツと投げながら、俺は優子にそう言った。

「まあ別にいいんだけどね。そうそう、赤屍さん、意外だけど雇って良かったわね」

「だろ？あの人、微妙に嫌な予感はあるが、一応お手伝いさんだからな。やっぱ、一人ぐらいいたほうが良いだろ」

「どっちかって言うと、必殺仕事人みたいだけどね」

薫がそう言うが、俺も優子も、それを笑って流すことは出来なかった。

「……まあ良いわ。それよりも、お昼食べないと」

優子がそう言って、俺たちは弁当を食べた。

「……さて、時間的にも、後一つ乗るぐらいしか残っていないので……」

なんだかんだで全員集合した俺たちは、まあ、全員、俺の言葉も意味ないだろう感じの顔でいる。

つまり、とある一角を向いて爛々と輝いた目をしているんだな。

「観覧車にいくぜイヤッホオーウー!!」

『オ……………!!』

利春が俺の言葉を引き継ぎ、全員でそれに答える。

「さて？それでは、一緒に乗るペアだが……」

「とりあえず、このペアになっているよ」

薫が紙を広げる。

『一組目、薫&美穂ペア。二組目、風香&秀吉ペア。三組目、利春
&美春ペア。四組目、明久&瑞希ペア。五組目、ムッツリー二&愛
子ペ

ア。六組目、雄二&翔子ペア。七組目、風祈&優子ペア。八組目、
キヨン&美波ペア』

と、その紙には書かれている。

それに全員が同意し、最後に俺たちは観覧車に乗ることとなった。

一組目、薫&美穂ペア。

「……さて、そう言うわけで……」

「……はい……」

私と美穂は、妙な雰囲気の観覧車の中で、ぎこちない会話をしていた。

「ええいもう！お見合いかつ！」

危うくカバンを投げて観覧車を壊してしまいそうになったけれど、それを押し止めて、私は叫んだ。

「……と、言うわけで、美穂。いつも通りの話をしようか」

私は美穂にそう促し、いつも通りの、いや、ひよっとするとそれよりも少しだけ甘い時間（って言うんだっけ？）かも知れない時間を過ごした。

た。

二組目、風香&秀吉ペア。

「だからね、オペラ座の怪人よりも、シェイクスピアのハムレットとか、テンペストの方がいいと思うんだよね」

「それはワシも思うがのう。しかし、知名度からいくとオペラ座の怪人や、ロミオとジュリエットの方が良いのではないか？」

「まあそうなんだけどさ。でも、やっぱり主演がやりたいと思うのが良いと思うんだよね」

「むう……確かにそうじゃな。いっそ、皆に本を渡して勉強させておくかのう……？」

私と秀吉は、二人っきりで居るというのに、今度の演劇での話をしていた。

「ただ、どうやって本を用意するかって話なんだよね」

私は、電卓を取り出して計算をして、表示された金額に思わず頭を抑えながら言った。

「その問題は、部費で落とせるんじゃないのかのう？なんなら、ワシが生徒会に掛け合っても」

「落とせたら儲け物だけだね。……こういう時に、あの腹黒二人組みが来ていたらと思うんだけど……」

「？腹黒二人組みとは誰じゃ？」

秀吉が、私のボソツと呟いた発言が聞こえたようで、首をかしげながら聞いてくる。

「あー、こつちの話。気にしないで大丈夫」

私は秀吉にそう言いながら、うつすら赤みがかった空に目を向けた。

三組目、利春&美春ペア。

「ですからね、美春は、デトイト・メタル ティは邪道だと思うんです」

「確かに、ある意味邪道だけど……＜自主規制＞」

以下より、今回の話では自主規制しかない為、ここで終了。

四組目、明久&瑞希ペア

「えっと……姫路さん……」

「はい……なんでひゆか？明久君？」

……ん？ひゆか？

おかしい、姫路さんはこんなへんな喋り方をしなかったはずだ。

そう思っつて、少し逸らしていた目を姫路さんに向けると、姫路さんは頬を真っ赤に染めて、とろんとした目をしていた。

たしか前にもこんな姫路さんを見た覚えが……

「そうそう、あの、打ち上げの時だ」

えっと……確かあの時の姫路さんは

「……あのさ、姫路さん。ちょっと、その手に持っている缶を見せてくれる？」

「はい……いいでひゅよ。明久君」

微妙にフラフラしている姫路さんから受け取った缶は、ジュースのように書いてある、カクテルと言うお酒だった。

「姫路さアん！？どこでこれを手に入れたのさ！？」

思わず大声を出してしまう。

「……ん……」

と、熱っぽい吐息を漏らしながら、姫路さんが僕の方へとにじり寄って来た。

「ど、どうしたの？姫路さん」

「あきひしゃくん！」

「は、はい」

「ダメじゃないですか！男の子がそんな無防備でいちゃ！」

おかしい。姫路さんの言っていることが良く分からない。

「そんな無防備だと……襲われちゃうんですからっ！」

言っ、姫路さんは僕に飛び掛ってきた。

いきなり飛び掛られて、踏ん張ることも出来なかったので、僕は姫路さんと観覧車の床に倒れてしまう。

っ、ええ！？普通、こういうのって男女が逆じゃないの！？

と、姫路さんは、僕の上でスースーと寝息を立て始めた。

たしか、風祈が酔いを飛ばせるって言うてたから、後で風祈に頼んでおこう。

「……きつと無理だと思うけど、ちょっと、勇気を出して告白してみようと思ったのになぁ……」

僕は、ちよつと残念に思いながらそう呟いた。

おまけ、瑞希サイド

……えつと……明久君の今言ったことは、本当なんでしょうか……？

風祈君に、酔っ払ったような感じで乗れって言われましたけど、さすがにやりすぎたかなと思っていたのに……。

それにしても、あれが演技だと気付かない明久君も相当だと思いきすけど……。

……いえ、良く考えたら、寝たふりをしていた方が本心が聞けたんじゃないでしょうか？

だって、明久君、きつとする気が合ってもしなかったような気がしますし、もしかすると告白も違う物かも知れませんし……。

それに……それに……。

ああっ！もうっ！こんな事考えるよりも、行動あるのみです！

絶対に、明久君と結婚して見せますっ！

第三十二問（後書き）

瑞希よ、何足跳び？

とまあ、ツツコミから入りましたが、いきなり次回予告。

次回は、残りの組の観覧車内での会話をメインで行かせていただきます。

因みに、腹黒コンビは……

第三十三問（前書き）

今回後半、全く意味不明です。

……なんであんなの書いたんだろう……。……。

第三十三問

五組目

ムツツリーニ&愛子ペア

「……………!!」

「あはは、ムツツリーニ君。そんなことしても、上の観覧車に乗ってる人のスカートは見えないよ?」

ムツツリーニ君は、観覧車の中を動き回って上の瑞希ちゃんのスカートを覗こうとしていた。

……………。

「……………俺は、別に覗いていた訳じゃない」

ムツツリーニ君が、首をブンブン振りながらそう言う。

「へー。じゃあ、何してたの?」

「……野鳥観察」

驚くほどテンプレな答えを返してくれた。

「へー、じゃあ、いつでも出来る野鳥観察の方が、ボクと一緒にいるよりも楽しいんだ」

ジト目で言うと、ムッツリーニ君は顔を真っ赤にして、

「……そんなこと……ない（ブンブン）」

と言ってくれた。

「なら、野鳥観察は止めて、ボクと一緒に喋ろうよ」

ボクが言うと、ムッツリーニ君は若干名残惜しそうにした後、座席に戻った。

以下より、保健体育の会話（18禁）のため、自主規制。

六組目、雄二&翔子ペア

ミシミシミシッ！！と観覧車に音が鳴り響く。

<自主規制>

七組目、風祈&優子ペア

「……はあ。今まで勝手に見てきたが……最後の組はやめておくか」

「へ？なんで？」

優子が、俺の言葉に不思議そうに聞き返してくる。

「いや……お前が言ったんだろ？『人の恋路を邪魔するな』って」

肩を竦めながら俺は優子に言う。

「え……？あのペア割って、そう言うことだったの……？」

「正確に言えば、フラグのへし折りなんだが……まあ言いか」

俺がボソツと言った声は聞こえなかったようで、安心した。

「……そう言えば、観覧車に乗るのって最初から決まってた計画なの？」

優子が、ひとまずこの後の組のことを頭から追い出して聞いてくる。

「んまあ、決まっているか決まっているかで聞かれたら、決まってたな（ブンツ）」

「どっちも決まってるじゃないの。……って、今なんで窓の外に短剣を投げたの！？」

優子が俺がぶん投げた『天魔ソード（以前のデートっぽい時に上映中だった映画に出てきた武器で、『天魔の力』を小刀に変えたようなもの

だ）』を見て、そんな声を上げた。

「いや……優子に変な視線を送る馬鹿と、下で見ているバカにお仕置きをしようと思ってな」

因みに、窓から飛び出す瞬間に転移させたので、観覧車が壊れる心配も無い。

……いや、天魔の力が当たったら、観覧車なんぞ一瞬で碎け切るかな。……ボックスじゃなくてその物が。

「って言うか、あれ死ぬわよね？」

「大丈夫だ。目の前が数十キロほど消し飛ぶだけだから。それに、一応人に当たる直前にゼロになるように出来ている」

下から響く、『いきなり僕の目の前が消し飛んだんだけど！？』と言う声は、俺には聞こえなかったと思っておこう。

「……しかし、優子を変な目で見るやつらが居るのは心配だな。四六時中一緒に居られる訳でもないし」

俺が顎に手を当てながら言うと、優子はどう勘違いしたのか、顔を

真っ赤にしていた。

「おーい、コラ。戻ってこーい」

ぺちぺちと優子の頬を叩きながら言つと、やっとトリップしていた優子が戻ってきた。

「あ……ふおめん。……で、何の話だったっけ？」

「今、確実に噛んだよな。いや、まあ、優子にも身を守る手段が必要かと言つことなんだが……」

俺は再び考える。

『学園個人』の力で優子に『アクセラレータ一方通行』やら、『ボンバーランス室素爆槍』
(い

、『レールガン超電磁砲』なんかを持たせることも出来るが……なあ。

「暴走の危険つてのがあるんだよな……」

「へ？なにが？」

おっと、どうやら声に出ていたらしい。

……しかし、どうするか。『学園個人』の超能力じゃあ危険だし…
あの『一方通行』^{アクセラレータ}ですら完璧に使えてないからな…

…。

「……………ん？完璧？」

俺はパチンと指を鳴らす。

「優子、ちよっと目を閉じてろ」

「……………え？」

優子が、微妙に真っ赤な顔をして聞き返してくる。

「だから、ちよっと目を閉じてろって」

俺が呆れた調子で言うと、優子は、「……………そうよね、風祈にそこま

でを求めた私がバカよね」と呟いていた。

……何の話やねん。

まあとりあえず、優子が目を閉じたのを確認してから、俺は優子の唇にキスをする。

「僕の大切なファーストキスを、あげちゃった」

安心院さんっぽく言ってみたが、なんか気持ち悪くなったただけだな。

……ファーストなのは事実だが。

「……………（パクパク）」

なんか、優子が顔を今までで一番真っ赤にして口をパクパクとさせていた。

……どうでもいいが、金魚見てエだな。

「……………まあ、『口写し（リップサービス）』で出来たようだから、

いいか」

俺は『^{アナリシス}解析』でちゃんと優子に設定をちよつといじくつた『^{ジ・エンド}完成』が入ったのを確認して、一つ頷いた。

因みに、優子に渡した『完成』は、『使用者本人が身の危険を感じたときに限り、発動できる。尚、異常以外にも超能力なども可能である

』 つつう設定を付けといた。

じゃねえと、余計に危険になるからな。……いくら完璧に超能力でも使えるようになるとは言え、世界中から襲い掛かれたら世界が滅び

ちまう。（主に俺たちで）

「さてと、折角（？）の二人つきりなんだから、もっと別の話でもコイツ、気絶してやがる」

優子は顔を真っ赤にして気絶していた。

起こすのも悪いので、ベクトル変換やら発火能力者の温度調整やらで風邪を引かないような温度を作って眠らせておく。

……ったく。何がそこまで顔を真っ赤にして気絶するぐらいのこと
があっただんだ？

ここは観覧車の頂上だから、下に変態が居たとしても見えないだろ
うしな……（もっとも、居たとしたら俺が気付くだろうし、赤屍さ
んに連

絡を取って消えてもらうが）

……ミステリーだな。

「さてと、時間も時間って言うか、閉園時間だから、そろそろ帰る
んだが……」

俺は優子を背負いながら、前にいる約四名をジッと見て、

「なんで、明久はそんなに顔が真っ青なんだ？」

「なんか怖いのが飛んできたからだよ！っていつか、あれ絶対風祈でしょ！？」

明久が憤慨しながら言ってきた。

「何もしてませんよ。私はあくまで何もしていません。そんなのはただの『不慮の事故』ですから」

言いつつ、床に走った傷に手を当てて、傷を『なかったこと』にする。

「で、そっちの姫路は……」

「ああ、姫路さん、お酒を飲んだみたいで。様子がおかしかったんだ」

明久が心配そうな顔をする。

……いっけね。姫路に言った事忘れてた。

「んなら、酔いを醒ますぞ？……変なことはやってないよな？」

「や、やってないよ！僕がそんなことするように見える！？」

「……見えねえな。どっちかって言うと、襲われる側だ」

叫ぶ明久にそう返したと、姫路の耳元で、

「（姫路、とりあえず演技はもういいぞ……って、普通に寝てんのかよ）」

俺の言葉に反応しないので、少々電気信号を見させて貰うと、完璧に寝入っていた。

……以外にこの観覧車、長かったからな！。

「明久、酔いは冷めてるが、寝てるようだから、お前が運んで行け」

「あ……うん。分かったよ」

明久が頷くのを見て、俺はもう片方に目を向ける。

「……で？キヨン。お前はなんでそんなにボロボロなんだ？」

顔がボロボロって言うか、腕も変な方向に曲がっているように見えるが、大丈夫なのか？……大丈夫なんだろうなあ。

「……いや……な？」

……まあ言いか。これまた寝入っている島田が不機嫌そうな顔してないし。

「まあどうせ、明久が襲わないように家まで行くんだがな」

『そりやそうだ（です）（じゃのう）』

「皆！？なんで満場一致なのさ！」

第一、この間みたいな三下……そう言えば一通さんが三下って呼ぶよな……不良で良いか。

まあ、不良がでないと限らんし、一応護衛は行かないとな。

……不良が五人以上いたら、明久は一瞬で負けそうだし。

「んじゃあ、帰るか」

すっかり忘れてて使ってたが、ババアから禁止されてたんだっとな。

……今更だが、極力使わないようにしよう。家に帰って作つといった方がいい気がするものもあるし。

まあ、そんなわけで、まずは姫路の家に全員で向かって、その後解散と言うことになった。

く以下より、微かにというか、酷いというか……想像力豊かな人なら、割と吐き気がこみ上げてきそうな話になりますので、苦手な方は」

注意ください。

別に、ここから先を読まなくても次回からの話が分からなくなるということは無いので、飛ばしても全く問題は無いです。

……べ、別に読んで欲しいって言っている訳じゃないんだからねっ
！！>

「……」

「り、風祈？顔が怖いよ？」

俺が後ろの方にイライラしながら歩いていると、戸惑った感じで明
久がそう言ってきた。

「ああ、スマンな。あと、お前らにキレてる訳じゃないから安心し
る」

明久の頭をグリグリとなでながら俺は言う。

「そうだ。薫！ちょっと優子背負っててくれ。なに、すぐに戻る」

俺は、有無を言わず薫に優子を預けて、来た道を走って戻る。

……さつきから、念のために入れておいた感受性に、女性陣への下卑た感情が流れ込んできてるんだつつうの。

……ったく、吐き気がするわ。

「っと、一応冥府のやつらに確認取るか」

俺は、一度時間を止めて、プルフリッヒの振り子で冥府に連絡を取る。

……さて、誰に繋がるか……。

『アカロシア ブッッ』

名前が出た瞬間にいったん蔓を切る。

……あの人は嫌だ。だって、振り子に連絡してきてオドラと戦わせようとするんだもん……。

ってか、なんで麗王に繋がるんだ？忙しくないのか……ああそうか、あの人は職務をサボってるってこの前オドラがばやいていたな。

そんな訳で、もう一度冥府に連絡を取る。

『おお、あの時の』

どうやら、今度はドラセナに繋がったらしい。

「あー、お久しぶりです。いきなりで悪いんですが、今から送る人間共って、案件にありますかね？」

今俺の前にある角を曲がると見える奴らの情報を、ドラセナに送りながら俺は尋ねる。

『こやつらなら、今丁度アコニットに向かわせようとしていたところじゃ』

ドラセナが、数秒と待たずにそう返してきてくれた。

「ああ。なら、姫さんには行かなくて良いって言うておいてください……いや、人界には言うてきてもいいと」

『まあ、案件をそなたがやってくれるというなら、丁度良いし、ア
コニットに最近人界に行かせろってせがまれておったんじゃ。……

麗王

が簡単にでれないのは分かっていると思うのじゃがな』

ドラセナはそこまで呆れ調子で言って、その後俺が言った言葉に驚
いたような声を上げ、

『……別に、それは問題ないぞ。「あの者」は教誨師 いや、
グリモアリスに協力している者じゃからな』

マジか。あの人、どんだけ忙しいんだ。オイ。

「まあ、別に罪に問われないなら良いんで。それじゃ」

そこで蔓を切って、時間も動き出させる。

そして角を曲がると、そこには五人の不良共がいる。

「……さてと、あまり返り血はつけないんだ。ついでに、能力

はあんま使いたくないから、二つで済ませてもらうぜ？」

俺はそこでいったん言葉を区切り、突然現れた俺に驚いた不良どもに、こう言った。

「『婦女暴行』、『幼女誘拐』、『殺人』……後はなんだったか？ さつき聞いたのに忘れちゃったな。まあ、とにかくここまでやったお前

らが、これ以上生きていられると思うな？」

俺の言葉への反応を待たず、不良 言っておくが、学生じゃないぞ？二十代後半ぐらいの男共だからな？

まあ、そいつらに取り出した螺子をチラつかせ、

<以下より恒例の第三者視点。本格的に気分が悪くなる人がいるかも。……いない？いや……いるかな。ついでに、彼は殺しませんが死人

はです。苦手な方は本当にご注意を。引き返すなら今だ！>

<書いてみたら思いの他グロかったので、一部と言うか九部くらいカットします。大体意味は通る……かな？>

ドストドストッ！！と音が鳴り響く。

「ちょっとやりすぎちゃったかにゃーン？まア、どうせ俺はここで放置だな」

風祈は、そう言って携帯電話を取り出しながらその場を去る。

彼はこう言った。

螺子で壁に止めた男達の方など、振り返る気にもならない。

「…………おや？」

漆黒のメイド服を着た女性が、壁に止められている不良たちを見つけて、そんな声を上げる。

「ちょうどいい！おい、女。死にたくなかったらこいつを抜

」

不良の一人は、何故かこの状況でも脅して言う。

「おおコワイ。コワイですねえ。ですが、一言言っておきますと

」

ニツコリと、笑みを浮かべて女性は言う。

「何笑ってやがる！早く

」

女性はさらに笑みを深くして、

「あなたもう死んでますよ」

スパツと言う小さな音と共に、不良の一人の顔が口と鼻の間に一閃、右目と左目の間から顎までに一閃。

そして、上半身と下半身を切断される。盛大な血飛沫を上げて、上半身から内臓をボトボト落としながら不良の一人は、

「き……気がつきませんでし……」

そこで、完全に事切れる。

今まで生きていたのは、彼女の腕が凄まじかったからだろう。

「クス……これに懲りたら、もう少女を襲うのは止めることですね……」

彼女は軽く血の着いたメスを振るって歩き出す。

「ああ、これもまた言い忘れてましたが」

彼女が歩き出したことで、未だに自分のことしか考えられないのかホッとしていた不良たちは、地面が横になっているような錯覚に陥った。

。

「あなた方ももう死んでますよ」

ブッシャアアツツ!!と、血が噴き出す音が路地裏に響いた。

第三十三問（後書き）

赤屍さん怖っ！！

……ああ、ついに死人を……

いや、前は死んでから、死を『なかったこと』にして復活させてたけど、今回は生き返らせないから……一応酷い？

ただ、ああいったのが苦手な人は読んでいないと思うので、今回は短め。

……どうせ、読んでも読まなくても、お前の書いたあとがきは殆ど変わらないだろ。と言うツツコミは止めてください。傷つきます。

「……クス。なぜ私が出されたのでしょうかねえ？」

キヤアアア！！？赤屍さん！？なぜこんな所に！？

あつ、止めて！メスを投げるのは止めて！

「……なぜ彼女は、あんな半端なシーンを追加したのでしょうかねえ？」（赤屍さん）

番外編六 異常気象……にも程があるだろ！？（前書き）

しつこいようですが前半意味不明。

……超だいたい遅れましたが、この間の大雪から考えていた話です。

番外編六 異常気象……にも程があるだろ！？

昨日、帰ってすぐに家に地下を作り、家のスペースを大幅に拡大した。

もしも能力が使えなくなってもいいように、何が来ても何とかかなりそんな武器の製作だ。

まず一つ目は、一方通行のチョーカー。

勿論、『自分だけの現実』バーソナルリアリティは付加させた状態だな。

自称神がいろんなところに世界を繋げてくれるおかげで、シスターズ妹達の代理演算機能が使えるらしい。

おかげで、昨日は一方通行と番外固体と打ち止めと、と会話をひたすらさせられた。

……なんでお前ら、チョーカー通して会話できるんだよ。

……まあそれは置いて、次にオブジェクトの製作。

まずは主砲を含んで全長150メートルの球型。

最高速度、時速410キロ。

装甲、溶接などの不純物を含んで5センチ×200層。

主砲、高出力レールガン×1。

副砲、レールガンなど。

そして、メインカラーがグレー。

静電気式推進システムで高速移動する陸戦特化型第二世代のオブジエクト、

「……ブレイクキャリアー。完成品にすると、相当マズイ物だよな」

俺は、この怪物兵器を見上げてため息をつく。

その点、もう一つの方は、

「射撃訓練もかねてみるか」

俺は言つて、この整備場をトバリで囲つて、その上からさらに『デスト破
ラクション・ファイルズ
壊領域』を張る。

無線で動かしてこちらに持ってきたそれは、

まあ、表し方を借りさせて貰えば、

現れたのは、全長五メートルのカマキリに近い容姿だ。

四本の脚で地面に接し日本の鎌を構えるのではなく、二本の鎌と二本の腕を持ち、日本の脚で直立するような外観だった。

そして開いた装甲の中から飛び出した半透明の羽が、常人の肉眼では捕らえきれない速度で、残像を残す感じで羽ばたいている。

カマキリの背部には巨大なドラムのような物がある。それは大量の銃弾を収めておくためのものだ。

そして、鎌の変わりに折りたたまれた前足の先端には保護カバーがあり、二つに開いたその中には人工物の兵器が取り付けられている。

三本の銃身を束ね、回転するように作られたもの。

それでいて、火薬の力を使わずに発射されるもの。

電磁力の原理を応用して金属砲弾を撃ち放つもの。

前脚保護カバーの側面にはこうある。

ガトリング
Gatling
レールガン
Railgun、と。

ツツツツツツツツ！！！！！！と、音すら消えた。

「壁がギリギリ耐え切ったって感じかよ……。強固な整備場にしているとよかった。未元物質製じゃなかったら、ぶっ壊れてたな」

俺は胸を撫で下ろしながら、砕けた破片を掃除してまた壁を作り直

す。

にしても……、

「これが、第三位を一点だけだが超えたGatling Rail^{ガトリングレール}gun^{ガン}か……怖すぎるな。良く浜面は耐え切ったもんだ」

浜面のことを今まで以上に尊敬するぜ……。

「……っと、そろそろ朝食の時間だな」

俺はカンカンツと階段を駆け上り、今までいた地下四階の整備場からいつもの家まで一気に行く。

……狭すぎて、この階段じゃあ？ターンは無理だな。

って言うか、Vターンの方が時間がかかったまう。

「おはよう。風祈」

「ああ、おはよう。優子」

俺が階段から出ると、優子が席に座っていた。

「……あれ？そっいえば、家ってそんな階段あったっけ？」

今更ながら、優子がツツコンでくる。

「ああ、これは昨日帰ってきた後に俺が作った」

国を脅して、物資やらを持ってこさせてな。と言っ事実は伏せておく。

「……ああ、そうなんだ……」

そこまで言って、優子は何かを思い出したように顔を真っ赤にして目を逸らした。

……やっぱり、ミステリーだな。

まあ、何か様子が変な優子と、ぐったりした様子の秀吉と風香、朝食を作っていた薫と一緒に朝食を食べ、学校の用意を使用したところ

で、ふと窓を開ける。

「……………おう？」

窓を開けると、外が真っ白だった。

より正確に言えば、雪が異常なほど積もっていた。

つまり、窓が埋まるぐらいに。

「……………異常気象にも程があるだろ……………。今、もうすぐ夏に入らって時期だぞ……………」

呆れ顔で言いながら、窓を全力でぶん殴ってベクトル変換を使い、その衝撃を外の雪にだけ伝える。

それで雪を吹っ飛ばして、すぐに温度調節をして薄い膜を作り、雪が来ないようにする。

家は守らないとな。……どうせ雪程度じゃ壊れない造りだが。』
（『テレスマ
ダークマター
未元物質』 + 『天使の力』製の）

「あれ？どうしたの？」

風香が、呆れ顔で外を見ていた俺にそう言うてくる。

「……いや、妙な異常気象でな。雪が異常に積もってやがる」

それでも一応、もう少しこの地域から削っておいた方が良さだろう
と思い、まあ、普通に雪が降ったという程度（それでも、この時期
にこの

量積もるのは異常だが）というか、普通の靴が埋まるくらい残して
おいて、それ以外を吹っ飛ばす。

「……なにか、嫌な予感がするんだけど……」

薫が、引き攣った笑みでそう言うていた。

「第一回！（雄二の声）」

「二年生最強クラスはどこだ！（明久の声）」

「……………勝負方式は、ムッソーニ雪合戦」

学校に行くと、そんな事を明久たちが言い出した。

と、スピーカーからスネークの声で、

『これより……………学園長の意向により、二年生で雪合戦を開始する』

と言う放送が入った。

……………その後の放送を聞くに、どうやら一、三年生は今日は学校が休みらしい。

……………ババアよ。それはいいのか？

「……………私は、それよりも気がかりなのが居るんだけど……………」

と、薫が、Dクラスの方を引きつった顔で見る。

清水か？と思ってそっちを向くと、

「……平賀……いや、あれは……」

Dクラス代表、岡本さん……一方通行がいた。

「あれ、絶対ベクトル変換使うよね。……フッ」

風香が、黒い笑みでそんな事を言っていた。

「……それには俺も同感だが……」

そろそろ、コイツが、俺達が始めて自称神にあつたときに貰ったらしいあの能力を、また制限した方がいいかも知れん。

「……だってなあ。ありゃあ……」

つと、コイツは今は関係ないな。

「……あれ？そういえば、キヨンと利春は？」

「んお？本当だな。どこへ」

と、そこで全長100メートル程度の、球型の物体がみえる。

「……そういえば、これって兵器だったな」

俺は、全長約100メートルの球型の物体
ガトリング03
3を見て、呟く。

「確か、最高速度530キロ、陸戦特化型第二世代だったわけ？」

「んで、エアクションフロートとキャタピラ式推進システムで動く怪物兵器だろ」

「主砲は、連速ビーム式ガトリング砲×2で、副砲はレールガン、コイルガンなどだったわけ？」

薫の言葉を俺が引き継ぎ、俺が引き継いだ言葉を風香が引き継ぐ。

「風祈、あれは、お主が作っておいた物と似ているのじゃが……」

「ブレイクキャリアーのことか？ だったら、似ているのも無理は無いだろ。これとあれは、根っこの部分では同じ兵器なんだから」

秀吉の質問に、ガトリング033……『正統王国』ではラッシュだったか？ まあ、それを指差しながら答える。

ん？ 優子？ アイツなら到着して早々走ってったぞ？ なぜか顔を真っ赤にして。

「……破壊するか？」

誰が乗っているかは分かっているから、別にブレイクキャリアーで破壊しても問題ないだろ。

「風祈、あれは周りにも酷い被害がでるから、ここでは撃てないよ」

風香がそう言う。

ああ、確かにそうだったな。ここに向かって撃ったら、学校が粉々になっちまう。

「……そういえば、『極東の島国』でオブジェクトは出来たって言ってたよね……。まさか、これが原因なんじゃ……」

薫が、思い出したように言いながら顔を引き攣らせていた。

「あれは学園都市のような気もするが……それよりも、これって……まさか、雪合戦の仕様か？」

こんなもん使ったら、ガチの合戦じゃねえか？

「……まあ、元平賀をぶつけておけば問題ないだろ」

反射するしな。と付け加えて、俺たちは雄二の元へと向かう。

「雄二、ババア長の雪合戦って、クラス分けのチーム？」

「ああ、全クラスで一斉にやるサバイバルらしいぞ」

薫の問いに、雄二が答える。

どうでもいいが、後ろから響いてくる音がうざい……。本気で破壊してやるうか。

と、俺はグラム単位の値段がプラチナより高いプラスチック爆弾、『ハンドアックス』に電気信管を突き刺しながら考えて、

「どうせ、すぐに動けなくなるし、ほかっといてもいいんじゃない？」

と言う風香の言葉で、あの巨体がこんな場所でそんなに動き回れる訳じゃないことに気付く。

「なら、あのうざったい音もそのうち聞こえなくなるな。……なら、これはどうしようか」

言って、『ハンドアックス』を掌で弄びながら考える。

「……まあ、持っとくか。爆発しても、大したダメージにはならん

し」

そう結論付けて、制服のポケットに『ハンドアックス』を捻じ込んだ。

「……カオスですう！！？」

サバイバル雪合戦が始まったその光景は、それはもうカオスだった。

つつても、原因は元平賀とラッシュの対戦の流れ弾なんだが、

「ぐおッッ！」

あ、雄二がガトリングからの雪球受けて吹っ飛んでいったな。

「……ったく、どっちも無駄に威力があるからなあ」

俺は腕を伸ばして、数十メートル吹っ飛んでいった雄二を空中で回

収しながら呟く。

と、見ていた戦闘風景から、こっちへ雪球が飛んできた。

「……まさか、もう使うことになるとはな」

俺はポケットから『ハンドアックス』を取り出して、雪の上において爆破。

衝撃で巻き上がった雪を盾にして、凶器の雪球を避ける。

「……っていうか、反射しないで欲しいよね」

薫が、ため息混じりにそう呟いた。

……ああ、全クラスの女性陣（秀吉含む）は別の場所に行かせてあるぞ。傷つかれちゃ困るもんでな

「……にしても、フラッグを摂るってゲームなのに、負傷者が多すぎるだろ」

聖母の微笑み（トワイライトヒーリング）で負傷者を治しながら、俺は言う。

因みに、他のクラスはすべて摂られているので、FクラスVS Dクラスが最後の戦いだな。

……それも、一番危険な。

「……ん？なんか引つかかっているな」

と、腕を戻そうとしたら、気絶した雄二が手に握っている物が、遊んでいたやつらが作っていたかまくら（よく壊れてなかったな）に引つか

かっていた。

何を持っているか気になったので、ちょっと軌道をずらして雄二をこっちに引き寄せる。

「……これって、Dクラスの旗だよね？」

戻ってきた雄二の手を見た薫が、なんとも言えぬ顔で言う。

「……そうだな。なら、あの戦いを終わらすか」

俺は、未元物質の素粒子を混ぜ込んだ雪球を一つ、雪球と言つか氷柱の様な雪球を一つ手に持ち、

「せーのつと！」

掛け声と共にベクトル変換 $e\ t\ c$ を使って、素粒子を元平賀に、氷柱をラッシュにぶん投げる。

雪球が頭に当たった元平賀は、平賀に戻っていたが……。

「あれも……届いたかな？」

薫が目を凝らしてラッシュのコックピットを見る。

……どうやら、キレイに突き刺さったらしいな。

俺はパンパンッと手を叩きながら、ラッシュを回収しに行く。

番外編六 異常気象……にも程があるだろ！？（後書き）

あまりダラダラ続けても意味が無いので、一話で終了。

……本当は五話ぐらい出来たけど、他にもやりたい話はあるので一話にまとめました。

尚、最初のあれは複線……です。回収できるかは知りません。

第三十四問

「……さて、皆。そろそろ、期末テストの勉強をしなくちゃならないんだけど……」

私　霧沢薫が、Fクラスの教室で周りにいる明久たちに向かって言うつと、

「ああ、そうだったな。んじゃ」

と、雄二が返しかけたところで私の後ろに居る風祈を見て固まった。

「……………世界滅びねーかなー」

「（おい薫！アイツなんであんなこと言ってるんだ！？）」

雄二が小声で言う。

「（ああ、あれは……なあに、心配要らないよ。あれはちょっと『ワールドイグニッション』を制御しているだけだから）」

「（……待て、新ワードが飛び出してきて俺の処理が追いつかん）」

雄二が額に手を置きながら言う。

……うーん。

「（まあ、簡単に言えば風香の超能力って言うのかな？『世界のありとあらゆる物を操作する』っていう能力の）」

「（……だから、お前達、風香には召喚獣の能力を使わせなかったのか。あんな前半に最強が三人もいたんじゃないろマズイから）」

私が言うと、雄二が納得したような、呆れた顔になっていた。

「（ついでに言えば、あれ、あんまり使わないと所有者が真っ黒になっっていくって言うか……まあ、超ドSになっっていくんだよ）」

私が妙に清々しい、ツヤツツヤの風香を指差すと、雄二が小刻みに震えだした。

……あれで分かるとは、雄二の危機感地能力もすごいなあ。

「……まあ、どうせ一人と一匹チートが増えたんだから、もう少し増やすつもりだけだね」

と、私は締めくくって、右腕に幻想殺しをつけながら風祈の頭を殴る。

……下手に風祈が幻想殺しを解除しちゃったら、後々めんどくさいもんね。

と、パキンッツ！と言う音と共に、いつもの風祈に戻った。

……よし。これでオッケー。

少々地獄のような能力に意識を乗っ取られかけたが、薫のおかげで戻ってこれた。

と言うわけで、ここからは俺、霧沢風祈が語らせてもらおう。

「……ふ、風祈。もう大丈夫か？」

雄二が、顔を青くしながら俺に尋ねてくる。

「ああ、もう大丈夫だ。……で、なんでお前はそんなに顔が真っ青なんだ？」

俺が呆れ顔でツツコムと、雄二はなんでもないと行って目を逸らした。

……大方、薫がなんか言ったんだろう。

「……ったく。まあ、それは置いておくが。勉強会の話だったよな？」

俺はムツツリーニに確認を取る。

「……（コクッ）」

「んなら……明久、ちょっと来い」

俺は廊下に向かい、明久を招き寄せる。

「風祈、僕はそう言う趣味ないよ!？」

「よし分かった。アキちゃんの写真をばら撒いてやろう」

明久の頭を手で叩きながら言って、教室の扉を閉める。

「……さて、まあ、お前はアイツらから……特に姫路から離れたほうが良いだろうと思ってな」

肩を竦めながら、俺は明久に言う。

「ま、明久。家での勉強では、その紙に書いてあるとおりにやれ」

ポイツと明久に、家での勉強のやり方を書いた紙を投げる。

「え……でも風祈、これ、殆ど勉強時間が無いんだけど？」

「いや、気にするな。いいから、家でやるときはその予定でやれ。」

んで、最高のシチュエーションでやれや」

「……な、何で知ってるの？」

「気にするな。見れば分かるしな」

俺は明久の頭にポンツと手を置いてそう言う。

「オラ、さっさと帰るぞ。ついでに言っておくが、お前だから使えるのであって、他のやつにはそんな勉強法使えないからな？」

明久にデコピンをしながら、念を押す。

「わ、分かったよ。じゃあ、雄二たちにも黙っておくね」

「ああ、それが良い。雄二には、下手に勉強法を教えたら霧島に殺されるかも知れん」

などと軽口を叩いて、教室に戻る。

「さアて、勉強会の初日だが……」

教室に戻って、おれはそう言う。

……そういえば

……確認してみるか。

「後で、この店に全員来い」

俺は、Fクラスメンバーに紙を渡して、教室を出る。

他のやつにも渡さないとな。

「さつてと、最近バイトを始めたあそこに行きますか」

俺は、カバンなどを部屋に入れた後、優子にそう言った。

「ああ、行ってくてあそこのことだったの？」

さすがにもう、意味が分からんが顔を真っ赤にするということがなくなつた優子が、納得といったような顔でそう言った。

……いや、あえて服装にコメントはしないがな（主に俺の精神的な意味で）

「薫たちも待っているだろうから、早くいかねえとな」

俺はバイトの制服＋ が入ったカバンを持ちながら優子に言った。

……一方さんの翼で飛ぶのは、後ろに乗っている奴が危ないからな。優子にはできん。

とは言つても、駅までは座標移動で軽くいける。

で、俺らが切符を買って改札前に来た所で、

ピリリリッと携帯が鳴り響く。

俺は若干鬱陶しいなと思いつつも、切符を改札に通してから画面を見る。

『edisniform』

どうやら、コイツが電話をかけてきてくれたらしい。

「……り、風祈？どうしたの？」

優子が、俺の横で心配そうにそういつてくる。

……おっと、今は優子も横に居るんだったな。

さっさとアイツらも居るあそこにもいかなきゃいけねえんだから、手早く済ませるか。

「もしもし？」

声色を変化させて、岡本さんの声で電話に出る。

『……へへへ。やっと出てくれたね、お兄ちゃん』

なるほど。確かに、邪気満点の幼い男児の声だな。

ってか、『やっと』ってほど無視したわけでもないが。

「……お前……誰だア？」

早くでてこねえかなー。と思いながら、俺はそう言う。

『ボク？ボクわねえ……。《たつく》』

そこまで言ったところで、電源ボタンを押して通話を終了する。

「……あれ？電話」

優子のその言葉に優子の携帯を見ると、先ほどの俺の携帯に出たときと同じく『edissnimorf』と言う文字が表示されている。

「《中に居る》……悪イが、ブ・チ・コ・ロ・シ・確定だ」

言つて、俺は霊体物質化能力を発動。

隣にいる優子を俺のほうへ抱き寄せ、効果範囲に優子も入れる。

と、この力につられてやってきた、確か神クラスかその辺の悪霊だった《中に居る》が誘き寄せられた。

「神クラスには神クラスがいいよなア？」

そう言つて、昔見たあの小説を思い出して能力生産。

「『グレートスピリッツIN五大元素 オーバーソウル スピリットオブドリーム』」

一瞬、ここまでやるべきではないと思つたが、まあ良いか。優子に手を出した罪は重い。

「ああ、そういえば、お前もう死んでたな。……どっちにしろ、もう消されてるんだが」

瞬間、黒い影

《中に居る》は霧散して消えていった。

これなら、霊体物質化能力は使わなくて良かったか？

……まあいいか。犠牲者でもないし。

そういえば、勉強つながりで思い出した非常にどうでもいいことなんだが、この間分かったことが一つある。

つっても、自称神が言ってたんだがな。

どうやら、俺たちの能力で禁書のキャラたちの能力を使うのは、

『演算能力を得る』のではなく、『自分だけの現実』を同じにする
バーソナルリアリティ
と言っ物らしい。

つまり、無意識に一方通行のような演算をしているってことだな。

………どうりで、800点オーバーが出来る訳だ。

まあ、全て他愛の無い戯言だけだな。

……ええ、使いたかっただけですとも。戯言を。

とまあ、そんな戯言（これは普通に使うが）はどうでもいいんだが、

「ふ、風祈……えっと、何……？」

この間よりはマシだが、なぜかまた顔を真っ赤にした優子が出来ちゃった。

「ああ、なんでもない」

抱き寄せたままだった優子を放して、

『チャラチャラチャラン　チャララララン

一番線に電車が参ります。黄色い線まで、お下がりください』

おいちょっと待て、いまファ　マの音楽流れたよな！？

……とりあえず、やってきた電車には乗るが……

『チャラチャラチャラン　チャララララン』

「フ　ミマしつけえ!!」

電車に入った途端鳴った　アミマの音にキレながら、どこの電車かを見る。

「……ああ、水坂財閥の製品なんだな」

何でアイツがこんなの作ってるんだと思いつつも、一応納得しておこう。

……一々あれの行動の意味を考えていたら、人生の半分はどうでもいいことに費やされるだろうからな。

第三十四問（後書き）

間が要らないと思います（全部だろというツツコミは禁止）

さて、いつもどおり（？）の言葉から始まった今回の話。

……なんだか、回を増すことにクオリティが下がって言ってる気がする……。

下がる余地があつたことに驚きですが。

まあ、次回は勉強会一日目（多分それだけ）の予定です。

第三十五問

「こ、これは決して、最初が書けなかった訳じゃなくて……」

「決して書けなかった訳じゃ無いんだからアアアアあああああ！
！」

「……アイツ（自称神）……何しに来たんだ？」

「……さあ？」

走り去っていった自称神の後姿を見ながら、俺は優子に言う。

「……ところで風祈。今のキレイな人は誰……？」

「はっはっは、優子。アイツが綺麗な訳が
」

と、優子が天使の笑みで非常にマズイ物を展開させているのに気付いた。

「『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』だとう……！？見せた覚えがな

「

俺がそこまで言いかけたところで、

「何でここにきて最強の羽が生えますかねえ！？え、俺そんなにマズイ事言った！？」

……なんかもう、一人で世界を相手にしておつりが来るレベルの天使っぽいのが俺の前に現れてしまった。

……生きてたどり着けるかな。俺。

「こんにちはー。すいません、ちょっと手伝ってもらえますかね？」

……真っ暗な視界の中、声が聞こえる。

パチリと俺が目を開くと、そこにあっただのは顔だった。

「
（唯今堪え切れない吐き気に抗
わずにしております。しばらくお待ちください）」

ボケ親父の顔だった。ウェッ。

「……さてと、とりあえず着替えたし、清水に連絡を……いや、取
らなくていいな」

俺は、バイト先 『ラ・ペデイス』の更衣室から出て、そこ
まで言いかけて二階へと続く階段を見る。

…… 前回は、

「……（ボタン）」

俺が部屋に入ると、部屋一面が…… まあ、俺には大した知識が無い
から何にも言えんが、おそらくヘヴィメタ系のそれなのだろう物で
埋ま

っていた。

回想終わり。

……さて、茶番はこの辺にして、一応あいつらが集まっている上に行っておくか。

優子は着替えさせて意味も無く上に置いていくが。

「ヤッホー 元気に勉強してるかなー野郎共」

声色変化させて、CV野中藍で勉強会の会場である、清水の親父の部屋に呼びかける。

『え、今の誰に声！？清水さんお姉さんいたの！？』

『……………』

『美春。問に答えたてやって。明久が不憫』

『美春は実姉なんていません』

……なんか可哀相な会話が聞こえてきた。

……明久よ。ドンマイ。

「いや、まあ、マジメにやっているんだろうが……監督として天才少女を置いていくぞ？」

扉をガチャッと開けて、後ろに立っていた優子を放り込む。

「ついでに、転生少年と天才少女もいるから、それに勉強は聞いとけ」

俺は言って、扉を閉める。

その後に、

『え？転生少年？』

『明久。それはお前の耳までバカになっただけだ』

と言う会話が聞こえてきたが、気にしない。

変わりに、後で飲み物とか持って行つてやるけどな。

因みに、明久にはそのうち……運でも渡してやるか。もうちょい幸福な人生を送れるように。（あいつの自業自得な気もするが）

「……さつてと。今回のバイトこなせば目標金額に届くからな。いっちょ頑張るか」

俺は、腕をブンブンと振り回しながら階段を降りて一階へと向かう。

……ちつと、自分で金を稼いで買いたいものがあつたからな。つか
ていとかんマジメルヘン。

「お客様、お飲み物とサービスのケーキをお持ちしました」

今度はＣＶスネークで扉の外から呼びかける。

と、ガタツ！と言う音とガラツ！と言う音が聞こえてきた。

『……明久に雄二よ、躊躇無く飛び降りようとするでない。ここは三階じゃぞ?』

「……吉井に坂本、逃げることは無いだろう」

「風祈いい加減にしてくれる!? 宿めるのも疲れるんだからね!」
「?」

いきなり扉が開いて薫と優子にステレオで怒られた。

……ちょっと調子に乗りすぎました。

「まあまあ、それは置いといて。お詫びにこれ持ってきたから」

俺は手に持ったケーキを優子たちに差し出しながら、明久と雄二を座らせる。

「……風祈。ホントに洒落にならない冗談は止してよね」

「そうだぞ風祈。本気で逃げようとしたんだからな」

明久と雄二がジト眼で見ってくる。

……しゃーないな。注意を逸らすか。

……あんましたくなかったんだがな。この話。

「まあまあ二人とも。お詫びにケーキと飲み物を奢ってやるし、昔話をしてやるから」

「へ？昔話？」

明久が首を傾げて聞いてくる。

俺は薫と風香に目配せして、

「うん、私たちの真に面倒くさい友人……」

風香が言いかけた言葉を俺が引き継いで、

「鈴条百合華に鈴条歩……それが、真に面倒くさい俺たちの高校一年の四月の友人だ」

俺は、額に手を当てながら明久たちに話す。

「まあ、お前たちも名前ぐらいは知っているだろう？ 歩が入学して早々、五月には休学届けを出してロシアに行ったんだから、噂ぐらいいに

はなってるはずだし」

「ああ、あの二人か。確か、明久が見当違いの言語を覚えようと必死になっている辺りだったか？」

俺の言葉に雄二が思い出したとも言つように手を打つ。

「ちょっと雄二！ その話はしないでって言つたじゃないか！」

「まあそれは置いておくが……とにかく、あいつらの本性を俺達が教えてやろう」

明久の言葉を流して、俺はそう言った。

「軽く知っている人でも、あの二人は成績優秀、百合華は大和撫子
って言葉が似合うくらい黒髪の女子だったよね」

薫が頭が痛そうな顔をしながら言う。

「まあ、実際は二人とも髪は白髪だし、腹は真っ黒だしっていう感
じだったんだけどね」

風香も頭が痛そうな顔をしながら言う。

「まあそれでも、最初っから異能を持っているって二人だったんだ
がな。……多分、学園都市に行けば『バランセーターリスト素養格付』で

レベル5もいけるだろうな……っと、これは禁句だったか？」

そこまで言っただけは、まあとりあえず。と仕切りなおして、

「まずはあの二人と、俺たち五人が出会ったときの話から始めよ
うか」

（想像以上に短い＋蛇足なので、鈴条兄妹のプロフィールを）

鈴条百合華

上は銀髪で出る場所は出たと、スタイルの良い黒髪の現在三年生。

実際は、黒髪はかつらで、白髪が本当の髪。

ブラコン兼超能力者。（学園都市の考え方で）

所謂『デュアルスキル多重能力者』らしく、守の力がレベルアップした感じらしい。

文月学園生徒会副会長

鈴条歩

常に温和そうな目をしている、黒髪の現在二年生

だが、百合華と同じく実際は白髪で黒髪はかつら。

シスコン兼超能力者（学園都市の考え方で）

百合華と同じく『デュアルスキル多重能力者』で、守の力のレベルアップしたもの。

第三十五問（後書き）

許してくださいッッッ!!

今回はこの一言に尽きます。はい。

「……待つて風祈。百合華先輩の副会長って何？」

「そのまま生徒会副会長って書いてある通りだが？」

明久が、話を始めようとした所でそうツツコンできた。

……まったく。話の腰を折りやがって。

「さてと、じゃあ」

「だから待つてよ風祈！なんで前の情報を出してるのさ！？」

「いや、あれはどんな汚い手を使ったのかは分らんが、ロシアにいるのに生徒会副会長に当選した奴だからな？現在の生徒会役員だぞ？」

「

「……え……？」

明久が絶句する。……まったく。

「おい明久。何の話をしているんだ？今風祈が話を始めようとしていた所だろうが」

「そうだぞ明久。まったく」

「ちよつと！？」

明久が何か言いかけているが、それを黙殺して、

「じゃあ気を取り直して、話を始めようか」

俺は再び、そう言った。

昔々、あるところに

「待つて！？始まりがおかしいよね！？」

明久が、またケチを入れてきた。

「まったく、この出だしは不満か？なら、こっちのパターンで始めてやるよ」

以下、実際のモノローグで行かせて貰おう。

一応、明久たちに話す内容とは別の所もあるしな。

いきなりこの世界に来て二週間。

今日は文月学園の入学式だ。

……一応、明久と同じ学校にしたが……まあこれなら楽しい人生を送れるだろうからな。

と言うか、もしかしたらこの世界にいたもう一人の俺が受験してた

のか？だとしたら、俺と入れ替わったのか、消えちゃったのか、それも

ハッキリさせときてえな。

……それに、もう一人の俺が居るんだったら会ってきてえしな。話も合うだろ。

「クラス分けは……俺がDクラス、薫がFクラス、風香がAクラスか」

さすがに同じ苗字を三人一クラスには入れないみたいだな。別にいいんだが。

「……んじゃ、また後でな。薫、風香」

「じゃね〜」

「うん。また後でね」

風香と薫と分かれて、Dクラスの教室に向かう。

さつき確認した顔ぶれでモブじゃねえのは……。

清水ぐらかい。

……微妙に気になる名前の奴も居たがな。鈴条歩とかいう。

……何となく、鈴科と上条をくつつけた様な名前だが、まさか『原作』知識があるヤツじゃねえよな？

いや、『原作』知識があるヤツのほうがいいんだが。話も弾むだらうし。

因みに、非常にどうでも良いんだが、俺は不安が九割を占めている。

……だつてよ？そりゃ、薫と風香が居るし、明久も居るが、逆に言えばそれだけなんだぜ？

高校でそれだけ同じってのは良いと思うが、正直転生（って言うか来訪っていうか）前の世界ではバカ騒ぎするメンバーが十人以上は軽く居たんだしよ。

「……ま、グダグダ悩むのは俺じゃねえな。そう言うのはホントに

やばい時の事だ」

俺は肩を竦めて言っつて、Dクラスの教室を開ける。

……おいおいすげエなア。知ってる顔が一つしかねエぞオ!?

「……はア。不幸だ」

俺は呟きながら、席に着く。

……あー、まあ、いいか。否が応でも、二年では関りを持つんだし。

そんな事を考えていると、

「あん？」

悪寒と視線を感じた。……誰だ？

視線のほうを見ると……確かあの席は……鈴条歩だったか。

「……何か用か？」

俺は席を立ち上がって鈴条の前まで行く。

……なんだろうな。この感覚。

なんていうか……ああそうだ。一方さんが終始笑顔で居るような感覚……。

「……な、なんでしょう？」

「とぼけんな。お前、今何を考えている？」

俺が睨むと、鈴条は軽く肩を竦めて、

「……分かりました。ちょっと屋上に行きましょう」

そう言った。

なんだよおい。どこそその古泉みたいに超能力者の証拠でも見せてくれるってか？

……なーんて、あるわけねえけどな。ここはバカテスの世界だし。

「……で、なんのようだ？自分は超能力者だとしても明かすのか？」

屋上まで言っで、俺は尋ねる。

……なんかおかしいことが多々あるな。

新入生がなぜ屋上まで迷わず行けるのか、だとか。

そもそも、自分で言うのもなんだが銀髪の俺をみて普通に接している所とか。

「ああ、それは正解。あと、君は何か普通の奴らとは違う気がするからさ」

「あ？」

おい待て、俺は声に出してたか？

「安心して、声には出てなかったよ」

俺が思考していると、ヤローはそう言って来た。

……あん？

「デメエ、俺に何の用がある？ケンカ売ってんのか？」

「ああ、非常に言いづらいんだけど……」

そこで、コイツは言葉を切って、

「はア！？」

こんなことを言ったのだった。

「俺と友達になってください!!」

と。

おいなんだよ待てよなんだよ新研究って。新しい研究なら一人でやれよ。

「うつせエ!!」by風祈。

……失礼、取り乱しました。……けどなんだよ新研究って。

余計に時間が無くなるじゃないですか。ただでさえいっぱいばいだったのに。

「受験生なのにほざくな」

それはそうだけどね!?それはそうんだけど、それでもなんで中一の前半からやり直すの!?今何歳だっけ!?

「だから、受験生なのにほざくな。雄二だってちゃんと勉強しなかったらふざけた点数だっただろ?」

……むう。確かにそうだ。

「ま、テメエはさっさと審査で受かって二段を取れて話だな」

二段を持っているとイジメられる（笑）の言葉は無視しても、受けさせてもらえないんだからしょうがないんだよ。

「だってどうせ、お前勉強できねえだろ?なら先にそっちをやっついて受験で有利になっとけよ」

……確かに、今から勉強を始めれば学科は余裕だろうけども。

「つつうかよオ。ンだア？このバカみてエな三下は？」

……あれ？なんでそんなセリフを……

「悪いが、こつから先は一方通行だ！！おとなしく尻尾巻きつつ泣いて、無様にもとの居場所へ、引き返しやがれエ！！」グシャツ

「作者が原因不明の症状で倒れた為、ここで終わらして貰おう。本当にすまなかったな。尚、三十六問は過去編が終わり次第始まるので、

宜しく。吉井玲ファンの人は要チェックだ！！……仮にキャラ崩壊していても怒らないで居てくれるのなら」

過去編（霧沢風祈編） 2 最強の超能力者と無能の無能力者（俺）→これはバカと

キャラの分らん男。

それが、俺、霧沢風祈が鈴条歩に抱いた感情だ。

言ってみりゃ、前の世界（といった方が言いかな？）の利春と同じ分類と言った所か。

「サイコメトリーからテレポート、マインドリーディングにテレキネシスとかの超能力のオンパレードだね」

どうやら、超能力者と言ってもほぼ隠しているとの事。だったらなぜ俺に明かしたのが気になるがな。

そんなわけでなぜ俺に接触してきたのかも含めて問うと、

「だってトモダチだし、さっきも言った通り君はなにか他の『人間』とは違う雰囲気があるからね」

なる。やっぱ、別世界の出身だと違うもんなのかな。雰囲気とか。

「それで、能力チカラのせいで友人が出来なかったから、雰囲気が違うコイツと友達になろう、と考えたって訳だ」

「そ。それに、俺の姉にもトモダチを作りたいかったんだよ」

何となく一方さんが出てきたから言ってみたら、これが当たって嬉しい。珍しいこともあるもんだ。

「だが、お前の姉ってことは二年か三年だろう？それに、女子の友人には女子が適任じゃないのか？」

俺が問うと、

「それが、ほら、これ僕達が出会ってきた女子がそうだったただけかも知れないけれど、女子の心の中は総じて腐ってたんだ」

「そんなのと一緒に入れるわけが無い……って事か」

なるほどな。たしかに、人付き合いを打算で考えるやつは近くに居たくねえよな。

「そ。ってな訳で、姉さんの所へ行きましょー」

軽く言つて、歩は扉を開け、階段を下りていく。

……何となく、コイツ某ドSキャラに似ている気がすんのは俺の気のせいだと思いたい。……こう、雰囲気とか。

「……鈴条ねえ」

何となく、俺はそう呟いた。

「なるほど。そう来たか」

階段を下り、歩の後ろを歩いていくと、二年校舎の階段踊り場へとやってきた。

つっても二階だが、ここに妙なものが一つだけある。

それは

「さ、このハンドルを回さないと姉さんの所へはいけないよ」

ニコツと、腹立たしいぐらいに爽やかな笑顔で歩は、俺の前にある全長一メートルはありそうな　ハンドルを指差す。

「……いくら俺でも、さすがに怒るぞ、コレ」

ぼやきながらも、とりあえず必死でハンドルを回す俺。

「因みに、それは僕が作った、姉さんの所までいける装置なんだけど……結構ハンドルが重いから気をつけて」

「じゃあテレパスとかで呼ぼうぜ！！？（グルグルグルッ！）」

数分後

「……ぜえ……ぜえ……」

俺は階段踊り場で、汗だくの体を仰向けにして喘いでいた。

「……さて、姉さんの所に行こうか」

歩は、仰向けの俺を無視して二階へと上がろうと階段に足を掛ける。

……ってオイ。

「ハンドルを回した意味は!？」

「特に無いよそんなの」

「殴っていいですかねえ!！」

ちよつと本気で殴ってもいいか？ いや、マジと書いて本気と読むぐらいで。

「そんなことはいいいから、行こうよ」

あれ、俺のさっきの感覚、あんま間違つてなくねえ？ コイツ、間違いないドSだろ。

「……いつか削ぐ。ホントに削ぐ……!！」

なんて言いながら、重たい体を起こして歩とともに階段を上る。

「……って言うか、教室にいるに決まってるじゃないのさ」

「……それは俺もバカだったとは思っけどな……」

……で………すみませんでした。

……コホン。まあ、仕切りなおして、二階にて、

「姉さん？ 居るかな？」

二年Aクラスの教室の扉をガラツと開けて、歩がそう言った。

それを廊下から見ている俺は、来年には明久たちとここで試召戦争をやるのか………という感じで見回す。

と、開いた扉から少女　一応年上だから少女と表現するのか知らんが　が出てきた。

容姿を現すなら、モデルのような体型にサラサラの、背中ぐらいまである黒髪。可愛いと言うよりは綺麗と表現したほうが良さそうな感じた。

まあ、清楚なお嬢様と言っても通るか？

『……なに？　どうかしたの、歩？』

『いや………それがs』

『まさか、イジメられたの!?　すぐにソイツら連れてきなさい!　今すぐ銀河系の彼方へと飛ばしてあげるわ!!!』

『落ち着いて姉さん。僕らの超能力はそんな距離まで飛ばせないよ』

……ヤベエ、あの人ブラコンだわ。絶対。

『……それより、　　が言っただ人を連れてきたよ』

『へ?　ああ、そっちだったの』

ん?　なんかこっちに来てないか?

「……あなた、二酸化炭素を吸って酸素を吐き出すことができる< <?」

………oh?

「……出来ませんが、そしてその変な顔文字はなんなのだよ……」

「なーんだ。じゃあ、その練習をしてきて」

「え、俺アンタと初対面だね?　なんでそんなガンガンくんの?」

俺が言うと、前の少女（と言いか毒舌娘）は「ハア……」と呆れたようなため息を漏らした。

………なんだろ。先輩なのに初っ端からタメ口聞いちゃったけど、むしろ殴りたくなってきた。

と、俺がそんな事を考えていると、歩が前までやってきて

「あ、ごめんごめん。姉さん、口が悪いからさ、植物君」

「『植物君』！？ いや、俺霧沢風祈ですけどオ！？」

……なるほど。コイツも口が悪いタイプか。

「あ、とりあえず自己紹介をしておくわね。私の名前は鈴条百合華よ」

「はあ、どうも。俺は霧沢風祈です」

一応タメ口に戻

「だから二酸化炭素を吸って酸素を吐き出せるようにしなさい！！」

「出来ねエつつてんだろオがア！！」

さない！！ 絶対敬語（っぽい何か）はコイツに使いたくねえ！！

「……さて、顔見せも終わったし。とりあえず一階に」

『変態だ ！！』

『僕の話聞けえ ！！』

……へ？ 今の声、明久と雄二か？

『ちよ、なんであたしが変態になってるんだい！？』

……ああなるほど。コレ、入学式始まっちゃったんだ。なるほどなるほど。

「よし、ここで時間でも潰そうか」

「……俺としては、ここより学校探索の方が楽しうだがな。主に精神的に」

とまあ、そんなこんな的事がありまして、次回に続くと言わしてもらおう。

さて、せーのっ！！

次回へ続く！！

……正直、スベツた感があるけどな。

過去編（霧沢風祈編） 2 最強の超能力者と無能の無能力者（俺）〜これはバカと

あ、ヤベ。

スベったって使っちゃった。受験生の癖に

さて、今回のお話、いつもよりも短いです。酷いです。

ドSとただ酷い人を穿き違えてる気がします。

……まあいいか（）。

さて、少し前の話題になりますが、一つだけ。

『笑ってはいけないシリーズのパロ被ったア

い！……！

』！

……ええ。アレを見る前から、そこだけの話はあつたのですよ。きつと年内にはいけると思いますが。

……あれ、それって結局、冬とかもやってるって事になってないか？

……あれ、たんに更新ペースが遅くなっただけじゃね？

………とにかく……！

次回も宜しくお願いします……！

P S

過去編は恐らく、必ず最後にケン力的な何かは入ると思います。だってやり易いから。

それと、なんとなく思ったコーナーとして宿題(?)を出させていただきます。

回答例

Q『生徒会の一存シリーズ 碧陽学園生徒会
に入る言葉は?』

A『議事録』

&

Q『バカとテストと召喚獣 この作品の内容は?』

回答例

A『青春エクスプロージョンラブコメ』

これらの回答を感想のところで募集します。

皆さん、ふるってボケてくださいねっ …… すいませんでした。

えーっと、とりあえず、これで一本作る気なので、たくさんきてくれたほうが嬉しいです。

特に生存を知らなくても構いませんので、回答お願いします。
…… なかったら私泣きます。多分。

過去編（霧沢風祈編） 3（最終章）俺が俺でアイツがアイツで、悪鬼羅刹の男と

後半、別に飛ばしても問題ナッシングです。どころか、気持ち悪くなる方が居るかもしれませんのでお気をつけください。

あの同じ単語の羅列は。気にしなくて良い。そして、このシリーズは設定公開と思ってください。

別に、過去編を読まなくても殆ど理解できるとは思っています。

そんなこんなで（参加できなかった）入学式から一週間が経過した現在。

どうやら、（少々厨二的な言い方になるかもしれないが）『この俺は』元々この世界にいた俺』と入れ替わって（向こうにいるのかは知らないが）いたと言うことが分かった。

まず、この俺は母型の血のおかげで髪は銀だ。不満は無いがな。

で、目の色も至近距離で見なきゃわからんが黒か灰色か分からん目つまり、色で純正の日本人かどうかを判断するのは難しい。

さて、ここで問題です。

Q『髪が銀色で眼つきが悪いヤツがいたら、教師アード生徒はどう思うでしょうか？』

答えは単純明快。

A『不良だと思い「眼の敵にする」か「近づかない」か「絡む」』

いや、確かに前の学校ではそれほど『近づかない』は無かったんだ。

さながら碧陽学園かの如く、良い奴らばっかだったから。

が、『元々この世界にいた俺』（面倒くさいからこれ以降はコイツの事を『風祈君』と呼ぶ）はどうやらそう言った運が無かったらし

い。

つまり、『吉井明久君は霧沢風祈君と仲良くしてくれましたが、他の方々はそう言うわけではありません』

これが、『元々この世界にいた俺』の境遇だったらしい。

え？　どこから掴んだ情報だった？　H A H A H A。決まっているだろう？　周囲の反応だよ。

いや、うん。まあ、俺を始めてみるヤツが軽く避けるのはいつもの事だったから最初の三日間ぐらいは気にしてなかったんだがな。

ただ、周囲の陰口って言うのか？　でな、

『アイツが神無月中の「悪鬼羅刹」とコンビを組んでたって言う「一騎当千」の霧沢風祈か』

うん。これ聞いた時にはびっくりしたね。だって俺、『一騎当千』なんか出来ませんもん。つか厨二かッ!!。

ただ、霧島にも親しげに話しかけられたので、おそらくコンビを組んでたって言うのは本当なのだと思う。

しかも、悩み相談（と言うかもっぱら雄二の話）を受けるような間柄だったようだ。

これには、恐らく風祈君も辟易していたことだろう。

因みに、俺（ホントに俺な。『風祈君』じゃないぞ？）と雄二の会

話を載せておこう。

雄二「よう、風祈」

俺「……はあ？」

雄二「？ どうした風祈？ そんな呆けた顔して」

俺「（……あ、この間霧島と話したんだから雄二とも繋がりがあつておかしくないのか）」

雄二「どうしたんだ？ 一人で考え込んで」

俺「いんや、なんでもねえよ」

雄二「あー、そういやあ、入学式からいろいろあつてお前と話してなかったな」

俺「そうだな」

雄二「いや、まああの筋肉に捕まっていたのもあるんだが」ボソッ

俺「？ どうした？」

雄二「いや、なんでもない。……ああ、それでな。入学式の日に、セーラー服を着たバカがいたんだよ」

俺「……十中八九俺の知り合いですすいませんでしたハイ」

雄二「おおう、どうしたお前急に早口で」

俺「気にするな」

以下より書くに耐えない話が続いていきます。

……さて、一週間がたちまして、溺愛する妹の風香が、木下（姉）と仲良くなったと言う話を聞いた。

秀吉ではなくて木下（姉）なのだが、まあ溺愛する妹と仲が良かった。

必然的に親しげになる事だつてあるだろう。事実、風香が紹介してくるし。

……さて、超展開キタコレと言われるかも知れないが、少々話をさのちうなもののせてもらおう。

中学生時代、風祈君は面倒くさい（まあ今の俺も代わらんが）ヤツだったようで、困ってるやつは見捨てられないと言うホントに面倒くさいヤツだったらしいのだ。

いや、霧島の話によれば、雄二とコンビを組んで止めにいったらしいんだが。

……まあいい。で、そんな事やってれば当然、恨みを買う。

これは、それが発端となった話しだ。

「……すごぶるドライだな」

俺はため息つきながら隣を歩く百合華を見る。

……なぜか今日は他の連中と帰らせてもらえず、百合華に引っ張ってこられたのだ。

「……私にはどうしようもなかったから。私にはキレないでね」

百合華が目を逸らしながらそう言う。

……？　なにがあるんだ？

「未来予知は断片的にしか見えないし、正確な所まで見えないのよ」

「……いや、それはこの前聞いたが……。なんでそんな言い訳っぽいんだ？」

「……………」

なんか無言だった。

そんな感じで口数少なく俺らが歩いていると、前から五、六人の男達がやって来た。

金属バットを持っていたりと、うわぁ今時こんな居るんだゝ的なやつらだ。

「お、この姉ちゃんかわいいーじゃん」

「お、ホントだな」

ニヤニヤと気色悪い顔で百合華を見る男二人。

「う……………」

それに対し、怯えた瞳、怯えた声で返す百合華。

……オイ、絶対お前キャラじゃねえだろ。むしろこっぴつって大喜びするタイプだろ。殴る大義名分みたいな感じで。

「ちよつと俺らと遊ばない？」

「嫌よ」

え？　ここで地を出すの？

「そんな事言わずにさ」

「黙りなさい虫唾が走るわフナ虫が」

訂正。こっちが地か。さっきのは甘かったようだ。

「おい、コイツって呼び出そうとしていたヤツじゃないか？　銀髪だし……」

と、そんな微笑ましい風景を見ると、そんな声が聞こえてきた。

「……ああ、そうだな。……でも、こんな女にやられたのか？」

せんせー。百合華さんは銀髪じゃないと思いまーす。白髪だと思いまーす。

「不甲斐ないってヤツだろ？　まあ良いや。とりあえず連れてくぞ」

和平的にな。和平的にやれよ？

俺がてきとーにそんな事を思っていると、一人の男が百合華の前まで歩いていき

「オラアッ！！」

顔をぶん殴った。

………なるほど。どーあってもこーなる運命ってか？

………さすがに優しすぎる俺でもこの人数相手は二週間ぶりじゃねえか？

「………なによりも、俺が眼中に無いつてところかな」

ポンス。と百合華を殴った男の肩に手を置く。

「あ？ 急に現れやがって、何だデメエ」

…… あん？ …… 百合華がなにか超能力でも使って俺の存在を隠してたのか？ …… それで未来予知がどうのって言ってたのか？

「…… まあとりあえず」

「関係ないヤツはすっこんでろ！！」

俺は前にいた男の顔を掴んで地面に叩きつける。

「ふざけんじゃねえ！！」

そんな叫び声と共に、バキッ！！と、骨が金属バットによってへし折られた音が響く。

「…… 痛ってゝな。そしてム・カ・つ・い・た。スイッチ入るぞ
コラ」

折れた右腕をムチのように撓らせて、金属バットを持って殴りかかってきた男を殴り飛ばす。

「油断してんじゃねえ、ぞ！！」

と、別のヤローが折れた右腕を金属バットで殴打してきた。

ま、折れてる腕にやられてるからな……

「……それで？」

半回転して背後の男を蹴り飛ばし、衝撃で落とした……なんだこれ、野球ボール？

まあ、それを拾い殴りかかってきた男の腕目掛けて投げる。……ボールは友達だな。

「ぐわっ!!」

ボールが腕に当たった衝撃で、持っていた金属バットを取りこぼす。

俺はそれを無傷な左腕で拾い、男の顎骨目掛けて思いっきり振る。

ベギィツ!!と、少なくとも顎骨から聞こえちゃマズイ音が響いて二、三メートル吹っ飛んでいった。

続けざまに、一人の足に金属バットを全力で投擲。

そしてもう一人の足に足払いをかけて床へ転がし、最後の一人は先ほど足払いをかけた男を振り回して腹を攻撃する。

振り回した男を先ほど倒した二人に向けて振り下ろし

「悪いなあ。誰敵に回したか分かってんのかお前」

グシャッ!と横たわる顔面を踏みつける。

「もうチヨイ耐えろよ。ほら、いーち」

[illegible]

「……ホントは、『木下優子囚われのお姫様』を救うってのが目的だったんだけどね。コイツらについて行って（ボソッ）」

最後に百合華が何か言ってた気がするが、俺には何も聞こえなかった。

過去編（霧沢風祈編）3（最終章）俺が俺でアイツがアイツで、悪鬼羅刹の男と

打ちすぎだってばよ……。

あの文打つのに約十五分ぐらい。……コピペをしると……！

いや、それ以前に打ちすぎだと……！ アホだろもう……！

……あ、次回からは普通の時系列に戻します。多分これよりは良いクオリティになるはずです。

第三十六問（前書き）

短いんだよ！　ただひたすらに短いんだよ！！

でもさすがにいつまでも停止しているのもどうかと思っから更新するんだよ！

だから長さへのツツコミはしないでくれると嬉しいかも！！

第三十六問

「……とまあ、そんな感じで、基本的に俺のことを『植物君』と呼ぶ兄弟は、その一件の三日後に両親の都合で転校して行っただと」

俺は、溜息をつきながら言って、

「実際、あの二人って二人暮らしで両親居なかった様な気がするけどね」

薫が補足説明をした。

「……あれ？ でもさ、おかしくない？」

「何だ明久。ついに自分が『僕はバカじゃない』って言ってることのおかしさに気付いたか？」

「違うよ雄二！ そして僕はバカじゃないよっ！！」

『……………ウワァ』

「ちょっとみんな！？ どうしてそんな残念なものを見る目で見るのさー！」

全員の気持ちが生クロした瞬間だった。みんなスッゲエアレな者を見る目……つかバカを見る目だった。

「…………コホン。まあ、そうじゃなくて」

明久が言いかけ

「どうしてそんな隠してそんなことを今更私たちに言ったの？」

島田に取られた。……ドンマイ明久。

「ああ、それはね……ハア」

風香がため息をつけながら俺のほうを見る。

……しゃーなしが。

「それはな島田。アイツらのことを話すっていうか軽めに人間性を話しておく事で真実を知った時、苦しまないようにする為だ」

「あの二人、見た目だけはいいいからね……」

薫がどこか遠くを見ていた。……ホントにな。見た目だけは……性格もいいところもあるが。

「んあ。そういやあ、あの二人の生態を忘れていたな」

「……生態？」

小首を傾げて聞いてくる霧島に俺はそれに頷いて、

「そう。生態。……まあ所謂『肉食系』男女っただけなんだけどな」

「え……それはその……」

俺の言葉に、なぜか姫路が真っ赤にしていたので一応補足を入れておこう。

「『肉食系』って、ホントに『肉食系』だぞ？ 肉大好きなアホっでことだ……あの二人、肉さえあればご機嫌取りだってチヨロイかな」

「……半ば予想はしてた」

雄二が呆れ半分の声で言っていた。

「……寝起きに機嫌が悪かったりするから私たちもこんな感じで好みを見つけないきゃいけなかったんだよね。……あんなの普通居ないよ」

「そつだよね。あんな寝起きが機嫌悪いのなんて普通いないよ」

『お前らが言うなっ!!』

今の薫と風香のセリフには、俺も含めた全員でツッコミを入れさせてもらった。

……ちなみに、この二人ほど寝起きの機嫌が悪いのは存在しないと思う。

「……んむ？ ちょっと待つのは風祈よ。話した理由はそれだけじゃないじゃろ？」

秀吉が小首を傾げて聞いてくる。……毎度ながら思うが、ホントにコイツは男子に見られる気があるのだろうか……？

「おお、鋭いな秀吉。そうだ。もう一個ある」

俺の言葉を薫が引き継いで、

「実は、あの二人が近々帰ってくるようになってね。確か」

「明日だったな。アイツらが帰ってくるの」

『急だなおいっ！！』

なんか皆（明久、姫路、雄二、霧島、島田、キヨン、清水、利春だ）にツツコミされてしまった。

『こんがらかった』

「んあ？ 電話だ」

ツツコミを入れられた俺が苦笑いでいると、携帯に電話がかかってきた。

……誰からだ？

「……………百合華？ ………………もしもし？」

『ああ、植物君？』

「違っけどな。……………んだ？ お前、国際電話は金が無駄にかかるから嫌いだと言ってなかったか？」

『いや、これは国内電話よ?』

「は?」

『だから、戻ってくるのが今日になって、今空港に居るから迎えに来て? 植物君』

「……ハア!!?」

思わず大声を出してしまった! つかせめて昨日のうちに言えよ!!

『と言うわけで待ってるわよ』 (ピッ)『

「くそ……あのアホ共……!!」

「ふ、風祈? どうしたの?」

優子が小首を傾げながら聞いてきた。

……相変わらずこの兄妹はそっくりだなオイ。

「ねエ風祈。今、私のこと兄って言わなかった?」

「へ……変換上の問題だ。他意はな……る」

「……で、風祈。何があったの?」

俺が優子から必死で目を逸らしていると、呆れ顔で風香がそう言った。

「……百合華と歩、もう空港に居るんだってよ」

『もつと急だなオイ!!』

空港

「……ineisi」

「落ち着いて風祈。ローマ字になってる」

あの後、俺らが空港へどこにでもいけるドアで移動したが、どこを探してもあの兄妹は出てこない。

「……呼びつけといていないってどういうことだねあのボケ兄妹……」

「あはは……あ、電話だ」

どこからか佐藤の声が聞こえてきたような気がしたが、気のせいだろうと思う。

『あ、薫？ えーつとね？』

「どしたの？」

…… あー、そういえば佐藤が『ふ、風祈しゃん！！ えつと、ご、五時ぐらいに一人で来てください！』とかなんとか言ってたな……

『百合つちと歩つちなだけどね……』

「あー、空港のどこ探しても居ないんだけど」

…… 今の時間は…… 四時四十分か…… 一応佐藤の家を視てみるか？

そろそろ行かなにやらんし、ボケ兄弟を見つけたらすぐに行くが、いつ見つかるか分からんから一応連絡もとつといた方がいいだろ。

悟りの毒つと…… ここで上条ちゃんならラッキースケベでもやるが、俺にそんな属性無いから大丈夫だろ。見たら薫にシバかれるし。

『あの兄妹、美穂の家にいるっぽいのよ』

「ブホオツ！！？（薫）」

「ハア！！？（俺）」

第三十六問（後書き）

良い子の皆さんーん？ 皆さんの風ですよー？

……ハイ。のっけからすいません。お久しぶりです。

短くともここまで書く時間を作るのにどれだけ時間がかかったか…
…あとクオリティ戻ってないですし。

……スランプかな。

風祈「スランプって言うのは出来るヤツがなるのであって、元から出来ねエやつが言うんじゃないやねエ！」

……いろいろすいません。

さて、どうしてこうなったなRe：バカは世界を救えるか？ 終了するのは分かってましたが終わっちゃったようでしょう……。

アレが終わってるのに私の小説まだ始まらないよやばくねコレ？

ヘタすると『終了から一年後に二次小説開始』とか良く分からない事も起こるかもしれないですよ奥さん。

……これに関する詳しい（？）事は活動報告に書いていますので興味があつたら是非に。

それでは、次回も宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8310o/>

バカとテストと介入者

2011年10月7日23時32分発行